324
143

シリヤの聖イサク全書

堀江復譯

明治四十二年七月　正教會編輯局

シリヤの聖イサアク全書

緒言

ニセフォルイは後來アストラハンの大主教となり、此人なほ、二千七百七十年、シリヤの聖イサアクの苦行的說教、希臘文にて著したるものを出版するに當り、此聖人の行狀と其說教に就て述る所左の如し、

克肯なるイサアクは凡そ敎の道の起源として流るゝ東方の産にて、シリヤの人なりき。彼の生國はニヽヒヤなれども、其父母の事は消息を有せざれば我等に知られざるなり。イサアクは青年の時に世を避け、すべて世に屬するものに遠ざかりて、兄弟と共に聖マトフェイの修道院に入りけるが、彼處には多くの人々猶肉體

明治 42 8 5 内交

を以て天使の如き生涯を送りけるに、彼も自から其處に於て修道士の生活の方法と秩序とを受けたりき。彼は此院に在りて苦行場裡に己を修齊し道德に充分の進歩を爲しけるが、其時深く默想に入らんと欲する願の爲に刺撃せられ、野を愛するの熱情を以て心を燃しぬ。故に會住修道院より更に遠ざかりて荒涼たる野の小庵に棲隱し、何人にも交らずして、たゞ自己と神とに目在しつゝ全く靜寂なる生活を送るを始めぬ。此の時に當りて、彼の同胞兄弟は最早前述修道院の掌理となりけるが、書を彼に遣はし、野を棄てゝ以前の修道院に歸らんことを切に勸め嘆願して已まざりき。然れどもイサアクは愛する所の野を片時も棄つるを肯んぜざりき。さりながら最初兄弟の願の成らざりしは後に神の默示は遂ぐるを得しめ、イサアクは聖なる修道院に再び入らんことを切に勸めたる同胞の言を聽かざりしかど、主教の

監督に必要を有せるニチヒヤ教會の舟を統御せんことを上より命じ給へる天の父に順へり。是に於て彼は其心に熱愛する野を棄て、立てられてニネビヤ大都府の主教となりけり。此の爲に要用なるは野の斗下に隱るゝにあらずして、牧師の職の台上に置かれ、煌々として光り輝く道德の照さゞる所なき光線を遠く注ぐにあり。しかれども是は甚だ暫時にして、此光は僅に照し始むるや、次で復た隱れぬ、何故なれば世は斯の如きの人を受るに堪へざりしによる。彼の爲に起れる事件は昔サシムの主教に叙せられたる神學者聖グリゴリイが按手禮の際に逃走を謀れると殆ど同樣なりき。それ此事は自適と心神の不堪忍とをあちはし、隨て愛神者には不相當なる如く見ゆるこいへども、此二人の德行と完全とにより、予は之を定罪すべきもの且は非難すべきものと言はず、何となれば彼等は他のすべてに於て間然す

る所なく、神聖なればなり。「神に屬する者は度らざる所なし、而して己は何人にも度られず」（コリンフ前二の十五）。

按手の禮の後イサアクが遭遇したる事件は左の如くなりき。イサアク按手の禮を受くるや、其日二人あり、主教館に來りて彼に訴へ出でたり、其一人は他より負債の償却を要求し、他は負債せしことを自認しつゝ少しの延期を與へんを懇請せり。然れども債權者は彼を咎して言へり「もし債を償ふを肯んぜずば、今斷じて裁判官に訴へん」と。神聖なるイサアク彼を責めて言ひけるは「聖なる福音の誡命に依れば汝は掠奪者よりも督促すべきにあらず、矧んや債を償はんとする者に一日の間の猶豫を爲すは當然なり」と、されども此刻薄なる人は答へり「福音の誡命を今は側に置くべし」。其時イサアク宣言していへり「主の福音の誡命に順はずば予は汝等に何を爲すべきか」と。而して彼は野に於て習慣せる平穩にして掛慮なき生活が主教の誓約を以て要求せらるゝ事の爲に掣肘攪亂せらるゝを認め、位を棄てゝ愛する所の寂寞たる隱舍に歸りぬ。彼は死に至る迄彼處に止まりけるが、魔鬼及び肉身と戰ひて如何なる苦行を成しゝか、實驗的生活と直覺的生活を以て要求する道德に幾何の進歩をなしゝか、靈魂の如何なる完全を得て生存中に如何なる恩寵を賜はりしか、是事は言ふも無用ならん、此は彼の書により容易に確知するを得べし。けだし彼は第五十六說教に次の如く言へり、曰く「自己の眼を以て太陽を見ざる人はたゞ聞くのみにて、此光に觸れざるにより、人に此を說明する能はざるべし、靈的行爲の甘きを自己の心に味へざる者も此の如し」。又第七十五の說教には言へり、曰く「久しく右と左に試みらるゝ予は此の二の方法を以て一度ならず己を試み、敵の無數の打擊を受け、大なる救援を窃に賜はり、多年の

間に經驗を求め得て、神の恩寵により實驗上確知せしもの左の如し」云々。而して第六十五の說教には言ふ「予は自己及び凡て此文を讀む者の記憶の爲に聖書の研究と眞實なる口を以て傳へられたるものより借り來りて其儘之を記述せしが、自己の實驗より借れるものも少なからず」と。此に由りて見るにイサアクはすべて後來書に著す所のものを先に自から實驗して、奥義の門に入る者等を自己の實驗により敎導せしこと明なり。然のみならず、此の奥義入門の事は最高上なる道德を授け、完全の最巔を示すものとして實に神聖なるのみならず、奥義の敎導者も神聖なり、高尚にして且完全なりき。げだし已に述べたる如くすべて神聖なる恩寵を以て敎へられしものを實地に試み、確知して之を書したればなり。ゆゑに此の最驚く可き人は有能にして極めて美なる恩寵の働を默止する能はずして、或處には容易に言顯し、他の處には特に明言して曰く「予が之を書する時は予の指は紙に隨ふに遑あらざること一回のみならず、予が心に突入して感覺を默せしめたる愉快の爲に、予は忍耐を守る能はざりき」と。（三十八說敎）さりながら之と同く此人の德行に於て特に驚くべきは、其自から證する如く、すべての人類に遠ざかりて生活しつゝ彼等に對して愛に燃えたること是なり。げだし言ふあり「愛する所の者よ、予は愚に陷りしにより奥秘を默守するあたはず、兄弟の爲に無智となれり」（是れ使徒が「我誇りて無智に至れり、汝等我に此を爲さしめたり」といふに符合す、コリンフ後十二の十一）げたし眞實なる愛は此の如きものにして、愛する所の者に何事をも窃に隱す能はざるなり」と。（三十八說敎）此に由りイサアクは清潔にして生活を施す水の流を野より渾々として湧出し、無盡に灌注して、兄弟の靈魂に豐に飲ましめたりき。げだし或る無名記者

もイサアクの事の簡短なる傳記の後、彼の文章に就て左の如く言へり、曰く「凡そ修道士の師にして且教導者たり、及び教の湊なる彼は修道士の生活に關する此四書を最能辨にてあらはせり」傳記はロマワチカシの書庫の古典中に之ありてイサアクの四書の始にアラビヤ語とシリヤ文字とにて書されたり、此傳記は「シロマロニト」アッセマニを以て羅甸語に譯出せられしが今其處より茲に引用せり。

又此記者はイサアクの生存の時のことをも次の如く言へり、曰く此聖人は創世を距る七千年の始めに生存せり。是れイサアクの自から言ふ所のものと符合す、彼が魔鬼の事に論及し「最早六千年經たる所の者を汝は出でよ呪咀ず」といへる是なり。三十說愈此に由るに彼の此言をなしし時は世の造成より最早六千年經過したるを見るべくして、此事は彼が登塔者シメオンに與へたる書はより更は確實に知るを得べし、何となればシメオンは

ユースティン一世の時の第四年（是れ救世主ハリストスより五百二十年の始なり）よりマウリキイの代の五十年に至り、或はハリストス降生五百九十六年に至る迄、七十五年の間生存したればなり。然してシメオンの塔に居るを愛し始めたるは、最弱年の時にして、彼に書を與へて教訓し、默想的生活の第一の規則を命ずるイサアクはシメオンの塔に登る以前に之を書したるにより、（五十五の說教を見よ）神の攝理の五百三十年の頃には父イサアクは既に德行に成全したるのみならず、年齡も盛なる時なりしは知るに難からざるなり。故に彼の老後は非常に長壽なりしにあらずんば、彼はハリストスの降生後六百年以前に天の第宅に移りしこと疑なし。

聖イサアクはシリヤ人として其著作をシリヤの語にて書せり。シリヤの作者エベドイエズー記していへり、「ニネビヤ人イサア

クは靈的教導の事、神聖なる奥義の事、審判の事及び行狀の事に關する書七卷を著せり」と。然れども十三世に知られたるものにして今日知らるゝは全きにあらず。聖イサアクの教訓の大部分はアラビヤの翻譯に修道士の規則といふ題名の下に保存せり。茲に四書は存しけるが、第一書は教訓二十四を載せ、第二は四十五、第三は四十四、第四は二十シメオンに與ふる書とを載す。パレステナ聖サバの修道院の克肖なる修道士ペトリキイとアウラミイが希臘語に翻譯せる教訓九十九はたゞ第二第三の書とシメオンに與ふる書とを載するのみにて、原稿には幾ど第一と第二の書を存せしのみなりかくの如くエペドイエズが表示したる著作の中希臘の翻譯に於て知らるゝものは聖イサアクの作の半より少なし。

右緒言は原序文并にカルニゴフの大主教フィラレトの著なる歴史的師父學より鈔錄す。

譯者識

シリヤの聖イサアク全書

目次

第一說教　世を棄つる事及び修道士の生涯……一頁
第二同　神に感謝すること、幷に初等の教の簡短なる說明……十一頁
第三同　靈魂は世と世慮に遠ざかりて沈默するならば神の容智と神の造物を易く認識するに至らんけだし其時は己の性と己の內部に隱るゝ寶とを認識するを得るなり……二十二頁
第四同　靈魂の事慾の事及び智の淨潔の事に就ての問答……二十五頁
第五同　感覺の事幷て誘惑の事……三十三頁
第六同　主宰が尊威の高きより人間の弱きに降し給ふ仁慈の事及び誘惑の事……四十一頁
第七同　自由なる罪と自由ならざる罪の事及び場合に依り犯す罪の事……四十五頁

第八同　衰弱して怠慢なる人々より己を守りて自省すべき事、彼等と親むにより怠慢と衰弱が人に主となりて種々なる不潔の慾に充たさるゝ事、放蕩なる思念を以て心を汚されざらんが爲少年と近づくより己を守るべき事。……五十頁
第九同　新進修道士の秩序及び規則、及び彼等に適當なる行爲の事。……六十頁
第十同　聖なる人々の記事、及び彼等が聖なる訓言と奇異なる生涯。……六十五頁
第十一同　高老なる老人の事。……六十七頁
第十二同　他の老人の事。……七十頁
第十三同　或兄弟の問。……七十二頁
第十四同　詰責を受けたる一兄弟の事。……七十四頁
第十五同　默想の種々なる卓越の事、智の權の事、及び祈禱の各種類に對して智は其活動を起すに幾何權あるか祈禱には如何なる界限を天然に與へらるゝか、汝は如何なる界限迄祈禱を以て願ふの權あるか、其界限を越ゆれば汝が行ふ所は祈禱と名づけらるゝと雖最早祈禱には非ざる事。……八十一頁
第十六同　清潔なる祈禱。……八十二頁
第十七同　物の記憶を以て喚起せらるゝ肉體の念を離れて深く直覺に入らんを尋ぬる靈魂の假定。……九十二頁
第十八同　無形體なる者の本性を觀察するに就て問答。……九十八頁
第十九同　主日の事及び「スポタ」の事に關する理論の標準及び其比喩的意義。……百〇五頁
第二十同　常に庵中に居りて獨り己を省みんと決心せし者に最必要にして最有益なる日々の想起。……百〇九頁
第二十一同　種々なる事項に就ての問答。……百十一頁
第二十二同　試惑を恐るゝ身體は罪の友となる。……百五十頁
第二十三同　默想を愛する一兄弟に遣す書。……百五十二頁
第二十四同　同胞にして同教なる兄弟に遣す書。
彼は世に居りてイサアクに過はんと欲し、其來らんことを書を以て勸め且懇願したるによる。……百五十九頁
第二十五同　知識の三の方法の事、其作用と其意味の同じからざる事、心の信仰の事、信仰に隱るゝ奥密なる富の事、此世の知識は其方法に於て信仰の正

直明白と幾ばく差異ある事……百六十一頁
第二十六同　知識の第一階級……百七十一頁
第二十七同　知識の第二階級……百七十五頁
第二十八同　知識の第三階級即完全の階級……百七十六頁
第二十九同　知識の他の方法と其種々なる意味……百八十一頁
第三十同　祈禱の狀態の事及び其他讀者が小心に守るならは不斷の記憶の爲に必要にして多くの關係に有益なる者の事……百八十三頁
第三十一同　近世的生活の事及び我等は畏れず懼かす神に依賴して心を堅むべく確たる信仰を以て勇氣なるべし何となれば神を看守者と爲し守護者と爲せばなり……百九十一頁
第三十二同　心中内部の奥密なる覺醒は如何して守らるゝか嗜眠と冷淡は何處より心中に來りて聖なる熱愛を靈底に消し靈界天上の事に熱心する精神を奪ふて神に向ふを滅殺するか……百九十六頁
第三十三同　心中に續生し祈禱を以て試みらるゝ多くの變化の事……二百頁
第三十四同　神に近づきて生存し認識の生活にて日を送る事……二百二頁
第三十五同　世に服從する事……二百五頁
第三十六同　或る顯然なる奇徴を己の手に有せんことを必要なくして願ひ且求むべからざる事……二百十頁
第三十七同　神は何故神を愛する者に誘惑を放任するか……二百十四頁
第三十八同　人に起る所の念頭により如何なる階級にあるを察知すべし……二百十七頁
第三十九同　靈に屬する人々は身體の肥滿に準じ他の靈界に屬するものを知識により幾許看破すべきか如何して智は其肥滿より上に高めらるべきか之より自由を得ざるは何故なるか智は何時如何なる方法により祈禱の時妄想なくして止まるを得べきか……二百二十五頁
第四十同　叩拜及び其他の事……二百二十九頁
第四十一同　沈默の事……二百三十四頁
第四十二同　是れイサアクが愛する所の一人に與ふる書にして彼は此中に(ア)默想の奥義に關する敎訓を著し多くの者が此奥義を知らざるに依り此の神妙なる練修を等閑にし往々修道士の間に行はるゝ傳說により屢中に

留まることを述ぶ(カ)默想のことに關する訓話の摘要……二百四十一頁
第四十三同　種々なる豫想の事、及び各豫想の爲に必要なる者の事……
……二百四十八頁
第四十四同　默想を務むるは思慮ある者に肝要なる事……二百五十四頁
第四十五同　精細なる思慮の階級……二百五十九頁
第四十六同　眞實なる知識の事、試惑の事、及び陋劣薄弱にして學ばざる人のみならず、一時無慾を賜はり、思想の有樣に於ては完全に達して、死者の如くなれると共に一分は淨潔に近づきし者等も慾の上に高く立ちし者等も此世にある間は其生命を慾なる肉體と結合するにより、神意により格鬪の中に居りて肉體の故に慾より援劒を受く、故に驕傲に陷りて滅ぶるが爲憐みによりて彼等に試惑を遣はさるゝを確知するの緊要なる事……二百六十五頁
第四十七同　此章の意義及び祈禱の事……二百七十三頁
第四十八同　道德の各種及び凡の道の完備……二百七十九頁
第四十九同　信仰と讓德の事……二百九十頁
第五十同　逝世の益……三百〇三頁
第五十一同　人は何に由りて生命の外部の狀態の變ずると共に神秘なる思想にも變化を來すか……三百〇五頁
第五十二同　夜間の儆醒及び其行爲の種々なる方法……三百十一頁
第五十三同　讓遜は如何なる尊敬を受るか、其階級は如何に高尙なるか……
……三百十四頁
第五十四同　問答各種……三百廿二頁
第五十五同　克肖なる父、奇蹟者シメオンに與ふる書……三百二十六頁
第五十六同　神を愛する事、世を避くる事、及び神に於て安んずる事……
……三百七十三頁
第五十七同　世より遠ざかる事、及び凡て智を援すものより遠ざかる事……
……三百九十一頁
第五十八同　神は靈魂を益するが爲慾に近接するを許す事、及び苦行的行爲の事……四百十一頁
第五十九同　修道士の生活の秩序及び其梗概と區別、德行は如何なる樣子にて互に相生ずるか……四百二十八頁

第六十同　世より極て上なる窄き路を進行する者に對し魔鬼の戰ふ種々なる手段の事……四百三十頁
第六十一同　心を神に近づかしむる爲に人に益するものゝ事、如何なる眞實の源因は人に助を窃に近づかしめて、如何なる源因は人を謙遜に導くか……四百四十三頁
第六十二同　神聖なる誓の悔改を奬勵する諭言、及び人間の弱きに對して此之を陳べられしは人々生活の神より離れて亡ぶるを免れんが爲なる事、及び罪を犯す緣由と爲すべからざる事……四百五十頁
第六十三同　修道士の生涯の美は如何して保護せらるゝか神に榮を歸するの順序……四百五十三頁
第六十四同　神より定められたる默想の路を進行する者に如何なる轉變變化を生ずるか……四百五十六頁
第六十五同　默想者の事、默想者が其行爲を以て無邊の海に至る、即ち沈默の生涯に至るを理會し始むるは何の時なるか、其勞の結果を產するを多少望むを得るは何の時なるか……四百五十七頁

第六十六同　世に貧者となりて神を尋ぬる爲に出發したる神の僕は眞理の了解に達せざらんを恐れて尋ぬるを停止すべからず、又神聖なるものと神の奥義の研究を愛するにより生ずる熱愛を冷にすべからざる事、及び智は慾の記憶により擾さるゝ事……四百六十頁
第六十七同　神に倚賴する種類當然に神に倚賴する者と無思慮に且無智にして倚賴する者の事……四百六十二頁
第六十八同　世を棄る事、及び自由の交際を憤む事……四百六十八頁
第六十九同　掛念を有せざるは默想者の爲に有益にして其出入は有害なる事……四百七十二頁
第七十同　夜間儆醒の行の愉快により神に接近し人に顯然たる者の行路の事及び此の本人は其生活の凡ての日を密にて養はるゝ事……四百七十五頁
第七十一同　罪なる敗壞は如何にして生じ如何して止むか、其力と勢力の事……四百八十一頁
第七十二同　心を守る事、及び幾微なる直登の事……四百八十九頁
第七十三同　神を愛する表徵及び其働の事……四百九十一頁

第七十四同　德行の種類。……四百九十三頁
第七十五同　不斷の禁食の事自己に集中して一所に止る事、其結果の事、及び凡て此等を正しく適用するを知識により區別するを學ぶ事。……四百九十六頁
第七十六同　沈默と默想の事。……五百〇七頁
第七十七同　肉體上の感動。……五百〇八頁
第七十八同　誘惑の各種類及び眞理の爲に起る誘惑を忍耐するは幾許く愉快にして、善智なる人は如何なる階級により昇進するか。……五百十二頁
第七十九同　驕傲の事、驕傲なる神の敵の試惑。……五百十七頁
第八十同　德行の種類の說明及び彼等は各々如何なる價値と如何なる特質を有するか。……五百二十一頁
第八十一同　肉體と靈魂と智の淨潔。……五百二十五頁
第八十二同　靈的智慧に充たさるゝ有益なる主眼。……五百二十六頁
第八十三同　悔改の事。……五百二十七頁
第八十四同　智識の尺度と信仰の尺度は如何程大なるか。……五百三十頁
第八十五同　讒遲にして聽く者に愛を以て告ぐる有益なる敎訓。五百三十四頁
第八十六同　心が靈界に進歩する爲神の照管に依り我等に喚起せらるゝ天使的行動。……五百四十六頁
第八十七同　人に於ける第二の行爲。……五百四十八頁
第八十八同　光と暗の更迭は何れの時にも靈中に起る事及び靈魂は右にも左にも傾く事。……五百五十頁
第八十九同　神聖なる熱心の假面に被はるゝ無智なる熱心の有害なる事、溫良及び其他の德性より生ずる助の事。……五百五十三頁
第九十同　心ならざる惡なる念頭は之に先だつ思念を等閑にして注意せざるより生ず。……五百六十四頁
第九十一同　神を愛するより生ずる忍耐の事及び忍耐により助を得らるゝ事。……五百七十一頁

目次

目次

終

苦行的說教

第一　說教

世を棄つる事及び修道士の生涯。

神を畏るゝは道徳の始なり。言ふあり、道徳は信仰の所産なりと、彼は智が世の放心より遠ざかり、靈ひとして旋回する思を繼めて、未來の興復を考ふるに集中ずる時心に種附けらるゝなり。人は道徳の基を置かんと欲せば、己を操持して浮世の事に遠ざかり、聖詠者（聖詠二十二の三、百十八の三十五）が神を以て示し且稱したる如く正しく聖なる路に由り、光明の法に止まるに如くはなし。品性に於ては天使と等しき者もあるべしと雖、其尊きを持續し得る人ありや、或はあらん、否、全くあらざらん、是れ或人の言ふ如く變化を速に感受するより生ずるなり。

生命の路の始は常に智を以て神の言を學ぶと貧しきに生活を送るとにあり。一を

以て己を潤すは他を成全するに助けん。もし神の言を學ぶを以て己を潤さば貧しきに進歩するの助を爲すべくして無慾に進歩するは神の言を學ぶに進歩するが爲に閑暇の時を汝に與へん彼と此との方法は道徳の完全なる家屋を速に高むるに勤けん。

世に遠ざからずんば誰も神に近づく能はざるなり然れども遠ざかるとは肉體より移るの謂には非ずして世事に遠ざかるをいふ而して道徳は人の其智を世の爲に占有せしめざるにあり五感が人に勢力を有する間は心は寧靜に止まり妄想なくして存する能はず野に非ずんば肉體上の慾は休止に至らざるべく惡なる思念は衰へざるなり靈魂が自から感動する力を受けて神を信ずるに酣酔するに至らざる間は五感の弱きを愈さゝるべく内部に屬するものゝ爲に障礙となるべき有形物體を力を以て壓する能はざるべく自由と靈智的所產と彼と此との結果を感せざるべし即網より救はれざるなり第一者(ア)なくんば第二者あらざるべく第二者(イ)の正しく進行する處に在りては第三者(ウ)は恰も勒樽の如く結び付けらるゝなり。

(ア)世に遠かざること(カ)神を宿するに酣酔すること(サ)自由

恩寵が人に增殖する時は義の願により死を畏るゝことは人の爲に重視するに足らざるものとなるべくして神を畏るゝが爲に患難を忍耐すべき多くの理由を人は其心に發見せん見身體の爲には有害にして俄に人性に影響を及ぼし隨て人を苦しむるすべてのものは之を未來に望む所のものと較ぶれば毫も其眼中に入らざらん誘惑を許さるゝなくんば我等は眞理を認むるあたはざるべし。しかれども人の此事に於ける確證を發見するは神が人の爲に大に慮りて神の照管の下にあらざる人なしとの概念に於てすべくして神を尋ねて神の爲に苦難を忍耐する者は特に分明に之を見ること掌を指すが如くならん。さりながら恩寵の衰微が人に增々加はるときは此のすべてのものは人に於て殆ど之と反對なる狀態にてあらはるゝなり彼の爲に知識は研究の故に信仰より大なるべく神に依賴するは何れの事にも之あるにあらざるべくして人に於る神の照鑒は別に了會せらるゝなり。かくの如き人は常に矢を以て射んとして暗きに埋伏する者(聖詠十の二)の詭計に陷らん。

人に於て眞生活の始は神を畏るゝなり然れども人は才智の高超と共に之を其心中に守るに堪へざるなり何となれば神を樂むを自から失ひつゝ五官に勤むる

が爲に心は散亂すればなり、げだし人々言ふ如く內部の思想は此等を感ずるを以て之に勤むる官能其ものに結び付けらるゝなり。

智の疑は心中に畏を引誘す然れども信念は肢體を截斷せらるゝ際にも自由の意志を確固不拔ならしむるを得べし。肉體に對する愛の汝に優勢なる程は汝が愛する所のものを圍む多くの抵抗に對し勇敢にして戰慄せざる者となる能はず。

己の爲に榮譽を希ふ者は哀みの原因を少くするあたはず。境遇の變化と共に眼前に在る所の事に關して變化を其心に感せざる人はあらず。もし慾念は人々の言ふ如く五感の所產ならば己を主張して引誘の際にも心の平安を守らんと言ふ者は終に默止すべし。

奮鬪苦行の時に於て勞の爲に恥づべき思念は其時絕滅すと自から己の事を稱する者は、貞潔なる者にあらず、其心の眞實を以て其智の直覺を淨むる者は、是れ貞潔者なり、げだし彼は放蕩なる思念に無恥にして心を留めざればなり。其良心の尊正が一見して貞信の爲に證を爲す時は恥は思念の秘密なる納所に掛けられし幕の如くなるべし、彼の無玷は貞潔なる處女の如く、パリストスの爲に信を以て守らるゝなり。

靈魂を豫め占領したる放蕩の傾きを遠ざけんが爲、又は肉體に起りて、逆焰を灑ぐ騷がしき記憶を除かんが爲に充分なるは、神の書を學ぶを愛するに己を埋めて、其意の深きを理會するに如くはなし。言中にかくるゝ奈智を理會するの樂みに思を沒するときは、之より解明を引出すに隨ひ、人は世を背後に棄つべく、すべて世にあるものを忘るべく、すべての記憶とすべて世が具體化したる勢力ある象樣は靈魂に消滅して、常に天性を見舞ひ來れる思念の要求を頻りに貶斥せん。されば靈魂は聖書の奧義の海に於て見る所の新なる顯現により大に悅ばん。

もし智は水面に浮びて、其意の深きに透徹し、其深處にかくるゝ悉くの寶を了解することは能はずと雖も聖書を了解せんとする熱心に占領せらるゝならば、是れ其最も驚くべきことを考ふる獨一の思考を以て其意思を堅く緊縛する爲にも、或る抱神者の言ふ如く意思が肉體の性に突進するを妨ぐる爲にも、これを以て充分ならん。然れども心は劣弱にして內部と外部の戰の時に起る所の殘害に堪ふる能はざるべし。されば惡なる思念の如何に苦しきことは汝等之を知らん。もし心は知識を以て占領せられずんば、肉體的突進の援れを忍耐するあたはざるべし。

掛けらるゝものゝ重みは風の暴きにより天秤の動搖する速力を妨ぐる如く、恥と畏は智の動搖を妨ぐるなり。しかれども畏れと恥の缺乏するに隨ひ、智は斷えず旋轉せしめられん。されば靈中より畏の遠ざかるにしたがひ、智の秤衡は自由を得たるものゝ如く彼方此方に搖々として定らざるなり。さりながらもし秤衡は甚だ重き貨物を其盤上に載するならば最早風の吹くが爲に易く動搖せざるべし。かくの如く智も神を畏るゝ心と恥との積載の下にあるときは、之を動搖せしむる者の爲に轉倒せらるゝこと難し。然れども心に畏の乏しくなるに隨ひ、轉動と變改とは之を占領し始めん。故に其進行の基に神を畏るゝの心を置かんことを學ぶべし。さらば途上に於て旋回するを爲さず、日ならずして天國の門にあらん。

凡そ汝が聖書に於て見る所のものは、言の主旨を探究せよ、聖なる意義の深きに透徹していよ〳〵精確に之を了解せんが爲なり。神聖なる恩寵の下にみちびかるゝ者は恰も或る聰明なる光線ありて句々節々に記されしものを通過する如くなるを感知すべくして、智は空言と大なる思想を以て心の認識に告ぐるものとを區別せん。

もし人は善名なる句々節々を思を潛めずして讀むならば、心も貧しくなり了るべくして、靈魂の奇異なる了解により最甘美なる趣味を心に得しむる聖なる能力は彼に消滅せん。

すべての物は常に其の親しきものに向ふ。神の分前を己れに有する靈魂も、奥妙なる神的能力を含有する言をきく時は、其言の旨趣を熱心に己れに引誘するなり。靈神を以て言ひ奥妙にして大なる力を有するものは、すべての人を覺醒して慫慂せしむるには非ず。道德に關する言は地の爲及び地と近く交るが爲に占有せられざらん心を要求す。道德は暫時なるものを虛るが爲に心を苦めらるゝ人の思を覺醒して道德を愛せしめず、之を領有するを尋ねしめざるなり。

物體より解脫するは其成立に於て神と結合するに先だつ恩寵の攝理により、或者には後者の前者に先だちてあらはるゝことも屢々之ありといへども前者は後者に先だつ、けだし愛は愛にて覆はるれば也。攝理に通常なる秩序は人間社會の秩序を守るべし。若し汝に於て恩寵の序と異なるあり。さりながら、汝は一般共通の秩序は人間社會の秩序を守るべし。若し汝に於て恩寵の先だつあらば、是は恩寵の事なり。しかれどももし先だゝずんば、すべての人々が互に進行する途によりて汝も靈塔の高きに昇るべし。

すべて直覺的に行はるゝ事にして、之が爲に與へられたる誡命に從ひ成就せらる

べきものは、有形の目には全く見えず。而してすべて實驗上に行はるゝ事は複雜なり。何となれば實體あるものと實體あらざる者との爲にたゞ一なる誡命所謂實驗なるものは彼にも此にも、直覺にも實驗にも必要を有するによるなり。げだし一致とは直覺と實驗との配合なればなり。

淨潔の事を配慮するの行爲は既往の過を記憶するにより喚起せらるゝ感情を厭せず、却て之を記憶する所の哀みを靈智より借るべし。さらば此時より記憶の進歩は心中に益を生せしめん。靈魂が道德を求むるに倦かざるは、靈魂と結合する身體の顯然たる願欲の一分を己の益に向はしめん節度はすべての物を飾らん節度なくんば最美なりと思惟せらるゝものも轉じて害とならん。

彼の五官に役せらるゝにはあらざる樂みを己れに感じ智を以て神と交らんと欲するか矜恤に勤めよ。矜恤が汝の內部におらはるゝ時は彼の神に似たる聖なる美は汝の中に揃かるゝなり。矜恤の事の包容せざる所なきは、光明の榮譽と一致するが爲に、何等の時間も要するなくして神性と交るを心に生せしめん。

靈的交通は印象す可らざるの記憶なり。此記憶は體合一致を守るが爲に其力を誡命に違はざるより借りつゝ人性を强ふるを以てするにあらず。又之に從ふに依るにもあらずして、篤熱なる愛により、不斷心中に燃えんげだし心靈の直覺を以て堅く體合に立つが爲に支柱を彼處に於て見るなり。ゆゑに肉に屬する靈に屬する二樣の感覺の閉るにより、心は驚奇せん。もし人は先づ我等の主が言ひし如く父の完全なる如く博愛なる者となるを始めずんば、見えざる象樣を心に印する靈的愛情に達するが爲に他の路あるなしげだし主は其從ふ所の者に此基を置かんことをかくの如く誡命し給へり。

實驗の言は別にして、美言は又別なり。經驗上何等の確知なくしても、智慧は其言を飾るを能くすべく、眞理を知らずして眞理を言はん。或者は道德の行爲を自から實地に試みずして、道德のことを講解し得べし。しかれども實驗より出る言は希望の實なり。之に反し實驗を以て其義を表さゝる智慧は耻の言質なり。

壁に水を描き其水を以て己の渴を止むる能はざる技藝者と、美なる夢を見る人と、實驗を以て其義を表さゝる言とは同じかるべし。道德につきて自ら實地に試みたる所を言ふ者は其聞く所の者に之を傳ふること己の勞を以て求めたる金を他人に與ふる者と同じかるべし。又己の勞にて得たるものにより聽者の耳に教を詩く者は其神子と言ふや勇氣にして口を開くこと、高老なるイアコフか潔淨なるイオ

シフにつぐる如くなるべし、曰く、我れ第一の分を汝の兄弟よりも多く汝に與ふ、是れ我が劍と刀とを以て唖𠮟俚人の手より取りたる者なり」（創世記四十八の廿二）一時の生命は凡て不潔に生活する人には大に望ましかるべく、智識を奪はれたる者は之に次ぐ。死の畏は良心に責められる〻人を哀ましめんと或人の言へるは太だ好し、之に反して善なる證明を自己に有する者は生命を願ふ丈死をも願ふ。此の生命の爲に己の智を恐怖と畏懼の奴たらしむる者を眞の智者と認むるなかれ。ずべて肉體と遭遇する所のものは善なるも、惡なるも夢と思ふべしげだし之より脫するは獨り死を以てするにあらずして、死する以前にも彼は汝を棄てゝ遠ざかることと屢々之あり。しかれども此中汝の靈魂と或る關係を有するものあらば、之を以て此世に於る己の所得と思ふべし、彼は汝と共に來世にも行かん。而して此は善なるものならば樂んで其心に神に感謝すべし。されど此は惡なるものならば哀むべく、嘆息すべくして、汝が此身を有する間に之より脫せんことを盡力すべし。

凡て汝の心中に行はるゝ善は、汝自らも念を入れて奥密に涵養せよ、げだし汝の爲に之が中保となるものは洗禮と信仰にして、之により汝は我等が主イイススハリストスを以て彼の善なる行に召されたるなり。彼に光榮と尊敬と感謝と叩拜は父及び聖神と共に世々に歸す。アミン。

第二　說教

神に感謝することと幷に初等の教の簡短なる說明。

受くる者の感謝は與ふる者をして先に受けたるよりも多くの賜を與へしむ。少き者の爲に感謝せざる者は多き者に於ても僞なり、不眞實なり。

病んで其病を知る者は必ず療法を尋ねん。己の病を他に告ぐる者は治療に近づきて其療法を易く發見せん。心の頑なるによりて彼の病は增加す、もし病者は醫に反對するならば、其苦痛は益々大ならん。悔いざる罪の外に赦す可らざる罪なし。而して賜はたい之が爲に感謝することなき時の外は加增なくして了らざるなり。愚鈍なる者の受くる部分は其眼中に小なり。

德行に於て汝より優越なる者を常に記憶に存して忘れざるべし。彼等の尺度に對して己の足らざるを不斷に見んが爲なり。憂ふる者と輕蔑せられたる者の最苦しき憂愁を常に心に存すべし、汝自ら逢ふ所の微小にして論ずるに足らざる憂愁の

爲にも當然の感謝を爲し喜んで之を忍耐するを得んが爲なり。

打擊と衰弱と怠慢の時に當り、敵の爲に苦しき疲勞と罪の重きとに拘繫抑留せらるゝ者は以前の勉勵の時を其心に思ひ浮ぶべし。汝は凡て小なることをさへ如何に慮りしか、如何なる苦行をあらはしたりしか、汝のみならず、汝の怠慢により汝に現れたる如何なる熱心を以て抵抗したりしか。然し瑕瑾の爲に汝は如何なる痛心歎息をなしたりしか、此のすべての際に汝は如何なる。勝利の冠をうけたりしかと、此を念ふ可しげだし凡てかくの如き想出により汝の靈魂の喚起せらるゝは深處よりする如くなるべく、燃ゆるが如くなる熱心を被るは死者の葬られたるより復活して起上る如くなるべくして魔鬼と罪とに熱心敵抗するを以て其元始の秩序に立歸らん。

有力者の陷りしを記憶して、己の善行に誰遲せよ。昔陷りて悔改したる者の重き墜墮を想起せよ、而して之と同く彼等が其後に賜りたる高きと尊敬とを想起せよ、さらば己の悔改に勇敢ならん。

自から己を責めよ、さらば汝の敵は汝の近づくにより逐拂はれん。自から己と和せよ、さらば天と地は汝と和せん。己が內部の室に入らんことを勉めよ、さらば天の室を見ん何となれば彼と此とは同一にして一に入りつゝ兩ながら見るべければなり。彼の國の階梯は汝の內部に汝の靈中に秘藏せらる。罪を離れて自己に沈沒せよ、然らば彼處に登るべき路を發見し、之によりて登るを得ん。

聖書は來世に如何なるものあるを我等に說示さず。然れども天然の變化至りて此世界より出づるに先だち、未來の樂みの如何なるを此處に於て感知し得べきことを便宜に我等に敎ふるなり。さりながら縱ひ我等を喚起して未來の幸福を願はしめんが爲に、我等に慕はしくして且光榮なる、愉快にして且貴重なる物の名を以て此を描寫すといへども、『目未だ見ず耳未だ聞かず』云々（コリンフ前二の九）と言へば之により未來の幸福の測る可らずして、此處の幸福とは何の同じきこともあらざるを我等に知らしむるなり。

心神の樂は受くる者の靈性の外に獨立して存在する何等の物をも利用することあらず。然れども別に「天國は汝の裏にあり」（ルカ十七の二十一）と言ひ、又『汝の國は來れり』（マトフェイ六の十）といへば、是れ既に我等は己の內部に或る感覺に屬する實體を感じ、此中に籠る所の樂みを聘質として受けたるを示すなり。げだし獲たる其ものは必ず聘質と同しき者なるべく、全きものは部分の合したるものならざるべから

す。ゆゑに「鋭に縁りて觀るが如し」〔コリンフ前十三の十二〕といふは獨立的に存する者を示さずといへども、同じきものを受けたるを意味するなり。然して此の感知は聖神の智慧ある作用なりといへる聖書解釋者の證明は、もし眞ならば、此感知は亦既に彼の全きものゝ部分なるなり。

戰て善を爲す者は道德を愛する者にあらず。之に隨つて生ずる不幸を喜んで受くる者は道德を愛する者なり。人が道德の爲に患難を忍耐するは大なる行爲にあらず。五官の誘惑的肉煉の時に當り、善意の選擇を爲すが爲に智の惑はざるは、大なる行爲なり。

すべて後悔は自由を奪はるれば喜をも生せず、又此を爲しゝ者に恩賞に對する權利をも與へざるなり。

もし汝に害なくんば陷る者を庇護すべし、然らば彼にも善心を添ふべく、汝の主宰の憐みは汝をも扶けん。劣弱なる者と傷心する者とは言を以て之を堅むべく、汝の手の届く丈すべての方法を以て堅めよ、然らば全宰なる右の手は汝を堅めん。祈禱の勞を以ても中心の愛情を以ても傷心する者と親與せよ、然らば汝の願の爲に憐みの泉は開れかん。

感動に滿たさるゝ清き思念を心に有する神の前の祈禱を以て常に己を勞らすべし、然らば神は汝の智を不潔汚穢なる思念より守り、神の途は汝によりて辱められざるべし。

神の書を讀み、其確實なる理解を以て、汝の視覺が他の未だ知らざる放蕩の汚穢を以て汚されざらん爲なり。

勝たれざるべしと思ふ時にも、或は放蕩なる思念を以ても、或は汝を誘惑に引き入るゝ容顏を見るを以ても已の智を試みるを決行するなかれ、何となれば賢者も此の如くして暗まされ驕傲に陷りたればなり。其肉體の強き愛なくして火焰を其懷に隱すなかれ。

青年には學ばすして聖物の軛下に自から投することは難し、智の味の始は、其徵候が心中に始て顯はるゝ時、先づ神の勤めに怠ると、祈禱に怠慢なるとに於て發見せらるべし。げだし靈魂が先づ此より離れずば、心靈上の誘惑に入るべき他の途なければなり。然して靈魂は神の助を奪はるゝならば、其敵の手に易く陷らん。且靈魂は道德の行を等閑視するものとなるや、必ず之と反對なるものに誘はれん。げだし如何なる方面なりとも、此より他に轉ずるは、最早反對なる方面の始なり。もし道德の

ため、及び靈魂の爲に爲す所あらば、無益の事に掛念するなかれ。己の弱きを不斷神の前に打明すべし、然らば保護なくして獨り居るも、他の爲に誘はれざるべし。

十字架的實驗に二樣あり、性の二樣なるにより彼も二部に分たるゝなり。其一は靈魂の刺激的部分の働により起さるゝ肉體の憂を忍耐するにありて、是れ所謂實驗なり。之に反して他は才智の顯徹なる活動と神聖なる默想とにあり、同く亦祈禱を專にする等にありて彼は靈魂の願望的部分に行はれ直覺と名づけらるゝなり。而して一者即實驗なるものは熱心の力によりて靈魂の慾に屬する部分を潔むべく、次者は眞實なる愛の働にして即ち靈魂の聰明なる部分を光照する天然の願望なり。凡て第一の部分に於て完全に學習を爲すに先だち、此の第二の部分に移り、其美に心を奪はるゝ人のことは予は最早其怠慢は言はざるべきも「地に在る肢體」「コロサイ三の五」を先づ殺さゞるが爲に、怒は彼に及ばん。即十字架的汚辱の行爲を忍耐練習するを以て意志の弱きを癒し、古聖のいはゆる其官能の弱きを癒して、靜默に達するを敢てしたるが爲に怒は及ばんとするに先だち智は十字架に上るを企つるならば、神の怒は及ばんといふは、亦此義を示す。怒を招くべき此の十字架に上るの事は憂愁を忍耐する、即肉體に釘する第

一の部分にあるには非ずして、人が直覺に入らんとする時にあり、されごこは靈魂を慫慂したる後に從ふべき第二の部分あり。耻づべき慾の爲に智を汚されたる者と虛妄の念を以て智に滿たさんと急ぐ者とは、先づ憂愁を以て心を潔めず、肉體の願望を惻せずして、耳に聞くものと墨汁にて書したるものとに依賴し、自から目を盲まして、暗黑に滿たさるゝ途を行かんと猛進するが爲に其口は塞がれん。けだし視覺の健全なる者は光に滿たされ、恩寵の嚮導を己れに得ること、日夜戰々兢々として其目は淚に滿たさるゝなり、而して彼等を途に要する甚だ恐るべきものと逃遁する恐るべき懸崖と、欺かれ易き幻像と相混じてあらはるゝ眞理の假裝の故に彼等は祈禱と涕泣とに於て其勤を終日續行し夜に至らんとす。

或人言ふ『神よりするものは自然に來る、然れども、汝は感知せざるなり』と。是れ眞實なり、然れごもたゞ願くは場所の淨潔にして汚さるゝ無からんことを。もし汝の心の目の眸子が不潔ならば、太陽の球體に敢て目を注するなかれ、恐らくは汝は此の小なる光線をも失ひ、即一片の信仰と謙遜と心の信認と汝の力に準する小なる行爲をも失ひて、靈物の居る唯一の範圍に投せられん。即神の外にありて外域の幽暗と稱する地獄と同じき所に投せらるゝこと、夫の不潔の衣を服して婚姻に來るを

恥ぢざりし者の投せられし如くなるを免れざらん。

思の淨潔は勞苦と己を守ることより流れ出づべく、思慮あることの光は思の淨潔より流れ出でん。此により才智は恩寵に依りみちびかれて、五感が楯を有せざるものと敎へざるものと學ばざるものとに至らん。

道德は即體にして直覺は即ち靈なるを想ふべし、而して彼と此とは五感に屬すると靈智に屬する二の部分より合成せらるゝ一の完全なる人を成す。肉體と其部分が完全に形作らるゝなくんば、靈魂は存在を受けて生ずる能はざるべし、此の如く靈魂の爲に第二の直覺に達する即默示の精神に達し、靈的種子の實質を己れに受くる子宮に於て形成せらるべき直覺に達するの事も、道德の行爲を成すなくしては能はざるべし而して是れ即天啓を己れに受くる力を認識する者等の居る所なり。

直覺は物と其原因とに隱るゝ神聖なる奥秘を感知する是なり。世に遠ざかると世を棄つると、世にあるすべてのものより潔まるの事を聞く時は、先づ世○といふ名稱は如何なるを意味なるとを理解し且認識するに通俗の區別により此名の成るとを理解し、且認識するに通俗の意味を以てせず、純理の見解を以てせんこと汝に要用なり、然らば汝は自己の靈魂が幾ばく世に遠ざかると世より之に何を混せらるゝことを認識するを得ん。

世といふ言は我等が計算する諸慾を自から包括する集合名辭なり、もし人は世の如何なるを先づ覺知せずんば、何の肢體を以て世に遠ざかり、何の肢體を以て世と結ばるゝを認識する迄に到り達せざるべし、二三の肢體を以て世より脫し、之を以て世と交るを避け、竊に己を以て其生活は世に遠ざかれりと思ふ者多し、げだし彼等はたゞ二の部分にて世の爲に死したれど、他の肢體を以ては世に生くるを理會せず、容智を以て悟らざるなり。然して彼等は自から己の慾をも自覺するあたはずして、既に之を自覺せざれば、之を療することにも意を致さゞるなり。

理論的推究によれば世とは分ち取る所の諸慾を自から包括する集合名辭の組成をも名づくされば慾を總括して之に名を下さんと欲するときは、之を世といへども、其名の區別により之を分たんと欲するときは、之を慾と名づくるなり。慾は連綿として纖々承々する世の流れの部分なり、ゆゑに慾の廢絶する處に於ては世は其連綿たる纖承を止めん。慾とは左の如し、富の爲及び或る物體を聚むるが爲に熱中するなり、肉體上の快樂なり、結婚の熱情は之より生ず、貧貴の顯なり、嫉妬は之より流る、貧賤となりて合せんとの願なり、權勢の高きに傲然として跨るなり、修飾して

意を悦ばせんとの願なり、人間の名譽を索むるなり、是れ怨の原因なり、肉體の爲に恐るゝ心なり、此等の慾の其流を止むる處に於ては、世も死すべく、此等の慾の或る部分が彼處に不足する程は、それにしたがひて、世は其組織の其部分に於ては活動せずして休止するなり、聖者のことに就て或人の言ひし如し、曰く彼等は生存しつゝ死せり、何となれば肉に於て生くれども、肉に從はずして生くればなりと、ゆゑに汝も此等の中の何の部分を以て生くるを見よ、其時は何の部分を以て世に生きて何の部分を以て死せるを汝は認識せん、世の如何なるものたるを確知するときは此のすべての區別により何を以て世と結ばれ、何を以て世より脱するを確知せん。畧して之を言へば世とは肉體的生涯と肉體の念慮をいふ、人の己を此より棄ひ去ることに依り人が世より出でたることは認識せらるゝなり、されば世より遠ざかることも左の二の徴候により認識せらるべし、即超絶なる生涯に依り及び其智見の卓越なるに依り、認識せらるゝなり、此よりして終に庶物に對する概念は汝の思に生じて、其の概念により思は庶物の上に飜らん、されば性が己を強ひずして願欲するものは何なるか、汝にある所の萠芽は涸さるゝ能はざるものなるか、或はたゞ偶然に生ずるものなるか、智は全く無形體なるものを理解認識するに到達したるか、或は全く有形物體なるものに動かされて此の物體なるものは嗜慾的なるか、之と相準じて汝は其生涯の尺度を得んげだしすべて行ふ所のものに智が自然にあらはるゝ行爲の具體化したる印象は是ぞ即道徳なる、善なる目的と共に身を以て勞せんとする思念の熱切と集中は、もし嗜慾的にあらずんば、此の熱切を練習するが爲に、原因を自から此等の印象より健然に借り來るべくして、此等の思念の醒なる印象と相會しつゝ、神に於る最良なる熱心の爲に無益なる記憶は常に劃斷せらるゝにより智は弱るなやや否を察すべし。

此章に於て示したる此等の僅少なる徴候は、もし人は默想に專らにして通世生活を爲すときは人を光照するが爲に充分にして、こは多くの書に易ふるを得ん、肉體の爲の恐れは人々に於て有力にして、之により人々は或る名譽なる事、又は尊敬すべき事をも成すに堪へざるものとなり了ること屢々之あり、しかれども肉體の爲の恐れに靈魂の爲の恐れが臨むときは、肉體上の恐れは心靈上の恐れに對して無力なること、恰も蠟の之を燒く火の力に於る如くなるべし、我等が神に光榮は世々に「アミン」

第三　說教

靈魂は世と世慮に遠さかりて沈默するならば、神の睿智と神の造物を易く認識するに至らん、げだし其時は己の性と己の內部に隱るゝ寶とを認識するを得るなり。

浮世の慮の外より靈中に入るあらずして、靈魂が天性自然の狀態に居るならば、其辛勞は久しからずして神の睿智を認識するに達せん、何となれば靈魂が世に遠ざかると其沈默とは、彼をして自然に神の造物を認識せしむべく、之により彼は神に舉げられ、懽嘆して神と共に止まらん。げだし心靈の泉に外より水の入り來るあらざるときは、彼に溢るゝ天然の水は、神の奇蹟を考ふる思想を不斷靈中に生せしめん。之に反して靈魂が此等の思想を有せざるものとして現はるゝならば、是れ或は他の或る記憶を以て或る源因を與へられたると、或は五感が外物と逢着したるにより、靈魂に亂れを引起したることを示すなり。然れども五感が沈默を以て鎖され、外部に突出するを許されずして、沈默の助けにより記憶の衰ふる時は、靈魂の天然自然の意思は如何なるか、如何なる寶は之に隱るゝかを發見せん。それ此寶は無形體なるものを識るの認識にして、之に先だつの意思あるなく、之が爲に勞することもあらずして、自然に心中に生ずるものなり。然のみならず人はかくの如き思念の人の性中に生ずるを知らざることさへ之あり。げだし誰か人の爲に師となるか、或は智力により想像しつゝ他の爲に說明し得べからざるものを人は如何して理會するか、或は人か少しも他より學ばざる所のものに於て誰か其嚮導者となるか。

靈魂の天性はかくの如し。ゆゑに慾は或る附加物にして靈魂は自から之が本原たるなり。げだし天性によれば靈魂は無慾なり。されば聖書に於て靈魂の慾と肉體の慾の事を見るあらば、是れ慾の原因に關して言ふものなることは汝の爲に明白なるべし。しかれども靈魂は天性に依れば無慾なり。外部的哲學を固守する者等は此說を採らず、彼と同じく其門徒等も亦然り。之に反して我等は信ず神は像によりて造る所のものを無慾に造り給ひしを像によりて造る所のものとは肉體に關していふにあらずして、見ざる靈魂につきて言ふなりげだし凡の像は眼前にある所

の形狀より描取らるべし。先づ眼前にあらはれたる同形なくんば、いかなる像をあらはすを得べきか。ゆゑに我等が前文に述べし如く、慾は靈魂の天性に存するに非るを確信すべし。もし誰か之に抗言するならば、我等は彼に疑問を提出せん、彼は我等に答ふべし。

問　靈魂の性は如何なるか。無慾にして光に滿たさるゝものなるか、或は有慾にして暗まされたるものなるか。

答　それ靈魂の性は有福なる光を己れにうけしものなるが故爾には光明純潔にして原始の秩序に回復せらるゝときも之と同樣にあらはるゝならば、敎會の敎育者も斷定する如く、慾に感動するあるや、靈魂は其本性の外にあることは最早疑を容れざるなり。故に慾は後來靈魂に輸入したるなり、されば靈魂はたゞひ感動せらるゝも慾を以て靈魂の本性の中に之ある如く言ふは眞實にあらざるなり。ゆゑに靈魂が自己の固有にあらざる外物を以て感動せらるゝことは明なり。もし靈魂は身體の關係を離れて慾に動かさるゝにより、慾を以て靈に屬するものと名づくるならば、飢渴も睡眠も靈に屬するものとならん、何となれば靈魂は此等のものに於ても、之と同く肢體を截斷せらるゝ際に於ても、熱病、疾病及び其他の之に類するものに於ても、肉體と與にするにより、之と共に憂を分つは、猶肉體も靈魂と共に憂を分つが如し、靈魂は肉體の樂むときには其に樂み、其憂をも自から共にするなり。我等が神に光榮と權柄は世々に「アミン」

第四　說教

靈魂の事、慾の事、及び智の淨潔の事に就ての問答。

問　靈魂の天然の狀態はいかなるか、天然と反對の狀態はいかなるか。

答　靈魂の天然の狀態とは感覺に屬すると思想に屬する神の造物を認識するなり。天然以上の狀態とは常に萬物に先だちて存在する神性を直覺するが爲に喚起せらるゝなり。然して天然と反對なる狀態とは慾に亂さるゝものに靈魂の感動するなり。神聖なる大ワシリイの言へる如し、曰く靈魂は天性に順應してあらはるゝときは上方にあり、しかれども其天性の外にあらはるゝときは下方に地にあるゝなり、上方にあるときは無慾を以てあらはるれども、天性が其固有の品位より

下るときは、彼に慾はあらはるゝなり。ゆゑに靈魂の慾は天性のまゝ靈魂に屬するものにあらざることは終に明白なり。もし靈魂は非難せらるべき肉體上の慾に感動することは飢渴に於ると同くんは、飢渴に就ては之が爲に法を置かれざるにより、他の批責に値する者と同樣批責をうくべきには非るべし。時として或者には一見したる所或る不適宜なることを遂ぐるを神より許され、非難と譴責とに代へて善なる報酬を與へらるゝことあり、淫婦を妻に娶りたる豫言者オシヤの爲にもかくの如く、神に屬する熱心により、兇行を遂げたる豫言者イリヤの爲にもかくの如く、モイセイの命により其父母を及殺したる者の爲にもかくの如くなりき。其外靈魂には肉體の性を俟たざるも、天然自然に靜愛と激し易き性のあることは言ひ得らるべくして、是れぞ即靈魂の慾なる。

問　性に順應すことは靈魂の望みが神聖なるものゝ爲に奮熱せしめらるゝ時なるか、或は地に屬するものゝ肉に屬するものに向ふ時なるか、且何の爲に靈魂の性は激怒と其熱心とを露はすか。又如何なる場合に於て激怒は天然なるものと名づけらるゝか。靈魂が或る肉體上の望みの爲或は嫉妬の爲或は虛誇の爲或は之と相類するものゝ爲に刺激せらるゝ時なるか、或は之と反對なるものゝ之を刺激する時なるか、誰か說あらば答ふべし。我等之に從はん。

答　神の書は名稱を多く言ひ、屢々之を使用すれども、其義を的確にあらはさず。或る名稱は肉體に屬すれども、靈魂のことを言ひ、之と反對に靈魂に屬する名稱は肉體のことを言ふ。聖書は之を分開せず、然れども聰明なる者は此を理解するなり。くの如く主の神性に屬する名稱の中、人性に適用すべからざる或る名稱は聖書に主の至聖なる體のことを言ひ、之に反して人性に依り主に屬する卑下なる名稱は主の神性のことを言ふ。ゆゑに多くの者は神聖なる言の旨趣を理解せず、蹉跌して改む可らざる罪を犯しぬ。かくの如く聖書には靈魂に屬するものと肉體に屬するものとを嚴に區別せず、ゆゑに道德は天然に靈魂の健康ならば、慾は最早靈魂の病にして、靈魂の性に偶然入り來りて其固有の健康を失はしむるものなり。然れども健康は天然に偶然の病に先だつことは、此により明白なり。ゆゑに此は實にかくの如くならば(至當ならば)是れ既に道德は天然自然靈魂に存在して偶然なるものは靈性の外にあるを意味するなり。

問　肉體上の慾は天然なるか、或は偶然に肉體に屬するか。又靈魂に屬する心靈上の慾は靈と體の結合により天然なるか、或は非固有的に靈魂に屬するか。

答　肉體上の慾のことは非固有の義に取るべしとは誰も敢て言はざるべし。然れども心靈上の慾のことは清潔が靈魂に天然なることの確知せられて、人皆之を認むるならば、慾は毫も靈魂に天然なるにあらずと敢て言ふは當然なり、何となれば病は健康の後にあればなり。然して同一の性に善なるものと惡なるものとは共に存すること能はず。ゆゑに一は必ず他に先だゞざるべからずして、他に先だつものは天然なり、何となれば凡て偶然なるものゝことは性よりするにあらずして、外より輸入せりと言ふべきによる。而してすべて偶然なるものと輸入せしものには變化の隨ふあれども、性は變せず易はらざるなり。されば肉體上の慾は肉體を益し凡て利益に資くる所の慾は神より賜はりしものにして、心靈上の慾も亦然るなり。さりながら肉體が其固有するものを失ひて、强て其安寧の外に立ち、靈魂に從ふを餘儀なくせらるゝときは、肉體は衰弱して害を被むらん。又靈魂も己れに屬するものを棄てゝ肉體に從ふときは、彼も害を受けん。使徒の言ふ所によるに曰く「肉の欲する所は神に逆ひ、神の欲する所は肉に逆ふ、斯の二の者相敵す」（ガラテヤ五の十七）ゆゑに誰も神を非難して我等の性に慾と罪とを賦與したる如く言ふなかれ、神は各自の

性にその成長に資くべきものを賦與し給へり、さりながら一の性が他と合同するときは自己と親しきものに合同するにあらずして、反對なるものに合同するなり。然れどももし慾は靈魂に天然に存するならば、何故靈魂は之より害をうくるか。本來性に屬するものは之を害せざるなり。

問　肉體を成長堅固ならしむる肉體上の慾は、本來靈魂に屬せずんば靈魂を害するは何故なるか。又道德は肉體を苦むれども靈魂を成長せしむるは何故なるか。

答　性の外にあるものは性を害する所以を認めざるか。けだし性は各己れに屬するものに近づきて、樂みに滿たさるゝなり。さりながら汝は此等各自の性に屬する固有なるものゝあるを知らんを願ふか認めよ、性に助くる所のものは其性に屬するものにして、之を害するものは疎遠なるもの、外より輸入せしものなることを。ゆゑに肉體の慾と靈魂の慾とが互に反對することは確知せられたるにより、凡て幾許なりとも肉體に助けを爲して之に休安を與ふるものは既に肉體に固有なるものなり。しかれども靈魂は何物と親しくなるとも其物は靈魂に天然なりとは言ひ得ざるなり。けだし靈魂の固有を成すものは肉體の爲には死なればなり。さりながら前文に言ふ所のものは非固有的に靈魂に屬するも靈魂が自から肉體を被むる

問は、肉體の弱きにより之を脱して自由にならんことは能はざるなり、何となれば測る可らざる容智を以て靈魂の活動と肉體の活動との間に定められたる一致合同の故に依り、肉體の爲に憂ふるものを天然自然に彼と共とすればなり。然れども彼等は互にかゝの如く共に與にすといへども、甲の活動は乙の活動と異なり、彼の望みは此の望みと異にして、之と同く體は神と異なるなり。さりながら性は變せざるなり、却て各自の性は或は罪に或は道德に極めて傾くといへども、然れども其固有の望みにより活動するなり。されば靈魂が肉體のことの慮より上に高まるときは、其活動により、全く靈神上に開花して、天の中央に測るべからざる所に潛去られんさりながら此の狀態に於ても肉體が其自己に屬する固有なるものを忘れて想起せざらんことをば許さゞるべくして、之と同じく肉體が罪に於てあらはるゝならば靈魂の思は心中に流れ出て已まざるなり。

問　智の淨潔は如何なるか。

答　智の淨潔とは人が惡を知らざるを言ふにあらず（けだしかくの如き者は畜類も同樣なるべし）天性のまゝ孩提の如くなる狀態にあるを言ふにあらず、外見を飾るを言ふにあらず。視よ智の淨潔とは即道德に勤勉練習するにより、神聖なるものを以て光照せられたる是なり。ゆゑに人が思念の誘惑なくして之を得ること肉體を衣ざる者の如くなるべしと予は敢て言はざるべし。けだし我等が性は死に至る迄戰はざるべく害を受けざるべしと予は言ふを敢てせざればなり。然れども思念の誘惑と名づくるは之に從はしめらるゝを言ふにあらずして、之と戰ふの始を置くをいふ。

思念の活動は四ある事

思念の活動は人に四の原因により生ずるなり。第一は天然なる肉體上の望みにより生じ、第二は人の見聞する世の客觀が感覺に顯はるゝにより生じ、第三は豫め占領せられたる概念により、及び人が智力に有する心靈上の傾きにより生じ、第四は如上の原因により、悉く〳〵の慾に引入れて我等と戰ふ魔鬼の打擊により生ずるなり。ゆゑに人は此の肉體の生活にある間は死に至る迄思念と其戰とを有せざる能はず。けだし人は世を出でざる先に、此の四の原因中何れか無動作に至らんことを得るが、或は肉體の爲に緊要なるものを切に求めざると、世の或物を願ふを餘儀なくせられざることを得るか、自から判斷すべし。しかれども此の如きことを想像するは時に合はず、何となれば性は此の如き事々物々に必要を有

すればなりと云はゝ、是れ最早慾は凡て肉體を被むる者の欲するとに拘はらず動作するを意味するなり。是故に凡て肉體を被むる人は顯然として不斷に動作する一の或る慾より己を保護せず、二の慾より保護せずして、多くの慾より保護せんこと緊要なり。德行を以て自から慾に勝ちし者は、たとひ思念と此の四の原因の打擊の爲に驚かさるゝといへども、自から勝利を讓らざるべし。何となれば彼等は力を有して、其心意は善良神聖なる記憶の爲に大に悅べばなり。

問　智の淨潔と心の淨潔とは何を以て異なるか

答　智の淨潔は別にして、心の淨潔は又別なり。げだし智は心靈上の感覺の一なれども心は內部の感覺を包括して之を其權中に持すればなり。心は根なり。もし根が聖ならば枝も聖ならん。即心が導かれて淨潔に達するならば、悉くの感覺も淸めらるゝこと明なり。もし智は神聖なる書を讀むに益々勉勵し、或は禁食と敬醒と靜默とに多少苦んで、汚穢の品行に遠ざかるならば、其從前の生涯を忘れて淨潔に達せん。然れども恒久なる淨潔は有せざるべし。何となれば彼は速に淨められるれや亦速に汚さるればなり。たゝ心は多くの患難と剝奪と、凡て世に居る者等と世間的交際を爲すより遠ざかると、此のすべての爲に己を殺すとにより、淨潔に達するなり。然してもし彼は淨潔に達するときは、其淨潔は何等の小なるものゝ爲にも汚されるべく、大なる顯然たる戰をも恐れざるべし。即塞心すべき戰をも恐れざるべし。何となれば薄弱なる人々に於て消化する能はざる如何なる食物をも速に消化し得べき强健なる胃を己れに有すればなり。げだし醫は言へり、凡て肉食は消化し易からず、然れども强健なる胃が之を受くるときは健康なる體に多くの力を與へんと。かくの如く凡て暫時の間に僅少なる勞苦を以て速に得たる淨潔は速に失はれ且汚されん。然れども多くの患難によりて達し、長久の間を以て得たる淨潔は靈魂の或る部分に對する打擊の度の優勢にあらざるものをば恐れざるべし。何となれば神は靈魂を堅むればなり。彼に光榮は世々に歸す。アミン。

第五　說教

感覺の事併て誘惑の事。

貞潔にして一に集中せられたる感覺は靈魂に平安を生じて事物を試みるに入るを許さゝるべし。然して靈魂が事物の感觸を己れに受けざるときは勝利は戰なく

して成らん。しかれども若もし人が漸く怠慢して打擊の來り近づくを許す時は戰を受くるを餘儀なくせらるべくして、最單純平和なる元始の淨潔は攪亂せらるゝなり。けだし此怠慢により人類の大半或は全世界も天然自然の清き狀態を失はん。故に世にありて世の人々と密なる關係を爲す者は智を淨潔にする能はざるべくして、智の元始の淨潔を回復するを能くする者は僅々なるべし。ゆゑに凡の人は常に警戒して其感覺と知覺を打擊より守らざるべからず。けだし儆醒と不眠と豫覺とは大に要用なり。

大なる質朴は變じ易し。人性は神に從ふ界限を守るが爲に畏を必要とす。神を愛するは人に道德の行爲を愛する心を喚起して、之により人は作善に誘引せらるゝなり。靈的知識は其性質に於て道德の行爲の後にあり。然れども畏と愛とは彼と此とに先だつべくして、愛は又畏に先だつ。凡て前者を爲すなくして後者を求むるを得べしと、恥ぢずして言ふ者は靈魂の爲に滅亡の第一の基を置かんこと疑なし。此の如く主の途は後者は前者より生ずるなり。

汝の兄弟を愛するを惑物を愛するに換ふるなかれ、何となれば汝の兄弟はすべてのものより貴重なる者を奥密に己の內部に受たればなり。大なる者を得んが爲に小なる者を棄てよ、高價なる者を得んが爲に餘分なるものと低價なるものを輕んせよ。自己の生命に於て死すべし死後に生きんが爲なり。苦行に死して怠慢に生きざるに己を付すべし。けだしハリストスを信ずるが爲に死を受けたる者のみ致命者にあらず。ハリストスの誡命を守る爲に死する者も致命者なり。己の願に於て無智なるなかれ、汝の知識の小なるを以て神を辱しめざらん爲なり。己の祈禱に於て智なるべし、汝に光榮を賜はらん爲なり。尊敬すべきものを嫉妬なくして與ふる者に願ふべし、其賢明なる願の爲に尊敬をうけん爲なり。ソロモンは自から容智を願ひ之を大なる容智の王に願ひしにより、容智と共に此世の國をも受けたり。エリセイは其師の有したる神の恩寵の二倍を願ひしに、其願は遂げずして了らざりき。けだし不要緊なるものを王に求むる者は王の尊貴を賤んずるなり。イズライリは不要緊なるものを願ひしかば、神の怒は彼に及べり。彼は神に屬する行爲により神の恐るべき奇跡に驚嘆する事をば棄てゝ其腹の欲する所を充さんを求めたり。然るに「食の尙其口にある時神の怒は彼に臨めり」（聖詠七十七の三十、三十一）神の光榮に應じて己の願を神にさゝげよ、汝の價値が神の前に增々加はりて、神は汝を喜ばん爲なり。もし誰か或る穢はしきものを王に願はゞ、こはたゞ其願の不要緊を以て自

から已を汚して之により大なる無智をあらはすのみならず、其願を以て王をも辱しむるなり。祈禱に於て地に屬する幸福を神に願ふ者もかくの如く行爲するなり。けだし視よ天使と天使長即王の大臣等は汝が祈禱の時如何なる願を以て主宰を向ふに注目し、汝地に屬する者が已の肉體を棄て天に屬するものを願ふを見るときは駭き且喜ばん、之に反して天に屬するものを棄てゝ自已の穢はしきものを願ふを見ば哀まん。

神が自から其照管により我等の願を待たずして與ふるものとたゞ神に屬する者又は其至愛者に與ふるのみならず、神を知らざる疎遠者にも與ふるものを神に願ふなかれ。けだし言ふあり、祈禱に於て「異邦人の如く贅語を言ふ」なかれと〔マトフェイ六の七〕是れ肉體に屬するものにして「異邦人の喜む所なり」と。主は言ひ給へり〔マトフェイ六の三十五、三十二〕子は其父にパンを願はざるべし、其父の家に於て最大なるものと高貴なるものとを求めよ、然らば此等の者願ふべきを誡命し給へり。然れども知識の完全にして靈魂の康健なる者には何を誡命せられしを見よ。彼等には告げて言へり食物或は衣服の爲に盧るなかれ、何となればもし神は無言なる動物の爲禽鳥の爲及び不潔なる造物の爲にさへ之を盧らば矧や汝等の爲に盧らざらんやと神の國と其義とを求めよ、然らば此等の者は皆汝等に加はらん〔マトフェイ六の三十三〕

神に願ふ所あらんに神は速に汝に聽くを延引するならば哀むなかれ、何となれば汝は神より容忍なるに非ればなり、汝に之あるは或は願ふ所のものを汝の受くるに當らざるによるべく、或は汝の心の行く路が汝の願に副はずして却て之と反對なるによるべく、或は汝は願ふ所の賜を受くべき程度に未だ達せざるによるなり。神の賜の無益とならざらん爲なり、何となれば易く受けしものは速に失はるべくけだし我等は時に先だちて大なる程度に關係すべからず、受ることの速なる爲にして、凡て中心の苦を以て得たるものは、戒愼して守らるゝによる。

ハリストスの爲に渇を忍べ、彼が其愛を以て汝に飮ましめん爲なり、浮世の樂の爲に已の目を塞げ、神が其平安を汝の心に主たらしむるを汝に賜はらん爲なり、汝の目の見る所を節制せよ、神の喜をうけん爲なり、もし汝の行爲は神の意に適せずんば神に祝禱を強て願ふなかれ、神を試みる人の如くならざらん爲なり、汝の祈禱は汝の生涯と相準ずること肝要なり、けだし地に屬するものに繫がるゝ者は天に屬するものを求むるあたはざるべく、世事に占領せらるゝ者は神聖なるものを願ふ

を得ざるなり、何となれば各人の願は其行爲を以て表示せらるべく、人が勉勵を順はす其ものゝ爲には祈禱に於て圖ふべきによる、大なる者を願ふ者は不要緊なるものに占領せられざるなり。

汝は肉體に繋がるといへども、自由の者たるべく、パリストスの爲に從順の自由を表はすべし、汝は正直を以て善く慮るべし、縞み去られざらん爲なり、凡の行爲に於て謙遜を愛せよ、謙遜なる者の行路以外常に發見せらるゝ認め難き網より救はれん爲なり、艱難を避くるなかれ、何となれば之を以て眞理の認識に入ればなり、誘惑を恐るゝなかれ何となれば之により尊敬すべきものを得べければなり、祈禱せよ心靈上の誘惑に陷らざらん爲なり、されど肉體上の誘惑には全く剛毅にして自から備ふべし、げだし誘惑の外に於ては神に近づくあたはず、何となれば神聖なる安息は誘惑の中に於て備へらるればなり、誘惑とは欲望のことにあらず、艱難を言ふ。誘惑より逃るゝものは、德行よりも逃れん。

問「祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり」〔マトフェイ二十六の四十一〕と言へども、他の處には「力を竭して窄き門より入れ」〔ルカ十三の二十四〕といひ、又「身を殺すものを懼るゝなかれ」〔マトフェイ十の二十八〕といひ、又「我が爲に其生命を喪ふ者は之を得ん」〔同上三十九〕といふ、此等の言は如何んして一致すべきか、主は何處にも誘惑を忍耐するに我等を奬勵すれども、此處には命じて「祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり」といふ、是れ何故なるかげだし艱難と誘惑となくして如何なる德行ありや、或は如何なる誘惑は此より大なるか、即人が自己を亡すより大なるか、しかれども主の爲に此誘惑に服すべきを主は命じ給へり、げだし言ふあり「己の十字架を負ふて我に從はざる者は我に宜しからず」と〔マトフェイ十の三十八〕然るに主は其凡ての教に於て誘惑に服すべきを命じたれど、此處には入らざらんことを誡命し給ひしは何故なるか、げだし言ふあり、汝等多くの艱難を歷て天國に入るべし〔行實十四の二十二〕又言ふあり「世にありて患難をうけん」〔イオアン十六の三十三〕又言ふあり「忍耐を以て汝等の靈を救へ」と〔ルカ二十一の十九〕嗚呼主よ、汝の教導は智の如何なる銳敏を要するか、才智と認識とを以て讀まざる者は、常に此教導の外にあらん、ゼワェディの子と其母が汝と共に天國に坐せんことを願ひし時、汝は彼等に告げて次の如くいひ給へり、曰く「汝等我が飮まんとする爵を飮むことを能くするか、我が受くる洗を受くることを能くするか」と〔マトフェイ廿

我等に命じ給ふか、如何なる誘惑につきて之に入らざらんことを祈禱すべきを我等に命ずるか。

答　信仰に關係して誘惑に入らざらんことを祈禱せよ、汝の心意の疑惑の爲に誘及び驕傲の魔鬼と共に誘惑に入らざらんことを祈禱せよ、神の放任により汝が才智を以て思考したる惡なる意見の爲に汝に遣さるゝ顯然たる魔鬼の誘惑に入らざらんことを祈禱せよ、汝の貞潔の神使の汝と離れざらんことを祈禱せよ、罪が汝に向て烈火の如き戰を起して汝を貞潔と分離せしめざらん爲なり、他者に對して一者を怒らしむる誘惑或は其靈魂が大なる苦戰に引入らるべき貳心と懷疑の誘惑に入らざらんことを祈禱せよ、之に反して、肉體上の誘惑は、靈を全うして之を受くるに自から備ふべく、全身全體を以て之を游渡るべく、其目は淚に滿たさるべし、汝の守護者の汝より離れざらん爲なりけだし誘惑の外に於ては神の照管は窺ひ知られざるべく、神の前に勇氣を得る能はざるべく、神聖なる愛の汝の心中に確立することも亦能ふべきなし、誘惑の先には人は疎遠なる者の如く神に祈禱せん、しかれども神を愛するにより、誘惑に入り、變心を自から許さゞる時は、神の前に立つこと、恰も神を債務者とする者の如くなるべし何となれば、神の旨を遵奉し神の敵と戰つて之に勝てばなり、視よ、祈禱せよ誘惑に入らざらんが爲なり」とは此を意味するなり、且汝は高慢の爲に恐ろしき魔鬼の誘惑に入らざらんことを祈禱せよ、願くは汝が神を愛するにより、神の力は汝に協力して、汝は其敵に勝たん、汝は其思念の邪なるが爲に此等の誘惑に入らざらんことを祈禱せよ、願くは神に對する汝の愛は試みられて、神の力は汝の忍耐により頒讃せられん、彼に光榮と權柄は世々に歸す、アーメン」

第六　說教

主宰が尊威の高きより人間の弱きに降し給ふ仁慈の事及び誘惑の事。

又汝は才智を以て透見するならば、我等の主が其憐に準じ、其恩寵にしたがひて處りつゝ肉體上の誘惑の爲にも祈禱すべきを命せしことは明なるべし、けだし我等の性は虛にして且土なる肉體の故に在弱にして、誘惑の中に在るときは之に抗する力あるなく、隨て眞理より離れ、背走して艱難の爲に勝たるべきを知り、祈禱する

を命じ給ひしは、もし誘惑なくしても神を悦ばすことを得るならば、我等は不意に之に陷らざらんが爲なり。然しても人は高き道德に進行しつゝ恐ろしき誘惑に不意に陷りて、塔へ得ずんば、是時に於て人は道德の完全に到り達する能はざるべし。

我等は自己の爲にも他人の爲にも、偏愛の心を有し靈魂の生命の隱るゝ高貴にして尊正なる行爲を怯心により放棄して、弱きを寬容するの敎を口實とすることあるべからず、例へば「祈禱せよ、誘惑に入らざらんが爲なり」といへる敎の如き是なり。けだしかくの如き者等のことは誠命により罪を犯すものと謂ふべし。故にも し誘惑が不意に起りて人を捉へんに、人は我が此誠命の一を破るならば、即貞潔若くは修道士の生活を棄て、或は信仰を棄て、或はパリストスの爲に闘はず、或は誠命の一を行はずして、之を棄つるを餘儀なくせられ、自から恐れを爲して勇氣にして誘惑に抵抗せずんば眞理より落ちん。

今より我等は全力を盡して肉體を輕んじ、靈魂を神に托して主の名の爲に誘惑と戰ふに着手せん。それイオシフを埃及の地に救ひて貞潔の儀表と標準を彼に於て示し、ダニイルを獅穴に三人の童子を火爐に守りて彼等を無害ならしめ、イエレミヤを泥坑より救ひて彼にハルデヤの陣中に於て憐を賜ひ、ペトルを戸の閉されたる獄中より曳出し、パウェルを猶太人の集會より救ひし者之を略言すれば常に如何なる場所如何なる方面に於ても、其僕と共に居りて、其力と勝利とを彼等に於てあらはし、彼等を多くの非常なる境遇に守り、悉くの艱難に於て彼等に其救をあらはす者は我等をも必ず堅めて我等を圍む波浪の中より我等を救ひ給ふべし。アミン。

我等が靈中には魔鬼と其衙卒に對してマカワエイ及び聖なる諸豫言者及び使徒及び致命者及び克肖者及び義人等の有したると同樣の熱心あるべし。彼等は最困難なる誘惑の際に神聖なる法律と靈的誡命を恐るべき方面に樹立し、世も身も背後に棄てゝ顧みず、其義を堅く守り、靈魂と共に肉體をも圍む所の危きに自から勝利を讓らず、勇氣にして之に勝ちて彼等が名は パリストスの來る以前に生命の書に記され、彼等が敎は神の命によりて我等の敎訓と衆固の爲に守らるゝこと使徒の證する如し。ロマ十五の四これ我等嚮なる者となりて、神の道を認識し、彼等と彼等が生涯のことの傳記を己の目前に有して精神を勵まさるゝ活る模範となし、彼等を以て己の標準となし、彼等の路に由り進行して彼等に背るあらん爲なり。呼神聖なる言は聰明なる靈魂の爲に何ぞ美なるや。彼等は靈魂の爲に食たること肉體の

第六　說教

爲に受けて之を支持する食と同じかるべし。且義人等の傳記は溫柔なる者の耳に慕はしきこと近頃植ゑたる植物を濕す不斷の灌漑と同じかるべし。

ゆゑに至愛者よ、元始より今に至る迄萬物が保護せらるゝ神の照管を心に懷抱することゝ弱き眼の爲に或る善良なる藥劑の如くすべく、之が記憶は何れの時にも自から之を守りて、之を熟考し、之を盛りて己の爲に敎訓を之より引出すべし、汝は神の尊崇の大なるを念ふ記憶を其心中に守るに練習し、其靈魂の爲に我等が主イエスキリストスに於る永遠の生命を得んが爲なり、彼は神にして又人なるにより、神と人々の間の中保者となれり、彼の尊崇の寶座を繞る光榮には天使の各品も近づくあたはず、然れども我等が爲に彼は卑微讓遜なる狀態に於て現はれ給ひしことイサイヤの言ふ如し、曰く「我等が見るべきうるはしき容なく、うつくしき貌なしと」イサイヤ五十三の二。性によればすべての造物の爲に見えざる者は肉體を衣て萬民の救と生命の爲に攝理を成し、萬民は彼に於て淸潔を得たり彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン」。

第七　說教

自由なる罪と自由ならざる罪の事、及び場合に依り犯す罪の事。

自由に依らずして人の引入れられ、弱きによりて行はるゝ罪あり、又自由に依り無知の爲に犯す罪あり、之と同く他者は或る場合により又は久しく惡に止まりて之に染みたるにより罪を犯すことあり、視よ是れ罪のすべての種類と狀態にして此等は皆批責せらるべきものなりと雖ども、罪の爲に定められたる罰と之を比較するならば、彼と此との輕重もあらはるゝ如なり。或者は最大なる罰科に陷り辛うじて悔改に着手せん、然れども或者の罪は赦さるゝに近し。アダムとエワと蛇とは罪の爲に報を神より殘らず受けたれど、彼等が訓に服したる程度は極めて同じからざる如く、彼等の子孫の爲にも亦然るなり。各人の爲に罰の輕重は其意志と其の罪に傾く偏向とに相準ずるなり。もし人は罪を助成する意志は有たざれども、道德を等閑にし之を練習せざるが爲に罪に誘はるゝならば、がくの如き者は罪に止まるこ

と重くして罰も亦重からん、之に反して他の道德に勉勵する者は何の罪にか誘はるゝならば、其罪を抹殺するが爲に憐れみは彼に近きこと疑なし。

或は人が道德に勉勵し活動して易はらざる者として顯はるゝ時犯す所の罪は之と同じからず、げだし其慮る所の事の爲に毀損を受けざらんと苦心しつゝ夜は寢ねず、昼は其重き軛と其德行の爲に慮るすべての苦心を何處にも自から負ふあり

と雖も、此等の配慮の時に際し、或は無知により、或は其行路、即德行の路に何等か妨礙の起るあるにより、及び何れの時にも其肢體に湧起する波浪により、又は其自由を試みんが爲に許さるゝ偏重によりて、其の天秤の盤が少しく左方に傾き、肉體の弱きが爲に罪の種類の一に引誘せらるゝことあり、されば此時に於て、彼は敵より起されたる災難により靈魂の爲に憂ひ悲みて、痛く嘆息せん。

或は人が道德の練修に弱く且緩慢なるを以ておらはるゝ時犯す所の罪あり、これ亦同じからず、彼は道德の路を全く棄つべく、凡て有罪なる樂みに從ふに趨走することゝ僕の如く、樂を極めん爲に、其方法を求むるに勉勵すること或る從卒の如くして、其敵の旨を力めて遂行し、己の肢體を魔鬼の器械に備へて、すべて彼に順ふの用意を爲すも、悔改の事を思ひ、道德に近づき、惡を絶ちて、滅亡の途に終を置かんことは少しも慮らざるなり。

或は道德の路に於ても、義の途に於ても、不意に起らんとする蹉跌と墜堕により犯す所の罪あり、げだし神父等の言に依るに道德の路に於ても、義の途に於ても、墜堕妨礙強迫及び其他の之に類するものに偶會するありと。

或は靈魂の墜堕と、其のすべての滅亡と、全くの自棄とあり、これ亦別なり、此等のものゝ數に顯然として屬する者は、もし之に陷るときは、父の愛を忘るゝなかれ、もし彼は不義に陷りて多くの罪を犯すこともあらば、善に勉勵するを息むるなかれ、其進行を止むるなかれ、然して再び勝たるゝ者も、起ちて其敵と戰ふべく、破壞せられし建築の爲に基を置かんことを日々に絕たざるべし、曰く「わが言者の言を口に絕始すべく、自ら此世を去るに至る迄は豫起あがる、幽暗に居れば主は我を照し給ふ」と（ミヘイ七の八前）して呼吸のある間は死に至る迄少しも戰を止めざるべく、頓覆の時に至ても、其靈を勝利に付すなかれ。

さりながらもし其小舟は日々に破られ、載貨は全く損害にかゝるある時も、自から苦心し、自から備儲し、たゞひ他借をなすとも、他の大なる船に乘り移り、希望と共に浮んで主が其苦行を眷み、其挫折に憐を垂れ、其惠を降し遣はして、敵の火箭を迎へ

しめ、之を忍耐するに強き勉勵を與ふるに至る迄は、已まざるべし。神より與へらるゝ容智はかくの如く其望を失はざる賢なる病者は此の如し。我等はたとひ或る行爲により罪せらるゝとも、全くの自樂の爲に罪せられざらんゆゑに父なるマルテニアンは苦行の多きにより弱らざらん事さ、義の途に當り種々なる戰の屢々起るにより遂巡するを爲さずして、我等が爲に恥づべき狀態を以て自から勝利を敵に讓る無らん事とを勸諭す。げだし彼は或る慈父の如く、端正整然たる秩序により遂ふること次の如し曰く子輩よ、汝曹は實に道德に進行する苦行者にして眞實なる心掛を有するならば、汝曹の心意を淨めてハリストスの前に顯はし、彼に悅ばるゝ行を爲さんことを願ふべし。げだし汝曹は之を以て天然の嗜慾と、此世の抵抗と汝等を常に攻擊して易はらず息まざる魔鬼の憎惡と、其の悉くの詭計により起る所のすべての戰を忍耐せざるべからず。戰の慘狀の連綿として續くを恐るゝなかれ、奮鬪の久しきに亙るが爲に動搖を來すなかれ、敵の軍備に弱はるなかれ、塞心するなかれ、もし汝曹は一時蹉跌して罪を犯すことありとも、絶望の淵に陷るなかれ。然のみならず、もし此の大なる戰に於て何の害をか受け、面を打たれ、傷を蒙むることありとも、之により汝曹の善良なる目的に進向するを少しも阻止するなかれ。殊に

汝等が選擇したる行爲に止まりて此の願はしく、且頌讚すべき終りに達せよ。即戰に於て堅固なる者となり、勝たれざる者となり、其傷の血に紅に染まる者とならんことを期して、如何なる方法を用ふるも敵と戰ふを罷むるなかれ。

大なる老人の敎訓は此の如し。上文に述る所のもの丶爲に汝曹は弱り、或は疲勞すべからず。禍なる哉彼の己の約束を詐り、其良心を蹂躪して、魔鬼に手を貸し、彼をして汝等を小なる或は大なる罪の種類に引入れたるにより、自から誇らしめ、其靈魂の攫かれたる部分を以て敵の面前に再び立つ能はざる修道士よ、彼は其朋友の清潔に達して互に相迎へんとする時、彼等と途上に相別れて、滅亡の途を辿り、克肯者が神の前に有する勇氣をも、又其清き心より出づる祈禱をも失ひしならば、即天軍よりも高く上昇して、願ふ所のものをうけ、其の獻げたる口に喜びと共に歸り來るに至る迄は如何しても自から禁せざるべき所のものを失ひしならば、何の顏を以て審判者に謁見せんとするや。而して最恐るべきは、こゝに彼等と途上に於て相別れし如く、光明なる雲の清潔を以て光り輝く體を其背に帶び去りて之を天門に立てんとする日に於て、ハリストスが彼を彼等と別つこと是なりげだし此處に於て彼等の行は最早定罪せらるべきにより「惡人は審判に立つを得ず、罪人は義人の會

に立つを得ざるなり」聖詠一の五

第八　說教

衰弱して怠慢なる人々より己を守りて自省すべき事、彼等と親むにより怠慢と衰弱が人に主こなりて種々なる不潔の慾に充たさるゝ事、放蕩なる思念を以て心を汚されざらんが爲少年と近づくより己を守るべき事。

其口に人を議するを禁ずる者は其心を慾念より守る者は時々主を見ん。常に神を念ずる者は、魔鬼を逐出し、怨の種子を絶たん。其靈魂を時々監視する者の心は默示を樂まん。其智の視覺を纔めて己の内部に集中する者は自己に於て靈的天映を見ん。其智のすべての高超を惡む者は其心の内部に於て己の主宰を見ん。もし清潔を愛し、之に由りて萬物の主宰を見るを得ば、何人をも議するなかれ、其兄弟を議する者に聽くなかれ。もし人が汝の前に於て爭論するあらば、耳を塞げ、且其處より避けよ、怒る者の言を聽かざらん爲なり、且汝の靈魂は生命を奪はれて死せざらん爲なり。激し易き心は神の奥義を容れず、然れども温柔にして謙遜なる者は新世界の奥義の泉なり。

親よ、清潔なるを得ば汝の内部に天ありて、天使と其光とを自己に於て見るべく、彼等と共に、彼等によりて、天使の主宰をも見ん。當然に稱贊する者は害を受けざらん。さりながらもし稱贊が彼の爲に樂くんば、彼は報酬を要せざる行爲者なり。讒遜なる者の寶は其内部にあり、是れ主なり、其舌を畢生堅く守る者は、竊み去られざらん。沈默する口は神の奥義を解釋すれども、言に巧なる者は其造成者より遠ざかる。善良なる者の靈は太陽よりも光り、神聖なる默示の現象を樂まん。神を愛する者に從ふ者は神の奥義を以て富まされん。然れども不義にして驕る者に從ふ者は神より遠ざかり、其友に嫌はれん。舌を默する者は、すべての外部に讒遜なる秩序を受け、容易に慾を制せん。不斷に思を神に潜むるにより慾は剿滅せられて、敗走せん。是れ慾を殺すの劒なり。有形なる海の寂然として靜なる時は海豚躍りて浮游する如く、心中の海に憤激と忿怒の情の寂然鎭靜して如何なる時にも心は愉快なるときは、眞義と神聖なる默示とは其中に躍らん。己の内部に主を見んを願ふ者は不斷に神を

記憶するを以て、其心を淨むるに盡力す、かくの如くなれば其智力の眼の清明なるにより、彼は時々主を見ん。水より出る魚に有る所のものは神を念ふ記憶を脫して世事の記憶に漂ふ智力にも之あらん。人々と會談するに遠ざかれば遠ざかる程人は實に智力を以て神と談話するを賜はるべく、此世の慰を己より遠ざくる程は聖神により神の喜を賜はらん。魚は水の乏しきにより亡ぶる如く、神によりて起る才智の活動も世の人々と數々交際して時を送る修道士の心に消失せん。

世と生活上の爲に困む不幸の俗人は、俗人と共に時を送る不幸なる修道士より愈れり。燃ゆるが如くなる熱心を以て晝も夜も心に神を尋ね敬によりて起る攻撃の根を絕つ者は、魔鬼の爲に寒心せらるべく、神と其使等に大に望まれん。靈の清き者には其內部に思想の境ありて、彼處に照る太陽は是れ即聖三者の光なり、此境の住者が呼吸する空氣は憔悴者たる至聖の神なり、彼等と與に坐する者は、聖なる無形體の造物にして我等の生命と喜と樂とは是れ即ハリストスなり、光よりの光、父よりの光なり。かくの如き者は其心の現象を毎時樂みて、實に太陽の光よりも百倍光り輝く美麗に驚かん、これぞ我等の內部に隱るゝイエルサリムにして、且神の國なることは、主の言ひ給ひし如し（ルカ十七の二十一）。此境は是即神の光榮の雲にして、

たゞ心の清き者は之に入りて主宰の顏を見るべく、主宰の光の光線を以て其智を御かがやかさん。

之に反して激する者、怒る者、名を好む者、貪慾なる者、貪食する者、俗人と交る者、我意を遂げんと欲する者、怒り易くして慾に滿たさるゝ者、凡てかくの如き者等は夜間に鬪ふ者と同樣混亂の中に居る可く、生命と光の境域の外に在りて、暗黑を辿らん。けだし此域は善良謙遜にして其心を清めたる者の領分なり。人は外部にある如何なる美をも嫌ふて、之を醜視せざる間は、眼を舉げて直に神に向ふ能はざるべし。己を卑めて抑損する者に主は容智を增さん。之に反して己を容智なりと思ふ者は神の容智より離る。舌を多言より制する程は、才智は照されて、思念を辨別せん。されど最思慮ある才智も多言の爲に亂されん。

世に屬する物に貪しき者は、神に於て富まんされど富者の友は神に於て貧しかるべし。貞潔謙遜にして言を放にするを嫌ひ、忿怒を心より逐ふ者は（余は之を保證す）祈禱に立つや直に其靈中に聖神の光を見るべく、其光を以て照し輝く光耀の中に躍るべく、此の光榮の現象と其變化とを樂み、之を以て自己と比するに至らん。神に於る現象の働の如く汚鬼の群を蹂くべきものは他に之あらざるなり。

神父あり、余に語ること次の如し、曰く「一日我れ坐したりしに、予の心意は現象の爲に捕へられたり。而して己れに歸るや、余は太く嘆聲を發せり。されど我と對立する魔鬼は之を聞くや電氣に呑まるゝ者の如く恐れ、何物にか遂はるゝ者の如く、切迫の餘り叫んで遁逃せり。」

此の生涯より逝ることを忘れずして、此世の樂に戀々たるを自から抑制する者は福なり。何となれば幾回か加增せられたる修業を自己の近る時に受けて、其修業は彼の爲に減少せざればなり。彼は神により生れて、聖神は彼の養育者たり、彼は神の懷より生命ある食を啜り、其馨香を嗅ぎて、自から樂まん。しかれども世に屬する物と、世と、其安息とに繋がれ、世と談話するを愛する者は生命を奪はるべし。予は彼のことに就ては一も言ふべき所なし、たゞ愁むべからざる哀を以て痛泣號哭して、聽者の心を傷ましむるあらんのみ。

暗黑に居る者は首を擧げよ、汝等の顏は光を以て照されん。此世の慾の櫂下より脫せよ、父よりする眞實の光は汝等を出迎へ、其奥密の役者に汝等の鎖を解くを命せん。汝等其光に追隨して父に進行せん爲なり。哀哉我等は何を以て縛られ、何物が我等に彼の榮を見るを妨ぐるか。呼、我等は鎖を切斷せられ、尋ねて我等の神を見るを得ば幸なり。人間の秘密を知らんと欲し、精神を以て之を洞察する迄には到り達せずとも、もし汝は賢ならば、各人の語言と、生活の狀態と、其擧措とにより之を審んじ靈の清くして生活の狀態の無玷なる者は、常に貞潔を以て神の言を發すべく、其理會の度に應じて、神聖なる事をも彼れ自己に屬する事をも判斷せんしかれども慾に心を傷められたる者は舌も之により動かさるゝなり。もし彼は靈神上の事を言はんと欲するならば、不義にして勝を占めんが爲に、慾の影響により判斷せん。賢者はかくの如きものを其初會の時に認め、潔者は彼の惡臭を嗅がん。

靈と體とが常に空談に耽りて才智の高超に任ずる者は淫者なり、彼と相和して事を共にする者は姦通者なり、而して彼と與に交る者は偶像崇拜者なり。少年と狎近づくは淫行なり。神は之を醜とす。かくの如き人を和ぐるに藥なし。之に反して同情により衆人を等く愛して、區別を立てざる者は、完全に達せん。少年少年の跡を追はゞ思慮ある者をして、彼等の爲に泣き且哭せしめむ、然るにもし老人にして少年の跡を追はゞ少年の慾よりも更に臭なる慾を得ん。彼は少年と道德の事を論ずと雖も其心は傷はる。少年はもし誰遜の德ありて、沈默する者ならば、もし其心は羨欲と忿怒より淨まり、すべての人に遠ざかりて己を省みる者ならば、怠慢なる老人の慾

を速に悟らん。然してもし老人をも少年をも一樣に敬愛せずんば、力を盡してかくの如き者と親與せざらんことを勉むべく、殊に彼より遠ざかるべし。

清潔の外貌を裝ふて其裡面に己の慾を養ふ怠慢者は禍なり。思念の清潔と善良なる生涯と舌の節制とを以て白髮に達したる者は、此世に於ては、認識の果の甘美を樂むべく、肉體より出去るときは、神の榮をうけん。靈魂を聖にするが爲に聖神を以て修道士の心に吸收するの火を冷にするは、人々に交ると多言と種々の談話とに愈るものあらず。たゞ神を識るの認識を長じ神と親近するに助くる神の奥密の子等と談話するは此限にあらず。けだしかくの如きの談話は生命の爲に心を覺醒しめの根を拔きて汚穢なる思を睡らしむること、恐くの德行よりも力あるなり。かく慾の如き者等を除くの外は、友をも機密を共にする者をも己れに求むるなかれ。恐くは其靈魂に躓を置き神の途より離れん。汝を神と一致連合せしむる愛は汝の心に增々加はるべし。恐くは其原因と其終とは敗壞なる世俗の愛は汝を擒にせん。彼此の苦行者と共に居り共に交るは、神の奥義に富まん。之に反して怠慢なる者と懶惰なる者を愛するは互に才智の高超に任し、腹を飽まで滿たしめて、度無からん。かくの如き者は友無くして食するを不愉快なる如く思ひ、左の如く言はん「孤獨にして己の餅を味ふ者は禍なり、何となれば彼の爲に旨からざればなり」と。彼等は互に宴會に招き、之を以て甲は乙に報ゆることを宛ら雇人の如し。此の嫌はしき愛と此の不適當と不敬虔とに時を送るを我等より遠ざけよ。たとひ汝は餘儀なくせらるゝとも、彼等と共に食するを肯んずるなし者を避けよ。兄弟よ。かくの如きことに慣習せかれ、何となれば彼等が晩餐は嫌ふべく、其側には魔鬼の侍するあればなり、新郎なるハリストスの友は之を味へざるなり。

屢々宴會を設くる者は放蕩の鬼の奴隸なり。彼は讒諂なる者の靈を汚さん。無玷なる者の晩餐に供へたる低價なる「パン」は種々の嗜好によりて食事を爲す者の靈を清めん。貪食者の晩餐より發する香氣は食物と炙物の富にあり。愚にして思慮なき者は之に引誘せらるゝこと犬の肉店に引誘せらるゝ如し。常に祈禱に專らなる者の晩餐は麝香より發する如何なる香氣よりも香油より發する薰香よりも愉快なり、愛神者は之を願ふこと値すべからざる寶を願ふ如し。

禁食して儆醒を務め、主の爲に勞する者の晩餐より生命の療法を借りて己の靈魂を死者の如くなれるより喚起すべし。げだし至愛者は彼等を聖にしつゝ彼等の中に席坐す。ゆゑに彼等を苦むるの苦味は變じて言ふ可らざる甘味となり、靈界天上

の奉事者は彼等と其聖なる食物とを獲はん、或る兄弟が其目を以て明に之を目撃したるは予の知る所なり。

己を造成者より離れしむるすべての奢侈の爲に其口を塞ぐ者は福なり、憐みによし之を飲盡すときは其者の心は欣々としてを覩る者はすべての人より隱れ不當なる者と與にせずして、獨り主を傾食せん、彼等の關係者とならざらん爲なり、及び主の光線に照されずして了らざらん爲なり。しかれども食物に致死の毒を混せられたる者は、友なくしては愉快に食ふ能はざるべし。腹の爲に親睦する者は死骸を貪食する狼なり。悲なる者よ、汝に何の飽かざるありて怠慢者の晩餐に腹を充さんを願ふか、彼處に汝の靈は種々の慾に滿たされん。視よ是れ腹を制するを能くする者等の爲に豫戒なり。

禁食者の馨香は極めて愉快にして、彼と面會するは思慮ある者の心を樂ましむるなり、しかれども貪食者は彼と交るにより突然畏を生ず、ゆゑに彼は禁食者と共に食はざらんが爲にあらゆる方法を用ふ。

節制者の生活狀態は神に愛せらる。之に反して彼と隣するは貪食者の爲に甚だ苦し。默想者はハリストスに大に稱贊せらる、しかれども心意の浮戲高超に偏して、魔鬼の捕ふる所となりし者の爲には彼の近づくは愉快ならず。謙遜にして溫柔なる者を誰か愛せざらん、但驕傲なる者と惡言する者は然らず、けだし彼の爲す所を忌むによる。

人あり、自己の經驗により余に語れることと左の如し、曰く「余は何の日にか何人となりとも談話を爲さんに、其日に於ては乾麵麭三顆或は四顆宛食す、而して强て祈禱に起つや、我が心意は神に向ひて勇氣を有せず、思を彼に向はしむる能はざるなり。然れども會談者と別れて默想に入るや、初日には乾麵麭一半を强て食し、次日には一を食す、然して我が心意の默想に確立するや、一顆の乾麵麭を强て全く食せんとするも能はず、されど我が心意は强ひずといへども、勇氣にして斷えず神と談話し、神性の光輝は減少せずして我を照し、我をして神聖なる光の美を見て之を樂ましむ。然れども默想の時に當り誰か來りて、一時間たりとも我と言ふあるや、其時は食に近づかざらんことも、或る規則の或るものを廢せざらんことも、彼の光を直覺するが爲に智力の弱らざらんことも予が爲に能はざるなり」と。見るべし、我が兄弟よ、忍耐と獨居とは如何に美はしく且有益にして苦行者に如何なる力と如何なる便

利とを與ふるや、神の爲に默想を專ら務めて獨り自から己のパンを食ふ者は屢な
り、何となれば彼は常に神と談話すればなり。彼に光榮と權柄は歸す、今も何時も世
々に「アミン」

第九　說教

新進修道士の秩序、及び規則、及び彼等に適當なる行爲の事。

視よ清潔にして神に愛せらるゝ秩序は目を彼方此方に轉せずして常に眼勢を前
面に向はしむるにあり、閑話を爲さずして、たゞ必用なる事を言ふにあり、身體の要
求を充たす爲には貧しき衣服を以て自から足れりとし、肉體を支持するに食物を
益用すれども腹を悦ばすが爲にせず、すべて少しく食ひ、此を輕んじて彼を撰ぶを
爲さず、たゞ此の一を以て甘んじて腹を充たし、他を斥くるにあり、謹愼注意は何等
の德行よりも上にあり、酒は汝に友のあらざる時、或は疾病或は力の衰弱するあら
ざる時は味ふことなかれ。他が言はんと欲するときは其談を遮るなかれ、答ふるこ
と愚者の如くなるなかれ、賢者の如く確乎なるべし。汝は何處にありとも己を衆人
より小なる者と思ひ、且は其兄弟の役者と思ふべし。何人の前にも肢體の一をも露
すなかれ、緊要なる理由なくんば誰の體にも近づくなかれ。又重要なる理由なくん
ば、人の汝の體に近づくをも許すなかれ。談話に放縱なるを避くること死を避くる
如くせよ。睡眠の爲にも貞潔なる秩序を求め得よ、汝を守護する能力の汝に遠ざか
らざらん爲なり。汝は何處に寢るとも、能くし得るならば何人にも汝を見ざらしめ
よ。何人の前にも唾を吐くなかれ。もし晩餐に坐する時、咳の出るあらば、其面を後に
轉向けて咳をせよ。清潔にして食ひ且飲むこと、神の子に適當なる如くせよ。
汝の友の前に供へたるものを無遠慮に取らんとして手を伸ばすなかれ。旅行者あ
り、汝と共に居るときは、一度二度彼を招きて食せしめよ、秩然として卓上に供へ、不
順序なるなかれ。肢體の一をも露さず、端正に且溫和にして坐すべし。欠の出る時は
他の見ざるやうに口を閉ぢよ、げだし呼吸を止むれば、欠は過ぎ去らん。もし院長或
は朋友或は門弟の室に入らば、己の目を守れ、彼處に在るものを見ざらん爲なり。し
かれどもし思は强て之を促さば、己を省みよ、之に從ふなかれ、此事を爲すなかれ。
けだし此事を爲して恥ぢざる者は修道士の順序と此順序を我等に賜ひしハリス

トスに遠ざかるなり。汝の朋友の庵に於て器物を置ける場所に注目するなかれ。自己又は其朋友の室の戸は、靜に開閉せよ。何人の室にも突然に入るなかれ、外より戸を叩き許を得て其後敬んで入るべし。

汝を急がしむる緊要の事なくんば、步むに惶急するなかれ。すべて善なる行は衆人に順ふべし。たゞ貪欲者、或は貪銀者、或は世に恥る者には從ふなかれ、恐らくは邪なる行爲をなさんずべての人に對し溫和に談話せよ、すべての人を貞潔を以て見よ、何人の顏をも飽くまで凝視むるなかれ。路を行くに、汝より年長なる者を追越すなかれ、もし汝の友が後れたるときは少しく前に避けて待つべし、斯く爲さゝらん者は無智者なり、法のあらざる豚と相類す。もし汝の友が途に遇ふ者と談話を始むるときは彼を待ち急がしむるなかれ。健康なる者は病者と時に先だちて言ひ、要求する所を遂げしむべし。

過失は如何なりとも何人をも責むるなかれ、却て己を以て全く責をうくべき者と思ひ、罪の原因者と思ふべし。何等の賤しき事をも讓遜を以て爲し、辭するなかれ、避くるなかれ。もし笑はざるを得ざるあらば、齒を外に露はすなかれ。もし婦人と言はざるべからざることあらば、己の面を彼の眼勢より避けよ、かくの如くして彼と談話せよ、修道女より遠ざかり、修道女と出會談話し及び其面を見るより遠ざかることは火に遠ざかる如くせよ。汝が神を愛する愛情の其心に冷ならざらん爲なり、及び慾念の泥を以て其心を汚さゝらん爲なり。もし彼等は汝の爲に骨肉の姉妹たりとも、彼等の爲に用心すること、他人の爲に用心する如くせよ。親屬と近接するを自から警めよ、汝の心に神を愛するを冷にせざらん爲なり。少年と放談し及び面會するを避くるは魔鬼と親むを避くる如くせよ。たゞ彼の神を畏れて常に己を省み貧うして己の房中に居れども、神の奥義に富める者を唯一の會話者となし、奥義の共談者となせ。己の密事と行爲と戒とをすべての人に秘せよ。極めて緊要の外は誰の前にも露頭にして坐するなかれ。緊要なる用事を執行ふには貞潔を以て着手することを汝を守る天使を敬ふ者の如くせよ、而して神を畏るゝ心を以て事を完成すべし。たとひ汝の心に樂しからずとも死に至る迄己を此に强ふべし。

たとひ汝の母たり或は姉妹たりとも婦人と共に食せんよりは、致死の毒を受くるは汝の爲に愈れり。たとひ骨肉の兄弟たりとも少年と同衾して寢ねんよりは蛇と共に居るは汝の爲に愈れり。路を行くに年長者の中誰か汝に告げて行け歌はんと

言はゞ之れに從へよ。もし告ぐるなくんば舌は默すとも心を以て神を讃美せよ。何人も何の爲にも逆ふなかれ、譏るなかれ、何人とも爭ふなかれ、汝の主神の名を以て怒ふなかれ。侮られよ自から侮るなかれ。辱しめられよ、自から辱しむるなかれ。靈に屬するものが害を受けずんば、體と共に體に屬するものは尊ろ之を亡ぼさん。誰とも訴訟するなかれ、汝は不當に裁判せらるゝも判決せられたるをば忍耐して受けよ。世に屬するものを心に愛するなかれ、治御者と首長に順ふべし、而して彼等と近く相交るを禁せよ、何となれば是れ怠慢者を滅亡に捕ふる網なればなり。

己の腹を充たさんと盡力する貪欲者よ、治御者と首長たる者の炙物よりも熱炭を己の腹に投ずるは汝の爲に愈れり。衆人に厚情を注ぎ、すべてに溫和なるべし。己を多言より守れ、げだし多言は神により起る思の感動を心中に打消さん。好んで人を敬ふるを避くること人々に跳着く獅子を避くる如くせよ。此事の爲には敎會の被敎育者とも他の人々とも會するなかれ。怒り易き者或は爭を好む者等の徒を過るなかれ、恐らくは汝の心も忿怒に滿てられ汝の靈は誘の暗黑に占領せられん。驕傲なる者と共に居るなかれ、恐らくは聖神の作用を汝の靈より奪はれて、其靈は種々なる惡慾の住所とならん。人よ、汝は此豫戒を守り、神を思ふを常に練習するならば汝の靈はハリストスの光を實に自己の中に見て永久に暗まされざらん。ハリストスに光榮と權柄は世々に歸す。アミン」

第十　說教

聖なる人々の記事、及び彼等が聖なる訓言と奇異なる生涯。

一日予は庵を離れて一の聖なる兄弟を訪ひけるが、不快の爲に彼と共に一所に宿りぬ、彼れ幸に予の爲に周旋せんが爲なり、何となれば彼處に予の相識は一もあらざりしによる。然るに予は此兄弟が夜間時に先だちて起き、諸兄弟の模範となるべき習慣を有するを見たり。彼は時の多きを以て聖詠を唱ひけるが、其唱ひ續くる間に俄に規則を止めて、其面を俯し、恩寵が彼の心を燃せる熱切と共に地に頓首すること百餘回に至りぬ。其後起ちて主宰の十字架に接吻し、新に叩拜して同く亦十字架に接吻し、而して再び其面を俯せり。かくの如き慣例を彼は終世守りぬ。彼が膝を屈むるの多き予は算することを能はず、然り此兄弟が毎夜重ねたる叩拜を誰か能く

數へんや。敬虔と熱切と虔恭とを以て融和せられたる愛とにより、十字架を接吻すること二十回にして更に又聖詩を唱ひ始む、然れども或時は其熱愛に烈しく燃されたる思の大に熱するにより、此の火焰の燒くに堪ふる能はざるや、喜びに勝へざる彼は自から禁ずる能はずして叫びぬ是に於てか予は此の兄弟の恩寵と苦行と神の勤めに於る覺醒とに大に驚けり。然るに朝に第一時の後に至り、讀まんと欲して坐するや、彼は囚人の如くなりき而して其讀み續くる各章の間に一回ならず面を俯し、多くの句毎に手を天に擧げて神を讃美せり。彼は生れて四十歲なりき彼は食を用ふること最少量にして、且は全く乾萎たるものなりき其身體は之を强ふるこの度と力とに過る屢々なるにより宛ら影の如くなりき。故に多く食せざるが爲に衰へし彼の面の二の指程もあらざる如く痩せたるは予の憐憫を惹起せり。故に予は屢彼に告げて言へり「兄弟よ汝の苦行に於て自身をも惜み、又汝が求め得たる此の善なる生涯をも惜めよ。靈の連鎖ともも云ふべき汝の此練習を亂すなかれ、之を絶つなかれ、幾分か勞を增さんとの願により、其途の進行を減殺するなかれ、之を全く止むるなかれ、適度に食せよ。恐らくは食し能ふ力を奪はれん、力に超えて足を伸すなかれ。恐らくは全く用立たざるものと爲らん」と。彼は憐み深く、最温柔にして、善心を以て矜恤を爲せり。生れながら潔白にして、諫に順ひ、神に依て智なる彼は其潔白の爲又其善心の爲に衆人に愛せられたりき。もし兄弟が彼を要するあれば、兄弟と共に勞して三日或は四日に至ること度々なりき、其後退て暮より暮に至る迄時を全く己の庵に送りぬ。げだし何等の工作にも器用なりき、然るに獲たるものあるときはたとひ其物に乏しくなりたりとも、多き少きに拘はらず大に重要視するにより其物を有せずと言ふこと能はざりき。兄弟と共に働くときは恥づる如くにして之を爲し、庵より出づることは自から懷しとせざるも、己を强ゆること度々なり。實に奇異なる此の兄弟の生涯と畏動とはかくの如くなりき。我等の神に光榮は世々に歸す。アミン」。

第十一　說教

高老なる老人の事。

他日予は又一の老人を訪へり、高老にして且美なる有德の人なりき。彼は甚だ予を愛しけるが、言語は野なれども、知識は光明に心は深遠にして、恩寵の暗示する所の

ものを言へり。彼は聖なる勤行の外は庵より出づることを屢々せず、己を省み、靜默して居れり。時に予は彼に告げて言へり、曰く、「父よ、予は主日に聖堂の玄關に至り、彼處に坐して朝早く食し、出入する人々に我を見て卑んせしめんを欲す」と。老人は此に答へて予に告ぐること左の如し、錄して言へり、凡て世人の惑を爲す者は光を見ざらんと。汝は此地方に於て誰にも知られず、汝の生涯を人々は知らず、ゆゑに言はん、修道士は朝より食事すと。殊に此處の兄弟は新進者にして其意思薄弱なり、彼等は多く汝を信じ汝によりて自から益しつゝあるに、もし汝が此事を爲すを認むるならば、害を受けん。古の神父等は其行ひし多くの奇跡の故に、人々が彼等に尊敬を表はしたると、其名を讃揚したるとに因り、かくは行爲したれど、此を爲せしは己を汚辱に陷れ、其行爲の榮を認して驕傲の因を己より遠ざけん爲なり。之に反して汝を之と同樣の衆に出でしむるは何物なるか。すべての行爲に秩序と其時とあるを知らざるか。汝は如此の行爲と如此の名とを有せずして他の兄弟と同樣生活す。汝は己れに益を產せずして他を害せん。且かくの如きの動作は悉くの人に益あるに非ずして、たゞ完全なる者と大德なる者に益あり、何となれば此は常識を離れたる行なればなり。然れども儘に中間に逆したる者と新進者の爲には此は害あり、何となれば大に戒心して常識に從ふべき必要あればなり。老人は警戒の時を既に過ぎたれば、たゞ其欲する所に從て益を引出さん。げだし未熟なる商賈は大なる運轉の爲に自から大なる損失を速かん、然れども些少なる運轉には速に前進して成効せん。已に言ひし如く凡ての行爲に其秩序あり、生活の凡ての種類に時の有るあり、其度に超えたることを時に先だちて始むる者は何も獲る所あらずして、たゞ己の爲に害を倍さん。もし此事は汝の爲に願はしくば神の照鑒に依り、汝の望に依るに非ずして、汝に及ぶ所の汚辱を喜んで忍耐せよ、心を擾すなかれ、汝を凌辱する者に對して怨を懷くなかれ。」

予は猶一回此の感謝すべき人と談話せり、少壯より晩年に至るまで自から己れに任じたる勞の爲に生命樹の果を味ひし彼は道德の敎訓を多く予に授けて更に左の如く言ひき、曰く、「凡て體を苦めず心を憂へしめざる祈禱は流產したる胎實と一般なり、何となればかくの如き祈禱は自から精神を有せざればなり」と。彼は又余に告げて曰く、「自說を立てんと欲し智は僞りて心に恥を感せざる議論好の人には何物をも與ふるなかれ、又何物をも乞く彼より取るなかれ、恐らくは汝が大なる辛勞を以て得たる淨潔を自から遠ざけて其心に暗黑と擾亂とを滿たしめん」

第十二　說教

他の老人の事。

何の時なりしか予は一の神父を其庵に訪へり。聖者は誰が爲にも戸を開くことを屢々せざりき。しかれども予の至るを窓より認むるや、予に告げて言へり「入らんと欲するか」と。予は答へり「然り貴き父よ」と。然して予が入りし後、祈禱を行ひて我等は種々の談話をなしけるが、終りに臨み、予は彼に問ふて言へり「父よ予は如何にすべきか、或者等予を訪ひ來れど、予は何も獲る所あらず、彼等の談話より何の益をも引出さず、然れども彼等に告げて來るなかれと言はんこと、は予は自から恥づ、彼等は予が通常の規則を行ふを妨ぐることさへ度々之あり、故に予は之を哀む」と。福なる此の老人は予に此に答へて下の如く言へり「かくの如く閑散を好む者等の汝に來るあらば、其暫く坐するや、祈禱に立たんとするの狀を彼等に示せ、而して叩邦して告げて言ふべし、兄弟よ、我等は祈禱せんけだし予が爲に規則の時已に至りぬ、之を破ること能はず他時に之を行はんことは予が爲に心苦しくして、こは予の爲に益

亂の因となる、ゆゑに極めて必要の事あるにあらずば、規則を棄つるあたはず。されど今は予が祈禱に換ふべき已むを得ざるの事あるなしと、かくの如く言ふべし、此事なくして彼を汝と共に祈禱せずに去らしむるなかれ。もし祈禱せよ、我は去らんと言はゝ、彼に叩拜し告げて言ふべし、愛の爲に此の一祈禱なりとも我と共に爲し給へ、予は汝の祈禱により益を受けんと。もし彼等止る時は、汝の祈禱を通常よりも長く行へ。彼等をかくの如く待遇せば、其汝に來るや、汝の寛縱せざると閑散を好まざるとを知り、汝の彼處にあるをきゝて其所に近づかざらん。

ゆゑに愼めよ、恐らくは汝は偏愛により神に惱するの行爲を破らん。されどもし或る神父又は疲れたる旅行者の來るあらば、かくの如き者等と暫く居るは汝の爲に長き祈禱の代りとならん。されどもし其旅行者は閑談を好む者の一ならば、出來るだけ彼を安んじ、平和にして去らしむべし。」

或る神父は言へり、曰く「或者等庵中に於て工作に從事するも、自己の規則を弛べず執行して擾亂せざるを得べし、といふを聞き、予は之を怪む」。彼は又慙くべき言を發していへり、曰く「實に言はん、予は水濱に出づるならば、我が慣習と其順序とに錯亂を感じ理性を成全するの妨げを覺ゆ。」

第十三　說教

或兄弟の問。

同神父は曾て或兄弟の問を受けたり、曰く「子は如何にすべきか、予に或る物品のあるあり、或は劣弱の爲、或は行事の爲、或は他の或る理由により之に必要を有すること毎々なり、此物なくんば獸想に居る能はずしかれども予は或者の之に必要を有するを見て同情の念に耐へず、此物を以て彼に與へ、又或人には請はるゝにより與ふることも屢之あり、げだし愛も誠命も之を餘儀なくせしめて、我自己に必要なるものを讓らしむるなり、然れども其後予が爲に此物の必要なるは、予を思念の不安と擾亂とに陷らしめ、予が智力を獸想のことを慮るより引誘し去るのみならず、獸想を棄て、行て同物品を捜すを餘儀なくせしむるなり、たとひ忍耐して獸想を失はざるを得るとも、予は大なる憂と思の擾亂の中にあり、故に予は何れを擇ぶ可きを知らず、或は兄弟を安んせしむるが爲に予の獸想を解除して之を中止するを爲すべきか、或は彼の願を輕んじて獸想に專なるべきかと。

老人は之に答て次の如く言へり、曰く「もし矜恤或は愛、或は慈悲、或は其爲す所は神の爲にすと認めらるゝ或事が汝の獸想を妨げ、汝の眼を世に轉せしめ、汝を不安に陷れ、汝が神聖を記憶する念慮を暗まし、汝の祈禱を寸斷し、思念の擾亂と紛消を汝に生せしめ、神聖なる讀經を勉むるを止め、心意の高超より救はるべき此器械を棄て、汝の戒心を滅し、汝が此時に至ら迄檢束せられしを自由自在に往來するを始むるに至らしめ、獨居に入りたるを人類社會に歸らしめ、弊むられたる慾念を汝に惹起し、汝の五官の節制を解放し、世に死したる汝を世の爲に復活せしめ、汝の爲に唯一の慮なる天使的行爲より汝を貶黜して、俗人の側に立つるならば、かくの如きの義は亡ぼす可なりげだし肉體上の安きを與へて愛の義務を遂行するは世の俗人の行なり、然れども、もし修道士の行ならば、こは獸想に專らなるに非ざる不充分なる者の行或は獸想を以て同心的共住と合したる者の行にして、彼等は不斷に入り且出づるなり。かくの如き者等の爲には、こは美にして嘆賞すべき行なり

之に反して身體を以ても智力を以ても、世を離れたる遁世的行爲を實に己の爲に撰擇して、其意を獨居の祈禱に決し、凡て過去るものゝ爲、此世に屬する物を覩るが爲及び之が記憶の爲には死者の如くなりし者、かくの如き者の爲には、肉體に屬す

るものと顯然たる行の義之を以てハリストスの前に義とせられんが爲に之を勤めずして、使徒の言ふ如く地にある肢體（コロサイ三の五）を殺し、淨潔にして無玷なる思念の祭をハリストスに献げて、自己を開拓したる初實の果となし、未來の望の爲に肉體の愛を懲性にして、危きを忍耐するは當然なり。げだし修道士の生涯は天使の生涯と同等なり。されば天上の行爲をすてゝ浮世に屬するものを持するは我等に不適當なり。我等が神に光榮は世々に歸す（アミン）。

第十四　說教

詰責を受けたる一兄弟の事。

曾て一兄弟あり、矜恤を爲さゞるを詰責せられけるに、彼は其詰責者に自由にして答へ敢て言へり曰く「矜恤を行ふことは修道士の爲に立てゝ義務とせられず」と然るに詰責者は之を駁して下の如く言へり「矜恤を行ふを修道士の爲に立てゝ義務とせられざることは顯然明白なり。げだし錄して言ふ如く露面を以てハリストスに告げ「視よや我一切を捨てゝ汝に從へり」（マトフェイ十九の二十七）と言ひ得る者には、之を義務とせられざるなり、即地上に何物をも有せず、肉體に屬するものを務めず、有形上の事には一も考を及ぼさず、何を獲るをも慮らずして、もし誰か彼に何物をか與ふるあれば、たゞ其必要に迫る丈取り、必要の外は之を無視して實に鳥の如く生活する者かくの如き者には矜恤を行ふを義務とせられざるなりげだし自ら自由なる者は如何して他に與ふるを得んや、之に反して浮世の事に引かれ、自己の手を以て操作して、自から他より取る所の者は殊に矜恤を行はざるべからず、もし彼は矜恤の事を慮らずんば、此無慈悲は主の誡命に反す。げだし誰か神に奥密に近づかず靈を以て神に勤むるを能くせざるのみならず、己の爲に爲し得べき顯然の行をも慮らずんば、かくの如き者等は己れに生命を得る何の望ありや、かくの如き者は無智なり」

又他の老人あり、言へり曰く「他人を肉體上の事に安んせしめんが爲に自己の默想の行爲を擾す者を怪む」と。又言へり曰く「我等は默想の行爲に他の如何なる慮をも混すべからず、すべての行爲は各々其位地に於て尊敬せらるべし、我等の品行に汚點を有せざらん爲なり。げだし多くの事を慮る者は多くの事の僕なり。之に反して一切を棄てゝ靈魂の齊整を慮る者は神の友なり。視よ、矜恤を爲し、近者に對し肉體

上の必要を滿足せしめて愛を遂行する者は世に多し、然れども公道にして且最美はしき默想を務め、思を神に擧ぐるを務むる者は寥々として僅に見ることを得べし。世に矜恤を行ひ、或は身體に關する事に於ては義を守る者等の中默想を務むる者が神より與へらるゝ賜の一なりとも得たる者之ありや」と彼又更に言へり曰く「汝は俗人ならば世の幸福を樂んで時を送るべし。之に反してもし汝は修道士ならば、修道士の卓越なる行爲を以て己を飾るべし。然れども汝は彼と此とを占有せんと欲するならば、彼も此も失はん。修道士の行爲は次の如し。形體に屬するものより免るゝ自由なり。祈禱に於て身體を勞するなり。神を不斷中心より記憶するなり。汝は此等の行爲なくして世の道德に滿足するを得るか、自ら判斷すべし。

問　默想に於て苦む修道士は二種の要務を有する能はざるか、即神を思念することゝ他の處を心に有することゝ是なり。

答　予は思ふ、默想に時を送らんと欲する者は、一切を棄てゝ獨り己の靈魂を處るのみならず、己を世處の外に置くといへども環旋なくして默想の行爲を治むることは、勿論なり。然や主に勤めて主の子孫の爲に掛慮する者を主は世に留めて主の前に勤めんとする者等を自から選び給へり。けだし官位の等級を記し、常に王の面前に立つて其機密に參する者等は外部の務に從事する者等より光榮なることは此世の王に於て之を見るのみならず、天の王の行爲に於ても見るを得べし。即祈禱を不斷務めて王の會談者となり、其機密の參與者となりて天上地下の富を賜はり、すべての受造物に對して己の權を揆ばくか顯はす者は彼の己の所有と此世の幸福とを以て神に勤め、最重要にして且太だ美しき善行を爲して神の意に適する者よりも如何なる勇氣を受くるか。ゆゑに我等の取りて龜鑑と爲すべきは神に屬する行爲に尙不充分なるを免れざる後者にあるに非ずして、苦行者と戰士とにあり、彼等は其生涯を美しく完備し、此世に屬するものを一切棄てゝ天國を地上に開拓し、地に屬するものを一次永遠に棄卻して天上の門に手を伸ばしたりき。

我等が爲に此生涯の路を啓きたる古の諸聖人は何を以て神意を悅ばしたるかたとへば諸聖人の中フィワェイのイオアンの如き、此の德行の賓にして、此の豫言の泉なる者は何を以て神を悅ばしたるか、隱舍の內に在りて兄弟を肉體の要求に安んぜしめたるを以てしたるか或は祈禱と默想とを以てしたるか、前者を以てするも多くの者が神意を悅ばしめたるに予は反論せざるべし。然れども祈禱と一切を棄

つるとを以てしたる者の如きにはあらず。げだし默想に居り、之を以て頌揚せらるゝ者により其兄弟等に明々なる助あればなり。即窮乏の時には我等に言を以て助け、或は我等が爲に祈禱を献ずる是なり。然れども此事の外にあるものは（もし或者の爲に慮る此世の事に關するの記憶又は其配慮が默想を務むる者の心に宿るならば是れ神的智慧の行にあらず。げだし默想を務めずして、默想の外に生活する者には告げて言へり「ケサリのものをケサリに納め神のものを神に納めよ」と（マトフエイ二十二の二十一）即各々己に屬するものは近者に神に屬するものは神に納めよといへり。天使の位に居る者、即靈魂の事を慮る者には、何か此世に屬するものを以て神を悦ばすべきを誡命せられず、即工作の事を慮り、或は一者より取りて他者に與ふることを誡命せられざるなり。故に修道士は其心意を動搖して神の面前に立つより引下ぐべき如何なる事をも慮る可らざるなり。

しかれども若し誰か反論して神聖なる使徒パウエルを提出し、彼は自己の手を以て操作し、矜恤を爲したるに非ずやといはゝ、其者に告げて言はん、パウエルは獨り萬事を爲すを能くせり然れども我等は彼の如くすべてに堪能なる他のパウエルの有るを知らず。げだし此の如き他のパウエルを我に示せ、然らば汝を信せんと、且神の照管によりて成る所のものは之を一般の行爲の儀表と爲すべからず。げだし福音を傳ふるの行爲と默想の務とは各異なり、もし汝は默想を守らんと欲するならば、此世の事を一も慮らざるヘルワイムの如くなるべし。汝と神とを除くの外、地上に汝の慮るべき他者あるを思はざること汝に先だちし神父等の敎へし如くすべし。もし誰か自己の心を頑にせず其仁心を力めて遮るを爲さずして、神の爲にも或る生活上の事の爲にも凡て地に屬するものを慮るより遠ざからんも其の定められたる時に一の祈禱を守ること能はずんば、擾亂と費心とを免れ自由にして默想に止まる能はざるべし。

ゆゑに道德の名の下に何事にか關係せんとする思の汝に生ずるあり、之を以て汝の心中にある穩靜を擾すあらば、其の思に告げて言ふべし「愛の途は美はし、慈悲の行は神の爲に美はし、然れども予は神の爲に此を欲せず」と。一の修道士あり、言ふ「父よ止まり給へ神の爲に急ぎて汝に追着かん」と、然るに彼は答へていへり「我も神の爲に汝より逃げん。父アルセニイは靈益の事をも他の何事をも神の爲に誰とも談話せず、他人は神の爲に終日談話し、其來れる旅行者を悉く受けたれども、彼は之に代へて無言と默想とを選び、此に因り彼は現生の海中にありて神聖なる神と談話

し、默想の舟に乘り、大に穩靜にして此海を渡りしは、此事を神に質したる苦行者等の明に知れる如し。視よ、默想の法は一切の爲に默するにあり。しかれども默想に於ても擾亂に滿たさるゝ者となり、身體は操作の爲に靈魂は或者の事を慮るが爲に援さるゝならば、其時は神を悅ばしめんが爲に多くの人の事を慮りつゝ如何なる默想をか送るべき自から判斷すべし。げだし一切を棄つるなく何等の慮よりも遠ざからずして默想の行爲に進歩を見るを得んとは言ふも耻づべきなり。我等の神に光榮は歸す。

第十五　說教

默想の種々なる卓越の事、智の權の事及び祈禱の各種類に對して智は其活動を起すに幾何權あるか、祈禱には如何なる界限を天然に與へらるゝか、汝は如何なる界限迄祈禱を以て願ふの權あるか、其界限を越ゆれば汝が行ふ所は祈禱と名づけらるゝこと雖最早祈禱にはあらざる事。

光榮は其賜を豐に人々に注ぎ給ひし者に歸す。彼は有形なる者をして無形なる者の天然の秩序により彼に事ふるを得しめ塵に屬する者の天性にかくの如き奧義を語るを許し給へり。殊に彼は我等と同樣罪ある人々が此の如く語るを聽くだに堪へざる時は其恩寵を以て我等が心の盲を開き聖書の研究と大なる神父等の教にとり之を了解せしめ給へり。げだし予は自己の手を以てあらはせるもの丶千分の一をも自己の苦行に因り實驗的に確知するに堪へざるなり況や汝等及び凡て讀者の心を曉起し且之を照明せんが爲に述る所の此文に於てをや、望むらくは人々奮起して之を渴望し實行に着手せんことを。

祈禱には非ざる事。

祈禱的悅樂と祈禱的直覺とは各同じからず。後者の前者より一層上なることは完全なる人の不完全なる童子より上なるが如し。或時は詩の句の口に甘くして祈禱に於て一句を誦することが數ふべからざる程續き他句に移るをゆるさずして祈禱する者の飽くを知らざることあり。然れども或時は祈禱により或る直覺を生じて、口頭の祈禱を斷ち、直覺によりて祈禱する者の身體麻痺して驛異することあり。かくの如きの情況を我等は名づけて祈禱的直覺と曰ふ。然れども之を名づけて形

狀又は式樣とはいはず、或は又愚者の言ふ如く空想的幻像ともいはざるなり。而して又此の祈禱的直覺にも程度と其賜の等差とありて猶是れ祈禱なり、何となれば智力が最早祈禱の有らざる處に侵入して祈禱より上なる情況に在るにあらざればなりげだし祈禱に於て舌と心の動くは關鍵なり、されど是より後にあるものは最早密室に入るなり。こゝには何等の口も何等の舌も默すべし、心即此の思念の指揮者も、智力即此の感覺の統御者も意思即此の疾く翔りて恥を知らざる鳥も默すべく、其の悉くの機謀は廢すべし。こゝには尋ぬる者も止まるべし、何となれば家宰が來りたるによる。

第十六　說教

清潔なる祈禱

神が人々に與へ給ひし律法と誡命のすべての力は、神父等の言ふ所によれば、心の清潔を以て限度と爲す、かくの如く人々が神に懇求する祈禱の悉くの種類と形狀も清潔なる祈禱を以て限度となすなりげだし慨嘆も屈膝も中心の願求も最愉快なる喚呼も祈禱の悉くの種類も我がすでに言ひし如く、清潔なる祈禱を以て限度となして、たゞ此祈禱に至る迄發展するの力を有するのみなりしかれども祈禱の清潔より内部の清潔に達して思が此限度を超ゆるときは、祈禱も、活動も、涕泣も、椳も、自由も、願求も、希望も、此生涯又は來世に望む所の或物を樂むことも、最早之あらざるべしすべて祈禱の活動と祈禱の悉くの種類は、たゞ自由の權を以て智力を此界限まで導き到らしむるのみなり隨て祈禱に於る苦行も之が爲なり然れども此界限の後にあるものは最早駭異にして、祈禱にはあらず、何となればすべて祈禱に屬するものは止み或る直覺の到るありて、智力は祈禱を以て祈願せざればなり。凡て行はるゝ所の祈禱は如何なる種類にても、活動に依りて行はる、然れども智力が靈的活動に入るならば彼處には祈禱あらざるべし。祈禱と直覺とは其始を互に自から相借るといへども祈禱は別にして祈禱に於る直覺は亦別なり。祈禱は種子を播くなり、直覺は穀束を集むるなり、此時に方りて穫る者は言ふ可からざる現象の爲に駭異すること恰も其播く所の小なる裸體なる粒よりかくの如き美なる種類の俄に其前に成長したるを見るが如くならん。されば彼は自己の爲す所に於ては何等の活動もなくして止まらん。何となれば凡て行はるゝ所の祈禱は或は顯求或

は感謝或は讃美を罩むる所の祈願なればなり。然れども智力が此の界限を超えて彼の範圍に入るときは、此等の祈禱の種類の一もあるべきにや、何等の願求あるべきにや、深く意を留めて研究せよ。けだし予は此事を以て眞實を識る者に質さんとすればなり。此の思慮判斷は悉くの者に之あるには非ずして、たゞ此事の親見者となり、及び役者となりし者或はかくの如き神父等に學びて、彼等の口により眞實を認識し此等の事の討求に生命を送りし者にあるのみなり。

誡命と凡て律法に屬するものとを僅少の欠點と共に遂行して心の清潔に達せし者は數千人中僅に一人のみならんかくの如く大なる戒愼により清潔なる祈禱に達し、此の界限を突破して彼の奥義を受るを賜はる者は、千百人中一あるのみならん、何となれば多くの者は如何しても清潔なる祈禱を賜はる能はずして賜はる者は甚だ寥々なればなり。然れども最早此祈禱の後にある所の奥義に達したる者はなり。

世々代々の中神の恩寵によりて僅にあるのみなり。

祈禱は或事の祈願及び配慮にして又或事の願望なり、例へば現在或は將來の誘惑より救はれんことの願望或は諸神父の業を圖がんことの願望耳は人が神より助を得んことの祈願是なり。祈禱の活動は此等の活動を以て限らるゝなり。然れども

祈禱の清潔なると清潔ならざるとは係る所左の如し、それ我等が已に述べたる活動の一をさゝげんが爲に智の豫備せらるゝ時に當り、何か外の意思又は何事の爲にか安んぜざる心の之に混ずるある時は、此祈禱は清潔なるものと名づけられざるなり。何となれば智が主の祭壇に卽心に、卽此の靈界なる神の祭壇に淨潔なる犧牲に依りて献せらるゝに非るによる。然れどももし誰か神父等が靈的と名づけたる此祈禱の事に論及し、神父等の言の意味を了解せずして此祈禱は靈的祈禱の域中に入ると言ふならば予は思ふ若し此意見を更に緊密に穿鑿するならば是れ何人をか惡しく言ばんとするものにして、靈的祈禱は全く曲げられんがけだし曲げらるゝ祈禱は靈的祈禱よりは更に低しずべて靈的祈禱は活動を免れて自由のものなるべし。然るをもし誰か清潔なる祈禱を以て僅に祈るあるや、之を以て靈的祈禱と言ひ得べきかずべて善良なる活動と靈的行爲に祈禱の名を附することは聖神父等には常なりき。且たゞに神父等のみならず、凡て認識を以て照明せられたる者等にも凡の美なる行爲を以て祈禱と殆ど同一視することは常なりき然れども祈禱は別事にして行ふ所の行爲は又別事なることは顯然なり。時として此の靈的祈禱と稱するものを或る處には路と名づけ、又別の處には智

的觀察と名づくることあり。靈的なる目的物の稱呼を神父等如何に變更するを見るか。蓋し名稱の的確なる意味は此世の物には一定せらるれど、來世に屬する物のためには確實眞正なる稱呼の下すべきあらずして、之が爲にはすべての名稱と凡て合成的なる起初、狀態色相及び悉くの綜合的名辭よりも一層上なる一の單純なる認識あるのみなり。故に靈的認識が有形世界より上に昇せらるゝときは神父等之を示すが爲に、欲するまゝなる稱呼を適用すべきあらずして、之が爲に的確なる名稱を證も知らざればなり。しかれども心靈上の思想を此認識によりて證明せんが爲に、彼等は名稱と喩言とを用ふること、聖デオニシイの言ひし如し。曰く感覺の爲には喩言と語法と適當なる名と辭とを使用す。しかれども靈魂が神の働によりて精神に屬するものに移さるゝ時は、感覺も實驗も我等の爲に無用なり、是れ猶靈魂が測る可からざる合一に依り神性に似たるものとなり、其活動に於ては最上なる光の光線を以て照さるゝときは靈魂の爲に糖神の力も無用なると同じかるべし。

終りに兄弟よ、智が其活動を識別し得べき力を有するはたゞ清潔なる祈禱の界限迄なるを信ずべし、既に彼處に達して後戻せず、或は祈禱を止めずんば、祈禱は其時に心的祈禱と靈的祈禱との間にある中間者に似たるあらん。されば智が活動の中にある時は智は心的範圍にあれども、もし彼の範圍に入るならば祈禱も止まんげだし諸聖人が來世に於て其智を神の爲に呑まるゝときは、祈禱を以て祈願せず、賅異と共に彼等を樂ましむる光榮の中に居るなり。我等が爲にもかくの如くなるべし、もし智は來世の福樂に燭るゝを賜はるならば、自己をもすべて現世にあるものをも忘るべく、何等の爲に活動することも最早あらざるべし。ゆゑに或者は確信を以て敢て左の如く言へり、意志の自由は或は證に於て或は思に於て行はるゝすべての德行と、祈禱のすべての秩序と、又此の情慾の王たる智力其ものをさへ感覺により導きて之を活動せしめん。しかれども神の統治と照鑒とが智力、即此の感覺と思念の家宰たるものを主治して、之を統御する時は、性より自由は奪はれて、智は導かるゝも導かざらんといへりされば性は自己に對して權を有する能はずして、他の力を以てみちびかれ、自から何の處にあるをも知らず、欲するまゝに意思の活動を爲さしむる能はずして、却て此際に性を捕へたる力の爲に占領せられ、其力を以て何の處に導かるゝをも覺知せざらん時は、何の處に祈禱はあるべきか。其時は人は思欲をも有するあらずして、聖書に證する如く肉體にあるか或は肉體の外にあるか知らざるに至らん（コリンフ後十二の二）かくの如くに捕へられて自から己を

認識せざる所の者に祈禱はあるべきかゆゑに誰も非難を言ふなかるべし、靈的祈禱を以て祈ること能くすと妄斷せざるべし、高慢を以て祈禱し、知識は蒙昧にして欲するときは靈的祈禱を以て祈ることを得んや、己を僞り稱する者は、此の如き妄誕に陷らん之に反し譫遜にして事を了會する者は甘んじて神父等に學び、怪の界限を知りて、かくの如き妄說に從ふを自から許さゃるなり。

問ふ此の言ふべからざる恩寵はもし祈禱にあらずんば之に祈禱の名稱を下すは何故なるか。

答　之が理由は既に證する如く、此恩寵は適當なる者に祈禱の時にあたへられて、其始を祈禱に於て有するによる、げだし神父等の證明によるに、かくの如き時の外此の美妙なる恩寵の降るが爲に位置あらざればなり、之に祈禱の名を與へらるゝは、げだし祈禱により智が此の幸福に導かれて、祈禱は之が原因となるによる、然れども他時には神父等の書に證する如く此の幸福は位置を有せざるなり、げだし多くの聖人の一代記にも錄する如く彼等が祈禱に立ちて智力を奪ひ去られしは人の知る所なり。

さりながらもし誰か問ふて、かゝる是時に於てのみ此の大なる言ふ可からざる賜あるは何故なりやといふ者あらば、次の如く答ふべし、是時に於て人は他のすべての時よりも自己に集中して、神に注意するに自己を準備し、願望して神より憐を待つによると之を略言すれば是れ王に懇願するが爲に王門の前に立つ時なり、されば懇願して、願ふ者の願が是時に成らんことは適當なり、げだし人が斯程に自から準備し、かくの如く自己を省察するは祈禱に前進する時の外如何なる時ありや、或は人の寢ね又は働く時又は其心意が亂さるゝ時は、かくの如きものを受くるに更に適當なりやげだし覩よ諸聖人はすべての時を靈神上の事の爲に占有せられざるなきにより閑暇の時を有せずといへども彼等の爲にも祈禱に準備せざるの時あらんげだし或は生活上偶會する所の何事をか思ひ或は天地萬物を研究し或は他の實に有益なる何事にか從事すること屢之あればなり、さりながら祈禱の時に於ては智の直覺力は獨一の神に突進して、其のあらゆる活動を彼に向はしめ注意と絕えざる熱切とを以て中心より願を彼にさゝげん、此によりて見れば靈魂に唯一の配慮のみなる是時に於て、神聖なる仁惠の溢れ出づるは當然なり、視よ司祭が準備し、祈禱に立ちて神を和げ、懇求して、其心を一に集中するや、其時祭壇に供へられたる餅と葡萄酒に聖神の降るは人々の知る所なり。ザハリヤにも祈禱の時に天使

現はれてイオアンの生るゝを豫報せり。ベトルにも第六時に屋背に於て祈禱したる時異象現はれて天より降れる布と其中にある動物とを以て彼を異邦人を招くに導びけり。コルニリイにも祈禱の時天使あらはれて、其錄されしことを彼に告げたり。又ナワインの子イイスにも祈禱に於て其面を俯したる時神は彼と語り給ひき。又司祭が約櫃の上なる贖罪所の中より凡て知らざる可からざる事の爲に神より異象を以て機密を識らしめられたるも、年に一回祈禱の恐るべき時に當り、司祭長がイズライリの子の支派の殘らず祈禱に集まりて、外部の堂中に立つに際し、至聖所に入りて其面を俯伏したる時に之あり。即恐るべき言ふべからざる異象により神の語るを聽きし時に之あり。呼此の時に於て彼の司祭長が勤めたる機密は如何に恐るべきものなりしや。しかして諸聖人に祈禱の時に現はれたるすべての異象も此の如くなりき。げだし他の如何なる時は神と對話する祈禱の時の如く聖なるか、且其聖なるにより賜を受るに此の如く適當なるか神の前に祈禱と祈願をさゝげて、神と對話する此の時に於ては、人は力めて其悉くの感動と思念を八方より纏めて一に集中し、思を獨一の神に沒して、其心は神を以て滿たさる。故に彼は人智の及ばざる所のものを悟るなり。げだし聖神は各人の力に應じて彼に働き、祈禱する其者より實體を借りて働くがゆゑに、祈禱は注意の爲に活動を專はれ、智は駭異の爲に打たれ、且呑まれて自己の願求を忘れ、其活動は深酔の中に葬むられて、人は此世に在らざらんとす。其時は彼處に靈と體との差別も何等の記憶もあらざるべし。神聖なる大グリゴリイの言ひし如し、曰く「祈禱は智の淨潔にして、こは唯人が駭異の時に聖三者の光より分與せらるゝなり」と。祈禱により智に生ずるものを悟るにより駭異する所の者に祈禱を分與せらるゝ所以は、此書の始に於ても他の多くの處に於ても予が既に言ひし如くなるを見るか。同く又グリゴリイは言へり、曰く「智の淨潔は心中の蒸洗なり、彼は天色に譬ふべし、聖三者の光は彼に祈禱の時に於て燦き始めん」。

問。此のすべての恩寵は、誰か何時之を賜はるか。

答。祈禱の時に之を賜はらん。智は舊き人を脫ぎて新しき恩寵の人を衣る時は、天色の如くなる淨潔を見ん。是即神が山上に現はれし時イズライリの長子等稱して「神の在所出埃及記二十四の十」と言ひし如く、此賜ものなり。ゆゑに予が已に言ひし如く、此恩寵とを名づけて、靈的祈禱とは言はずして、聖神により遣はさるゝ淸き祈禱の所產といふを當然とす。其時智は彼處に祈禱より上にあるべく、極て勝れたるも

のを發見すると共に、祈禱は中止せられん。ゆゑに智は其時祈禱を以て祈願せずして、人智の及ばざるもの、死すべき者等の世界の外にあるものを、直感するにより、大悦の中にあるべくして、すべて此世に屬するものを知らざるにより深默せん。此の不知を名づけて高上なる現象とはいふなり。是れ此の不知のことは言ふべし、祈禱と分れざる不知に達したる者は福なりと。願くは神の獨生子の恩寵により我等も此を賜はらん。彼に悉くの光榮と尊敬と叩拜は今も何時も世々に歸すべし、アミン」。

第十七　說教

物の記憶を以て喚起せらるゝ肉體の念を離れて深く直覺に入らんを尋ぬる靈魂の假定。

凡て他より高上なるものは其高上なるが故に、隱れて見えず、しかれども是れ他の體が天然に彼の爲に或る帷幕となるには非ず、ゆゑに彼の秘密を看破することも爲し得べし。凡て智力にて想像し得らるゝ實體は其自から卓越する所のものを外より借來るに非ずして、反つて此卓越は其活動の內部に一定せられたり、即彼が第一の光を大に明に受るが爲に直接に行爲するを得るは、或は他の品位と同樣なるべくして、其異なるあるは、位置の爲には非ずして、之をうくる特性の淨潔によるべく、或は天上の指麾と其力とを受るを能くすべき智の程度に準ずることも顯然なり。凡て智力にて想像し得らるゝ實體は、彼より下等なる實體の爲には隱れて見えず、然れども彼等が互に相隱るゝは天性に依るに非ずして道德の活動によるなり。而して予は此事を聖なる能力と靈性の品位と魔鬼等とにつきて言はんとす。初者の中者より隱れ、中者の第三者より隱るゝは、天性にもより位置にもより活動にもよるなり。然して各品位の實體は或は有形的なる或は無形的なるに拘はらず同じ品位に於て自から己の爲にも一者が他の者の爲にも隱れて見えざるは、知識による。然れども下等なる品位の爲に隱れて見えざるは本性による。何となれば無形なる本體を見るは、有形なる本體を見るが如く、外部に於てするに非ずして彼等の互に相見るは、道德に於ても、活動の度に於ても其見る所の本體の活動の內部に於て見るべきを示すなり。ゆゑにもし彼等は同等に尊敬せらるべき者ならば、たゞひ互に相隔たるといへども空想を以てせず僞りなき觀察と眞實の性とを以てして、互に

相見ん、但萬物の原因者は此限にあらず、彼は獨一崇拜せらるゝ者として此の差異よりは大に超越するなり。魔鬼等は極めて不潔なるものなれども、其自己の品位に於ては彼此互に相隱れず、然れども彼等より高上なる二の品位を見ざるべし、何となれば靈的觀察は活動の光にして、此光は直ちに彼等の爲に鏡となり、又目となるべきものなるによる。ゆゑに活動の暗まさるゝや、其本體は彼等より高上なる品位を見ざらん。されど自己固有の品位に於ては、彼此互に相見ん何となれば彼等は靈的品位よりは更に粗なるものなるによる。これ魔鬼等に就きて言ふなり。しかれども靈魂は汚され且暗まさるゝ間は彼此をも自から己をも見る能はざるべし。之に反してもし潔められて其造られたる往昔の狀態に歸るときは、此三の品位を明に見ん、即彼等より下き品位をも高き品位をも見るべく、又自己の品位に於ても彼此互に相見ん而して其時或は天使を見るか、或は魔鬼を見るか、或は彼此相見るも、有形的狀態に變ずるが爲に非ずして、却て自己の本性と靈的品位とに於て見るなり。之に反してもし魔鬼或は天使は自から變せず、有形的狀態を己れにうけずんば見るあたはざるべしと言はゞ是れ其見るは最早靈を以てするには非ずして即體を以てするなり。しかれども靈魂が體中にありつゝ、彼此互に相見るを怪むなかれ。げだし證者の確實眞正なるに據り、即顯たる大アフ、ナシイに據り、汝に明々なる證左を示さん、彼が大アントニイの事を記する文中に言ふあり、

大アントニイ一日祈禱に立ちけるが、大なる尊敬を以て舉げらるゝ靈魂を見て、かくの如き光榮を賜はりし者を讃美せりといふ、而して此の願者はニトリイのアンムンといひし人なりしが、聖アントニイの居りし山はニトリイを距ること十三日の道程にあり。此例は前文に述べたる三の品位のことの爲に既に證を爲すべくして、靈性はたとひ彼此遠く隔たるといへども、互に見るを得べきと、距離と身の官能とは開放的公然と行はれ、目前にあるものを見れども、遠く隔たりしものは他の觀察に達するときは、見るに肉體を以てせずして、精神を以てす。何となれば有形的觀察を要すればなり。

視よ、不潔なる人々にも或時には魔鬼等現はれ、同く亦天使等も現はれて、彼等が之を見るときは、有形の目を以てするならば、こゝに淨潔の要あるなけん。さりながら淨潔に達したる靈魂の爲には之あらざるなり。却て彼は心神を以て天然自然の目にて見るなり。されば靈魂が體中にありつゝ、彼此互に相見るを怪むなかれ。げだし證者の確實眞正なるに據り、即顯たる大アフ、ナシイに據り、汝に明々なる證左を示さん、彼が大アントニイの事を記する文中に言ふあり、

大アントニイ一日祈禱に立ちけるが、大なる尊敬を以て擧げらるゝ靈魂を見て、かくの如き光榮を賜はりし者を讃美せりといふ、而して此の願者はニトリイのアンムンといひし人なりしが、聖アントニイの居りし山はニトリイを距ること十三日の道程にあり。此例は前文に述べたる三の品位のことの爲に既に證を爲すべくして、靈性はたとひ彼此遠く隔たるといへども、互に見るを得べきと、距離と身の官能とは開放的公然と行はれ、目前にあるものを見れども、遠く隔たりしものは他の觀察に達するときは、見るに肉體を以てせずして、精神を以てす。何となれば有形的觀察を要すればなり。

在上の品位の許多存在することは、數ふべからずして、彼等は其卓越と品位とによ
り、名を稱せらるゞけだし首領と名づけ、權柄と名づけ、能力と名づけらるゝは何故か。
主制と稱せらるゝは、蓋し尊崇を以て卓越するものなるべし。而して彼等はアツシン
の主教聖ディオニシイの言ひし如く、其屬下たる者よりは少數なれども、權と知識に
於ては多大にして、其品位の等きに依り之を最多く分與せられたりげだし品位よ
り品位に及び以てすべての品位より大にして且權力ある者の單位に至る即一切
の受造物の首領にして又其基礎たる者の單位に達するなりされど子が名づけて
首領といふは造物主を言ふには非ず、神の業の奇蹟に先だつ者等をいふげだし多
くの者は彼等と我等の造物主なる神の容智を得ることを低くして、其低きは彼等の
下に居る者の彼等自己より低きが如くなるべしされど我が名づけて低しといふ
は位地に於ての高き低きを言ふに非すして、知識の力を以て言ひ、次下なる者の知
識の大小と比較して得る所の量に準じていふなりげだし此の悉くの靈的實體を
神の書は九の名稱を以て名づけ之を三部に分てり、而して第一部は大にして高く、
且最聖なる寶座と、多目なるヘルワイムと、六翼のセラフイムとに分ち第二は主制と能
力と權柄とに分ち、第三は首領と差役首と差役とに分てり、さて此等の品位はエゼ

レイの語より譯すればセラフイムとは煖むる者又燒く者の義にして、ヘルウィムとは
知識と智慧に富む者寶座とは神の支柱、神の安息の義なり、而して此等の名稱を以
て此等の品位に名づくるは彼等の行動に依る、されば尊敬すべき者としては寶座
と名づけ、悉くの國に權を有する者としては、主制と名づけ、精氣を調へる者とし
は首領民と人々とに權を有する者としては權柄力の强くして觀察の畏るべきも
のとしては能力捧持する者としてはヘルウィム、聖にする者としてはセラフイム、不眠
なる番兵としては差役首使はさるゝ者としては差役と名づけらるゝなり、
第一日に九の靈物の造られたることは知る可らず、而して一の造物は言を以て造
られたり是即光なり、第二日には穹蒼を造られたり第三日に神は水を一區に匯め
且蔬菜を生長せしめたり第四日に光を分ち、第五日に鳥と爬蟲と魚とを造り、第六
日に諸の動物及び人を造れり全世界の建設は長く且廣し、初は東にして終は西右
方は北にして左方は南なり、神は全地を奠むること床の如くし高き天は皮革天井
又は蒸露罐の如く、第二の天は第一の天と連なる車輪の如くして、天と地とは之によ
り互に相接するなり、大洋は即天と地とを繞らす帶にして、其中に天を廓する高き
山々あり、山の後に太陽あり、全夜の間を以て通過するを爲す、此等の山々の間に大

なる海は殆ど全陸の半又は其四分の一を占むるなり。
我等の神に光榮は歸す。

第十八　說教

無形體なる者の本性を觀察するに就て問答。

問　人性を以て無形體なる者の本性を觀察する方法と其差異は幾何あるか。

答　すべて靈的實體※の單純にして微妙なる本性を想像するは人性の感覺に屬し三の各異なる種類に於てすべし、或は有形なる客觀物即現實化したる物の粗なるに於てすべく、或は其物の微妙なる即現實化せざる物の微妙なるに於てすべく、或は異質なる直覺即實體其ものを直覺するに於てすべし。第一に關しては五官も之に權を有すべく、第二に關しては靈魂は之をたゞ表面に觀察すべく、第三に關してはこゝに聰明なる本性の力を要するなり、而して又後の二者各自に關しては意志と智力は之に權を有すべく、意志と心靈上の樂とに關係しては、もし意志が同意するならば直志は之が第一の原因なり、而して必要の時には自由と意志とは沈默を守り暫く位地を占めて、行爲はこゝに止まると雖、心靈上の樂は自由の所產なり或る場合に於ては、彼はたゞ指示するのみにて贊成するの意志あるなく、眞實の認識なくして生ずることあり、何となれば感覺は偶然に起るものを意志の關係なくして己れに受くるを能くすればなり。聖なる能力が我等と與にするときは此の三の方法を以て我等の敎訓にも我等が生命の建設にも勤むるなり。

※こゝに靈的實體とは無形體非物質なる本體にして、不合成的本性を云ふ。

しかれども不潔なる魔鬼は我等を益せんがためにあらず、滅さんがために我等に近づくや、我等にたゞ二つの方法を働かすを得べし、然れども我等を誘惑するが爲に第三の方法を以て我等に就く能はざるべし、何となれば魔鬼等は智力の天然の意思を我等に活動せしむる力を全く有せざればなり。げだし暗の子は光に近づく能はざるによる、さりながら聖なる天使等は之を有す、即意思を活動せしむることをも之を光明ならしむることをも能くするなり、これに反して魔鬼は虛僞なる意思の君にして又造成者なり、即暗の子の君にして、又造成者なり、何となれば光を發する者より受るものは光にして、暗まされたる者より受るものは暗なればなり。

問　彼には與へられ、此には與へられざるは何故なるか。

第十八　說　教

答　凡て師たる者は其教へんとする知識を先づ自から己に於て研究し之を學習し之を受用し且之を玩味し而して其時に最早之を以て被教者の前に述ぶるを得べし第一の教師は物の精確なる知識を自己の健全なる認識より授けん是れ最初に最透明清潔なる智の敏速なる想像に一切を包有し得る者なり魔鬼等は敏捷なれども光を有せず怜悧は別にして光は亦別なり前者は後者なくんば之を有する者を滅さん後者は眞實を示せども前者は眞實の影なり何ごなれば光は物の眞實を示し生活の狀態に準じて或は之を增し或は之を減ずればなり。

聖なる天使等は物の行動を知る知識を自己の認識により我等に注ぎ自から先に味ひしものと智力を以て想像したるものとを其後我等にも傳ふるなり而して之と同く第二の師も自己の認識の度に應じて物の行動に對する想像を我等に喚起す然らずんば其自から居らざる所のものに於ては必ず我等に正しき意思を喚起せん。さりながら我が既に言ひし如くたとひ我等は受くるを得るとも彼等は最初に眞の直覺を有したるに拘はらず之を以て我等に敎ふる能はざるを確信すべし。而して又彼等はおの〳〵彼等を統御する神の照鑒に依り被敎者を或は其事に或は其と反對なるものに喚起せん、しかれごも魔鬼の媒介に依るにあらずんば、感覺は惡の認識をうけざるべく、惡の爲に動かされざるべくして、智力も天然に惡を爲すことは能はざるべしといへごも我等か智力は聖なる天使の媒介なくしても天然に學ばずして善に起るを得べし予は之を眞實と認むるなり。げだし善は天性に種附けられたれごも惡は然らざればなり。然して凡て我有にあらずして外より入り來るものは之を認識するを得るが爲に或る媒介者を必要とす。しかれごも凡て內部に生長するものは學ばざるも幾分か天性に浸入するなり。されば天然の性質はかくの如く自然に善に與起するならば、之が生長と照耀とは天使の直覺を借らずしても得らるべきなり。さりながら彼等は我等の師たること猶彼等の互に師たるが如くなるべし。下なる者は彼の俯瞰して己よりも多く光を有する者に學ぶべく、此の如くして一は他に學びて聖三者を師とするの一位に至る迄漸々に昇進するなり。然れごも其の第一の品位は又自から確として言はん獨り自から學ぶに非ずして仲保者たるイイスを以て師となし彼より受けて下なる者に傳ふと。

思ふに我等が智は神聖なる直覺に向ふ天然自然の能力を有して一の希望に於ては我等もすべての在天の性と同樣なり。げだし我等にも彼等にも働くものは恩寵なればなり。さりながら性に依れば人智の爲にも天使の智力の爲にも神性を直覺

するは非常なるものとす、何となれば此直覺は他の直覺には數へ入られざるにより然れども凡て靈智ある者に於ては第一者に於ても中間者に於ても天と地のすべての永在者を直覺するは性によるに非ずして恩寵を以て成るべく、他の事物のごとく性を以て之に達するに非ざるべし。

如く性を以て之に達するに非ざるべし。

天上靈物の品位が止る所の聰明なる直覺と其觀察とはハリストスの肉身により來るに至る迄は彼等の爲に此奥義に徹底する程近接せしには非ざりき、しかれども言が肉身となれるや彼等の爲にイイススに入る門戶の開かれたることは使徒も言ひ我等は無玷清潔なる者となり得るとも思ふにこの言へる如し、しかれども我等を昇すべき默示と認識とに近づくあたはざりしの思想に於ては天にある者の媒介なくんば彼の實に與は直覺とを永遠者より直に受くべき上なる實體の有するならん、何となれば默示と直覺とを永遠者より直に受くべき上なる實體の有する義の顯現たる永遠の直覺に我等を昇すべき默示と認識とに近づくあたはざりし如くなる能力は我等の智には足らざればなり、げだし彼等も形式により之を受け、薇はるゝ所なくんばあらずして、我等が智力も之を受くること彼等と同じ、げだし各品位は他の品位の轉達により受けて第一の品位より第二の品位に傳ふるに殿重なる秩序と差別とを守り、かくの如くして奥義は悉くの品位に轉達するに至る。

さりながら多くの奥義は第一の品位に止まりて他の品位に及ばざるべし、何となれば此の第一の品位の外他の悉くの品位は奥義の大なるを己れに容るゝ能はざればなり、しかれども或る奥義は第一の品位より出でゝ獨り第二の品位に示され、彼に於て此奥義は沈默に守られて他の諸品は之を曉らざりしも、或る奥義は第三及び第四の品位まで達せん而して又聖なる天使等にあらはさるゝ默示にも增減あるべし、されば彼等に於てさへかくの如くならば、矧や我等は彼等を俟たず彼等の媒介なくして、かくの如きの奥義を受くるを得んや、之に反して諸聖人の智に或る奥義の顯現の感のあらはるゝは彼等により之あるべし、それ默示は更に高き品位より更に下き品位に傳へられ、次て其下き品位より他の品位に傳へらるゝことを神より許され、かくの如くして人性迄達することを神の指麾によりゆるさるゝならば、こはすべて之に堪ふる所の人々にも達すべきなり、げだし諸聖人は天上の諸品を經由して光榮なる永在者其ものをさへ直覺する、即ち此の窮むべからざる奥義さへも直覺するの光を受くべく、彼等が自ら相受るは生命の嗣者とならんとする者に遣はるゝ役事の靈なるによる(エウレイ一の十四)さりながら來世に於てはかくの如きの次第順序は廢さるべし、何となれば彼等は其靈魂の頌讚と喜樂

第十八　說教

この爲に神の光榮の顯現を彼此より受くるには非ずして、おの〳〵其剛勇の度に循ひ當然にうくべきものを價により主宰より直接に與へらるべくして、此世に於る如く他者により賜をうくるにはあらざればなり。げだし彼處には教ふる者も教へらるゝ者もなく、其足らざる所のものを他が補ふべき必要を有する者もあらざればなり。彼處には受くるに適當する者に直接に與ふる一の賜與者あるのみにて、天上の樂を受くるなり。彼處には教ふる者と教へらるゝ者との順序は廢されて、すべての願望の中心は唯一の尖頭に確立するなり。

我謂ふ地獄に苦みをうくる者は愛の鞭にて撻たれんと。此の愛の呵責はいかに苦しく且慘憺たるにや。げだし愛に對して罪を犯せりと感じたる者はすべての人を恐怖せしむる苦みよりも更に大なる苦みを忍耐すべく、愛に悖る罪の爲に心を打つの哀みはすべての有り得べき罰よりも恐ろしかるべし。罪人等は地獄に於て神を愛するの愛を奪はるべしといふは人に不似合なり。愛は總じて何等の人にも與へらるゝ（何人も之を首肯せん）眞理の認識の所産なりさりながら愛は其力を以て二樣に働かん。愛が罪人を苦しむるはたゞへば此世に於ても甲が乙の爲に忍耐する場合のある如くなるべく、又其本分を守る者をば樂ましめん。されば視よ、予の考に依れば地獄の苦みは是れ即悔恨なりされど愛は在上諸子の靈をば其懇請を以て醉はしめん。

問　罪の赦しを受けたるを人は何時確知するか。

答　全心より罪を全く憎むを其靈中に感知する時と、從前と反對の方向を明に自己に與ふる時なり。かくの如き者は其自から得たる良心の證明により、最早罪を憎みし者として、神より罪の赦を受くべき望のあることは使徒の言ふ如くならん、曰く「間然すべからざる良心は自から己の爲に證者たりと。願くは我等も始なき父と、獨生の子、及び聖神の恩寵と仁慈とに依り、其罪の赦しを受くるを賜はらん。彼に光榮は世々に歸す。アミン」。

第十九　說教

主日の事及び「スボタ」の事に關する理論の標準及ひ其比喩的意義。

主日は我等が體と血とを有する間は、我等の受るあたはざる眞理の認識の奥義に

第十九　說教

して我等の所思に超絶するなり。此世には實に第八日なく、安息日もあるなし。げだし神は第七日に安息し給へり」（創世記二の二）といひしは此生命の進行を終て後安息するの義を表示せり、何となれば墓は即體にして、體は世の爲なればなり。六日の間誡命を守るを以て、生命の行爲に終を告げ、第七日にすべて墓に送られて、第八日に墓より出づ。それ主日の奥義を賜はる者等は、こゝに比喩に於て之を受れども、日其ものを其本義に於て受るには非る如く、苦行者等も安息日の奥義を比喩により てうくれども、すべての憂ひ哀むべきものより休息して不安より全く安んずる眞實の「スポタ」を實に受るには非るなり。げだし神が此處に我等の爲に與へ給ひしは神秘にして、眞正現實にはあらざるなり。眞實にして比類なき安息は、是即憂と慾と安息に反對なる行爲とより全然休息することを表示するの墓なり。人間は彼處に於て靈も體も安息するなり。神は六日の間に、此世界のすべての構造を秩序にみちびき、元質を作りて、其の永久運轉する行動には、從ふべきの法則を與へ給へり、されば彼等は破壞するに至るまでは進行して止まざるなり。彼等の力、即創世元質の力を以て神は我等の體を組織し給へり、然れども元質にも其運行を休止せしめずして元質より生じ來れる我等が體にも行爲より休息することを得しめざるなり。しかれども我等の體が最初の化合に從ふと同時に、我等の爲に行爲より休止するの限界を定め給へり、即此生涯より脫する是なり。かくの如く「アダム」には告げていへり「汝の面に汗して汝の食物を食ふべし」と。然るに此は久しかるべきか「土は汝の爲に荊棘と蒺藜とを生ずべくして汝は其出づる所の土に歸るに至らん」といへり（創世記三の十八、十九）これぞ汝が生存する間に於る此生命の働の秘義なる。しかれども主は荊棘と蒺藜とを生ずべき汗に易ふるに祈禱と共に義の行爲に於て注ぐべき汗を以てし給へり。五千五百有餘年の間神はアダムを棄てゝ地上に勞苦せしめたり、げだし其時に至る迄は「惡所に入るべき路の未だ啓かれざりしこと」は神聖なる使徒の言ふ所の如し（エウレイ九の八）されど末日に及び來りて自由に命するに、他の汗を以て一の汗に易ふべきを以てし、すべてより安息するに非ずして、すべてを變革するをゆるし給へり、何となれば我等が地上に苦むことの永く續きたる爲に其仁慈を我等にあらはし給ひしによる。ゆゑにもし地上に汗を注ぐことを緩むるならば必ず荊棘を穫らざるを得ざるべし。げだし之と同く祈禱の廢棄は天然に荊棘を生ずるの地を以て體とするの行爲ならずんばあらず。慈は實に荊棘なり、之を體に種きたるにより、我等に芽を生ず（カラテイヤ六

の八)アダムの狀態を身に着る間は必ずアダムの慾をも身に着ん、げだし地は其性に順ふ者の芽を生せざる能はず。地の性の產する所のものは即我等が體の土なること、神の證言する如し、曰く「汝は土より取られたり」と(創世記三の九)彼の土は荊棘を生ずれども此の聰明なる土は慾を生ず。

主は我等の爲にすべてに於て模範たり、機密に於ても、すべて其攝理の種々樣々なる行爲に於ても且は第九時に至る迄も、其踵は行爲と勞苦とを止めずして(これぞ我等が全生涯の行爲の秘義なる)安息日に至り、墓に寢ね給ひしならば、生涯の中にも安息あり、即慾より休することありと主張する者は何處にありや。されど主日のことは、我等の爲に言ふも高きに過ぐ。我等が安息日は葬の日なり。我等が性は實に彼處に於て安息するなり。されど地の成立する間は之より日々荊棘を拔取らんことは、我等に必要なり。たゞ我等の勵を續くるにより、此等の荊棘は衰へん、何となれば地は之を全く掃清せられしに非るによる。此の如くなれば一時の怠慢により、或は僅少の不注意により荊棘繁茂して、地の表面を掩ひ、汝が種ゑしものを壓して汝の勞は空しきに歸するならば、最早汝は毎日地を掃清せざるべからざるなり、何となれば掃清を廢するは荊棘の繁茂をいよ〳〵大ならしむるによる。願はくは一性にして獨生なる神の子の恩寵により掃清せられん、彼に光榮は始なき父と生活を施す聖神と共に世〻に歸す。アミン」。

第二十　說教

常に庵中に居りて獨り己を省みんと決心せし者に

最必要にして最有益なる日々の想起。

兄弟あり、錄して常に己の前に置き、自から省みて言へること左の如し、無恥にして如何なる害をも受るに値する人よ、汝は自己の生命を無思慮に費せり、されば善行なくして空しく過ぎ、惡行を以て富める汝の諸日の中より餘す所の是一日たりとも、自ら戒愼せよ。社會の事をも、其動靜の事をも、修道士の事をも、其業務の事をも、彼等が如何に生活して其所爲の如何に大なる事をも問ふなかれ。此の如きことを絕えて念頭に掛くるなかれ汝は奧密に世より出で、死者の如くなりてハリストスに歸せり、世と世にあるものゝ爲に復た生るなかれ、希望は汝に先だつべし、然らばハリストスに於て生きん。衆人より來るもろもろの誹謗と、もろ〳〵の侮辱嘲笑及び

第二十　說教

非難に對しては自から備へ、忍耐を以て武裝せよ。而して此のすべてのものを喜んで受ること、實に之に當るべきものゝ如くして、如何なる勞苦も如何なる患難も、汝が曾て其旨を遵奉したる魔鬼より來る所の如何なる不幸も、感謝して忍耐し、すべての窮乏と天然に起るものとすべての不幸とを勇氣に勵忍せよ。身體の爲に缺くべからざれど速に腐敗に歸すべきものを失ひしは、神を望むによりて忍べよ、神に依賴して此のすべてを受けんことを願ふべく、助も、何等の盡瘁も何處よりも期するかなれ「汝の哀を主に負はしめよ」、聖詠五十四の二十三而してすべての誘惑に於ては自己を罪し、己を以て此のすべての原因者とせよ。何の爲にも誘はるゝなかれ、何事なれば汝も禁樹の果を食ひて、汝は種々の慾を受たればなり、不幸は喜んで受け、汝を寒心せしむるに放任せよ、其が爲後に至りて樂を感せん。禍なる哉、汝と汝の臭穢なる名譽よ。汝はあらゆる罪を充ち滿てる己の靈魂をば非難すべからざるものゝ如く宥免すれども、他の靈魂をば言を以ても思を以ても非難せり。汝の爲には此の今に至る迄汝が養はるゝ豚に適當なる食物にて足り足れり汚穢者よ、汝はかくの如く無智に生命を送りて、人々と交際し彼等の社會に止まるを如何にして恥ちざるか。もし汝は之に注意を向けて、此すべてを守るならば、或は神の助によりて救はれん。然れども之と反對なる時は暗黑と魔鬼の里に退去し、厚顏にして其旨を行はん。視よ、予は此のすべての爲に汝に立證せり。若し神は正義に據り人々を汝に近寄せ、汝が生命の全時彼等に對して思に存し言に發したる侮辱と非難との爲に汝に報ゆるあらば、全世界は汝の爲に平安を有せざらん。終に今よりなりとも止めよ、而して汝に報いらるゝすべてのものを忍耐せよとさ。此兄弟は誘惑又は憂愁の來るときは感謝と己の爲に之を益することを以て大に忍耐するを得んが爲に、此すべてを日々自から省思せり。吁我等も人を愛する神の恩寵に依り我等に及ぶ所の不幸は感謝を以て忍耐し、之より己の益を引出すを得ば幸なり。彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン」。

第二十一　說教

種々なる事項に就て問答。

問　人心は惡に向はざらんが爲に如何なる鍵鑰にて縛らるべきか。

答　恒に審智に從ひ生命の數に富むを以て縛らるべし。げだし意の放恣を抑へん

がために、かくの如く有力なる鏈鎖は他に之あらざるなり。

問　容智に從ふ者の進行の終極は何の處に之ありや、其學習は如何して完うせらるべきか。

答　其進行に於て此終極に達せんことは、實に能はず、何となれば諸聖人も此事に於ては完全に至る迄達せざればなり。容智の路に終なし、之に由りて行く者が神と合するに至る迄は、上へ上へと進行す。無限に彼を追求するはこれ其表徴なり、何となれば容智は神自らなればなり。

問　我等を容智に近づかしむる第一の途は如何なるか、其途の起首は何にあるか。

答　神の容智の跡を慕ひ、全力を以て進行すると、此進向に於て生命の終に至る迄全靈を以て急ぐと、もし必要あるときは生命其ものをも脱し之を自から拋つことをさへ神を愛するにより等閑視せざるとにあり。

問　誰か才智ある者と當然に名づけらるべきか。

答　此生命に界限のあるを眞實に曉る者是なり。彼は犯罪にも界限を置くを得べし。げだしいかなる知識或は如何なる通曉は之より高尚なるか、即人が智慧附けられ、欲望の惡臭に汚されたる一の部分をも有せず、又欲望の甘きに留められゝ靈魂に何等の汚點をも有せずして、此生命より出て不朽に入るを曉るより高尚なるものありや。げだしもし何人か天地萬物の奥秘に透徹せんが爲に其思想を錬り發明と觀察とによりてもろ〳〵の知識に富むも、其靈魂は罪の汚穢にけがされ、心中の希望に於ては證明を受けざるに拘はらず、希望の淺に幸に入りたりと思ふならば、世に彼より愚なる人やある、何となれば彼の行爲は世に向て不斷進行するにより彼をたゞ此世の希望にみちびきしのみなればなり。

問　誰か眞實に最剛なるか。

答　生命と勝利の榮が隱るゝ一時の苦阨には心を慰めて、地獄の惡臭が潛伏し蔣ぬる者に嘆息の分子を飲ましむる寬縱を願はざる者是なり。

問　もし誰か誘惑に因りて善なる行爲より離るゝならば神に進行するに如何なる害あるか。

答　患難なくんば神に近づくあたはず、患難なくんば、人間の正義も不變不易に守られざるなり、もし人は正義を增殖する行爲を棄つるならば、之を保護する行爲をも棄てん。されば彼は保護せられざる寶と同じかるべく、敵軍が圍繞せる時武裝を剝がれたる戰士と同じかるべく、網具を有せざる船と同じかるべく、渾々として流

るゝ水の泉を以て多く潤されざる園と同じかるべし。

問　誰か悟性を光照せられたるか。

答　世の甘味の中に潜まれる苦味を尋ぬるを能くし、其口に此盃を飲むを禁じ、如何して其靈を救はんかと常に捜索し、此世を離るゝに至る迄は其進行を止めず、五感の門を閉ぢて、此生命に對する執着の念を入らしめず、彼をして其奥密なる寶を奪はしめざる者是なり。

問　世とは何ぞや、彼を如何に認識すべきか彼を愛する者に幾何害あるか。

答　世とは其美を盡ひ之を熟視する者を引誘して之を愛せしむる淫婦なり。されば聊たりとも世を戀愛する情の主たるありて、之に絆さるゝ者は、其手より脱する能はずして、世は其生命を奪ふに至らん。而して世が人より一切を剝ぎ取りて死するの日に彼を其家より持去るならば其時人は實に世は淫者たると騙者たるとを確知せん。しかれども誰か此世の暗中に匿まるゝ間は之より脱せんと盡力するも、其路を覺るあたはざるべし。かくの如くなれば世は其門徒と諸子とを自己に引止むるのみならず、世に縛られざる苦行者等をも、又世の縺鎖を破りて一時世より上に立ちし者等をも引止るなり。視よ種々の手段を以て彼等を其行爲に於て擒へ之を其足下に投じて蹂躙するを。

問　病と困難とが身體を圍み之と併せて意志は善なるものを願ふの望と其最初の堅きとに於て弱るときは、我等之を如何に爲すべきか。

答　一半は主の跡を追ふて行けども他の一半は世に止まりて其心は此世にあるものより脱せず、自己を分割して或時には前を望めども或時には後を顧みる者等を見ること稀なりとせず。ゆゑに智者は「二心を以て主に就くなかれ」といひ〔シラフ一の二十八〕暗く者の如く穢る者の如く就くべしといへるは思ふに此の自己を分割して神の容智の路に近づく者等に敎訓を與ふるなり、主も此の不充分に世を棄てゝ自己を分割したる者等が肉體の慾を未だ自から棄てざるにより、畏懼と患難と衰弱を彼等に擲たしめんと欲し、彼等に一定の敎訓を告げていへり〔我に從はんと欲せば先づ己を棄つべし云々といへり〔マトフェイ十六の廿四〕

問　己を棄つとは何を謂ふか。

答　十字架に上らんと準備せし者は、其心に死の一念を有し、かくの如くして十字架に上り、現世の生命に再び分を有するを思はざるならん。己を棄つることを實行

せんと欲する者も此の如しげだし十字架とは如何なる患難をも受けんとの意志是なり、主は此事の何故かくの如くなるべきかを敎へんと欲するや、告げていへり、此世に生きんと欲する者は眞生命の爲に己を亡ぼさん、しかれども此處に於て我が爲に己を亡す者は、彼處に於て己を得ん、(マトフェイ十の二十五)即十字架の路を進行して其足を彼處に立つる者は己を得んと。されども誰か此生命のことを更に慮るならば、これ其の出でゝ患難に向ひし希望を彼は自から奪へるなり。げだし此念慮は彼に神の爲に患難に近づくを許さずして、彼が此念慮に從ふにより、漸々彼を誘ふて苦行的有福なる生涯の中より引去るべくして、彼を征服するに至る迄は、此念慮は彼に增々成長せん。我を愛するにより、我が爲に己の生命を其心に於て亡す者は、間然する所なく傷はれずして、永遠の生命に守られん、我が爲に其生命を亡す者は之を得ん」とは即此義を示すなり。されば猶此世に於て此生命の爲に己の生命を全く亡すに自から備へよ。もし此の生命の爲に己を亡すならば、主は亦同じ意味にていへり「汝に永遠の生命を與ふること我が汝に約せし如くせん」(イオアン十の二十八)されど汝は此の生命に留まるならば、我が約束と未來の幸福に於る保證を猶此處に實際を以て汝に示さん。此生命を輕んずるときは、永遠の生命を得ん。

此の武裝を以て苦行に出發する時は、凡て患難憂苦と思惟せらるゝ所のものは、汝の眼中に輕んせられんげだし心が此の如く武裝せらるゝときは彼の爲に戰もなく、死の危きに臨みて憂愁することもあるなしゆゑにもし人は未來の有福なる生命を望むが爲に此世に於る自己の生活を憎まずんば、毎時毎刻來る所の種々なる患難と勞苦とを全く忍耐する能はざる所以を確として知らんこと肝要なり。

問　如何して人は從前の習慣をすてゝ、缺乏と苦的行生活に慣るべきか。

答　身體は奢侈と懦弱とに貪くるものゝ爲に圍まるゝ間は、其必要を充たさずして生活するを甘んせざらん、而して身體が凡て懦弱を生ずるものより除かれざる間は、智も其體を奢侈より止むるあたはざるべし、げだし奢侈と浮華との觀場が其前に開かるゝありて懦弱に貪くる所のものを殆ど毎時見ざることなき時は、火焰の如き欲望起りて彼を衝動することと燒くが如くならん、故に贖罪者たる主は其跡に從て行かんことを約束したる者に、裸體にして世より出づべきを最善く誡命し給へり、何となれば人は凡て懦弱に貪くる所のものを先づ自から拋棄して、其後事に着手せんを要すればなり、主も自から魔鬼と戰を始むるや、最無趣味なる野に於て開戰し給へり、ハヴェルもハリストスの十字架を己れに任ふ者に邑より出づべき

を勸告す。いへらく「我等は彼の辱を任ひ、邑外に出でゝ彼に就くべし」エウレイ十三の十三」何となれば主は邑外に於て苦をうけたればなり。げだし人は世とすべて世にある所のものより己を分離するや、其從前の習慣と從前の生活の有樣とを速に忘れて、此等の爲に永く占有せられざらん。之に反して人を世と世の事物に近づかしむるにより、直に其智力を弱めん、ゆゑに此の救濟的及び苦行的の戰に大なる進歩を爲すが爲に、特に協力して之を導くは何物なるを知らんこと肝要なり。修道士の庵の貧しく缺乏なる狀態にあらんことゝ、修道士の爲に庵は空虛にして、安息の望を挑撥すべきものを一も畜へざらんことは有益にして、此戰に助くるなり。げだし人を搖弱ならしむる原因より遠ざかるときは、人は二樣の戰に於て、即內部と外部の戰に於て危きを免れん、かくの如く安逸に資くるものを自から遠ざくる人は其欲望を起すものの近きに居る者に比すれば勢せずして勝利を得ん。げだしこゝには二倍の苦行あるなり。

人は其住所の整頓設備の爲に必要なるものを缺く時は、人の要求も易すく輕んせらるべく、其要求を適宜に充たさゞる可らざる緊要の時に於ても、人は之を視るに慾望を以てせず、何等の微物を以ても體を悅ばしめずして、之を見ること或る輕んずべきものを見るが如くし、食に近づくも之を甘んずるが爲にあらず、性を助けて之を堅むるが爲にせんとす。かくの如きの勉勵は速に人を導きて憂ひず哀まざる意思を以て苦行に着手せしむるに至らん。ゆゑに凡て修道士と戰ふものをば、之を避けんが爲に疾足して、後を顧みず、彼と開戰せんとするものと交通せず、之を一見するだも節制して、もし近づき來るときは、出來得るだけ之に遠ざかるは、勉勵なる修道士に適當なり。予が此事を言ふはたゞ腹の爲に言ふにあらず、すべて修道士の自由の誘はれ且試みらるべき誘惑と戰とにみちびき入れんとするものにつきて言ふなり。げだし人は神に來るときは、すべて左の件々を節制することを神と約束するなり。即婦人の面を窺はざること、美なる容顏を見ざること、何物に對しても願望を抱かざること、裝飾せる衣服を見ざること、俗人が開設したるすべての陳列場を窺はざること、彼等の言說を聽かさること、及び之を好着せざらんことを約す。何となれば慾念は凡て此等のものと接近するにより、大なる勢力を得て苦行者を惱弱にし、其思想と企圖とを變せしむるによる。それ或る善なるものを一見するは、眞の熱心者の同意を喚起して、善を成すに傾かしむるならば、之と反對なる所のものも心意を壓して、之を奴隸にする勢力を有すること明なり。而

して默想する心意と偶會するものは、或る大なるものには非ずして、たゞ之を戰闘苦行に陷るゝのみなるも、これ亦既に大なる損失なり、即心意其ものを平安なる狀態より混亂なる狀態に陷るゝなり。

それ齋闘に於て試みられたる老苦行者の一人は、鬚なくして婦人の如くなる青年を認め、之を以て思念の爲に害ありとなし、其苦行の爲に毒なりとなせしならば、此聖人の入りて兄弟を接吻するを蹂躙したりしを、誰か之を等閑視してこれ我が事にあらずと爲すを得ん。賢なる老人は熟々思ふやう「もしたゞ是夜に於て此處に之と相類する事のあらんを少しにても思ふならば、これ亦我が爲に大なる害とならんと。ゆゑに彼は入らずして告げていへり「子よ予は恐れず。さりながら何の爲に予は徒らに自己に向つて戰を起すを願はんや。之と相類する何事をか想起するは、心に大なる混亂を生ぜん。餓は此身の各肢にかくるゝありて、之により大なる戰は人に臨まん、されば人は自己を保護して、其來らんとする戰をば己の爲に緩うして、逃走を以て救はれんこと肝要なり。然れども人よ、何事か接近し來るときは、たとひ己を善に強ゆといへども、常に之を見、且は之を願ひつゝ早くも危きに瀕せん」。

地中には多くの埋沒せる藥物を見るべきも、夏は炎熱の故に何人もこれを知らず、然るに滋潤至りて清涼なる空氣の力に觸るゝ時は、各藥物の地中何處にか埋まりしもののあらはるゝなり。かくの如く人も默想の恩寵と節制の溫暖に居るときは、實に多くの慾念より休止せん、然れどもし世事に關渉するならば、其時各慾念は起りて其首を擡るを見ん。殺や安息の香氣に觸るゝ時に於てをや。予が之を言ふは、此肉體に居る間、死せざる間は、誰も自負に陷らざらんが爲なり。且予はすべて邪なる生活にみちびく所のものを避け、且之に遠ざかり、苦行的戰闘に於て大に人に助くる所のものを示さんと欲するなり。或る想起の我等に恥をかうむらしむるものを畏るゝことゝ又之と同く良心を蹂躙せざることゝ之を輕んせざることは、常に我等に肝要なり。終に我等は身體を一時野に遠ざくるを試み、之をして忍耐を得せしめん。しかれども最重要なるは、おの〳〵（此事は各人の爲に心を痛ましむべしといへども之が爲に人は最早何も恐るゝ所あらざるべし）何處にありとも、戰の原因となるものより遠ざかるに盡力するにあるべし、これ需要が生じ來らん時、其要求を充たすべきものゝ近きにあるがため之に陷るを免れん爲なり。

問　種々の引誘を自から絕ちて苦行に入る者は、罪と戰ふに如何なる起初を爲し如何に齋闘し始むべきか。

答　すべて罪と欲望とに戰ふが爲に起初となるべきものは、勞苦と儆醒と禁食となることは衆人の知る所なり、矧やもし誰か我等が內部に居る所の罪と鬪ふに於てをや。此の見えざる戰を作す者等が罪と欲望とに對して之を憎むの徵候は此を以て認らるべくして、彼等は禁食を以て之を始め、其後夜間の儆醒は苦行に助くるなり。

禁食と儆醒の事。

畢生の間此一對と交ることを愛する者は貞潔の友とならん。腹を安んじ、睡眠を以て己を懦弱にして淫慾を燃すは萬惡の始なる如く、禁食と儆醒と、眠らずして神の奉事を行ひ、終日終夜身を十字架に釘して睡眠の甘きに反對するは神の聖なる途とすべての道德の基なり。禁食はすべての道德の保障なり、奮鬪の始なり、節制者の冠なり、「ハリステアニン」の首途なり、祈禱の母なり、貞潔と善智の源なり、默想の師なり、あらゆる善行の率先者なり。光を願ふは健全の目に適する如く、祈禱を願ふは思慮を以て守らるゝ禁食に適す。

もし誰か禁食し始むるならば、最食是時より智を以て神と共に交はるを願望せん。けだし禁食する體は全夜を床上に寢通すに堪ふる能はざればなり。人が其口に禁食の印を押さるゝときは、其意思は痛悔を學ぶべく、其心は祈禱を流すべく、其面に愛色ありて、耻づべき思念は人より遠ざかり、其眼中に欣喜の色は見えざるべし。彼は淫慾と空談の敵なり、思慮深き禁食者が惡慾の奴隷となりしことは未だ曾て見たる者あらざりき。思慮を以てする禁食はもろ〳〵の善の爲に廣大なる第宅なり之に反して禁食を等閑にする者はすべての善を動搖せしめん。何となれば禁食は最初食を嘗むるとき、預防の爲に我等が性に與へられたる誡命にして、禁食を破りし爲に、我等が造成の始は墮落したりき。さりながら苦行者等は神の法を守るを始むるならば、最初の貶黜の成れる其ものよりして神を畏るゝの畏れに大に進歩するを始めん。

救世主も世にイオルダンの河濱に現はるゝや、此より始めたまひき、けだし洗禮の後神は彼を導きて野に至り、彼處に於て彼は四十日四十夜禁食せり。之と同く凡て救世主の跡を慕ふて出づる者等も其苦行の始を此基上に確立せん。何となれば禁食は神の備ひ給ひし武器なればなり。ゆゑにもし此を等閑にするならば、之が爲に誰か叱責を被むらざらん。もし立法者が自から禁食するならば、其法を守る者は、誰か禁食せざるべけんや。此に由て見るに人間は禁食に至る迄は、勝利を知らずして

魔鬼も未だ曾て我等の性により攻擊を試みざりしが、此武器の爲に彼は先づ驅り
ぬ。而して我等の主が此勝利の大將となり、及び家子となり給ひしは、第一勝利の榮
冠を我等の性の首に加へん爲なり。ゆゑにもし魔鬼は人類中何人に於てか此武器
を見るならば、此反對者と苦虐者は即時に恐を生すべく、救世主の爲野に於て擊敗
せられしとに直に想到し、之を記憶して、其力は挫折せらるべく、我等が元帥を以て
われらに與へられたる武器を望むは彼を燒盡さん。如何なる武器は之より有力な
るか、狠惡の靈と奮鬪するに當り、心に勇氣を添ふるはハリストスの爲に飢うるに
如くものありや。げだし魔鬼の軍の人を圍むに當ては、身體を勞らし且苦しむる程
心は希望を以て滿たさるゝなり。禁食の武器を着るものは、何れの時にも、熱心を以
て烈しく燒かるゝなり。げだし熟心者イリヤも神の法律に熱心し始むるや、此行爲
を務めたりき。禁食者は之を獲たる者に神の誡命を想起せしむるなり。彼は舊き法
律とハリストスを以て我等に與へられたる恩寵の間の仲保者なり。禁食に等閑な
る者は他の苦行に於ても懦弱、怠慢、無力にして、其靈魂を弱らすの始と惡しき徵候
とをあらはすべく、彼と戰ふ者に勝利の機會を與ふべし、何となれば裸體にして武
器を持たず、苦行に出づればなり。ゆゑに勝利なくして戰鬪より退かんこと明なり、
何となれば彼の肢體は禁食に飢るの溫情を以て包まざればなり。禁食はかくの
如し之を務むる者の心は毅然として、凡の猛烈なる慾を逆へて之を反拒せんとす。
多くの致命者の事を傳へ言ふあり、彼等は致命の榮冠を受けんを期する日に當り
或は默示により、或は其朋友中或者の報告により之を豫知するや、全夜何物をも食
はず、晩より朝に至る迄眠らずして祈禱に立ち、詩頌歌章靈賦を以て神を讃榮しつ
ゝ愉快と欣喜とを以て其時刻を待ちしこと、或る婚姻に豫備する者の如くし、禁食
に於て劒を迎へたりとゆゑに見えざる致命者の行に召されたる我等も、成聖の冠
を受けんが爲に儆醒すべく、我が身の一肢體をも又一部分をも辭する兆候を其敵
に示さゞるべし。

問　或者は此等の行爲を屢し、多くの者も多分之を行爲しつゝあらんも、寧靜と慾
の鎭止と思念の平安を感せざるは何故なるか。

答　兄弟よ、靈底にかくるゝ慾は肉體上の勞苦のみにては矯正せられず。肉體上の
勞苦は常に五感によりて起さるゝものを思ふ意思を止めざるべし。此等の勞苦は
人を欲望より保護して、之に勝たしめず。魔鬼の誘惑よりも人を保護すれども、靈魂
に平安と寧靜とを得しめざるなり。げだし動作と勞苦とは默想と聯合一致し、外部

の感覺に擾亂燒みて若干時間容智の行爲に止まる時は、靈魂に無欲を與ふべく、地にある肢體を殺して、思念の安息を與へん。之に反して人は人々と交際し得ることを奪はれすして、其肢體をも自己をも意思の衰弱の爲に自己に集中するに至らざる間は已の慾を確知する能はざるべし。獸想は聖ワシリイの言ふ如く靈魂を淨潔にするの始なり。げだし外部の肢體に於て外部の擾亂と外部に於る引誘が燒む時は、智は外部の引誘と高超とより自己に歸りて自己に安んじ、心は覺醒して、內部心靈上の思を研究せん。ゆゑにもし人は善く此に堅立するならば、漸々心靈上の淨潔に進行するを得るに至らん。

問　靈魂は戶外に居る時に於ては潔めらるゝ能はざるか。

答　樹は每日灌がるゝならば、其根は何れの時か滅せん。それ淨潔は人々と交る自恣の交際を知らずして、此習慣を棄つるに外ならずんば、舊き習慣の記憶即惡癖の認識を實際自己を以て、或は他人を以て、五感に賴り之を己れに新にする者は、何の時か其靈魂の淸潔になるを望むべけん。其靈魂は何れの時に之より潔まるを得るか、或は彼は何れの時外部の抵抗より免れて己を察するを得るか。心が日々汚さるゝならば、人は汚穢より潔めらるゝ能はざるか。

問　人は外部の勢力の運動に對抗する力あるなく、軍營の中にありて頻繁の戰報を聞くを日々待つゝあらば、心を潔むる能はざるにあらずや。然らば如何して人は其靈魂の爲に平和を宣言するを敢てすべきか。されどもし此より遠ざかるならば先づ第一に內部の怒濤を少しづゝ鎭靜するを得ん。川は上方を塞がれざる間は下方の水は涸れざらん。人は默想に入るときは靈魂は諸慾を辨別して其智慧を聰明に試みるを得ん。其時は內部の人も靈的行爲に覺醒せられて靈中に花咲く神秘なる智慧を日にます〳〵感知せん。

問　人は如何なる確實の指示又は近き徵候により、靈中に隱れたる果を自から見、るを始めたるを感知すべきか。

答　誰か強ふることなしに流れ出つる多涙の恩寵を惠與せらるゝ時感知せん、げだし智の爲に涙を置かるゝは、形體に屬するものと、靈神に屬するものと、慾に從ふ狀態と、淨潔との間に置かれたる或る界限の如し。人は此賜を受けざる間は、其行は猶外部の人に成るのみにて、內部の人に隱れたる者の勢力を人は未だ全く感せざるなり。げだし人が此世の形體に屬するものを棄つるを始め、此界限を跨えて、性中實に內部に屬する者のあるを認むる時は、速に此の涙の恩寵に達せん。而して此涙

は神秘なる生涯の第一の院に始まり、人をして神の愛の完全に上らしむべく〳〵して、人が漣々たる流涕により、食にも飲にも涙を交へて泣飲し始むるに至る迄は、いよ〳〵進歩する程益々〳〵此恩寵に富まさるゝなり。

これぞ智が此の世界より出でゝ、彼の靈的世界を感知したる確實の徴候なる。然れども人は智を以て此の世界に近づけば近づく程此涙は減少すべくして、智が此の世界に全く止まるときは此涙は全く奪はるゝなり。これぞ人が慾中に葬むられたる徴候なる。

涙の區別。

燒盡す涙あり、又肥太らす涙あり。ゆゑにすべて罪を悲むにより心の眞礎より出づる涙は、肉體を乾かして之を燒盡さんも、然れども涙を注ぐ時に當り、靈中に主たる所の其ものも之より害を感ずること稀なりとせず。人は先づ必ず涙の此階段に入らざるを得ざるべし、然れども人の爲に第一の階段より更に愈れる第二の階段に入るの門戸は、之を以て開かるべくして、これぞ人が憐を受くる喜樂の方面なる。こは最早善智によりて注がるゝ涙にして、此涙は肉體を飾りて之を肥太らすべく、強ひすして、自然に流れ出づるものにして、已にいひし如く、こは人體を肥太らすのみならず、之が爲に人の容儀も變せられん。げだし錄して言へり、心に喜樂あれば顏色よろこばし、心に憂苦あれば氣ふさぐ〔箴言十五の十三〕。

問　使徒が「ハリストス」と共に復活せしならば〔コロサイ三の一〕といへる靈魂の復活は如何なる意味を含むか。

答　使徒は、暗より光の照るを命せし神は我等の心を照せり〔コリンフ後四の六〕といひて、舊きより出づるを名づけて靈魂の復活といふべきを示せり、是即舊き人に屬するものは一もあらざる新らしき人の生出することなり、錄していふ如し、彼に「新しき心と新しき神とを與ふ」と〔イエゼキイリ三十六の二十六〕げだし其時ハリストスはハリストスを識る容智と默示の神を以て我等の中に像らるゝなり。

問　默想を勤むるの力は（簡短に言へば）如何なるか。

答　默想は外部の感覺を減殺して內部の活動を喚起す。然れども外部に屬するものを勤むるは、之と反對なるものを生じ、外部の感覺を喚起して內部の活動を減殺せず。

問　何物か異象と默示の原因たるや、げたし或者は異象を有すれども、或者は多く勞するに拘はらず、異象は其丈に彼には感徹せざるなり。

第二十一　說教

答　これが原因は多くの之あり、其一は攝理的原因にして、一般の利益を以て目的とするなり、然れども他の原因は劣弱者の慰安と奬勵と訓示とを以て目的と爲す而して第一此のすべては人類に對する神の憐により備へらるゝものなれど、多くは左の三種の人類の爲に備へらるゝなり、或ひは純樸にして至て無惡なる人の爲、或は完全にして聖なる或者の爲或は燃ゆるが如くなる神の熱心を有する者の爲に備へらるゝものにして、彼等は世をすてゝ之より全く脫し、人々と共に社會に住するより遠ざかり、一切をすてゝ有形物體よりは何等の助も待たず、神の跡を慕ふて行きしによる。彼等は其狀態の孤獨なるにより、突然恐れを生ずべく、或は飢餓の爲、疾病の爲或は或る事情の爲又は患難の爲に死の危きは彼等を圍まん、よりて彼等は殆ど失望せんとす。ゆゑにかくの如き者等には慰籍の來るあれども、勞苦を以て彼等より大に超越する者等に慰籍のあらざるは、之が第一の原因は缺點の有ると無きとによる、即良心の缺點の有る無きによるなり。然ども第二の原因は必ずや次の如くなるべし、もし誰か人間の慰籍、或は何か有形物體よりする慰籍を有するならは、其者には一般の益の爲或は攝理に屬するものゝ外、かくの如きの慰籍はあらざるべし。我等は遁世者につきて言を爲す、ゆゑに神父等の一人を以て此事の證者とすべし、彼は慰籍を祈願したりしに、左の言をきけり、曰く「汝の爲には人間の慰籍と人々との會話にて足れり」と。

これと同樣他の或者も遁世者の身となりて、遁世的生活を送りしときは、恩寵の慰籍を以て日々自から樂めり、しかれども世と接近するや例の如く慰籍を尋ねたりしも得ざりければ之が理由を示されんことを神に願ふて言ひけるは「主よ恩寵の我より離れたるは主敬職の爲にあらざるか」と。然るに彼に告げていへり「否之が爲にあらず神は野に居る者等を虛るによりかくの如きの慰籍を彼等に賜ふなり」と。けだし人類中何人か有形的慰籍を有すると共に恩寵に屬するものをも受くることは上文にしるしゝ如く、かくの如き場合に於て一の攝理する者にのみ知らるゝ神秘なる攝理によるの外は能はざるなり。

問　異象と默示とは同じきか、或は然らざるか。

答　然らず。却て彼等には差異あり。彼と此とは共に默示と名づけらるゝことも屢々之あり。けだし神秘なるものを異象により顯はさるゝにより、すべての異象は默示と名づけらるる然れども默示は異象と名づけられざるなり。默示といふ言は意識せらるべきものと智力を以て試さるべきもの、且は想像せらるべきものに往々

用ひらるゝなり。されど異象は種々の方法によりて之あるべし、例へばいにしへ舊約の人々にありし如く形像又は豫象に於てするあり、深睡に於てし、或は覺醒なる狀態に於てするあり、而して或時には全くの的確を以てすれども、或時にはたとへば幻影に於てする如く、多少明白を欠くことあり、ゆゑに覺醒なる狀態に於て見るか或は睡眠に於て見るか、異象を有する者自からも之を知らざることしばゝ之あり、或は救助の聲を聞くこともあるべく、時としては最顯然として面り相對して見且談じ且問ふて、問の爲に答を得ることもあるべし。聖なる能力は之に賦ふる者にあらはれて、其者に默示を與ふるなり。而してかくの如きの異象は、極めて荒涼寂寞たる原野の地の人類に遠ざかりて、人の之に必要を有することの免れざる處に於て之あり、何となれば其處よりは彼に他の助けも慰藉もあらざればなり。然れども智力を以て感知せらるべき默示は淨潔に由り易すく受けらるべくして、たゝ完全にして練達なる者に之あるなり。

問　誰か心の淨潔に達せしならば、其徵證は如何なるか、又其心の淨潔に達したるを人は何時認識するか。

答　誰か悉くの人を善視して、彼の爲に何人も不潔汚穢なる者と見へざる時は、實に彼は心にて淨潔なり。げだし善なる目は惡を見ず（アウワクム一の十三）といへる言の如くならずんば、如何して我等は赦れりとせよ（フィリッピ二の三）といへる使徒の言に的應せんや。

問　淨潔とは如何なるか、其界限は何處にありや。

答　淨潔とは世に人性を以て想出せられたる知識の悖理なる方法を忘るゝ是なり。然れども此等より免れて、其外に立たんとせば、視よ其界限は左の如くなるべし、即人が其性の元始の醇樸と元始の無邪氣とに達して、恰も小兒の如くになり、たゞ小兒の缺點のあらざること是なり。

問　此の階段に誰か昇ることを得るか。

答　然り。げだし視よ、或者等は此度に達せり、言へらく「予は食せしや、或は食せざりしや」と。又して門徒に左の如く問ふに至れり、殆ど小兒の如き無罪に至りぬ、げだし此世他の或神父も此の如きの醇樸に達して、にあるものをすべて全く忘れたり、ゆゑにもし門徒等が止めざりしならば、領聖に先だちても食せしならん、より て門徒等は彼を小兒の如く領聖にみちびくに至れり。しかれども彼は世の爲には小兒なりしも、神の爲に靈魂は完全なりき。

問　默想の庵に在りて、默想に專なる苦行者は、何を業とし、何を沈思するを要するか、其智を空想の爲に暇あらしめざらん爲に彼は不斷何を爲すべきか

答　人が庵中に在て死者の如くなるを得るときは、業務と沈思とのことを問はんや。勉焉として心の安定なる人の獨り自ら居る、あるや、如何に己を導くべきを問ふの要あらんや。修道士には庵中に在て哀泣するの外、他の如何なる業務ありや、彼には哀泣より他の思想に轉ずる遑ありや、且如何なる業務は此よりも更に愈れるか。修道士の寓居と其獨棲とは、人間の喜より遠ざかる墓に居るに譬ふべくして、其勤めは即哀泣なるを彼に敎ふるなり。而して其名の意義も彼を同事に喚起して、同く之を信せしむるなり、何となれば彼は悲嘆する者と名づけらる、即心に悲哀を滿たさるゝ者と名づけらるればなり。ずべての聖人は哀泣に於て此生命より移れり。それ諸聖人さへ哀泣し、此生命より移るに至る迄、其目は常に涙に滿たされしならば、誰か哀泣せざるべけんや。修道士の慰安は、其哀泣によりて生ず。夫れ完全なる者又は凱旋したる者さへ此世に於て泣きしならば、猶に滿たさるゝ者は、如何ぞ泣き罷むに忍ぶべけんや。其目前に橫たはる死者ありて彼は自から罪の爲に殺されしものなるを目擊する者に、涙を益用すべきを敎ふるの要ありや。汝の爲に全世界より

も貴き汝の靈魂が罪に殺されて、汝の目前に橫たはらば、汝に哀泣を催さしめざらんや。故にもし默想を始め、忍耐を以て之に專ならば、哀泣にも專らなるを能くすべきは無論なり。ゆゑに我等に哀泣を賜はらんが爲に其心中に於て屢主に祈らんげだし他の賜よりも最善にして最愈れる此恩寵を求め得ば、其助により淨潔をも得ん。然してもし此を得ば我等が此生命より出づる迄は最早淨潔を我等より奪はれざるべし。

ゆゑに心の淸き者は福なり、何となれば彼等は此の涙の甘きを樂まざるの時あるなく、之によりて彼等は常に主を見ればなり。彼等の目に涙ある間は、彼等は其祈禱の高きを以て神の默示を見るを賜はるべくして、涙なき祈禱は彼等に之あらざるなり。「泣く者は福なり、彼等は慰められんとすればなり」（マトフェイ五の十）一と主の述べられし言は亦此意味を含有す。げだし泣くによりて人は心靈の淸きに達せん。ゆゑに主は「彼等は慰められんとすればなり」と言ひて、其慰の如何なるを說明せざりき。げだし修道士が涙の助により、慾の範圍を踰えて、心の淸潔の平原に入るときは、かくの如きの慰は彼を迎へん。ゆゑにもしこゝに慰を芻ぬる者等の中誰か此平原に達し、此處に於て得られざる慰を彼處に於て迎ふるならば、其時彼は泣くにより

第二十一　說教

て如何なる慰を自から期待したると、神は泣く者の清潔の爲にいかなる慰を與ふるとを終に了解せん、けだし不斷に泣く者は慾に援さるゝあたはざればなり。涙を流して哀泣するは、これぞ無慾なる者の賜なる。而して一時泣て嘆息する者の涙さへ彼を無慾にみちびくのみならず、智力をも慾の記憶より全く潔めて、彼を自由ならしむるならば、認識と共に日夜此行爲を練習する者のことは之を何とかいはんゆゑに獨り己の靈魂を此行爲に供へたる者の外は何人も哀泣によりて生ずる助を知らざるべし。凡の聖人は此門口に向ふ、何となれば慰藉の方面に入るが爲の門なり、而して至仁にして救濟的なる神の跡は此方面に於て默示により顯はさるゝなり。

問　或者は身體の薄弱の故に不斷に泣くことを得ず、智を保護するが爲に何を有すべきか、けだし智が何物にも占有せられざる時は、之に對して慾は起らざればなり。

答　それ何等の放心にも遠ざかる遁世者の身を以て、其心は生活上の爲に占有せられずんば、慾は心に蜂起して、苦行者を援すあたはざるべし、たゞ彼は怠慢にして其本分に不注意なることはあらん。然れどももし彼は神の書を研究練習するならば、其旨趣の討求に特に心を奪はれつゝ、慾の爲には少しも動搖せざるものとなりて存せん。けだし神の書に曉通することの益長じて其根を張るときは、空想は彼より逃るべくして、其智は聖書を讀み、或は讀みし所を考へんと欲するの望より離るゝ能はざるべし、されば深き原野の沈默の中に在て、聖書の爲に心を奪はるゝ彼は、其業を樂む最大なる悅樂に因り、現生には少しの注意も向けざるべし。此により自己と其性とを忘れて、恰も憤心したる人の如くなるべく、此世の事はすべて記憶せずして思想は神の大なることの爲に特に占領せられん、されば心を此に沈潛して言はん「光榮は彼の神性に歸す」と、又言はん「光榮は彼の奇跡に歸す、奇異なる哉、非常なる哉、彼のすべての行事よ、彼は予の貧寒を如何なる高處に昇せたるか、我等に何を學ぶを賜ひ、意思を如何に大膽ならしめて、我が靈を樂ましむるか」と。此奇跡に意思を向けて、常に之に驚かさるゝ彼は、不斷酩酊の中にあること、復活の後の生命をば、其旨趣の討求に特に心を奪はれつゝ、慾の爲には少しも動搖せざるものとなりて存せん。けだし神の書に曉通することの益長じて其根を張るときは、空想は彼より逃るべくして、其智は聖書を讀み、或は讀みし所を考へんと欲するの望より離るゝ能はざるべし、されば深き原野の沈默の中に在て、聖書の爲に心を奪はるゝ彼は、其業を樂む最大なる悅樂に因り、現生には少しの注意も向けざるべし。此により自己と其性とを忘れて、恰も憤心したる人の如くなるべく、此世の事はすべて記憶せずして思想は神の大なることの爲に特に占領せられん、されば心を此に沈潛して言はん「光榮は彼の神性に歸す」と、又言はん「光榮は彼の奇跡に歸す、奇異なる哉、非常なる哉、彼のすべての行事よ、彼は予の貧寒を如何なる高處に昇せたるか、我等に何を學ぶを賜ひ、意思を如何に大膽ならしめて、我が靈を樂ましむるか」と。此奇跡に意思を向けて、常に之に驚かさるゝ彼は、不斷酩酊の中にあること、復活の後の生命をば、既に味ふ如くなるべし、何となれば默想は此恩寵に最大に助くればなり。けだし彼の智力は默想に於て求め得たる平安と共に自から止まるを得べきを看破するのみならず、併て之を以て喚起せられて其生命の秩序と適應せし所のものを記憶せんがけだし來世の光榮と、彼の靈的生命と神とに止まる義人等の爲に其望の如く備

へらるゝ凡ての幸福と、其新なる興復とを心に想像しつゝ、此世にあるものは思に
も記憶にも存せざるべし。然れども此を以て醉はしめらるゝや、更に直覺を以て其
處より彼が自から生在する所の此世に轉回し來るときは、愕然として跡て言はん、
「嗚呼、深い哉、究む可らざる神の富と智慧と知識よ、聰明と容智と攝理よ、其定は如何
に測り難く、其道は如何に究め難きや」と〔ロマ十一の三十三〕けだし何れの時、彼はか
くの如き奇異なる別世界を備へて、之にすべての聰明なる實體を導き入れ、彼等を
終りなき生命に守り給ふか、何の故に彼は此の第一の世界を造り、之を擴大にして、
種類の群集と萬物の許多とを以て之を此の如く富まし、彼處に於て多くの慈の原
因と、慈を養ふものと、又之に抵抗するものとにも位置を與へたるか、而して何の故
に最初より我等を此世界に置き、世に長壽せんを愛するの情を我等に固めたりし
も俄に死を以て我等を之より奪ひ去り、少からざる時の間無感覺無動作を以て我
等を守り、我等の形像を滅し、我等を融解し、掛廻して、之を土と混じ、我等が組織を破
壞し腐敗滅盡して、人の性中一物も全く殘らざるに至るか、然れども崇拜せらるべ
き容智を以て定めたまひし時に至り、欲するあるや、たゞ彼にのみ知らるゝ他の形
像に我等を再興して、我等を他の狀態に導き入るゝは何故なるか、こは我等人々の

希望する所なるのみならず、此世界に必要を有せずして、其性の非常なるにより、僅
に完全を缺くところの最霊なる天使等も、我等諸族の塵より起きて、其敗壞の新に
せらるゝとき、我等が敗壞より起るを待つ、けだし我等の爲に彼等も入るを禁せら
れたれば、彼等も新世界の戸の一回開かるゝを待つなり、而して我等を苦しむる肉
體の重きは釋かれたるにより、此受造物〔天使等〕も我等と共に安んずるを得ること、
使徒のいふ如し、けだし此世の攝造はすべて全く破壞して、我等が性は元始の狀態
に回復するにより、「受造物自らも神の諸子の顯はるゝを俟つ、即敗壞の奴より釋か
れて神の諸子の光榮の自由に入らんこと是なり」〔ロマ八の十九、二十一〕
而して此より其智力を以て昇り、此の世界の合成に先だちて、如何なる受造物も、天
も地も、天使も、存在にみちびかれたる何等の物も未だあらざる時と、神が獨一の恩
惠により、俄に一切を無より有となして、すべての物が神の前に完全にあらはれた
る時に至らん。然るに彼は再び其智力を以て神の悉くの造成に下り、神より造を受
けたる物の奇々妙々と神の所爲の容智とに注意を向け、愕然として自から判斷し
て言はん「吁奇なる哉彼の攝理と照管は何等の概念よりも高きこと幾ばくなる、此
の受造物即此の種々様々なる物體の數へ盡されざるの多きを如何して彼は無よ

り有となしたるか。然るに又此の奇異なる好順序と、天地萬有の此美麗と、受造物と、時と年の整然たる此運行と、晝夜の此配合と、年と共に合する空氣の變換と、地より發萌する殊異多樣なる此花卉と、此の都府の美麗なる築造と、其中に最壯嚴に働られたる宮殿と、此の人類の敏捷なる活動と、彼等が世界に入りしより出づるに至る迄、勞苦を任はしめられたる此存在とを滅して、此の受造物を破壞するは何故なるか。而して此の奇異なる秩序は俄に熄んで、他の世界至り、此の最初の造物に於る記憶は何人の心にも全く浮び來らずして、他の之と異なる種類と他の所思と他の配慮とを生ずるは何故なるか。之と同く人性は此の世界の事と其生活の最初の狀態の事とは全く想起せざらん、何となれば人智は彼の狀況を直覺するに密着して、人々の智は血肉の戰に再び歸るの遑あらざればなり。げだし此世の破壞と共に來世は直に始まればなり。されば悉くの人は其時左の如く言はん嗚呼母よ、生み且養ひて智慧附けたる其子の爲に忘れられたる者よ、彼等は瞬間に他の懷に集められて、孕まざる者と決して生まざる者の眞の子となれり。孕ます、生まざる者よ、謳歌せよ」

イサイヤ五十四の一地が爾の爲に生みたる子の爲にと言はんとす。

其時彼は恰も大なる熱中にあるもの、如く、沈思して、左の如く言はん「此世は猶幾時存するか、來世は何時始まるか此室に此の狀態を以て寢ねて肉體が塵と混せらるゝは、猶幾時あるか。彼の生命は如何なる狀態に復起して組織せらるゝか。彼は新なる造物に如何樣變化するか」と此等の事を沈思するや、彼は大悅、驗異、寂然、沈默に至らん、而して彼は此時に起つて膝を屈め、滂沱たる淚と共に獨一容智の神に感謝し、常に最容智なる作爲に於て頌美せらるゝ者に讃榮を獻げん。かくの如きことを曰はりし者は福なる哉、豈も夜も此の如きの勤行に專なる者は福なる哉、其生命の日子を擧げて此等の事を沈思する者は福なる哉。然るにもし人は其默想の始めに於て、心意の高超の故に、かくの如き直覺の力を感せずして、上文に述べたる如き神の奇跡の力に上進する能はずんば、煩悶を來すなかれ、默想的生活の安靜を棄つるなかれ。げだし農夫も種子を種くと共に、直に穗を見るべきには非ずして、種きし後も、憂愁と、勞苦と、肢體の衰弱と、同輩に遠ざかると、家人に分るゝ等の事あるべし。然れども此を忍耐するときは、當事者が樂み、且躍り、且喜んで欣々たる新なる時期の至るあらん。

然るに是は何の時なるか。彼が己の汗を以て獲たる餅を食ひ、沈默を以て其の冥想を守るを得るの時ならん。げだし沈默と、沈默を以て忍耐し得る此冥想とは、大に

て終なき愉快を心に喚起して、其智を言ふべからざる驚異にみちびかん。ゆゑに忍耐して此に止まる者は禍なり、何となれば此の神出なる泉は其目前に開けて彼は之を飲みて樂むべく、晝夜何れの時にも何れの刻にも常に之を飲むをやめずして全く暫時なる此生命の終と最後の際に至るべければなり。

問　此の行爲即默想の行爲のすべての勞に於て首要なるものは何なるかげだし此に到達したる人は最早其生涯に於て完全に達したるを知るを得ん。

答　人が連綿として斷えず祈禱に止まるを賜はるとき是なり。げだし此に達せしならば、人はすべての道德の高點に昇り最早聖神の住所となれるなり。之に反してもし誰か撫恤者の此恩寵を疑なく受けざりしならば、此の祈禱に止まることを自由に遂ぐる能はざるべし。何となればすでに言ひし如く、人類中何人にか神の住する時は、彼は祈禱を止めざるのみならず、神自らも常に祈禱すればなり〔ロマ八の二十六〕其時は人は睡眠の狀態に在るも、覺醒の狀態に在るも、祈禱は其心中に於て斷えざるべく食するか、飮むか、寢ぬるか、何を爲すか、且は深睡の中にありとも祈禱の馨香と其蒸燕の氣は其心中に昜ずく發出せん。其時は人より祈禱は離れざるべく、如何なる時も祈禱せざるなかるべく、たとひ外部は沈默すとも、之と同時に人は神の奉事を勉に行ふなり、げだしパリストスを懷抱する人士の一人は淸き者の沈默を名づけて祈禱といへり、何となれば彼等の思念は神聖なる活動にして、淸き心と智との活動は神秘なる者を神秘に讃頌する物靜なる聲なればなり。

問　靈的祈禱とは如何なるか、且如何樣に之を苦行者に賜はるか。

答　心靈上の活動は嚴重なる無玷と淨潔との爲に聖神の能に與るものとなるを得べし、而して之を賜はるものは數千人中一人ならん、何故なれば是は未來の狀況と其生涯の奧秘なればなり。性は擧げられて、此處にあるものには何等の感動もなく、記憶もなく、無動作なるものとなりて存せん。靈魂は祈禱を以て祈願せず然れども其感覺に於ては、人間の理解に超越して、たゞ聖神の力を以て了解し得らるべき彼の世の靈に屬する物を感知せん、是れ即聰明なる直覺なり、こは其始を祈禱より借るといへども祈禱の働にはあらず、又其穿鑿にもあらざるなり。げだしかくの如き人々の中或は之によりて最早淨潔の完全に達したる者ありき。而して我等上文に述べし如く、彼等が內部の活動は祈禱にあらざるの時あるなし。ゆゑに聖神の來り臨むときは斯の如き水等を常に祈禱に於て發見すべくして、此祈禱により彼等を靈的現象と名づけらるゝ直覺に昇せん、げだし彼等は長き祈禱の方法にも其起

立にも、又其勤行の順序にも必要を有せざるなり。彼等の爲には神を想起するを以て足るべくして、直に神を愛するの愛に捉へらるゝなり。さりながら祈禱を尊敬するを爲すや、祈禱に立つことをも彼等は全く等閑視せずして、連綿として已まざる祈禱の外に、指定せられたる時間には起立するなり。

けだし我等は聖なるアントニイが第九時の祈禱に立ちて、其智力の上昇を感じたりしを知る、又他の或神父は祈禱に立つや手を擧ぐると共に無限の悦に達して、之に止ること四日間なりき。其他多くの人々も、かくの如き祈禱の時に當り、神を念ふ強き記憶と、神に對する大なる愛とに捉へられて無限なる悦に達したりき。然れども人の之を賜はるは、罪に反對する主の誡命を守るにより、內部に於ても、外部に於ても罪を脫するの時にあるべし。もし誰か此誡命を愛して、秩序正しく之を益用するならば、其者の爲に人間許多の行爲より免れて自由を得るは緊要の事となるべし、是即言はゞ體を脫して體の外に居ることにして、是は性につきて言ふにあらず。要求につきていふなり。誰か立法者の模範にしたがひて生活し、其誡命に導かるゝならば其者は罪に止まること能はざるべし。ゆゑに主は福音經に於て誡命を守りし者を住所となさんことを其者と約束し給へり。

問　神の多くの果の完全は如何なるか。

答　人が神の完全なる愛を賜はる是なり。

問　之を得たるを人は何により確知するか。

答　人の智覺に神を念ふ記憶の起るあるや、其時人の心は直に神を愛するに喚起せられて、其目は豐に涙をそゝがん。げだし愛は愛せらるゝ者を想起するにより感涙を起すを例とす。然して神の愛に居る者は決して涙を奪はれざるべし。何となれば神の記憶を涵養する所のものに決して乏しきを告げざればなり。故に夢中にも神と談話す、けだし愛は通常かくのごときものを生じて、彼は此生活に於る人類の完全なればなり。

問　人が求め得たる多くの勞苦、衰弱、及び奮鬪の後にも、驕傲の念慮は人を攻擊するを憚らざらん、何となれば彼は人の德行の美を借りて己の食となし、人が任ふ所の勞の大なるを計算するによる、然らば人は如何にして其念慮に勝ち、之が爲に征服せられざる程の堅固を其心に求め得べきか。

答　誰か神より離れ落つること、枯葉の樹より落つる如くなるを認識する時は、己の靈魂の力を了解せん。即主が其助を止め、彼をして獨り魔鬼との戰に入らしめ、通常

奮闘者と關係して其戰に助くる如く彼と共にするを爲さゞると同時に、彼は自己の力を以て此德行を求め得たるや、其の悉くの戰を耐忍し得たるや否を認識する時は、彼の力は顯はれん、之を確言すれば打擊と彼の困苦とは明了にあらはれん。げだし諸聖人を保護して之を固むる神の照管は常に彼等と偕にするなり。もし苦行と、致命的の苦と、其他神の爲に遭遇し神の爲に大に忍耐する患難に居るならば、此照管を以て人類の種々なる階級に打勝たん。此事は明白顯然疑なきなり。げだし人々の肢體に不斷起りて、之に憂をかうむらしめ、之を打負すが爲に最も強き肉痒の力を性は如何して征服するを得るかゞそれ他の人々は勝利を願ひ、且之を愛すれども其有力なる抵抗に際しては勝を奏する能はずして、反つて肉體上の擦傷より日々に打擊を受け、其靈魂の爲に困んで苦勞と悲哀と衰弱とに居れども、汝はかくの如き困苦なる肉體の引力を易く忍耐して、之が爲に大なる錯亂に至らざるを得るは何故なるか。されば他の場合には苦を感じ易く、荊棘の刺の爪を劃したる疵にさへ堪ふる能はざる肉體は、もし天然の力以外に其苦みを反拒する他の力の他所より來るあらずんば、鐵の斷劃に打勝ち、肢體の挫折と種々なる苦痛とを耐忍し、人性に常なる如く、痛苦の中に在て其差別をさへ感ずるあらずして、苦難の爲に勝たれざることを如何にして能するか。我等は神の照管の事に言及したるにより、奮闘を以て人に超絶する一報道の靈に益あるものを記憶の爲に引證するを憚らざるべし。

フェオドルと名づくる一少年あり、酷刑に處せられて、全身に苦みを受けたり、人あり問ふて「汝は苦痛を感じたるか」といひけるに、彼は答へて次の如くいへり、「最初は感せり、然れども後に至り、余は或る少年を認めたり、彼は我が奮闘の汗を拭ひ、我を堅めて、苦行の時我に爽快を得しめたり」といひき。呼神の惠は何ぞ大なるや、神の名の爲に奮闘する者に臨む神の恩寵は、彼をして神の爲に苦難を喜んで忍耐せしむるに幾許接近するか。

故に人よ汝に於る神の照管に感謝せざる者となるなかれ。畢竟汝は勝利者にはあらず、たゞ器械の如きのみにて、主は汝に於て勝ち、汝は勝利の名を無報にして受くることの顯然明白ならば、何れの時にも同樣の力を願ひ、勝ちて賞讃を受けて神を承認するを誰か汝に禁せんや。人よ汝は世の造成より以來幾多の苦行者が此恩寵に感謝せざる者となりて、生命の高きと其苦行の高きとより落ちたるを聞かざるか。人間に於る神の賜は本來數多にして、種々同じからざる程は、受くる所の賜にも同じからざるありて、之を受くる者の等級と適合するなり神の賜には縮少と卓越

こあり、其賜は皆高尙にして奇異なりと雖も、光榮と尊敬とに於ては一は他に優越し、一の等級は他の等級より高し。而して己を神に献げて道德上に生活することも亦同くハリストスの大なる賜の一なり。げだし多くの者は此恩寵により、人々に抽んじて神に献げられし者となり、神の賜に參與して之を受る者となり、選ばれて神に奉事し、聖務を行ふに相當する者となるを賜はりしを忘れ、其口を以て不斷神に感謝するに代へて、驕傲と高慢に離去りぬ、而して彼等は己を以て清き生活と靈的行爲とにより神に奉事を勤むる爲に聖務を行ふの恩寵を受けし者とは思はず、却て神に恩惠をあらはす者の如く思ふ、然らば神が人々の中より彼等を拔きて、神の奥義を識るにより其眞子となせるを彼等の當然に思慮するは何の時なるべきか。而してかく思慮するも彼等は其全心を震攝せざるべし、殆んや彼等の先にもかく思慮せし者等が突然尊位を奪はれたると、主が彼等を其有したる大なる光榮と尊敬とより瞬間に貶黜したるを見るに於てをや、而して彼等は不潔と放蕩と恥づべき行爲に離去りて禽獸の如くなりぬ。げだし彼等は己の力を識らざるのみならず、神の前に奉事を行ひ、其國に入るを得て天使の共住者となり、天使の如くなる生涯を以て神に接近するの恩寵を與へし者を不斷其記憶に存せざりしにより神は彼等を其勤より、黜けり、而して彼等獸想を棄てゝ其生活の有樣を變せしは是れ神は之を以て彼等が生涯に善き秩序を守り、自然と魔鬼と其他の反對の脅迫も彼等を懼かさざりしは、彼等の力に依るにはに非ずして、神の恩寵の力なるを彼等に證示するものにして、此事の至難なるにより、世は容るゝ能はず或は聞く能はざる所のものに彼等が久しく止まりて、之を守り、勝つ所とならざりしを證したるなり、故に彼等には或る力の伴ふありて、すべてに於て彼等を助け、彼等を保護するが爲に充分なりし、こゝは論を俟たざるなり。しかれども彼等は此力を忘れたるにより、使徒の言ふ所は彼等に應せり、曰く神的勤務の爲に塵を配合せし主宰たる神を其念に存するを願はざりしにより、彼等を戻れる心を懷くに任せり（ロマ一の二十八）されば其迷認の爲に彼等が汚辱を受けしは當然なりき。

問　人々と同住するを俄に全く辭して、善なる熱心の爲に人の居らざる恐るべき野に突然離れ去るを敢てする者は、之が爲に被覆又は其他の需要を有せざるに依り、飢えて死するの時あらざるか。

答　無言なる動物の爲にさへ之を造るに先だち、住所を備へて、其需要の爲に盛る者は其造成を輕んぜざるべし、特に神を畏れ、正直にして彼に從ひ、好奇の心を以て

第二十一　說教

せざる者を彼は輕んせざるなり。己の意志を神に全く犧牲にする者は、肉體の必用や、艱難不幸の事は最早慮らざるべく、隱れたる生涯に居り、卑しき生活を送らんことを願ふべく、患難を懼れずして、却て清き生涯の爲に全世界より遠ざかるを以て愉快甘美なる事と思ひ、丘陵山嶽の間に己を勞らして、無言なる動物の中に漂泊者の如くして居るべく、肉體を安んじて汚穢に充たさるゝ生活を送ることを肯せざるべし。而して己を死に付して、神に屬する清き行爲を奪はれざらんことを毎時毎刻悲んで祈禱する時は神より助をうけん。神に光榮と尊敬は歸す。彼は我等を清潔に守り聖神の恩寵の聖なるを以て我等を聖にして、彼の名を榮せしむべし、彼の聖なる名は清潔を以て世々に讃美せられん。「アミン。」

第二十二　說教

試惑を恐るゝ身體は罪の友となる

或る聖人は言へり、試惑を恐るゝ身體は、之を極度に至らしめて、其生命を奪はれんことを恐るゝが故に罪の友となると。故に聖神は彼に死すべきを奬勵す。げだし死せずんば罪に勝たざるべきを知ればなり。もし誰か主の住り給はんことを欲せば、主に事ふるに其身を強ひ、使徒が誓せる神の誡命の爲に勞して、其靈魂を使徒の錄したる肉慾の行より守るべし（ガラテヤ五の十九）罪に關係する身は肉慾の行に安んずるも神の神は罪の結果に安んじ給はざるなり、げだし身體が禁食と謹愼との爲に弱る時は靈魂は祈禱を以て强められ、身體が默想の苦阨に多く虐げられ、劍乏と缺乏とを忍耐して、其生命をも殆ど失はんとするときは、汝に歎願して左の如く言ふを常とす、曰く「相當に生存する自由を少しく予に與へよ、今や予は正しく行かん、何となれば不幸を以て試みられたればなり」と。然るに彼に同情を表し、彼を其阨より安んせしめて、多少の安息を彼に與ふるならば、彼は暫時は安んずといへども漸々嬾を呈して、汝に耳語し（彼の嬾は甚だ有力なり）汝を野より離れしめんが爲に、汝に告げて言はん、「世の近きに居るも好く生活するを得べし、何となれば多くの事に試みられたるによる、故に彼處に於ても今日導かるゝと同樣の規則を以て生活するを得ん。たゞ予を試みよ、もし予は汝の意に適するものとならざるときは汝は歸るを得ん。親よ野は我等より逃亡せざるなり」と。彼は大に歎願し、多く約束を與ふるも、彼を信ずるなかれ。彼は言ふ所を履行せざるなり。彼の願に應ずるとき

は汝を大なる墮落に投じ、起て出來る能はざるに至らん。

試惑により煩悶を生じて、之に滿たさるゝときは、自己に告げて言ふべし、汝は不潔と恥づべき生活とを再び渴望す」と。然るにもし肉體は汝に告げて「大なる罪は自から己を殺さん」と言はゝ、答て言ふべし、予は己を殺さん、何となれば不潔に生活する能はざればなり。こゝに予の死するは、予が靈魂の眞の死と神の爲に死することを再び見ざらん爲なり。予は寧ろ此處に放蕩の爲に死して、惡生命を以て世に活きざらん。予は己の罪の爲に此死を自由に撰擇せり。己を殺さん何となれば予は主に罪を犯したればなり。復び彼を怒らしめざらん。神より遠ざかる生命を予は如何にすべきか。此等の殘害を忍ばん、天の希望より離れざらん爲なり。もし世に惡く生活して神を怒らすならば、此世に於る予の生命を神は如何にすべきや」。

第二十三　說教

默想を愛する一兄弟に遺す書。

予は汝の默想を愛するを知り、又惡魔が汝の心の望を知りて善行に口を藉り、多くの事を以て汝を累し善の多くの種類を含有する道德を修る汝を挫折し、且之を妨碍するに至る迄は已まざるを知る、ゆゑに善なる兄弟よ、汝と密着の肢たる予は有益の言を以て汝の善なる望を助けんが爲に、賢明道德の人々より、神父等の書より、及び自己の經驗により自から得たる所のものを汝に書さんことを心懸けたり。げだし人は名譽も不名譽も輕んじて默想の爲に凌辱、罵詈、損害、又は打擊をさへ忍耐するなくんば、笑具となるなくんば見る所の人々をして痴人愚者と思はしむるなくんば、默想の善なる企圖に止る能はざるべし、何となれば人は或る緣由の爲に一度戸を開くならば、惡鬼は此等の緣由中或るものを多くの口實により現はすを能めずして、人々と限りなく會見するを頻繁ならしむればなり。故に兄弟よ、もし汝は古の人が放心も分裂も分離も自から容忍せずして贏ち得たる所の默想の道德を確として愛し、神父等に擬して彼等の行狀を自己に表はさんとするならば、かゝる場合に於ては賞讃すべき願の達し得らるべきを發見せん。彼等は完全なる默想を至愛して、近者の愛を失はざらんことをば慮らず、彼等を安んせんが爲に力を用ふることを勉めず、尊敬すべき人々と認めらるゝ者等との會見を避るを恥とはなさゞりき。

かくの如く彼等は進行したりしも、賢明にして達識なる人々は、彼等を非難して近者を輕んずる侮慢者とはせず、或は懶惰者又は理性を失ひし者どもなさずして却て人々と交際するよりも默想と遁世的生活を尊敬する者に對しては彼等を辨解して言へることと左の如し、曰く「己の庵中に於て默想の美を實地に學ぶ人の近者と會見するを避くるごとくなるに非ず、默想によりて拾集する果實の爲なり」。試に問はん、父アルセニイが何人にか遇ふあるや、逃奔して彼の爲に止らざりしは何の爲なるか」。又父フェオドルは何人をか迎へしならば、其迎ふるや劒を迎ふる如くなりき。彼は庵の外に在ても誰にも挨拶を爲さゞりき。然して聖アルセニイは問安の爲に來りし者にさへ問安をなさゞりき。げだし某神父あり、一日父アルセニイに遇はん爲に來りけるが、老人アルセニイは彼を己の從者と思ひ、戸を開けり、然るに來者の誰たるを認むるや、其面を俯しぬ、面して來者が祝福を受けて去らんことを證言し、次で彼に起たんことを久しく懇願するや、聖者は之を峻拒して言へり、「去らざる間は起たず」と。而して其者の去るに至る迄は起たざりき。そも福者の此く爲せるは、げだし一たび彼に手を與ふるならば、再び己れに歸り來らざるが爲なり。

言の緒きを見よ、然る時は汝はアルセニイを以て此神父或は他の人をば其徴なるが爲に輕んじたれど、別人には甚高位の爲に、偏頗をあらはして、彼と會話せしなるべしと言はざらん。之に反してアルセニイは小なる者をも、大なる者をも、すべての者を一樣に避けたり。彼の目前にはたゞ一あるのみなりき。即默想の爲には大なる人小なる人に論なくすべての人と共に交るを輕んじ默想と無言とを尊崇する爲には衆人より責を受るとも辭せざること是なり。大主教なる福フェオドルが聖者を見て尊敬を表せんとの意を有し、地方の裁判官と共にアルセニイを來訪せしことは我等の知る所なり。然るにアルセニイは彼等と共に坐するや、彼等がアルセニイの言を聞かんことを甚だ願ひしに拘はらず、少しの言を以ても彼等の高位を尊ばざりき。而して大主教が此を請ふや、善なる老人は暫時沈默して其後言ひけるは、もし予は汝等に言ふならば、予の言を守るか」と。彼等答ふ「諾」以て同意を表せり。老人は彼等に告げて言ふ「もしアルセニイ此處に在りと聞かば、其處に近づくなかれ」と。老人の奇なる品性を見るか。彼が人間の會話を輕んずるを見るか。視よ、これ默想の結果を認識したる人なり。福者は此の全世界の師にして敎會の首長たる者の來れることをば料らずして、左の如く思浮びぬ「予は世の爲に一次永遠に死せり、生者の爲

に死者は何の益やある」と、父マカリイも愛を滿てる詰責をもて言ひけるは、「如何して汝は予を避くるか」と然るに老人は奇なる賞讃すべき辯解をあらはし答て言へり「予が汝等を愛するは神の知る所なり、然れども予は神と人々と共に一所に居るあたはず」と。彼が此の奇異なる認識に導かれたるは、他の何人をも以てせしに非ずして神の聲を以てせり。げだし彼に告げて言へり、アルセニイよ、人々を避けよ、然らば救はれん」。

閑散にして談論を好む人たりとも、アルセニイの言を顚倒して、之を非難する程無恥なるものは一人もあらざるべし、又之に逆ひ之を以て、是は人間の想出にて、默想を益する爲に想出せるなり」と言ふ者なかるべし。反つて是は天上の敎なり。願くは我等はアルセニイに此事を告げられしを見て、是は彼をして遁れて世に遠ざからしめんが爲にて、兄弟よりも遁れしめんとの旨意には非ざるべしと思はざらん。益彼は世を棄てたる後行て修道院に居り、更に神に祈禱して問ひけるは、如何にせば道德を以て生活するを得べきか。主よ如何にせば救はるべきか、其途を我に示し給へ」と。彼は思へり、何か別事を聽くあらんと、されど第二次にも亦同く主宰の聲をきけり、曰く「遁れよ、アルセニイよ、默せよ、無言者となれ。兄弟と面會して共に談ずるは益多しと雖彼等より遁るゝ程汝に益あるに非ず」と。福なるアルセニイは神の默示に於て之を受け、まだ世に居りし時に遁るゝことを命せられ、其後兄弟と共に居りたる時にも同く此を告げらるゝや、其時彼は善なる生活を得んが爲に世の俗人より遁るゝのみにては不充分なり、悉くの人より一樣に遁れざるべからずと確信し且認識したりきげだし誰か神の聲に反抗して之に違言するを得るか。然るに神聖なるアントニイにも默示に於て次の如く告げられたりき、もし無言者とならんことを願はゞ、たゞワイワイダに行くのみならず、深く野の奥に至るべし」と。此によりて見れば、神は我等に悉くの人より遁るゝことを命じ、神を愛する者が默想に專なる時にさへかくの如く沈默を愛すべきを命ずるならば、誰か人々と共に談じ共に相近づくが爲に或る口實を設くるを得んや。遁世と戒愼とはアルセニイとアントニイにさへ、益ありしならば、況て劣弱者には殊に有益なるにあらずや。言を以ても、面會を以ても、助けんことを專世必要とする其者を神の貴びしは彼等がすべての兄弟社會に助くるが爲なるよりも、確言すれば全人間に助るが爲なるよりも默想の爲ならば默想は己を善く護る能はざる者の爲には殊に必要なるにあらずや。

予は他の或る聖人の事をも知る、其兄弟病重かりけるに彼は別庵に籠居して出で

ざりきぃだし聖者は兄弟の病中己の憐情を制し、來りて面會せざりしかば病者は生命の終りに臨み、使者を以て左の如く言はしむ、曰く「今に至る迄汝は予に來らざりき、然れども今は來るべし、予が世を去るに先だちて汝を見ん爲なり、或は夜間なりとも來れ、然らば予は汝を接吻して疑ねん」と。然れども福者は天性が我等相互の憐憫を常に促して意志の定限を踰えしめんとする此時にも肯んせずして言ひけるは、もし出れば我が心は神の前に潔からず、何となれば靈的兄弟を訪問するを疎にしてハリストスよりも天然を貴んずればなりと。兄弟死して彼は終に遇はざりき。

故に何人も意思の怠慢により、此事を能はざるが如く想ふなかれ、神の照管を斥けて其默想を破るなかれ、之を空しきに歸するなかれ。天然は如何に強くとも、聖者は其天然に勝ちしならば、ハリストスは愛さるゝならば、汝は此事に遭遇するとき、之を輕視する能はざる時に、ハリストスの子の輕視せらるゝと同時に默想を尊崇する他の如何なる緊要ありや。汝の心を盡し、汝の靈を盡し、汝の智を盡して、全世界よりも、天然よりも、天然に屬するすべてのものよりも「汝の主神を愛せよ」マトフェイ二十二の三十七と言へる彼の誡命は、默想を守る時に全く遂行せらるべくして、近者を愛することの誡命は自から其中に在り。福音の誡命に從ひ、近者に對する愛を其心に得んと欲するか。彼より遠ざかれ、其時は彼に對する愛の焰は汝に燃えて、彼に對面するときは、之を喜ぶこと聖なる天使を見るときの如くならん。又汝を愛する者等が汝の對面を願ふを汝は欲するか。たゞ一定の日に於て彼等と對面せよ。經驗は實に衆人の爲に師なり。康健なれ。我等の神に感謝と光榮は世々に歸す。アミン」。

第二十四　說教

同胞にして同教なる兄弟に遺す書

彼は世に居りて、イサアクに遇はんと欲し、其來らんことを書を以て勸め且懇願したるによる。

福なる者よ、我等は汝の思ふ如く有力なるにあらず、盖し予の薄弱と汝の爲に予が亡ぶることの容易なることを汝は知らざるならん、ゆゑに我等の爲にも慮るを要せずして、汝の爲にも願ふを要せざることを絶えず我に求むること。恰も習慣の故に自然に燃ゆるものゝ如し。兄弟よ、肉體と肉體の念とを安んずる此一事を我に求め

ずして、たゞ我が靈魂の救の爲に虛るべし。猶多時ならずして我等は此世を過ぎ去らん。予が汝に至る時は幾ばくの人に接すべきか、己の居所に歸る迄には人々の風俗又は其場所を幾ばく見るべきか。人々と面會するとき予の靈魂は思念の爲に意外の事を幾ばく受くべきか。之を以て惹起されたる人情の爲に多少懇んずる所はあり。其之が爲に擾亂を幾ばく忍耐すべきか。此事は汝も知らずんばあらず。世に屬するものを見ることは修道士に害あることは汝自から之を知る。見よ、長き間自から默想を守りし者が俄に又陷りて、慣れざる所のものを見且聞く時は、心に如何なる變化を生ずべきか、それ苦行に居て敵と奮闘しつゝある者の爲には、未だ其地位に近づかざる修道士に面會することさへ害あるならば、特に長き間の經驗を以て認識を得たる我等は如何なる井中に落ちんとするか、思ふべきなり。吁我等は我が敵の鋒より救はるゝを得ば幸なり。故に必要なくして予に此事を爲さしめんと之を予より促すなかれ。然のみならず、何を見聞するも、これにより我等が爲めに何の害もあらずと主張し、野に在ても世に在ても、わが思念は一樣なるを得んといふ者は、是れ我等を誘惑するなり。庵中に在りても、其外に在りても、我等が讒謗は擾されざるべし、之に惡しき變化を生せざるべし、人と物とに接するも之が爲に慾の騷擾を感せざるべしと、此の如く主張する者等は、是れ疵を受るも、之を知らざるなり。然れども我等は此の心靈上の健全に未だ達せずして、臭穢なる傷を己れに有す、もし一日も此事を慮らず卷かずして之を棄て、硬膏を貼り繃帶を施さずんば、蟲を湧出さん。

第二十五　說教

知識の三の方法の事、其作用と其意味の同じからざる事、心の信仰の事、信仰に隱るゝ奥密なる富の事、此世の知識は、其方法に於て、信仰の正直明白と幾ばく差異ある事。

行爲の徑と信仰の路とを經て、頻りに信仰に進歩したる靈魂は、もし知識の方法に再び轉するならば、信仰は直に跛行し始めん、而して相互の助を以て純潔の靈にあらはれ、正直明白にして穿鑿討究に涉るものには絕て入らざる精神の力は失はるべし。げだし一たび信仰を以て己を神に從はしめ、しばゝ經驗を以て神の助を試

みたる靈魂は最早自己のことには掛念せずして、却て驚愕と沈默の爲に縛らる、ゆゑに知識の方法に再び立戻りて之を行爲に使用する能はざるべし。然らずんば倦まずして窃に靈魂を監視し、之を盧りて、悉くの方法により不斷之を追尋する料の照管は、知識の方法の反對により森はれん、即靈魂は知識の力により自から充分に己を盧るを得べしと妄想して、無智になれるにより奪はれん。げだし信仰の光が照らし始むる者は、更に祈禱に於て神に願ひ、此を我等に與へ給へ」或は「此を我等より取り給へ」といふ如くなる無恥には最早至らざるべくして、彼等は自己のことは少しも盧らざるべし。何となれば眞實なる父の彼等を庇蔭する父たる照管を信の靈妙なる眼を以て時々目擊すればなり、げだし彼は無量に大なる愛を以ていかなる父の愛にも卓越し、我等の願ひ且盧り且想像するよりも更に大なる餘あるの量を以て我等に助くべき力を殊に有するによる。

知識は信仰に反對す。信仰はすべて之に腦するものに於て知識の法の破壞にして、且非靈的なる知識の破壞なり。知識の定限は搜索と考究となくんば何事をも爲すの權を有せずして、反つて彼は思ふ所のものゝ能ふべきや否を搜索するにあり。されど信仰は如何なるか。彼は不正にして近づく者には止まるを肯せざるなり。

知識は討求を待たず行爲の方法を待たずんば認識する能はざるべし。これ眞理に躊躇する徵候なり。之に反して信仰は工夫を凝らし方法を詮索するものにはすべて遠ざかる。思想の有樣の唯一、潔白、單純なるを要求するなり。視よ、彼等は如何に相反するか。信仰の家は幼兒の如くなる概念と單純なる心なり。げだし言ふあり、心の正直を以て神を讃美せりと、又言ふあり、一爾等もし轉じて幼兒の如くならずば天國に入るを得ず」マトフェイ十八の三。されど知識は心と其概念の正直明白の爲に網を立てゝ之と反對す。

知識は天然を其悉くの徑路に保護する天然の法則なり。之に反して信仰は天然より高く進行す。知識は天然の爲に破壞的なるものを自から容るゝを敢て試みずして此より遠ざかる。然れども信仰は容易く之を許容す。言へらく、爾蝮と毒蛇とを踐み、獅と大蛇とを蹈まん」聖詠九十の十三。知識は畏懼を伴ひ、信仰は希望を伴ふ。人は知識の方法に導かるゝ程畏懼の爲に縛られて、之より免るゝ自由を享る能はざるべし。之に反して信仰に從ふ者は直に自由自主なる者となりて、神の子の如くあらゆるものを權を以て自由に利用す。此信仰を愛する者はすべて造を受けたるもの

を天然に指麾すること神の如くならん、何となれば信仰には神の如く新なる造物を造成し得べき力を與へられたることを、錄していふ如くなるによる、言ふあり、欲す。るあるや萬物は汝の前に現はれん〔イオフ二十三の十三〕彼はすべてのものを存在せざるより生せしむること度々なり。之に反して知識は物質なくんば一物も生せしむる能はず。知識には天然を以て與へられざるものを生せしむる程の自負あらず。然り、如何して彼は之を生せしむべきか。水の流るゝ性は其潮に顯然たる足跡をうけざるべく、火に近づく者は己を焚かん、もし之を敢てする者あらば禍之に從はん、

知識は警戒して己を之より保護し、此界限を踰ゆることを如何しても肯せざるなり。しかるに信仰は自由の權を以てすべてに超越す、言へらく〔汝火の中を過るとき焚かるゝことなく、河も汝を溺らさず〕〔イサイヤ四十三の二〕信仰は凡ての受造物の前に此事を行ひしこと屢なり。之に反して知識は己を此事に試むべき場合の此處にあらはるゝありとも、彼は之に對して決行せざること疑なし、けだし多くの者は信仰により火焔に入り、火の焚き盡す力を止め、無害にして其中を經過し、海の急湍を陸の如く進行したりき。これ皆天然より高く、知識の方法とは反對にて、知識は其の悉くの方法と法とに於て空しきを示せり。知識は如何に天然の界限を守るを見るか。信仰は如何に天然より高く躍えて、彼處に其進行の路を啓くを見るか。知識の此方法は大略五千年の間世界を統御したりしも、人は幾何も其首を地より擧げて造物主の力を認識するあたはず。以て我等の信仰が照らし始めて、我等を暗より脫しオ智の無益なる高超に任ずる浮世の行爲と之に從ふ空しき從屬とを免れしむるに至れり。然るに今や我等は動搖せざるの海と乏きを告げざる寶とを發見したるも、更に又涓々たる泉に離れ去らんを願望す。たとひ大に富むといへども乏きを告げざる知識はあらじ。之に反して信仰の寶は天も地も容れざるなり。信の希望を以て以を固めらるゝ者は何物も決して失はざるべくして、有せざるものあるときは人は信仰を以てすべてを包有せん、錄して言ふ如し〔祈禱の時信じて求むる所は悉く之を得ん〕〔マトフェイ二十一の二十二〕又言ふ〔主は近し、何事をも盧るなかれ〕〔フィリッピ四の六〕

知識は之を求むる者を保護する爲に常に方法を尋ぬ。之に反して信仰は言ふ〔もし主は家を造らずば、造る者徒に勞す、もし主は城を守らずば、守る者徒に醒寤す〕〔聖詠百二十六の一〕信仰を以て祈禱する者は自護の方法を決して利用せず、之が助け

を求めざるなり。げだし知識は何の處にも畏懼を讃美すること容智者の言ひし如し、曰く「主を畏るゝ者の靈魂は福なり」〔シラフ三十四の十五〕されど信仰は如何なるか、錄して言ふあり「懼れて溺れんとす」と〔マトフェイ十四の三十〕而して又言ふあり「爾等は奴たる者の復び懼を懷く神をうけたるに非ずして、子たる神即神を信ずると望むとの自由によるものを受けたり」〔ロマ八の十五〕又言ふあり、彼等を懼るゝなかれ、彼等の面を避るなかれと。畏懼には常に疑念を伴ひ、然して疑念は審問を伴ひ、審問は用ふべき方法を伴ひ、用ふべき方法は知識を伴ふ。ゆゑに其考究と審問に於て畏懼と疑念は常に認得らるゝなり、何となれば知識は如何なる時にもすべてに於て成功するにあらざるこゝは是より先我等が證せし如くなればなり。げだし知識と智慧の方法が茲に幾ばくも助くることの全く能はざる困難なる事情の相集まりて衝突するとき、多くの危險を充ち滿てる機會の靈魂に遭遇するとは屢々之あればなり。しかれども他の一方には人間の知識の全力を極むるも拒ぐことの能はざる困難に於て、信仰は此等の困難の一にも毫も打負されさるなり。げだし人間の知識は見えざる造物と、有形なる力と、同く亦他の多くの者とも顯然たる殿を爲すが爲に幾ばく助くるに足るゝや否や。知識の力の弱きと信仰の力の強きとを見るか。

知識は其徒の爲にすべて天然に遠ざかる所のものに近づくことを禁ず。然れども信仰の力を此に於て察すべし、信仰は之を學ぶ者の前に何を提出するか。錄して言へり「我が名によりて魔鬼を逐出し、蛇を捉へ、毒を飲むとも彼等を害せざらん」と。い於て其を始むる以前に其終を審問し、然る後始めんことを提出す、これ其事の終りが人力を盡したる限りに於て困難と遭遇することのあらはるゝや、之が爲に徒に勞するを免れん爲なり、事の困難にして成就する能はざるものとならざらん爲なり。されど信仰は如何に言ふか。信ずる者には能くせざることなし」といふ〔マルコ九の二十三〕何となれば神の爲に能はざる所なければなり。吁言ふ可らざる何等の富なるか。信仰の波と信仰の力を以て大に注がるゝ奇異なる寶どに富む如何なる海なるか。信仰と共にする進行は如何なる善心と如何なる滿足と慰安とに充ち滿たさるゝか。其報は如何に易くして、其活動は幾何甘きか。

問　信仰の甘きを嘗むるを已に賜はりて、更に誠實なる知識に轉ずる者は其行爲を何人に比すべきか。

答　貴重なる眞珠を得て之を鎔製の小蟲に易へたる者に比せん。又自主自由を棄

てゝ畏懼と奴隷の狀態にみたさるゝ極貧の身分に歸る者に比せん。

知識は非難せらる可きに非ず然れども信仰は知識より上なり、もし非難せらるゝも知識其ものは非難せらるべきにあらで願くは之あらざらんことを。さりながら知識が天然に悖りて進行する種々の方法を如何に辨別すべきか如何して知識は魔鬼の列に近づくか（此事は後に至て明に辨せん。）此等の方法により知識の昇るべき階級は幾許あるか。各階級に如何なる差異あるか。知識は其各方法と共に如何なる概念を持するときは之を以て覺醒せらるゝか。此等の方法の中何れの方法に從ふ時は信仰と反對して天然より脫するか、而して之に如何なる差異あるか。其原始の目的に返り、其天然に達して善なる生涯に於て信仰と一なる階段に立つときは、如何なる階級にあるか、而して同一の級に於て差異は時として何處まで廣まるか、而して此級より更に高き級に如何して移るか、此の級或は原始の級の方法は如何なるか。而して知識が信仰に結合して之と一になり、火の如くなる概念を衣被して、神にて燃え、無欲の翼を求め得て、地に屬するものに勤むるより、他の方法を用ひて造成者の國に昇るは何の時なるか。さりながら其時に至る迄は信仰と其上昇と其活動とは知識より上なるを知るを以て我等に充分なり。

眞の知識は信仰を以て成全せられて、上方に昇り、何等の感觸よりも上なるものに接觸し、人間の知覺と知識とを以て捉へ得べからざる彼の光線を見るの力を受けん。知識は階段なり、之により人は信仰の高きに登るべくして、既に之に達するときは、最早復た之を利用せざるべし。げだし現時は言ふべし、我等知ること全からず、全き者の來るとき全からざる者は息まん」と（コリンフ前十三の九）今や信仰は最早完全の現實を我等の目前にあらはすものゝ如し、ゆゑに彼の人智の及ばざるものは我等が信仰を以て學ぶべくして、知識の審問と其力とを以てせざるなり。

視よ眞實の行爲は左の如し、禁食なり、矜恤なり、成聖なり、及び其外凡て身體の助により行はるゝものなり、近者に對する愛なり、心の謙遜なり、過を赦すなり、善行の爲の慮なり、聖書に隱るゝ眞正なる奧義の研究なり、最完全なる行爲と心中の慾の節度を守ることを以て智力を煉るなり。是れ皆知識に必要を有す、何となれば知識は之を保護して、此事に於るの秩序を敎ふればなり然るに是れ皆階段のみにして、之により靈魂は信仰の天の高きに登らん、之を名づけて道德とはいふなり。しかれども信仰の生活は道德より一層高くして、其働は動作にあるに非ず、完全なる平安と思

籍と心中に於るの談話とにして、此働は靈魂の概念に於て行はるゝなり。且此働は靈的生涯の全く奇異なる方法にして、靈的生命を感ずるなり、悦樂なり、靈魂の安息なり、願望なり、神の爲に喜ぶなり、及び其外凡て彼處の福樂の恩寵をうくるに當るべき靈魂に此生涯に於て與へらるゝものと、神聖なる書中信仰の指示す如く其賜に富める神を以て此處に行はるゝ所のものなり。

疑。誰か言はん、此の悉くの幸福と、是より先に教へたる道德の行爲と、惡に遠ざかると、心中に起る幾微の念頭を辨別すると、思念と鬪ふと、刺激する慾念に抵抗すると、すべて其外之なくんば信仰其ものが靈的活動に於て其力をあらはすことの能はざるものとは是れ皆知識を以て成就せらるゝならば、何故知識は信仰に反對なるものとしてあらはるゝか。

解。答ふ、思想の方法は三あり、之によりて知識は或は上るべく、或は下るべし、而して知識のみちびかるゝ方法にも、知識其ものにも、變化のあるありて、之により知識は或は害すべく、或は助くべし。三の方法とは何ぞ體と靈と神となり。知識は其性質に於ては一なれども、思想に屬するものゝ此範圍に關して は精微になりて、其方法と其明悟の働とを變ずるなり。終りに此の働の順序の如何なると其原因の如何なるとに注意せよ、之によりて知識は或は害すべく、或は助くべし。知識は靈智ある造物の性に最初之を造るときに與へられたる神の賜なれば、天性單純にして分れざるものなることは、たとへば太陽の光の如し、然れども其働に準じて變化と分割とを受くるなり。

第二十六　說教

知識の第一階級。

知識は肉體の望に從ふ時は左の方法を引誘して之と一にならん、宮なり、虛榮なり、修飾なり、身の安佚なり、此世に處するに便利にして、發明と藝術と學問とに新規を出す言の智慧を勉むると、其他すべて此の有形世界に於て身を飾る所のもの是なり。此等の特別なる方法に依れば、我等が既に言ひ且定めたる如く、知識は信仰に反對するものとならん。彼は裸體なる知識と名づけらるべし、何となればすべて神聖なる處を排除し、肉體の優勝の故に無智陋劣を心中に入れて、すべて虛る所のものは全くたゞ此世の爲なればなり。視よ、此知識の自己に對する意見は左の如し、言へ

らく知識は奥密に人を統治する思想の力にして、人々を監視し、全く人の爲に虛る神聖の後見たることは何の疑の之あらんと。ゆゑに彼は世界の統治を神の照管に歸せずして、すべて人に於る善なるものと、人の爲に有害なるものより人を救ふと、陰にも陽にも我等の性に隨伴する困難なるもの、及び多くの反對なるものより人を警戒する天然の預防とを以て人自己の勉勵と自己の方法の結果なる如く思ふなり。知識を弄ぶ者の自己に對する意見はかくの如し、彼は其經書の如く萬事成るべしと妄想す、此點に於ては彼は此の有形世界を治むるの掌理無しと主張する者等と一に歸す。さりながら彼は身體の爲に不斷慮るなく、懼るゝなくして居るあたはず、故に小膽悲哀絶望魔鬼の爲の恐れ、人々の爲の恐れ、賊の風說、死の傳聞、疾病に於る掛念必要なるものに缺乏するの心配、死の恐れ、災難及び惡獸の恐れ、及び其外すべて此に類するものと、時々刻々豈も夜も動亂して航海者に波を傾注する海に似たるものとは彼を主宰するなり。何となれば此知識は神を信ずる働きにより自己に對する處を神に負はしむる能はざるによる。ゆゑにすべて彼れ自己に關係するものに於ては其方法を考へ、工夫を凝すが爲に占領せらるゝなり。されば其發明の方法が一の或る場合に於て不成效となり了れども、奥密なる照管をも窺はざるにより、其時彼は之を妨げて之に反對する人々と爭はん。

愛を剿絶する善惡認識の樹は此知識に植附らるゝなり。ゆゑに彼は他の人々の小なる錯誤と其過失と其弱點とを摘し、人の師となると、言を以て逆ふと、狡猾なる發明と詭計とを用ふるを人に勸め、人の爲に凌辱的なる他の方法にも助を假らんとす。彼には高慢と驕傲とあり、何となればすべて善なる行爲を自己に奪ふて神に歸せざればなり。しかれども信仰は其行爲を以て恩寵に歸す、ゆゑに自負することあたはず、錄して言ふ如し、曰く「我を堅むるハリストスに由りて能せざる所なし」と（フヒッピ四の十三）、又言ふ、「我に非ず乃我と偕にする神の恩寵なり」と（コリンフ前十五の十）、然るに頑なる使徒が「知識は誇を致す」（コリンフ前八の一）と言ひしは、是れ神を信ずると神を望むとを以て容解せられざる如上の知識につきて言ふものにして、眞實の知識を言ふにあらず。願くは之あらざらんことを。

ワイドイサイヤベトル及び其他の諸聖人を完全にしたる如くなるべし、彼等は人性の尺度にしたがひて此の完全なる知識を賜はりぬ。此等諸聖人の知識は常に非常なる直覺と神聖なる默示と靈界の高尚なる直觀と言ひ得ざる奥義との爲に呑ま

る、ゆゑに其靈魂は彼等の眼中に塵芥視せらるゝなり。されど他の知識は其に相應して自負す、何となれば暗中を往來し、其有する所のものを地上にあるものと比して、之に價を附し、更に極めて美なるものゝあるを知らざるによる。人皆高慢に引入らる、何となれば彼等は地上にありて、其生涯を肉體を以て秤り自己の行動に依賴して、人智の及ばざるものを心に考へざればなり。されば彼等は此の波間に漂ふ間は之が爲に歷せらるゝなり。しかれども聖人は光榮神聖なる道德に大に進歩して其活動は上方に向ひ、其思は發明の事と空しきものゝ慮りに離れ去らず、何となれば彼等は光の中を行きて、迷ふあたはざればなり。ゆゑにすべて神の子を認識する光に遠ざかりて、眞實より離れたる者は、此狹路に由りて來往す。これぞ知識の第一の級にして之により人は肉體の慾に從ふ。ゆゑに我等は此知識を非難し、之を以て信仰に反するものとするのみならず、道德の何等の働にも反するものと爲す。

第二十七　說教

知識の第二階級。

人が第一の級を棄てゝ眞實なる思慮と願望とに占有せらるゝときは、靈性の光により、身體の官能を以ても、靈魂の智的想像を以ても、豫め經盡せる左の卓越なる行爲を成さん即禁食なり、祈禱なり、矜恤なり、神聖なる書を讀むなり、道德上の生活なり、慈と悃ふなり云々。げだしすべて善なる行爲と靈中に發見せらるべきすべての美なる特質と、パリストスの庭に於て奉事に充てらるゝ神妙なる方法とは、此の知識の第二の級に於て其力の活動により、聖神は之を成就せしむるなり。此知識は我等を信仰にみちびく徑路を心に指示して、來世の爲に旅裝を支度せしめん。さりながら此に於ても知識は尙外形的なり、複雜的なり、彼はたゞ我等をみちびきて信仰に送致する途なるのみ。之に反して知識の更に高上なる階級のあるあり。もし誰かに發達し、默想を以て人々に遠ざかると、聖書を讀むと、祈禱と其他すべて第二の知識に關するものゝ成就せらるべき善なる行爲とに其活動の基を据ゑるときは、

ハリストスの助により、彼の階級にも昇せらるべき力を發見せん。すべての秀美なるものは此知識により行はるべくして、彼は亦行爲の知識とも名づけらる。何となれば身體の官能に賴り感覺的作用を以て其行爲を外部の階級に於て成せばなり。

「アミン」。

第二十八　說教

知識の第三階級、即完全の階級。

聽くべし、人はいよ〳〵鍊修し神に屬するものを受けて、其生涯を見えざる天軍と匹似し得ることを、けだし天軍の勤を行ふは感覺上に行はるゝ行爲を以てするには非ずして、智慮により成る所のものに於てするなり。知識が地に屬するものと地に屬する行爲の慮より高く昇せられ、內部に隱れて眼目の達せざるものを思念するを試み、慾の放蕩の起るべきものを或る方法により輕んじて、天に向ひ、信仰に從つて來世を慮り、我等に約束せられしものを願望して、不可思議なる奧義を尋ぬる時は信仰其ものは此知識を呑み、之を變化して新に之を生まん。因りて其知識は全く神となるを致す。

其時知識は思想に屬すると感覺に屬する本體の性を統治する神妙不可思議なる働を智力にて想像しつゝ、無形なる者の範圍に羽翼を以て高翔し、觸るゝ能はざる洋海の深きに關係するを得て、單純にして幾微なる智力を以て曉り得らるべき靈界の奧義を探らん。其時は內部の感覺は彼の不死不朽の生命に存する所の秩序にしたがひて靈的活動の爲に覺醒せられん。何となれば猶此處に於ても思想上の復活を奧密に受るものゝ如く、之を以て一般の復新の眞證となせばなり。

視よ、是れ知識の三の方法にして體と靈と神とに於る人の一切の經過は之と結合せらるゝを。人が惡を善より別ち始むる時より、此世を出づるに至る迄、人の靈魂の知識は此の三の程度に存す。既に述べたる如く、三の程度に於る一の知識はすべての不義不法の充滿をも、義の充滿をも、精神のすべての秘密の深きに關するものをも生ずべくして、或は善に昇るべく、或は惡に降るべく、或は善と惡との中間にある智力の悉くの活動は此中に在るなり。此等の程度を諸神父は名づけて自然的反自然的及び超自然的といふ。これ三の方針にして、聰明なる靈魂の記憶は之により或は昇るべく、或は降るべくして、既に述べたる如く、人は或は自然により義を爲すべ

く、或は其記憶を以て自然より高く取去られて、自然以外に神を直覺すべく、或は出でゝ豚を牧することゝ彼の魔鬼の群と共に働きて思慮分別の富を費したる者の如くならん。

三の知識に就て述べたる事の要略

知識の第一の級は神に進行する行爲の爲に靈魂を冷にせん。第二の級は信仰の階段にあるものに速に進行するが爲に靈魂を援めん。第三の級は活動を休止して、これ未來の狀態なり)末來の奥義を樂む智力の獨一練習なり。さりながら性は死者の如くなる狀態と、肉體の重きことより高擧せられて、他の乖離する知識より一層上なる彼の靈的知識を以て成全せらるゝことは未だ全く能はざる如く、此知識も缺點を有せざる完全の爲に勤むることも、世の爲に死することも、肉體の性を全く棄つることも能はざるなり。しかして人は肉體に居る間は此より彼に移る過渡の狀態にあり、或は人の靈魂は貧にして一物なき者の如く、性中に賦されたる道德の第二の級なる中間の級に於て勤を行ふを俄に始め、身體の性の助によりて爲すあるべく、或は子たるの神を受けし者の如く自由の奥義に止り、價値に循ひて與ふる者の靈的恩寵を樂みて、其行爲の讓遜に新に歸らん、これ身體の助によりて行はるゝ行爲なり。而して靈魂が此等を守るは、敢をして此惡世に於て得る所の餌を以ても、同く亦錯亂せる偏頗の思を以ても、靈魂を捕へしめざらん爲なり。蓋し人は肉體の戸の帷幕の中に閉籠めらるゝ間は、希望を有せざるなり。げだし不完全なる世に完全の自由あるなし。すべて知識の爲す所は活動と連絡として已まざる研修とにあれども、信仰の爲す所は動作を以て行はるゝには非ずして、純ら心靈上の活動によりし信仰は知識より精微なること、知識は感覺に屬する物より精微なる如し。此の行爲(即ち神に大悅すること)を得るを賜はりし諸聖人は信仰の力により彼の超自然なる行爲の樂みに居るなり。

知るべし信仰とは崇拜せらるべき神聖なる實在と、神體其者のすべてに超絶する特別なる性と、我等が性を受けて肉體となれる不可思議なる攝理(此信仰は極めて高しといへども)との差別に關して人の有するものを言ふにはあらず、却て恩寵の光により靈底に燭き、智力の證明により心を堅めて、何等の疑念にも遠ざかる希望の確實を以て動搖せざる信念を言ふなり。而して此信仰は耳に聞くことの增加により顯はるゝには非ずして、靈底に隱るゝ奥秘を見ると、肉體の子の目には隱るれ

第二十八　說教

ごも、ハリストスの法を學びて、ハリストスの晩餐により養はるゝ者には神を以て默示せらるゝ不可見神妙なる富を見る心神の目に顯はるゝなり。主の言ひし如し、もし我が誡を守らば、汝等に撫恤者、眞實の神を遣はさん、世は彼を接くる能はず。彼は凡の眞理を汝等に敎へん（イオアン十四の十七、二十六。彼は何れの時にも人に居る此聖なる力と、常に人を庇ふ此庇蔭と、すべての有害なるものを人より反拒して、靈魂にも身體にも之を近づかしめざる此思想の堅きことを人に指示す。清明にして靈妙なる智は、信仰の目を以て、此力を冥々に感知すべくして、此力は諸聖人に於ては殊に之を實驗上に傾けて認識するなり。

しかれごも此力は信念の強きを以て靈魂の諸部を燒くに火を以てする如くなる撫恤者自からなり。ゆゑに靈魂は神を望み、突進して如何なる危難をも輕んじ信仰の翼に乘り有形造物の上に高く擧げられて、常に酩酊する者の如くなり、智は神の照看に驚愕し、神の性を悟る純然なる直覺と冥々なる觀察とをなさん。げだし機密を成す者の來りて顯然と之を啓示するを賜ふに至る迄は、信仰は神と聖者との間に言ふ可らざる機密の執行を務むべく、ハリストスの恩寵により。我等も此處に於て之を賜はることを聽質の如くならん、しかれごも其眞正現實に至ては、彼處にハリストスを愛する者と共に天國に於て之を賜はらん（アミン）。

第二十九　說教

知識の他の方法と、其種々なる意味。

有形なるものを學び、或は有形なるものより傳へらるゝを五官にて受る知識は、自然的知識と名づけらるゝなり。然して思想する者の力を以て無形なる靈物の性を內部に於て學ぶ知識は靈的知識と名づけらるべし。何となれば精神を以て感受して、五官を以てせざればなり。而して此二種類は其の觀察の時に際し、外より靈中に來るなり。之に反して神聖なる力を以て、與へらるゝ知識は超自然的と名づけられ、殊に不可思議なるものにして、知識より一層上にあり。而して此知識の直覺を靈魂の受るは、初め二知識に於る如く靈魂の外にある物體より之を受るにあらず。却て此直覺は自己の內部に於て物體に拘はらず、忽然、迅速、且は望外に其內面より顯はれ來るなり。何となれば、ハリストスの言ふ如く「天國は汝等の裏にあり」（ルカ十七

の二十一前表を以て希望を養ふによるに非ず、顯然として來るにあらず、神秘なる智力に印せられたる形象の內部に於て思ふことなく自然に顯はるゝなり何となれば智は彼に於て物體を尋ぬるに非ざればなり。

第一の知識は不斷の研究と勉焉たる學習の結果なり、第二は良善なる生涯と合理的信仰の結果なり、然して第三は唯一の信仰に關を以て與へらる何となれば信仰を以て知識は空うせられ、活動は終を告げ、五感は贅物となりて不用に屬すればなり。ゆゑに此界限より降れば降る程知識は尊ばるべし。而して地と地に屬するものに達する時は、知識は悉く〳〵降ればいよ〳〵尊ばるべし。而して地と地に屬するものと肉體の權にあらざるものとを考ふる時は、すべては信仰により組織せらるべくして「世々に讃美せらるゝ」（ロマ九の五）主イエスはハリストスは此信仰を我等に賜ふべし。アミン。

第三十　說教

祈禱の狀態の事、及び其他讀者が小心に守るならば、不斷の記憶の爲に必要にして、多くの關係に有益なる者の事。

人が祈禱を以て請願する時に當り、神に依賴するに確立するは、信仰の恩寵の極めて好き部分なり。しかれども神を信ずる信仰の確立は健全なる表信其ものをいふには非ず、彼も信仰の母なりとはいへども反つて靈魂は行狀の力に依て神の眞理を見ん。聖なる書に於て行爲と合したる信仰を見る時は、其事の斷定を以て正しき表信のことの斷定とし視る勿れ、何となれば望む所に疑なきに至らしむる信仰は未洗者或は眞理の爲に心の腐敗したる者等に於ては決して達し得られざればなり。げだし心の高尙なる人々に於る信仰の確實無疑は其品性が主の誡命に循ひて行狀に注意するの尺度により顯はるゝなり。

連綿として已まざる聖書の研究は靈魂の爲に光なり、何となれば此研究は慾を豫

防するが爲及び神を愛して祈禱の淨潔に止まるが爲に有益なる記憶を靈魂に指示し、併て聖者の迹に從ひて進行する平安なる路を我等の前に畫すればなりさりながら祈禱の時或は毎時の誦經に於て強き感動と連綿として已まざる悔悟の心の之に從て起らざる時も、我等が聖詠を唱ふ祈禱の力に疑を容るゝなかれ。實驗によりて遁る所の言は其言ひし者は無學の人たりとも、緊要に受けよ、何となれば天國の寶は地上すべてのものより大なればなり、貧者の捉へたる小蟲を受けて之を身に加ふるを輕んずるなかれ、川は細流より濫りて其流は大なるものとなる。

記憶を守る事。

善行の記憶は、自から其事を思惟するときは、我等に德行を新にするならば、放蕩の事の記憶も、之を想起するときは、我等の意中に恥づべき欲望を新にすること顯然なり、何となれば彼と此との記憶は想起する其物の差別を我等の念頭に顯はして、之を盡示すること恰も指を以て我等に指示す如く、或は我等が思念の恥づべきを示し、或は我等が行狀の高きを示して、思念と感動の右なるものをも左なるものをも我等に堅むればなり。我等は之を以て智力を窃に占領せらるべくして、此の心中の占領に於て我等が生涯の運命は顯はるゝなり、因て我等は不斷自己を視察せざるを得ざるなり。終りにたい此の一の占領のみ之を有する者を害するにあらず、之を併て現象も又此現象を自から補充する記憶も同く之を害せん、且道德の一の行爲のみ此行爲を練習する者を強く助くるにあらずして、道德に奮闘したる人々を想起するにより形作らるゝ心中の想像も彼に助くるなり。

さて此事は清潔の階段に達したる多くの者が常に夜間の現象に於て或る聖人等に面會するを賜はるによりて明白なり、而して彼等が靈底に印せられたる此の諸聖人の現象は日中には智力の練習に於て彼等の爲に毎時喜びの泉となるなり。ゆゑに彼等は道德の行爲に熱心に若手すべくして、之を渴望する焰は餘り有る程彼等に降らん。或人言へり、聖なる天使は或る尊敬すべき善良なる聖人の形を自から裝ひ、夢中の幻像に於て、其思の高超する時此同形を靈魂にあらはして之を喜ばしめ、然して日中靈魂が其思念を省察するときは、之を富まして、喜びに堪へざらしめん。

常に彼等を感動せしむ。ゆゑに靈魂の活動は聖者を喜ぶが爲に緩和せらるべくして、之により彼等は其進行に於て大に發達するなり。戒の長く續く時に於てもかくの如くなるべし。其思を惡事に占領せしむる習慣を有する者には、魔鬼の助により、

此を同形に於て顯はさるゝなり。魔鬼等は同形を自から裝ふて、靈魂を恐怖せしむる幻像を彼にあらはすのみならず、更に塵間の記憶を以て之が紹介者たらしむるなり。或時は靈魂を恐怖せしむる此の態くべき現像を以て速に靈魂を衰弱に至らしむれども、又或時は默想と獨居の生涯の困苦と其他の事をも彼に顯はす。故に兄弟よ、我等も己の記憶に注意し之により我が靈魂の狀態を歸結することに關しては我等を占領する記憶に就て今後常に區別するを始めん。此等の記憶の中如何なるものは我等の注意を止むべきか、如何なるものは我等の思に近づくや直に之を我等より逐出すべきか、こは我等に於て慾に此食物を投する汚鬼の陰謀に出るものなるか、或は願望と刺激とより起るものなるか、或は聖なる天使等より來りて我等に喜びと認識の記號を與ふるものなるか、即聖なる天使等が我等に近づく時我等の意思を奮起せしむる記憶なるか、或は五感を以て預め受けたる印象により我等に起るものにして、之が爲に或る一事に引誘する思念を心中に喚起せらるゝか、此等を區別するを始めん然しして此區別を認めたる後我等は左の二の者に於て實驗を求め、即記憶を觀察すると、此記憶を以て想起せしめらるゝ事を行ふとに於て實驗を求め得て、一定の祈禱を彼此の後に隨はしむるを勉めん。

或る事の爲に喚起せらるゝ愛は油を吸ふ小燈の如し、其光は之が爲に保たる、或は雨の爲に澑る涓流の如し、之を成立つる雨水の滅すると共に其流は止まん。しかれども神を以て原因者とする愛は地より湧出づる泉と同じ、其流勢は決して絕えず。（けだし神は獨り愛の泉なればはり）此愛を養ふ者も衰へざるなり。

汝は思の旋轉なくして祈禱すべし。

奉事の時に當りて、聖歌を歌ふを樂み、汝の唱ふる神の言の旨趣に通せんと欲するか、歌ふことの多少は全く措て問ふなかれ、句法韻律を諳んせんと思ふなかれ、之を唱ふること祈禱を唱ふる如くして、通常の大聲を罷めよ。我が汝に言ふ所のものを會得し、神を以て導かるゝ或人の書に言ふ如く、談話的に之を述べよ。汝の靈魂が攝理に驚嘆して、其高上なる理會の爲に喚起せられ之によりて或は頌讃に、或は有益なる哀みに進めらるゝに至る迄は神の言を學ぶに汝の心意を潛むべし。而して祈禱の爲になるものは之を以て己の有とせよ汝の心意が此に確立する時は、擾亂は位地を讓りて遠ざからん。けだし僕の所爲には心に平安なく、子の自由には騷がしき擾亂あらず。擾亂は常に才智と明悟とより趣味を奪ひ、思想を竊み去ること、譬へ

ば水蛭が人の身體より血と共に生命を吸取る如し。擾亂はもし名づけ得べくんば魔鬼の車輪と言はんこと當然なり、何となれば「サタナ」は騎士の如く、お智を取し、慾の堆積を自から取集め、此等と共に不幸なる靈魂に入りて靈魂を煩悶の中に葬むるに常に慣るればなり。しかれども亦左の事をも思慮して理會せよ。汝の聖歌を歌ふに當り、他より言を借る者の如くなるなかれ、敎訓の事を增じて已まざる如く思はしめざらん爲なり、句中より汲む所の感嘆と喜悅とより全く遠ざからざらん爲なり、之に反して汝の願の言は感動と思慮ある理會と共に自己の中より發する如くすべく、其行爲を實に理會する者の如くすべし。

煩悶は何の爲に心に起り、心意の高超より生じ、心意の高超は何より生ずるを認むべし。煩悶は心意の高超より生じ、心意の高超は閑散と讀んで徒らに談ずることより生じ、或は又腹を過分に滿たしむるより生ずるなり。

惡念に逆はずして、神の前に己を捧ぐべき事。

もし誰か敵が種く所の思念に逆はず反つて神に祈禱して之と通話するを絶つならば、是れ其心意は恩寵により睿智を得たる自由ならしめたると、其眞實なる知識は彼を多くの事より超を切斷したるとの徵候となるべし、何となれば我等は凡て反對の思念に逆ふて之を絶滅する程の力を何れの時にも有するあるにあらずして、反つて長く醫すべからざるの疵を之より受ること度々なればなり。汝は最早六千年程經たる者を出でゝ咒咀せんとす。然れども此は汝の全く賢なると汝の全く善智なるとに拘はらず、彼等の爲に汝を擊敗し得る武器とならんとするなり。さりながらたとひ汝は彼等を征服すとも、其時にも思念の不潔は汝の心意を汚して厭ふべき臭氣は長き間汝の嗅官に殘らん。されば如上の方法を用ひて、此のすべてと其恐れとより免るべし。何となれば神の外に他の助なけれはなり。

淚の事。

祈禱の時に於る淚は靈魂が悔改を以て神の憐みを賜はりし徵候なり。即祈禱が受けられて、淚を以て淨潔の田中に入るを始めたる徵候なり。げだし人々に於て暫時なるものを思ふ思念を除去らず、此世の望を自から拋棄せず、世を輕んずる心は彼等に起らずして、彼等は出發の爲に善良なる旅裝を預備するを始めず、彼處に在る所のものを思ふ思念は心中に復活し始めずんば、目は淚を注ぐ能はざるべし、何となれば淚は純然無雜にして高く飛ばざる沈思と、頻りに起りて退かず止まる多くの

思念と、心中に行はるゝ或る機徴なるものに於ける記憶と、此記憶を以て心を衰ましむるの結果なればなり。此により涙は增加して、いよ〳〵大ならん。

操作と貪銀の事。

汝が默想を務むる時に於て、操作に轉ずる時は、父の誡命を以て己の貪心を包む被覆となすなかれ。憂鬱を避くる爲に汝には心を擾さゞる程の繁多ならざる用事あるべし。しかれども矜恤の爲に多く事を執らんを願ふとも、順序に於て祈禱は矜恤より上なるを知るべし。之に反して身體の要求の爲ならば、たとひ汝の爲に飽かざるありとも、汝の必要を充たす爲に神が汝に分與するものを以て汝の爲に足れりとせよ。げだし神は決して其當事者を棄てゝ暫時なるものに乏しきを忍ばしめざるなり。主は言へり「先づ神の國と其義とを求めよ、然らは此等の者は皆汝等に加はるなり。」(マトフェイ六の三十三)て汝等の願に先だゝん。

或る聖人は言へり、曰く「飢る者を飽かしむることと、外來者の爲に汝の精舍を旅館に充つることゝは、汝の生涯の順序にあらず。是れ俗人の行爲なり。此行爲は彼等には特に適當にして美なる行爲なり、然れども有形上の虚より自由を得て其心意を祈禱に於て守る所の遁世者には不適當なり。」

第三十一　說教

遁世的生活の事及び我等は畏れず驚かず神に依賴して心を堅むべく、確たる信仰を以て勇氣なるべし、何となれば神を看守者と爲し守護者と爲せばなり。

自由の國に於て輕き輓を有する遁世的生活に堪ふる者となるときは畏の念慮は汝をして通常の如く意思を種々樣々に變じて其意思の爲に占有せらるゝを免れしむるのみならず、却て汝の守護者の汝と共にするを殊に確信せしむべし、而して汝の智慧も全く確實に汝に保證して、汝もすべての獨一主宰の下に居ると、主宰が一指麾を以て萬物を動かし、且振はし、且鎭め、且建つるとを信せしむべし。すべての人の爲に虚り、すべての人を統治する者の許可なくんば、一僕も其の或る同僕に害を加ふる能はざるなり。ゆゑに汝は直に起ちて勇氣なるべし。自由は或者等に與へらるゝにあらず。げだし魔鬼も有害なる野獸も邪なる人々も、統治者の意の允許あるなく、一定の量を以て位地を與へられずんは

彼等は其害せんと欲する望を遂ぐる能はざるべし統治者は自由にも其自由を全く働かすを許さゞるなり、もし此事の無かりせば生物に一片の肉も存せざりしならん。主は魔鬼と人々の權が其受造物に近づき、彼に於て其望を遂ぐるを許可せざるなり。ゆゑに常に靈魂に告げて言ふべし「われを護る守護者は我にあり、上より命せらるゝにあらずんば、一の受造物も我が前に現はるゝ能はざるべし」と。而して彼等が汝の目前に現はれ汝をして其の威嚇の言を汝の耳に聞かしむるを敢てせざるを確信すべし。けだし天より至上者を以て許可せらるゝならば、言を待たずして事は其の望に隨はん。

之と同く自己に告げて言ふべし「もし惡者をして造物に占據せしむるは我が主宰の旨ならば、主の旨の成らずして存せんことを願はざるにより悲まずして之を受けん」と。かくの如くならば汝の誘惑に於ては主宰たる指麾の汝を統治し、且管理するを既に探知して、確に之を自覺したる者の如く、喜に滿たされん。終に主に依賴すると雖も其心を堅めよ。夜の震懼と晝の流矢とを懼るゝなかれ（聖詠九十の五）けだし錄して言へり、神を信ずる義人の信仰は野獸をも羊の如く溫柔ならしめんと。汝は言はん「予は主に依賴する程の義人に非ず」と。しかれども汝は實に義を行ふが爲に患難を滿たさるゝ野に來り、之によりて神の旨に順ふ者となれり。人間の勞苦はたゞ其哀みを神に愛の祭壇に献る時は神に望あり。もし然らずして此勞苦を任ずるならば徒らに勞するなり。すべて神を愛する者とは此思慮分別を示す。けだしハリストスイイススによりて生くるを喜ぶ者は神を敬畏するにより己の爲に患難を選び窘逐を忍ばん。ゆゑにハリストスは彼等を以て奥密に藏する寶の領有者と爲すなり。

感謝と勇氣とを以て誘惑を忍耐する者に與へらるゝ利益。

咸る聖人の言へるあり曰く「道世者たる一の貴き老人あり、一日彼を訪ひけるが、予は誘惑の爲に自から哀めりき。彼は病に寢たり、余は彼に問安し、其側に在りて、左の如く彼に告げたり、父よ、我が爲に祈禱し給へ、何となれば魔鬼の誘惑は我を甚だ哀ましむればなり云々、其時彼は目を開き、我を熟視して言ひけるは、子よ汝は幼稚なり神は汝に誘惑を遣すを止めざらんと。予答ふ諾、予は甚だ幼稚にして力の强き人の誘惑を忍受す。彼續て言ふ神は汝を最早智ならしめんを欲す。予反論して言ふ、如何ぞ我を智ならしめん、予は日々に死を甞む。彼答て言ふ、神は汝を愛す、默せよ、神は汝に其恩寵を與へんと。其後之に加へて言ひけるは、知るべし子よ、予は魔鬼と三十

年の間戰ひたりしが、二十年を過る間は己の爲に絕て助を見ざりき。而して後の十年の中第五年も將に終らんとする時始めて慰安を見たり。然るに時を經るに隨ひ、慰安は增々加はり、第七年を過ぎて、第八年の將に至らんとするや、慰安は更に大なる量に達せり。三十年の間の進行に於て最早其年も終に近づかんとするや慰安は如何に大になりしか、其量を知るべからざるに至りきと。彼は更に之に加へて言へり神の奉事を行ふが爲に起たんと欲するや予は尙一の讃榮「カフィズマ」の三分の一を成すを得たりき、されども其餘に至ては如何なるか三日立つも懶惰して神と共に居り、少しも勞を感せずと。視よ多く勞すると、長き間の行爲は、如何に飽く能はざる慰安を生ずるを。

舌を守るは心を嚴起して神に向はしむるのみならず、節制にも助く。

一週間に二度食事をなせる一の老人ありけるが我等に告ぐること左の如し「予は或人と暫く談話するや其日に於ては予が爲に禁食の規則を通常の如く守る能はざるのみならず禁食を解くことをも餘儀なくせらるる」と。それ舌を守るは心を嚴起して神に向はしむるのみならず、身體の助により行はるゝ顯然たる行爲にも、之を

成すが爲に大なる力を窃に得しめ、之と同く奥密なる活動にも光を受けしむることと諸神父の言ひし如くなるを我等は了解せり。何となれば若し誰か知識を以て沈默を監守するならば、口の守りは良心を嚴起して神に向はしむるによる。此聖者は夜を不眠に送る大なる習慣を有しぬ。げだし言へり「朝に至る迄立つ其夜に於て余は聖詠を歌ふと共に微睡みけるが、眠の覺めし後其日に於ては、恰も此世に屬せざる人の如く、地上何等の念慮も予の心に生せず、又一定の規則にも要あらずして、是日は終日慘憺の中にありき。かくて是より先何も食はずして四日を過ぎし後、予は一日食をなさんを欲せり。予は晩の奉事の後に食せんと欲し、庵の戸の前に新藺に立ちけるが、其時日は猶高かりき。既にして奉事を始め、唯第一讃榮の間に於ては自覺と共に行ひしが、其後予は何處に在るをも知らずして、之に止まり、翌日太陽の更に昇りて予が面を煖むるに至る迄は依然として此狀態にありき。而して太陽が强く予の安を破り、予の面を燒き始むるや、其時予の心は我に歸りて、こゝに予は最早翌日になれるを識り、神の恩寵の人に注ぐこと幾ばく大なると神は其跡に從ふ者にいかなる大事を賜ふことを熟思して、神に感謝し始めたりき。此後光榮と美麗とは獨り彼に世々に歸することは當然なり「アミン」。

第三十二　說教

心中内部の奥密なる儆醒は如何して守らるゝか、嗜眠と冷淡は何處より心中に來りて、聖なる熱愛を靈底に消し、靈界天上の事に熱心する精神を奪ふて、神に向ふを減殺するか。

反對は善なる願望を有する者に之を實行するを妨ぐる能はず、たゞ惡者は善なるものを願ふ者の缺點を搜して惡しき口實を設くるのみならん。これ左の理由によるずべて善なる願望の意思には其活動の始に當り、或る熱心の之に伴ふありて、其熱切なること熱炭の如し、ゆゑに其の熱心は居常此意思を保護して、いかなる反對妨碍及び阻滯の近づくをも許さゞるなり、何となれば此熱心は種々の困難なる事情の傾注するに當り、靈魂を衰弱或は畏怖より保護する大なる堅固と、言ふ可らざる力とを受ればなり。それ第一の意思其ものは靈魂の性に天然に植付けられたる聖なる願望の力なる如く、此の熱心も心中刺戟の力を以て感動せらるゝ意思にして、天然の界限を守る爲にも心中に存する天然の願望を實行して己が自由に對する槪念を顯はす爲にも神より我等に與へられて、我等を益するものなり。是れ即道德なり、之なくんば善なるものは生せざるべくして、之を名づけて熱心とはいふなら、何となれば彼は始終人を活動振起せしめ、斯熱堅固ならしめて、患難に於ても、其過ふ所の恐るべき誘惑に於ても肉體を輕んじ、其生命を不斷死に付して、靈魂が强く願望する所の行爲を遂成すが爲に出でゝ背棄者の勢力を迎へしむればなり。

ゆゑにパリストスを衣たる或者は此熱心を自語にて名づけて神の法の犬といへり、即道德の犬又は番人といへり、けだし道德は神の法と名づけらるゝなり。此の熱心の力は家を守るが爲に二つの方法を以て堅固にせらるべく、覺醒せらるべく、又鼓舞せらるべくして、之と同く二の方法を以て衰弱と惰眠と怠慢とにみちびかるゝなり。即覺醒と鼓舞とは人をして其得たる所或は得んと欲する所の善の爲に斯み去られんを恐れしめ、或は何等の機會により、又は終局に至りて滅されんを恐れしむる或る畏懼の念の人に生ずる時に起るものにして、此は神の照管により人に喚起せらるゝなり、知るべしすべて堪能なる道德の當事者に於る此畏懼の念は靈魂を覺醒し且奮熱せしめて嗜眠に陷らざらしめんために心中に存在するものな

るを。

しかれども此畏懼の念の性中に喚起せらるゝ時は、我等が犬と名づけたる熱心は、猛烈なる火爐の如く、日夜熾に燃えて、性を覺醒せん。されば人はヘルワイムの如く覺醒して、窃み去らんとするものに時々刻々注意するが故に、前述或者の言へる如く、もし鳥が其傍を過ぐるあれば最敏捷と得も言はれざる性急とを以て動きて吠えん。然るに此畏懼の念が身體の爲に起る時は、サタナ的畏懼とならん、何となれば人は神の照管に對する信念に動搖を來し、神が時々刻々監視して道德の爲に苦闘する者の爲に照慮し給ふを忘るればなり。此事を聖神は預言者の口を以て左の如くいへり。曰く「主の目は義人を顧みる云々」〔聖詠三十三の十六〕又いふ「主の臭氣は彼を畏るゝ者に屬す」〔同上二十四の十四〕又主を畏るゝ者に主は面り自ら告げていへり曰く「惡は汝に臨まず疫癘は爾の住所に近づかざらん」〔聖詠九十の十〕。

さりながら道德が遭遇するもの或は道德に伴ふ所のものに因り、靈魂の爲に畏懼の念の生ずる、時即ち窃み去られざらん爲及び何の理由によりてか毀損をうけざらん爲に畏懼の念の生ずる時は、此念は神聖なり、其慮は善良にして憂愁と疲勞とは神の照管により生ずるなり。而して又他の方法あり、即道德の願望が靈中に大に成長するとき、犬の勢力と奮起の顯はるゝもの是なり、げだし願望が靈中に成長すれば成長する程此犬も、即道德に對する熱心も奮起せらるればなり。然るに之を冷却ならしむる第一の緣由は、此願望が靈中に減少し、且は灰滅するの時なるべく、第二の緣由は、信任と大膽の或る念慮が靈魂に入りて之に占據するの時なるべし、而して人は自負して何等の力よりも害をうくるを恐るゝの故無しと思ふて、其思を把持せんとす、故に熱心の武器を自から排斥して番人なき家の如くなり、犬は長眠して永く看守を棄てん。

心中の家は此念慮の爲に窃み去らるゝこと甚だ多し而してこは彼の聖なる認識を以て輝ける淨潔が靈中に暗くなる時に之あるべし。何によりて彼は暗くなるか、げだし最機微なる驕傲の或る念頭が靈中に入りて、彼處に巢を作るによるべく、或は人は暫時なるものを慮る憂慮に沈み、又は人の爲に誘惑的なる世の交際に屢々耽るによるべし。或はこは一切の惡の腹なる此主婦の腹より生出づべし。苦行者は世と交際するならば、其都度靈魂は直に衰弱すべく、多くの人々と會合する時も亦同く然らん、彼等は浮誇によりて彼の靈魂を必ず挫折すべし。之を畧言すれば敗走する苦行者の智は、もし世と交際するならば、之を譬ふるに彼の船長が安然と海に

航して、俄に海底暗礁の中心に觸れ破壞の難を被むると同じかるべし。我等が神に光榮、權柄、尊敬及び美麗は世々に歸す「アミン」。

第三十三　說教

心中に續生し、祈禱を以て試みらるゝ、多くの變化の事。

善なる願望を選取するは願ふ者の事なり然れども善なる願望の選擇を全うせしむるは神の事なり。之が爲に人は必ず神の助けに必要あり。ゆゑに我等に現はれし善なる願は、之に屢々祈禱を伴はしめて、我等に助をあらはさんことを願ふのみならず此願が神の旨に適ふや否を我等に識別せしむることをも願はんげだし神によりて心に入るものはすべての善願に非ずして、たゞ有益なるものなり。時として人は善なるものを願へども、神の之に助けざることあり、何となれば之に類する或る願が魔鬼よりも入りて、助となるものゝ如く思はるれど、人に相應せざること屢々之あればなり。魔鬼は自から人に害をなさんを謀り、人をして其願ふ所のものに適當する生涯に未だ達せざるときに強て之を尋ねしむるなり。或は其願は人の自から擔任したる方法と遠ざかることあり、或は之を實行し、又は其實行を始むるを能くすべき時の未だ來らざることあり。或は人は其行爲の爲に充分なる知識も力も有せざることあり。或は時の事情が我等に其事に助けざることあり。然るに魔鬼は種々なる手段を以て此の善なる行爲の假面を被りて、或は人を亂し、或は人證に害を被らしめ、或は其心中に網を伏せんとす。さりながら予の既に言ひし如く、我等に善なる願のあらはるゝ時は、勉勵して屢々祈禱を行ふべく、我等おの〳〵自己に告げて言ふべし、此の我が遂げんと欲する善なる行爲は、汝の意に適するならば、之を成就するに至る迄汝の旨は行はれんげだし此の行爲は我が爲に好都合なり、然れども汝より遣はさるゝ賜なくんば、之を遂ぐる能はざるべし彼も此も、望む事も爲す事も「フィリッピ」二の十三「汝よりするに拘はらず之を遂ぐる能はざるべし、何となれば汝の恩寵なくんば、我に起る此願を採用することをさへ予は決せざりしなるべく、或は之を恐れしならん」と、げだし善なるものを願望する者の爲に慣例は左の如し即ち行爲の爲にも、聰慧を獲て眞なるものを僞なるものより分つが爲にも、智慮により祈禱を用ひて助となすこと是なり。それ善なるものは、多くの祈禱と行

爲と保護と不斷の服從とにより、又連々たる涕泣と、謙遜と、天の助けとにより選擇するを得べし、矧や之と反對なる驕傲の念慮の人に存する時に於てをや。げだし此念慮は神の助の吾人に至るをゆるさず、即此の念慮を祈禱により不活動ならしむるを許さゞるなり。

第三十四　說教

神に近づきて生存し、認識の生活にて日を送る事。

一の老人あり、其庵の壁上に數語を題して、種々なる思想を書付けるを、人々問ひて「是れ何の謂ぞや」といひしかば、彼左の如く答へき「是れ即我と共に居る天使より來れる義の思想と、我に生ずる天然の正しき想考なり、此等の現はるゝ時之を書留むるは、予が暗くなれるとき之を用ひて我を迷より救ひ出さしめん爲なり」と。

又他の老人あり、暫時の世に代へて不滅なる希望を賜はれりとて其思想を讃美せられければ老人は答ていへり「我尙道中にあり、我を讃するは無益なり、我未だ路を終へざるなり」と。

美なる道德に拮据勉勵して、之により樂を味ふを感せずんば甚だしからん。

道德を鍊修するは主の誡命を守るにあり。鍊修の富は親よ心意の善良なる預備是なり、而して其預備は謙遜と之を守ることに存す。前者の力の衰ふるや、之に代ふるに誡命を以てすべし。されば「パリストス」の要求するは誡命の行爲にあるにあらず、心の匡正にありて、其匡正の爲に法下の者を誡命に則らしめたりき、身體は右にも左にも一樣に働けども、智は欲する所の如何によりし。或者は左なる行爲を以ても神の容智により生活を爲せども、或者は神聖なるものゝ假面を被りて罪を販賣す。

謙遜は賞を受けざるなり、賞は爲す所のものゝ爲に與へらるゝにあらずして、謙遜の爲に與へらるる。後者を輕んずる者は前者をも失ふ。先づ謙遜になりて、善なる行の爲に既に賞を受けたる者は道德の行爲を有する者に卓越す。道德は哀みの母なり、哀みにより謙遜生じて謙遜に恩寵は與へらるゝなり。されば報酬は道德の爲に來るに非ず又之に勞したるが爲に來るに非ず、此等によりて生ずる謙遜の爲に來るなり。謙遜を失ふときは前者は無益なりして、

己を保護する者の爲には缺點も義の守護者とならん。試惑の無き賜は受くる者等の爲に不幸なり。もし神の前に善行を爲して、神は汝に賜を與へんとするならば、自から謙遜すると、或は汝の爲に其賜に監守を附すると、或は之を汝より取上るとが汝の爲に幾ばく適當なるを認むるの認識を汝に與へ給はんことを神に祈願すべし。其賜が汝の爲に滅亡の因とならざらん爲なり。げだし富を守るは何等の人の爲にも無害なるに非ず。

道德の爲の慮を自から任ふて嚴重と敬神とに生活する靈魂は日々衰みなくして存する能はざるべし。何となれば道德は衰みと結合すればなり。患難を避くる者は必ず道德とも別るゝこと無論なり。道德を願望するならば、もろ〳〵の患難に己を付せよ。げだし患難は謙遜を生めばなり。神は靈魂の憂慮なからんことを欲し給はず。憂慮を有せざらんと欲する者の念ふ所は神の旨の外にあり。憂慮とは肉體に關するものゝ爲に慮るを言ふにあらず善行に從ふ者を困しむる者の爲に慮るをいふ。眞實の認識に達せざる間即奥義を看破するに達せざる間は、試惑に頼りて謙遜に近づかん。患難なくして道德に居る者の爲に驕傲の門は開かるゝなり。

誰か其思に悲哀無らんことを願ふか。凌辱なくんば心は謙遜に居る能はざるべし。然して謙遜の德なくんば神に祈禱するに純ら從事する能はざるべし。先づ人は其思を以て當然なる憂慮より遠ざかるべくして、終で驕傲の神は人に近づかん。人が驕傲に居る時は、人の近きに在りて正義の慮を人に喚起するを職とする天使は人より遠ざからん。人が此天使を輕んじて天使も人に遠ざかる時は他者あり、人に近づくべくして、其時よりは正義に於る何等の慮も最早人にあらざるべし。

第三十五　說教

智者言ふ驕傲は破壞に先だち、〔箴言十八の二〕謙遜は恩賜に先だつと。心中にあらはるゝ驕傲の尺度に隨ひ、神が靈魂を瞭解せしむる破壞の尺度も之と相準ずるなり。しかれども驕傲とは其念頭が智覺にあらはれ或は此念頭に暫時勝たるゝ時の謂には非ずして、人に常に留在する高慢をいふ。高慢なる思念には破壞隨ひ、然して人が高慢を愛する時は最早破壞を知らず。

我等の神に光榮と美麗は世々に歸す。アミン」

第三十五　說教

世に服從する事。

主の言は眞實なり、言へらく、人は世に服從すると共に神に對する愛を受る能はず

第三十五　說教

世に交ると共に神に交り、世の爲に慮ると共に神の爲に慮る能はずと。もし浮誇の爲或は身體に必要なるものを屢缺くが爲に神に屬するものを棄つるならば多くの者は直ちに我等を離れて他方に去らん。或は天國の爲に勞するに倦に同意を表して、主の言ひ給へる左の約束を了會せざる者あり、主は言へり「もし汝等のすべての慮を天國のことに適用するならば、自然の要求を滿足せしむべき有形なるものを汝等より奪はざるべく、其他のものと共にすべては汝等に來らん。げだし汝等が自己の爲に慮るを許さず」と。主は不靈なる物の爲我等の爲に造られたる鳥の爲にさへ慮りて我等の爲に慮らざるか。是れ能はざるなり誰か靈に屬するものと靈に屬するものに資くるものゝ爲に慮るならば、體に屬するものは幾ばく何時入用なるを慮るなくして、之を其者に與へらるゝなり。之に反して體に屬するものを必要以外に慮る者は料らず神より離れん、もし我等は主の名の爲に要用なるものを勉めて慮るならば、主は其の爲にも我等が苦行に準じて之を慮らん。さりながら我等はわが心靈上の行爲に換ふるに身體に屬するものを以てして神を試みるを力めず、自己のすべての行爲を未來の幸福を望むに向はしめん、靈魂を愛するにより、一たび己を道德に付して其爲す所の業を遂げんと欲する者は、此後

身體に屬するものは有無に拘はらず之を心に掛けざるべし此事に關しては神は屢々德行家を或る事の爲に試みらるゝに放任し彼等に向つて八方より誘惑の起るを許容し彼等が身體を擊つことイオブの如くし、彼等を極貧に陷れ、人々を彼等より遠ざけ彼等が獲得したるものを以て彼等を擊たんたゞ其靈魂には害は近づかざるべしげだし義の路を行くや、道德に生活するを愛するならば悲哀の我と遭遇せざらんことも、身體が疾病勞苦の爲に弱らざらんことも、慙らずして存在せんことも、能はざるべし、されどもし人は或は嫉妬に任じ或は其靈魂を害ひ、或は靈魂の爲に他の有害なる事を爲して、我意のまゝに生活を送るならば、定罪に服せん之に反して人は義の路を行き、最早神に向ひ進行して、之に相當なるものを多く受け、或は之と相類する事に遭遇するや、其路より離るゝは彼の爲に不適當なり、彼は喜んで好奇の心なく之を受け、神が此恩寵をつかはして神の爲に誘惑に陷りしを感謝すべく、豫言者使徒及び此道の爲に患難を忍耐したる多くの聖者と苦難に於て同伴者となるを賜はりしを感謝すべし。誘惑の人に臨むは、或は人々よりすると、或は魔鬼よりすると、或は肉體よりすることに論なく、神の指麾なくんば誘惑の來ることも之を許さるゝことも能はず、彼の爲に義に赴くの端緒となるべし。げだし神

と共に居らんことを願ひ始めたる者に、神は眞理の爲に試惑をつかはさずして、別に恩惠を施すことは能はざるべく、人も此大事を受るに當る者となることはパリストスの恩寵なくんば能はざるべし、即此の神聖なる勞苦の爲に誘惑を受けて、大に喜ぶに當る者となることは能はざるべし。聖パウェルは此事を證す。げだし此事の大なるは人が神に依賴するにより苦を受るに準備せらるゝや、使徒は明に之を名づけて賜といへる程大なり。パウェル言ふ、神によりて我等に賜はりしはたゞ彼を信ずることのみならず、彼の爲に苦を受くることなりと（フィリッピ一の二十九）聖ペトルも之と同く其書に於て言へり「義の爲に苦を受るときは福なり」と（ペトル前一の十三）終に汝は自由に生活するときは喜べども、患難に於ては孌慮し、之を以て神の路に遠ざかれりと思ふべからず、げだし彼の路は世々、代々十字架と死とを以て啓かるゝなり。しかるにかくの如き思は汝に何處より來るか、汝が神の路の外に在りて之より遠ざかり聖者の路に從て行くを欲せざると、或は己の爲に他の特別なる路を作り、之に由り苦まずして行かんを欲するとは此により審知すべし。

神の路は日々の十字架なり。爽快に生活して天に昇りし者はあらず。爽快なる路のことにつきては、其路の何處に終るを知るべし。全心を以て己を神に任したる者の憂慮無き者とならんことは神の旨に適せざるなり。然れども其憂慮は眞理の爲ならんことを要す。此によりて知るべし、神が彼に哀みを不斷遣すときは彼は神の照管の下にあることを。

誘惑に居る者等が魔鬼の手中に落ちんことを照管は決して許さゞるなり。殆や彼等は兄弟の足を接吻し其疵を掩ひ且匿すこと自己の疵の如くするに於てをや。此世に於て憂慮無らんを欲し、切に之を願ひつゝ、更に道德をも練修せんと欲する者は道德の途に在るに非ず。げだし衆人等は己の願に依て善行に奮闘するのみならず、意に反するも誘惑と烈しき戰鬪を持續して、己の忍耐を試みるなり。神を敬畏する心を自己に有する靈魂は有形上に害を加へんとする何物をも畏れざるべし。何となれば今より神を賴みて世々に至ればなり。

第三十六　說教

或る顯然なる奇徴を己の手に有せんことを必要なくして願ひ且求むべからさる事。

主は其聖者に接近して彼等に助くるや、何れの時にも或る行爲と物體的奇徴とにより其力を必要なくして顯然とあらはさゝるは、其施す所の助の無益とならざらん爲、及び如何なる害にもならざらん爲なり。而して此の如く爲すは、聖人の爲に照管しつゝ、其奥密なる慮を片時も止めざるを彼等に示さんと欲するものにして、如何なる事に於ても力に應じて其苦行をあらはし、祈禱に勉苦するを彼等に委任するなり。されども事が困難にして彼等に勝ち、彼等衰弱して、其天性も之が爲に不十分なるにより、成就する能はざる時は、其權威の大なるにより、主は自から之を成就せしめん。されば彼等は主の自から知る如く緊要なる助を受くべくして、力を以て其患難に抵抗するに至る迄は、出來る丈主は奥密に彼等を堅むるなり。げだし彼等が艱難のすべての路は彼等に賜ふ所の知識を以て解決するを爲さしめ、其直覺により彼等を覺醒して、彼と此との場合に有益なる讒策を献げしむるなり。されども事が顯然とあらはるゝを要するならば、主は緊要に之をも顯はすといへども其方法は缺乏と必要とを充たすに十分なる最容智なる方法にして、或る偶然に選擇せられし方法には非るなり。

誰か必要なくして敢て此を試み、或は神に祈禱して、奇蹟異能を其手に有せんことを願ふならば、其智は罵詈者たる魔鬼の爲に試みらるべく、其良心は自負するものにして且は頑劣なるものと認められん。げだし艱難に於ては我等に神の助を求むることは非るなり。主の惠み給ひしに非ずして爲しゝものも、多くの聖者の爲に得らるゝことあり。さりながら必要なくして己が意のまゝに之を願ひ之を渇望する者は、保證を奪はれて陷るべく、眞理の知識に失脚せん。げだし神に求むる者が其求むるを敢てせし如く聽納らるゝならば、惡者は彼に於て其願ひ得たる所のものを見て、更に大なるものを願はしめん。之に反して眞の義人はたゞ之を渇望せざるのみならず、爾へらるゝときは之を辭すべく、人なの目前に於て願はざるのみならず、奥密にも己の爲に之を願はざるなり。

けだし、視よ、聖神父の一人は其淨潔の爲恩寵に依りて、彼に來る所の者等を預知する賜を受けたりしが、其賜を取上げ給はんことを神に祈りぬ（老人の爲に請はれたる他の聖者も彼と共に祈りき）。然して彼等の中或は此賜を受けし者あるは、是れ其の必要に依り、或は其の正直に依りて之を受け、他の人々を神の指麾を受るに奬勵するものにして、之が特別の理由無くんばあらざることを俟たざるなり。

聖にして福なるアンムンは聖大アントニイの安を問はんが爲に行きて路に迷ひしことあり、視よ、其時彼は神に何を言ひて、神も彼に何を爲しゝか。父マカリイの事及び其他の人々の事をも想起せよ。眞實の義人は常に自から己を以て神に不相應なる者と思惟す。然れども彼等が眞の義人たることは、彼等己を廢れたる者と爲し、神の配慮を受くるに當らざる者と爲し、陰にも陽にも此事を承認めて、之が爲に聖神を以て智慧附らるゝにより確知せらるゝなり。是れ彼等は適當なる心配を有たざる者とならずして、此生命の存する間は勞苦せんが爲にして、其の安息の時を神は彼等の爲に來世に於て守りぬ。ゆゑに生活する主を自己に有する者等は靈界の事に於る奥密なる慰藉を時々與へらるゝに拘はらず、安心せずして患難より免かるゝを願はざるは之が爲なり。

道德に到り達するや、其人が憂慮と勞苦とを有せずんば、最早道德には非るなり、視よ、神の里は安然にして事を遂ぐべき方法のあるにも拘らず、不斷己を强て從順ならしむるにあり、何となれば神の旨はかくの如きものにして、神の居る所の者等を懶惰に習はしめざるにあり。反て神は彼等をして安然を尋ねしめざるのみならず、特に活動と大なる憂患とに從はしむるなり。神は誘惑を以て彼等を堅めて、彼等を聰慧に近づかしむ。其愛する所の者等の勞苦に止まらんことは是れ神の旨なり。安然に生活する者に神の神が居らずして、魔鬼の靈の住むことは、神を愛する或者の言ひし如し、曰く「余は如何なる日にも死せんを誓へり」と神の子と他の者との差異は、彼は憂患に居れども世は奢侈と安然を以て誇るにあり。げだし其愛する所の者等が此體を有する間は、自から安息せんことを神は善みんじ給はず、却て彼等世に居る間は憂愁と、患難と、勞苦、缺乏、裸體、獨居、貧窮、疾病、卑賤、凌辱に居り、心を傷ましめ、身を勞し、親族に嫌はれ、哀しき思を爲さんことは殊に其欲する所にして、彼等は一切の造物に對して他と異なる意見を有し、通常人間の住所と同じからざる住所と、寂寞として人々の目に隔視せらるゝ通世的居住を有して、此處に人を樂ましむべき如何なるものをも有せざるなり。修道士は哀めども世は笑ひ、彼等は嘆息すれ

ども、世は樂み、彼等は禁食すれども世は華美を盡す。彼等は盡は働きて、夜は困迫と勉強とを以て苦行を專にす。彼等の或者は隨意的憂患に居れども、他者は慾と戰ひつゝ勞苦に居り、或者は人々に叱責せらるれども、或者は慾の爲、魔鬼の爲、及び其他の爲に苦む。甲は放逐せらるれども、乙は殺され、或者は綿羊の衣を衣る云々〔エウレイ十一の三十七〕世に在て患難をうけん、然れども我が爲に勇めよ〔イオアン十六の三十三〕と言へる主の言を彼等は實行せり。主は肉體の安きに居る者の主を愛するに止まる能はざるを知る、故に安きと安きを樂むとを彼等に禁せり。願くは我等が救世主ハリストス愛を以て肉體の死に勝つ者は我等に其愛の堅きを現はさんことを。

第三十七　說教

神は何故神を愛する者に誘惑を放任するか。

諸聖人が神の名の爲に苦を受けて、其愛を神にあらはしたるにより、神は彼等を困難に留置くも、其愛する所の者より離れざるときは、諸聖人の心は露顯を以て神を

見るの勇氣を受け、希望を以て神に求めん勇氣あり祈禱の力は大なり。故に神の放任するは、其聖者が種々の哀みを以て試みられん爲にして、之と同く彼等は神の助と神が彼等を幾ばく照管するとを實驗を以て試知せん爲なり。何となれば試惑に因り聰慧を受るによる。之を放任するは彼等は無學にして存すれど彼と此とに習ふを奪はれずして、經驗によりすべての爲に知識を得て、魔鬼より笑はれざらん爲なり。何となればもし彼等をたゞ善良なるものを以て試みたらんには他の部分に於て學習することが彼等に缺乏し、戰鬪に於て彼等は盲目なるべきによる。もし神は彼等に之を識らしめずして、彼等を之に習はすと言ふならば、是れ即ち神は彼等を牛馬と同視して、何等の自由をも有せざる者と爲さんを欲すと言ふを意味するなり。人は先づ惡なるものゝ實驗を以て試みられずんば善なるものに趣味を有せずして、善なるものに過ふときは、認識と自由とを以て之を盆用すること自己の所有の如くせざるべし。經驗と練習とにより、實際に借來れる知識は、如何に愉快にして、久しき經驗を以て之を自己に得たる者に如何なる力を與ふるか、此事は知識の助をも、同く又天性の劣弱と神の力の助けとをも經驗して之を確信したる者は之を認識するなり。げだし神は先づ其力を止めて彼等を助けず、彼等をして天

第三十七　說教

性の無力と試惑の困難と敵の惡謀と、彼等が何者と戰ひて天性に如何なるものを衣ると、神の力を以て如何に保護せらるゝと、其路を幾何進行すると、神の力は彼等を幾何高うすると、又此力が彼等に遂ざかるならば慾と戰ふに幾何無力なるとを自覺せしむるならば、たゞ其時に於て彼等は之を認識せん、因りて彼等は此すべてにより謙遜を受けて神に近づき、其助を待ちて祈禱を專ら務むるを始むるなり。もし神意により多くの惡に陷りて之が爲に經驗を求得ずんば此のすべてを何處より借り來るべきか、使徒の言ふ如し、曰く「默示の至大なるによりて我が高ぶらざらん爲に一の刺は我が肉體に與へられたり即サタナの使なり」〔コリンフ十二の七〕さりながら人は試惑に於て神の助を幾回か實驗して、堅き信仰を求め得べく、之により恐れざるものとなるべく、其得たる練習により試惑に勇敢なることをも求め得べし。

試惑は凡の人に益あり、げだし試惑はパウェルに益あるときは「凡の口塞がり、世は皆神の前に罪あるを致す」〔ロマ三の十九〕苦行者の試みらるゝは彼等に其富を增さん爲なり、衰弱者の試みらるゝは彼等己を有害なるものより保護せん爲なり、睡眠に耽者の試みらるゝは覺醒に準備せん爲なり、遠く離れし者の試みらるゝは神に近づかん爲なり、神に親しき者の試らるゝは勇氣を以て樂まん爲なり。凡て學ばざる子の父の家より富を受るは己の助とならざらん。此により神は先づ試み先づ疲らして、其後賜を施す。苦き藥を以て我等に健康を樂むを得べからしむる主宰に光榮は歸す。

第三十八　說教

學習の時に當りて憂へざらん人はあらじ、試惑の毒を飮む時苦しと意はざる人もあらず。此等なくんば堅固なる體格を受る能はざるべし。さりながら試惑を忍耐するは我等の力にあるに非ず、げだし神聖なる火を以て固めずんば、如何して土器より水の漏るゝを止めんや、もし斷えざる願と共に謙遜して求め忍耐して神に順ふならば、我等が主ハリストスイイススによりすべてを受けん「アミン」。

人に起る所の念頭により如何なる階級にあるを察知すへし。

人は怠慢にある間は死期を畏れ、神に接近する時は審判を迎へんを畏る、しかれざ

も殿門に至く入るときは、彼と此との畏れは愛にて呑まるゝなり。是れ何故なるか。けだし誰か肉體の知識と其生涯に止まる生涯に居るときは、其心は如何なる時にも來世審判の記憶に占有せられざるなし、何となれば彼は其天性に循ひて正しく立ち、心靈上の秩序により行動し、其知識と其行爲との爲に占有せられて、神に接近する爲に宜しく整備せらるゝによる。さりながら人に神の奥義の感が起りて、來世の望の確立するにより、彼の眞理の知識に達する時は、動物の如く屠られんことを恐るゝ肉體的の人も、神の審判を恐るゝ靈智的の人も、愛にて呑まるゝなり。然して既に子となりし者は愛にて飾られざるも、畏れざる者は懶にて諭さるゝなり。我とわが父の家は主に事へん（ナワィン）二十四の十五。

神を愛するに得達したる者は更に此世に留まらんことを最早願はざるべし、何となれば愛は畏を滅せばなり。至愛者よ、予は愚に陷りしにより、秘密を守りて默する能はず、兄弟を益せんが爲に無智となりぬ、何となれば眞實なる愛は此の如きものにして、此愛は其愛する所の者の爲に或事を窃に秘する能はざればなり。予が此事を曾する時は、予の指は紙に隨ふの間もあらざることたゝ一回のみにあらずして、予の心に突進し、予をして感覺を默せしめたる愉快の爲に予は忍耐を守る能はざりき。さりながら常に神の事を思ひ、ずべて世に屬するものを禁じ、獨り神と共に止まりて其認識の談を爲す者は福なり、若し彼に忍耐の足るあるも、結果を見るを長くは猶豫せざらん。

神の爲の喜は此世の生命の喜より強くして、此喜を得たる者は、たゞ苦難を見ざるのみならず、此生命をさへ厭みざるなり。もし實に此喜を有するならば彼處に他の感覺は起らざるべし。愛は生命よりも甘く、蜜よりも美なり。愛は其愛する所の者の爲に苦しき死を受くるも哀まず。愛は認識の所產にして、認識は心靈健全の所產なり。而して心靈の健全は長く續く忍耐より生じたる力なり。

問　認識とは何ぞや。

答　不死なる生命の感觸なり。

問　不死なる生命とは何ぞや。

答　神に於るの感觸なり。けだし愛は通曉より生じて、神に依る認識は悉くの願望の王なり。而して之を受くる心には地上何等の甘美も發ならざるなし。けだし神の

認識の如くなる甘美は一もあらざればなり。

主よ、我が心に永遠の生命を滿たしめ給へ。

永遠の生命は神に於る慰藉なり而して神に於る慰藉を得たる者は此世の慰藉を

賤視す。

問　神より聰慧を受けたるを人は何により確知するか。

答　人に其の穩密に於ても又感覺に於ても諛諂なる品性を敎ふる聰慧其ものにより確知せん、而して諛諂の如何に受けらるゝは人に其智に於てあらはるゝなり。

問　諛諂に到達したるを人は何により確知するか。

答　世と交際し或は言論により世に媚るを以て己の爲に醜なりとするにより確知すべし。而して此世の榮譽は彼の眼中に嫌はしかるべし。

問　慾とは何ぞや。

答　身體の最欠くべからざる要求を滿足せしめんとして、此世の事物の爲に起る所の打擊なり、此打擊は此世の存在する間は熄まざらん、さりながら神聖なる恩寵を賜はりて、更に高上なるものを味ひ、且之を感じたる人は此打擊を心に入らしめざるなり、何となれば彼には他の極めて美なる願望の之に代り主となるありて、此打擊も又之によりて生ずる所のものも、彼の心に近づかずして、此等は無動作にして存するによる、是れ慾なる打擊の最早有らざる爲には非ずして、其心に何等の動亂もなく、其意識は或る他の物を樂み之を以て飽足るによるなり。

靈界の感觸と來世の直覺とを充分に受けたる心は慾の記憶に對して自覺することも恰も高價なる食物に飽ける人の之と同じからざる他の食物を供へられたるに對する如くなるべし。之に其注意を全く向けず又は之を願はざるのみならず殊に、之を輕んじ、之を嫌はん、これ其食物の穢はしく且は嫌はしき爲には非ずして、人が第一上等の食に飽かしめられ、之を以て養はるゝこと、彼の父の富を豫め消費し、自己の分前を既に蕩盡して、其後豆莢を願ひ始めたる者の如くなるにはあらざるによる。それ寶を委托せられし者は睡らざるべし。

もし謹愼の法と思慮ある行爲とを認識により守りて、其結果は生命ならば、格鬪と慾なる打擊とは全く心に近づかざらん。しかれども此打擊の心に入るを妨ぐるは格鬪の結果には非ずして、自覺と認識とが大に飽き足り、之を以て靈魂を滿たさゝと、心中に起る所の神妙なる直覺を願ふとに因る。これぞ此打擊の心に近づくを妨ぐるものなる、これ予が既に言ひし如く、眞理の認識と、靈魂の光を保護する思慮

の守りと其行爲とにより退去したる爲には非ずして、上述の理由により智が格鬪を爲さゝるによるなり。げだし貧者の食物は富者の爲には穢はしかるべく、病人の食物の健康者に於るも亦之と同樣なるべくして、富と健康とは謹愼と配慮とによりて成るなり、人の生存する間は、謹愼と配慮と、不眠と に必要を有す、其寶を謹せん爲なり。さりながらもし之が爲に定められたる界限を撤するならば、病者となるべく、其寶は竊み去られん。當然に働くを要する時は、たゞ結果を見る迄にはあらずして、死する迄なるべし。げだし成熟の果も白雨の爲に忽ち害を被むること度々あればなり。浮世の事に立入り談話に耽る者が之により健康を守らるゝことは、未だ保證する能はざるなり。

祈禱する時は左の祈願を發すべし。主よ、此世と交る爲には寶に死者とならんことを我に與へ給へ」と、而して汝はあらゆる願求を此中に籠めたるを知り、これを身に實行せんことを努むべし。げだし祈禱に伴ふに實行を以てするときは、寶に汝はパリストスの自由に立たん。然れども世人が世にある所のものと交通談話するより遠ざかるのみにあるには非ずして、心中の談話に於ても世

もし善良なる沈思と默想に己を習はすときは、慾と會するや、直ちに之を耻ぢん。自から實驗を以て試みたる者等は之を知る。さりながら慾は罪なるに因るも之に近づくを耻ぢん。神を愛するにより、或事を遂行せんと欲する時は、死を以て其願の界限と爲すべし。かくの如くならば、各種の慾と鬪ふに於て致命の階段に上るを實際に賜はるべく、終に至る迄忍耐して弱らずんば、此の限内に於て汝と相會する所のものより何等の害も受けざらん。薄弱なる理性の思想は忍耐の力を弱むれども、堅固なる智は、其思想に隨ふ者に天性の有せざる力を與ふるなり。

主よ汝に於る生命の爲に自己の生命を惡むことを我に與へ給へ。

此世の生涯は表中に書せる文字の中よりたゞ或る文字を引出す者に似たるあり、誰か欲するあり、又は願ふあらば、之を增し或は之を減じて文字を變更するを得ん。之に反して未來の生命は、王印を押したる消き卷軸に寫取れる文書の如し、之を增補することも、又は減削することも、決して許されざるなり。故に我等は變化の中に在る間に自から己に注意すべく、自己の手を以て記せる自己の生命の文書に標を有する間に善良なる生涯を以て之が增補を爲すに盡力すべし、之により以前の生涯の疵を消滅せん。げだし我等の此世に居る間は、神は善なる者にも惡なる者に

為印を押さず、以て我等が生國に事を仕終へて、他の方面に向ひ去るの時に至らん
聖エフレムの言ひし如し、曰く「我等が靈魂は艤裝する大艦に似たるあり、之に向つ
て逆風の起るは何の時なるを知らず、又軍隊に似たるあり、戰の喇叭の吹散ずるは
何の時なるを知らず、かくの如く考ふるは、我等に當然なり」といへり。其意謂へらく、
再歸の望なきに非ざる場合に於て小なるものを得んが爲にさへかくの如くならば、彼の畏るべき日に先だち、此の橋の前に於て此の新世界の門の前に於て、我等が
豫備し且具裝するは如何に肝要なるか。我等が生命の代保者なるハリストスは此
の期望を確として表示するの準備を我等に賜ふべし。彼に光榮と叩拜と感謝は世
々に歸す。アミン」。

第三十九　說教

靈に屬する人々は、身體の肥滿に準じ、他の靈界に屬
するものを知識により幾許看破すべきか、如何して
智は其肥滿より上に高めらるべきか、之より自由な
るを得ざるは何故なるか、智は何時如何なる方法に
より、祈禱の時、妄想なくして止まるを得へきか。

我等が前に門を開き給へる主の榮光は頗讃せらる、願はくは彼に向ふ願望の外他
の願求は我等にあらざらんげだし此の場合に我等は一切を棄て、靈魂は彼獨を追
ふて突進す、ゆゑに靈魂の爲に主を直覺するを阻礙せんとする慮はあらず。至愛者
よ、智は此の有形物の爲に慮るを棄て、肉體の爲に慮ると、此慮の爲に思念するとよ
り高まるに準じ、未來の望の爲に費心する程は益々精微になりて、祈禱に於て照明
せられん。而して肉體が有形的鏈鎖より免れて自由を得るに隨ひ、智も自由なるを
得ん而して智は其慮の鏈鎖より自由を得るに隨ひ、照明せられ、照明せらるゝに隨
ひいよ〳〵精微になりて、粗大なる有樣を有する此世の概念より高うせられん。其
時智は神を神の如く直覺するを學ぶべくして、我等が觀察する如くなるには非る
べし。もし人は先づ默示を受るに堪ふるものとならずんば、之を觀察する能はざる
べく、淨潔に達せずんば、其の概念は、神秘なるものを觀察する程照明せらるゝを得
る能はざるべし。而してすべて有形造物に於て見る所の有形なるものより免れて、

自由を得るに至る迄は、有形なるものに對する概念よりも自由を得ざるべくして、暗まされたる思念より潔めらるゝ者とはならざるべし。思念の暗黑と惑亂の有る處は、慾の有る處なり。もし人は我等が言ひし如く、此慾と其原因とより免れて自由を得ずんば、智は神秘なるものを洞察せざるべきことゝ、世の擾亂より遠ざかりて衆人に一般なる配慮より脫すべきことを命せり、言へらく凡て全人間とすべて己れに屬するものとを辭せず、又己をも捨てざる者は我が門徒となるを得ずと〔ルカ十四の三十三〕。

智を凡てのものより害を受けざらしめん爲、視ると、聽くと、物體の爲に慮ると、其滅却と、其の增殖とより且は人よりも害を受けずして、神に對する獨一の希望と之を結合せしめん爲に、主は他の百般の慮を我等より遠ざけしめたるは我等之により て獨一の神と交通するを願ひ始めん爲なり。さりながら祈禱は更に練修に必要を有す、之を長く務むるによりて智を增さん爲なり。祈禱は我等の思を鍵鑰より脫する無慾の後、練修に專ならんを要求す、何となれば時の久しきと共に智は練修に習慣を求得て、思念を反拒すべき所以を識り、他の泉より借る能はざるものを長き實驗を以て學ぶによる。げだし凡て現在の生涯は其成長を之に先だつ生涯より借るべく、先だつものを要求するは後に來るもの爲なり。祈禱に先だつものは遁世的生涯にして、遁世的生涯は祈禱の爲に必要なり、げだし我等が神を愛するの原因は祈禱に因り求め得らるべきによる。

至愛者よ、我等はすべて奥密に行はるゝ交通と、すべて神の事に於る善良なる才智の慮と、すべて靈神上のことの冥想とは祈禱の爲に立てられ祈禱の名を以て稱せらるゝことをも知らんを要す、例へば或は種々の誦經を言はんか、或は神を讃美するの調なるか、或は主の爲に掛念するの哀みなるか、或は身の叩拜なるか、或は聖詠を唱ふことか、或はすべて其外眞實なる祈禱のすべての式の組織せらるゝものと、之よりして神を愛する愛の生するものとは、此名の下に纏めて一所にせらるゝことの如き是なり、げだし愛は祈禱より生じて、祈禱は遁世的生涯に止まるより生ずるなり。ゆゑに神と相對して談話することを得んが爲に我等は遁世生涯に必要を有す。さりながら遁世生涯に先だつものは世を捨つるなり。げだし人は先づ世を捨てずして、世に屬するすべてのものより閑を得ずんば、退隱する能はざるべし。かくの如くなれば世を捨つるに先だつものは更に忍耐にして、忍耐に先だつものは世

を厭ふなり、而して世を厭ふに先だつものは畏と愛となり。げだし地獄の畏の心を
慫かすことなく、愛も幸福の願にみちびかずんば、此世を厭ふ念盛は心に起らざる
べし。然れども世を厭はずんば、世の安息の外に在るに耐へ得ざるべくして、心に忍
耐の先だつあらずんば、荒涼を充ち滿てゝ誰も住する能はざる地を選擇する能は
ざるべし。もし遁世生涯を自から選擇せずんば、祈禱に專なる能はざらん。もし神と
談話するなく、祈禱と合せらるゝ此冥想と我等が述べたる祈禱の式の凡ての種類
とに止らずんば愛を感せざらん。
終に神を愛するは神と對談するより生ずれども、祈禱的冥想と教訓とは沈默を以
て得らるべく、沈默は無慾を以て得らるべく、無慾は忍耐と貧心を憎むことを以つて
得らるべくして貧心を憎むは地獄の畏と福樂の望とを以て得らるゝなり。貧心の
結果と貧心は人に何を備ふると、貧心の爲に人は如何なる福樂にも入るを許され
ざることを知る者は貧心を憎まん。かくの如く凡の行爲は其先んずるものと結合せ
られ、其成長を之より借りて、他の最高上なるものに移らん。然るにもし一者は自己
より下からば彼の後に來る所のものも堅く立ちて顯然たるものとなる能はざる
べし、何となればすべては破壞し且絶滅すればなり。是より以上は言に定限あり、枚
算すべからず。

第四十　說教

叩拜及び其他の事。

誇大ならずして衆中したる長き祈禱の續くは之により汝は聖詠を歌ふを罷むるにより、無用の時を送ると謂ふなかれ。之に反して聖詠を歌ふを練習せんよりは祈禱に於て叩拜するを愛せよ。祈禱が汝に手を貸すときは之を以て神の奉事を補はん。而して其の奉事の時に當りて涙の賜を汝に與へらるゝならば之を樂むを以て祈禱に於て無用の時を送ると謂ふなかれ。何となれば涙の恩寵は祈禱の充滿なればなり。

汝の心の散する時は祈禱よりも讀經に從事せよ。さりながら既に言ひし如く何等の書も益あるにはあらず。動作よりも默想を愛せよ。もし能するならば祈禱に立つよりも讀經を重んせよ。げだし讀經は淨き祈禱の泉なればなり。何等の口實を以ても怠慢に從ふなかれ。然して心意の高超を自から制せよ。げだし聖詠を歌ふは行爲

の根本なり。さりながら身體の動作は、心意の高超と共に聖詠を歌ふよりは多く益ありと知るべし、之に反して心意の衰みは身體の勞苦に超越す。怠慢の時に於ては自から謹肅して、漸次に熱心を惹起すべし、何とならば熱心は心を醒覺して心中の思を煖むればなり。怠慢の時に當り、刺激は肉慾に反對して天性を助けん。げだし心靈の冷淡を止むればなり。或は腹の苦しきにより、或は事の多端なるにより、常に怠慢の生ずるは、此の冷淡に源因す。

行爲に於るの齊整は思想の有樣に於る光なり。是れ知識に外ならざるなり。夜間に行はるゝ凡の祈禱は日中のあらゆる動作よりも汝の目に尊かるべし。腹を苦むるなかれ。汝の智の曇らずして、夜間に起る時思の高超の爲に擾されざらん爲なり。汝の肢體の弱らずして、汝自ら婦人の如く屠弱ならざらん爲なり。然のみならず汝の靈魂の暗まされずして汝の明悟の昏味ならざらん爲、且其昏味の故に、此等を一に集中して聖詠を歌ふに、全く無力なるを來さゞらん爲なり。又すべてに對する趣味は汝に傷はれずして、聖詠を歌ふは汝を樂ましめて已まざらん爲なり。之と同時に智は思の輕易なると清明なることにより、聖詠の殊異多樣なるを常に愉快に玩味せん爲なり。げだし夜間の齊整が亂さるゝ時は、日中の行爲に於ても智は擾され暗中を彷徨し、通常の如く讀經を樂まざるべし、何となれば智は祈禱に向ひ、或は何の業務に向ふも、思は暴風の如く狂へばなり。苦行者に日中與へらるゝ愉快は夜間の行爲の光によりて淨智に溢れん。凡て長く續く默想を實驗により試みざる人は、たとひ大なるも賢明なるも、善く敎訓するも、功德を多く有するも、苦行の幸福の大なるを自から確知せんことは期すべからざるなり。

戒愼せよ、汝の身體の餘り薄弱にならざらん爲なり。其薄弱の爲に怠慢の增々加はらざらん爲なり。其怠慢の舉動を味ひて、汝の靈魂の冷にならざらん爲なり。己の行爲を秤ることと秤量に掛る如くするは、すべての人に肝要なり。飽く時は、小なる事にも自由を許すを自から警めよ。需用を充たしたる時に汝の坐するは、樽節なるべし。殊に睡眠の時は樽節にして清潔なるべく、たゞに思念のみならず、肢體にも嚴に注目せよ。汝に善良なる變化の起る時は、自負より己を守るべし。此自負の幾微なるに關して、自己の無力と自己の無智とを祈禱に於て主に懇懃に打明すべし。汝は棄てられたる者とならざらん爲、或る恥づべき事に試みられざらん爲なり。何となれば驕傲は迷亂を伴ひ、自負は誘惑を伴へばなり。

自己の必要に應じて操作に從事せよ、確言すれば操作が汝の爲に默想の鎖鑰となる

らん爲、之に從事せよ。照管者に依頼するに無力なるなかれ、何となれば忠實なる者に於る照管者の攝理は奇異なればなり。げだし照管者は其照管に依頼して生存する者等の業を立てしむるに人の住せざる野に於てして、人手を假らざればなり。もし汝が靈魂の爲に慮りて奮鬪する時に當り、主は汝の勢を待たずして、有形上の物を惠むならば、殺人者たる魔鬼の狡計に依り、此の照管の源因はすべて疑なく汝自己にありとの思を汝に生ぜしめん。然る時は汝に於る神の照管は此思と共に中止せらるべくして、之と同時に或は汝を慮る照管者の配慮の中止するにより、或は汝の體中に生ずる勞苦と疾病の再起するにより最多の誘惑は汝に向つて突進し來らん。神が其慮を中止するは、たゞ此思の生じたる爲には非ずして、此思の爲に智の寢へうるゝによる。げだし此思と一時は同意するも、己れに由らざる感動の爲に、神は人を罰せず、又鞭鞘かざるなり若慾の突貫し來るや、之と同時に我等に悔心の現はるゝあらば此の如き怠慢の爲に主は我等を嚴責せず、たゞ其心意が實に怠慢に陷り、之を見て感するなく、之を以て當然有益なるものと爲して之を己の爲に危險なるものと思はざるが爲に嚴責するなり。

常に左の如く主に祈るべし。

ハリストスよ、汝の眞理と眞理の充滿を我等の心に光り始めしめ給へ、如何して汝の旨に從ひ、汝の路を行くべきを識らしめ給へ。

或は遠くより來るものよりすると、或は先に汝に占據したるものよりすると、或は惡なる思想を汝の中に撒かれて屢々汝の智に現はるゝときは、難に認むべし彼は汝の爲に網を伏るを。汝は適時に自から覺醒せよ、肅謹せよ。之に反しもし思想は右方なる善良なるものゝ部分よりするならば、知るべし神は汝に生命の或る狀態を與へんと欲するを、故に此思想は例外に汝に起るなり。しかれどももし思想は曖昧にして、汝之に疑を容るゝも、彼は自己に屬するものなるか、或は偸兒なるか、助力者なるか、或は善良なる假面を裝ふて、其裏面に隱るゝ奸計者なるか、分明に之を曉るあたはざるときは、之に對し愚切にして最迅速なる祈禱と大なる儆醒とを以て晝も夜も武裝すべし。汝は彼を己より遠ざくるなかれ、又彼と同意も爲すなかれ、乃ち慇懃と熱切とを以て、之が爲に祈禱を行ひ、主を呼んで默するなかれ。主は此思想の何れよりするを汝にあらはさん。

第四十一　說教

沈默の事。

沈默を殊に愛せよ、何となれば汝を結果に近づかしむればなり、されど舌は此事を言ひ顯すに無力なり。先づ沈默に己を強ひん、其時は沈默によりて眞の沈默に至らしむべきものを我等の爲に生せん。沈默によりて生するものを神は汝に感知せしめん。されど此生涯を始むるならば、此より光は幾何汝に輝くべきか、予は之を言よ。

ここも能はざるなり。兄弟よ奇異なるアルセニイの事を記するを視よ、諸父兄弟等彼を見んが爲に來り訪ひけるに、彼は默然として一言も發せず、彼等と共に坐し、沈默を以て彼等を去らしめたり、汝は之を見て、此すべてを彼は全く意のまゝに行ひ、最初より己を之に強ひしに非ずと思ふなかれ。此行爲に棟習するにより、遂次或る愉快が生じ、強て身體を沈默を守るにみちびかん。而して此生涯に於て我等に多くの涙は生じて、奇異なる直覺により、心は何故か別々に感せん。或時は辛うして感ずれども、或時は慇くべく感せん、何となれば心は和げられて小兒の如くなればなり。

故に祈禱を始むるや、直に涙は流るゝなり。其肢體の忍耐により此奇異なる習慣を己の心中內部に得たる人は大なり。一方には此生涯の悉くの行爲を置き、又一方には、沈默を置く時は、秤量に於て沈默の愈れるを見ん。人々には多くの敎訓あり、然れどもし誰か沈默と親しむならば、此等の敎訓を守るの行爲は其者の爲に貴物ど、なるべく、是より先の行爲も貴視せらるべくして、彼は自から此等の行爲より抽んずる者としてあらはるゝなり、何となれば完全に近づきしによる。沈默は默想に助くるなり。何ぞや、我等は多人共住の院に居らば、何人にも遇はざらんことは能はざるべくして、默想を大に愛すること天使の如くなりしアルセニイさへも之を逃るゝ能はざりき。げだし我等と共に居る諸父兄弟に遇はざらんことは能はざるべくして、此遇ふことは期せずして之あるべし、聖堂或は其他の所に行くは、人に免る能はざればなり。彼の福樂を受るに堪へたる人は此すべてを知れり、即人間の住所の近きに居る間は、彼の爲に之を逃るゝ能はざるを知れり。而して其居る所の位置に依り同所に居る人々又は修道士等に面接するを避くる能はざることの屢々之あるや、彼は其時思寵によりて此方法を敎へられたり、即不斷の沈默を敎へられたりき。ゆゑにもし或者等の爲に已むを得ず戸を開く時あるや、彼等はたゞ其面會を自か

ら樂むのみにて、言談も要事も彼等は無用視したりき。

多くの神父は此面會により自己を保證するを得、福者の面會は彼等の爲に敎訓となるを利用して、靈神上の富を增すを得たりき。然るに或神父は人々に行かんと欲する望の起るや、己を石に繫ぎ、或は繩にて縛り、或は飢渴を以て己を疲らしたりき。けだし飢餓は感覺を鎭むるに多く功くれればなり。

兄弟よ、予は大にして奇異なる多くの神父等を見るに、彼等は行爲よりも、感覺の齊整と身體の習慣とを多く慮れり。けだし思慮の齊整は是より生ずればなり。多くの事故は不意に人と遇會して其自由の界限を脫せしめんゆゑに人は豫め求めたる弱らざる習慣により、其感覺を保護せらるゝなくんば、長く自から己を省察せざるべくして、己が原始の平安なる狀態を見ざるべければなり。

心の大なる進步は自己の希望のことを思念するにあり。行爲の大なる進步は一切の解脫にあり。死の記憶は外部の肢體の爲に善良なる連鎖となるべし。靈魂の香餌は心中に花咲く希望によりて生せらるゝ喜にあり。知識の成長は不斷の實驗にありて、之により智は二樣の變化の爲に內部に於て日々に實驗に附せらるゝなり。けだし寂寥の爲に時として我等に煩悶の起るあらば、是れ或は神の照覽によりて遣はさるゝならん。最優越なる希望の慰藉を有す、即我等が心中にある信仰の言を有するなり。捧神者の一人は善く言へり、信ずる者の爲に神を愛するは其生命の亡ぶる時にも充分の慰めなりと。其意言へらく未來の幸福の爲に現在の快樂と其安寧とを輕んずる者に患難は何の毀損をか被らしむべきと。

兄弟よ、予は汝に左の誡命を與へんとす、汝は世に對して憐憫の心を有するを自己に感ずるに至る迄は、矜恤の重檻を常に執るべしといふもの是なり。我等が慈悲心は、神の性と神の實體とに存する所の同形と其眞實なる狀態とを我等自己の中に見るが爲に鋭となるべし。我等は光明なる意願を以て神に於る生涯に進むが爲に、此等のものを以て照明せられん。殘忍にして無慈悲なる心は決して淨潔ならざらん。憐み深き人は自己の靈魂の醫なり、何となれば彼は慾の暗黑を內部より一掃することゝ恰も烈風の如くなればなり。福音的生命の言に依るにこは吾人が神に貸與する善良なる償なり。

臥榻に就く時は告げて言ふべし、曰く「臥榻よ、恐らくは汝は是夜に於て予が爲に棺とならん。晝時の眠に代へて永遠なる未來の眠の是夜に於て予に來る無きや否を知らず」と。故に汝に足のある間に練修を追逐して、最早脫し得べからざる鏈鎖の爲

に縛らるゝに先だつべし。汝に手のある間に己を祈禱に釘して、死の來るに先だつべし。汝に目の有る間に涙をこれに滿たして、塵埃に暗まさるゝに先だつべし薔薇は僅に之に向つて風の吹くあらば、凋まん。かくの如く汝の內部に於て汝の組織に入り來る元行の一に向つて風の吹くあらば、汝は死せん。人よ、死は臨んで汝の前に在り、汝之を其心に思ひ、不斷自己に告げて言ふべし、曰く、視よ、予が爲に來れる使者は最早戶の側にあり。如何して予は生すべきか、予の移るは永遠にして復た歸るあらずと」と。

ハリストスと對談するを愛する者は、遁世者となるを愛さん。之に反して衆人と共に居るを愛する者は、此世の友なり。もし悔改を愛するならば、默想をも愛すべし。けだし悔改は默想以外に完全を遂ぐる能はざればなり。もし誰か之に抗言するならば、彼と爭ふなかれ。もし默想、卽悔改の母を愛するならば、默想の爲に汝に傾注する身の小害も、詰責も、侮辱も、欣然として之を愛すべし。此預備なくんば、劍されずして自由に默想を守るあたはざるべし。然れども如上のものを輕んずるならば、神の旨に依り、默想に分を有するものとなりて、神の意に適する丈默想を守るを得ん。默想に固着するは不斷に死を待つなり。此の慮なくして默想に就く者は、悉くの方法を用ひて我等の堪忍忍耐するを要するものを擔ふ能はざるべし。

思慮ある者よ、己が靈魂の爲に幽靜なる居住と、默想と、籠居とを撰擇するは、常規の外に出づる行爲の爲に非ず、又之を遂げんとにも非ざるを知るべし。けだし衆人と交際するは、身の勉勵の爲に多く助くる所あるは、人々の知る所なり。されども、此事が緊要なりしならば、或る神父等は人々と共に居り、之と交るを棄てざりしなるべく、然して或者は墓畔に生活せざりしなるべく、又或者は幽靜の家に籠居するを自から撰擇せざりしならん。然るに彼等は彼處に於て肉體を大に弱らし、之を其課せられたる規則を遂行する能はざるに放棄して、すべて出來得る丈の薄弱と、身體の疲勞と共に彼等を捕ふる重き病を更に喜んで生涯忍耐し、之が爲に彼等は己の足にて立つことも、或は通常の祈禱を爲すことも、或は其口にて讃美することも能はざるのみならず、聖詠或は其他身體にて行ふ所のものを遂行せざりしも、彼等は悉くの規則に換へて、一の身體の薄弱と默想とを以て己の爲に充分となしたりき。かくの如くして彼等は其生命の日をすべて自ら送りぬ。而して此事の全く無益なるものゝ如く見ゆるに拘はらず、彼等の中一人も其庵を棄つるを願はざりしのみならず、其規則を執行せざるが故に、何の處にか外に行き、或は聖堂に行きて、他の聲

音と奉事とを以て己を樂ましむることをも願はざりき。

己の罪を感じ始めたる者は、人衆稠密の中に居を有し、祈禱を以て死者を復活せしむる者より高し。己が靈魂の爲に歎息して、一時間を送る者は、面會を以て全社會に益を與ふる者より高し。自から己を見るを賜はりし者より高し。げだし後者は身體の目を以て接すれごも、前者は心靈の眼を以て見ればなり。獨居的哀泣を以てパリストスに從ふ者は、集會の中に在りて己を頌讃せらるゝ者より愈れり。何人も左の使徒の言を此間に提出するなかれ、曰く「我はパリストスより絶たれんことをも亦或は願ふなり」と（ロマ九の三）パウェルが世を益する爲に、パウェルに居る所は此を爲すをも命せられん。しかれごもパウェルが世を益する爲に、パウェルに居る所の神を以て攝取せられたることは彼の自から證せし如く、自己の意のまゝに之を爲したるにあらざりき。げだし彼れ言ふ「我が分の爲すべき所なればなり、若し福音を傳へずば我は禍なる哉」（コリンフ前九の十六）さればパウェルを選びしは、彼に悔改の方法を示さんが爲に非ずして、人間に福音を傳へしめんためなり、之が爲に彼は大に餘ある能力を受けたりき。

さりながら兄弟よ、我等の心に世が死する迄は、我等は默想を愛せん。常に死の事を記憶し、此を思ふて其心は神に近づき、世の虛しきを輕んぜん、さらば世の快樂は我等が眼中に賤んぜらるべく、默想の不斷の寂寥を病體に於て喜んで忍耐せん、嚴穴と地窟とエウレイ十一の三十三に居りて、我等が主の光榮なる默示の天より來るを待つ者等と共に樂みを享けん爲なり。

彼と彼の父と彼の聖神とに光榮、尊敬、權柄及び威嚴は世々に歸す、アミン。

第四十二　說教

是れイサアクが愛する所の一人に與ふる書にして、彼は此中に（ア）默想の奥義に關する教訓を著し、多くの者が此奥義を知らざるに依り、此の神妙なる練修を等閑にし、往々修道士の間に行はるゝ傳說により庵中に留まることを述ぶ（カ）默想のことに關する訓話の摘要。

兄弟よ、余は書すべきものに就ては、之を書さゝるべからざる義務を除外なくせられしにより汝に與へし約の如く、此書を以て汝の愛を試みん、けだし予は汝が身を持するの殿を以て自から準備し行て默想を務めんとするを見たればなり、故にすべて此の練修のことにつき思慮深き人々より聽きし所のものと、其後予が近く實地に得たる經驗を以て彼等の證言を予の智に如何に適用したるとを簡短にあらはして汝の記憶に印せんとす、たゞ願ふ、汝は自らも此書を注意細讀したる後、汝に常なる勉勵を以て自己の助となさんことをけだし汝は予が此書中に收めたる言を通常讀む所のものと同視せず、聰明なる通曉力を以て讀むに着手し、此中に隱れたる大なる力によりて他の書を讀む際にも之を受ること或る光の如くせんことを要す、其時は汝の默想を守るは何の調なるか、其練習は如何なるか、如何なる奥義は此練習に歷るゝかを審知し、或者等が公生涯に於る公道の價値を殺ぎて默想を守り、修道士の生涯の患難と苦行とを選取するの何の故なるかを審知せん、兄弟よ、短日月の間に不朽なる生命を得んを願はゞ、深く慮りて默想に就くべし、其爲す所を深く研究すべく、たゞ名のみによりて此途に就くなかれ、乃ち之を推究すべく、深く思すべく奮闘すべし、此生涯の如何に深くして且高きに達せんことを諸聖者と共に勉勵すべしけだしすべて人間の業事は、此を爲す始に其終を考へ、之を成就すべき或る方法と、其希望とを預め料るべし、これ心意を勵まして事業に基を置くなり、而して此の預め料りたる目的は心意を事業の難きを任ずるに堅むべくして、此目的を熱望するにより心は其業事に於て或る羈絆を自から借り來らん、それ或者は其事業の終に至る迄弱らず智力を緊張する如く、默想の尊敬すべき行爲も、熟慮を經たる目的により、奥義の港となるべし、之によりて智は長くして且重き勞苦を悉く注意監察するなり、たとへば船長の目は星に向ふが如く、逝世に生活する者も、其進行のすべての纖績の間に於て、內心の看望は其目的に向ふ、即眞珠を發見せざる間は、默想の海の恐るべき旅行をさなんこと最初に決心したる其日より、最早其行かを心に決したる目的に向ふべくして、此目的の爲に觸るゝ能はざる默想の海の深きに入るべし、されば希望に滿たされたる注意は、其爲す所の業の難きと、其進行中に退會する危きことを輕減するなり、之に反し其默想の始に於て前途爲す所の業の爲に此目的を自から預め料らざる者は、空氣と戰ふ者と同じく無分別に畢動するなり、かくの如き者は生涯決して精神の煩悶を免れずして、彼の爲に左の二者の一は必ず生せん、或は彼は堪へ難き困難を持續する能はず、之が爲に脚たれて

默想を全く棄つるに至るべく、或は忍耐して默想に止まるも、彼の爲に庵は獄舍となりて、彼は其中に燒かれん、何となれば默想の練修によりて生ずる慰安に依頼するを知らざればなり、故に此慰安を願ふも、中心より哀んで之を求めず、祈禱の時に泣く能はざるなり。憐憫に充ち滿てゝ其子を愛する我等が神父等は、其書を以て我等が生命の要求に對する此のすべての爲に訓示を我等に遺しぬ。

神父等の一人は言へり、曰く「居る所の家より遠ざかるときは、我が智は戰闘準備より休するを得て、極めて善なる練修に向ふ、是れ我が爲に默想より生ずる利益なり」。之と同く他の神父も言へり曰く「我が默想に於て奮鬪するは、讀經と祈禱の時に句々子が爲に樂しからん爲なり。而して之に通曉して悅懌するにより、予が舌の默する時は、恰も夢中にあるものゝ如く、予の感覺と思想を壓縮する性狀を得來らん。而して之と同く此默想を續くるにより、予が心を記憶の動亂より鎭むる時は、予の心を樂ましむる爲に忽然として餓に生ずる內部の思念により、欣喜の波を斷えず我に遣はさるゝなり而して此波が予の靈魂の船に近づく時は靈魂を世の說話と肉身的生活とより脫して、神に存する所の眞實なる奇蹟と默想とに埋沒せしめん」。

されど他の神父は此に對して次の如くいへり、曰く「默想は新なる思念に於る口實と其源因とを截斷して、我に預占したるものゝ記憶を其壁內に灰滅衰萎せしむるなり而して意中に舊見が衰ふる時は、智は此等を矯正して其秩序に復せしめん」。

又他の神父は言へり、「爾の思念の差別によりて、汝の中に隱れたるものゝ尺度を悟るべし、我が之を言ふは易らざる思念のことにして、偶然に起り一時に過去るものを言ふにあらず。身體を有する者にして善なる或は惡なる二の變化と別を告げずして、自家に歸り來らん者は決してあらず、もし彼は勉勵者ならば、些細なるものゝ變化より別れて、本性の助の下にあるべし、父は生るゝ者の父なればなり、されども彼は怠慢者ならば大なるものゝ變化より別れて、彼の我が性中に隱れたる恩寵の酵の助けの下にあらん」。

或る神父は言へり「樂しき練修と夜間の斷えざる儆醒とを自から選ぶべし、是時すべての神父は舊人を脫して、心意の更新を賜はりぬ。此の時靈魂は彼の不死なる生命を感じて、其感應により、暗黑の衣を脫ぎて聖神を己れに受けん」。

又他の神父も言へり、曰く「誰か種々なる人物を見て、靈的練修と相和せざる種々樣々なる聲を聽き、かくの如き者等と共に會談し、共に相交る時は、彼は智の爲に閑暇の時を得ずして、物に己を省察することも、自から己の罪を記憶することも、己の思

を潔むることも、其目前に顯はるゝものに注意することも、祈禱に於て奥密に談話することも能はざるべし」。

又言へり「此等の感覺を靈魂の權下に屈せしむることは、默想と人々に遠ざかることなくんば能はざるべし、何となれば聰明なる靈魂は、此等の感覺と實に連接結合するによる、ゆゑにもし人は神秘なる祈禱に於て儆醒するあらずんば、其意思を圖らず誘ひ去られん」。

又言へり曰く「儆醒は幾ばく樂みを與へ如何に愉快欣喜ならしめて、其覺醒と共に、する祈禱と讀經とを以て靈魂を如何に潔むるか、其生命が何の時にも此事の爲に占有せられて最嚴重なる苦行的生活に居る者は、殊に之を知らん故に人よ、默想を愛する者よ、汝も此等の神父の言の命令的指示を己の前に置て、或る目標の如くし、其爲す所の進行を之と接近するに向はしむべし。しかれども汝の爲す所を目標と調和せしむるを殊に要するは何故なるか、之を確知せんことを思ふべし、けだし此なくんば、眞理の知識を得る能はざればなり、ゆゑに此事に於て其忍耐をあらはさんことを大に勉勵すべし」。

沈默は來世の奥義にして、言論は此世の器械なり。禁食者たる人は沈默と不斷の禁食を以て、其靈魂を神的本性に擬せんを試みるなり、人は其神聖なる練修により、神秘なるものを守るが爲に、己を分離する時は、此奥義に獻げらるべくして、其勤めは神聖なる機密に滿たされん、而してもし或者は神聖なる奥義に入るが爲に、一時己を分離するとに由りて見えざる力と萬物に主たる權の聖なるならば此印を以て己を表せん、而して其中の或者には中間の階級に在る者を新にするが爲に知るべからざる主の沈默に隱るゝ奥義を顯はすことを委任せらるべし、何となればかくの如きの奥義に勤むることは、腹を滿たして、不節制の爲に心を亂されたる人には不適當なるによる。

さりながら諸聖人も飢餓を愛する心意とにより、肢體は無力になり、顏色は蒼白になりて、地上のあらゆる念慮を絶し時の外は神と談話するを敢てせずして、奥義の秘密迄は昇せられざりきげだし汝は長き時日の間其庵に於て勞苦と神秘なるものを守る行爲の中に居り、感覺を制して、何等の會見をも避くるにより、默想の力が汝を庇ふ時は、先づ汝は故なくして汝の靈魂を時々占領するの喜を迎ふべくして、其後汝の清潔の度に隨ひ神の造物の堅きと、造成の美とを覩るが爲に汝の目は開かれん、而して智が此の現象の奇跡を以て導かるゝ時は、晝も夜も神の

造成の光榮なる奇跡と一になるべし。然らば是時より慾の感覺は、其靈底に於て此現象の愉快の爲に奪ひ去らるべくして、之に從ふ順序に於ては、清潔より始まりて愈々高まり智は更に心中の默示の二の級に登らん。

願くは神は我等にも之を恵み給はんことアミン」。

第四十三　說　教

種々なる豫想の事、及び各豫想の爲に必要なる者の事。

直覺する力を自から攝取する性質の靈的感覺は感じ易き光を自己に有する身體の目の瞳子に似たるあり。思想の直覺は天然の狀態と連合する天然の知識にして、彼は天然の光とも名づけらるゝなり。聖なる力は光と直覺との間に立てらるゝ思慮の太陽の賜なり。自然は思慮する者の光により直親し得らるゝ中間なるものなり。慾は或る堅き實體の如し、彼は光と直覺との中間に占據して萬物の殊異多樣なるを光により辨別するを碍ぐるなり。清潔は即心中の空氣の透明ともいふべきものにして、我等が內部の性は其中に高く飛揚す。もし智は天然に不健康ならば、知識は彼に於て無能なること、身體の官能が何を以てか傷はるゝや、視力を失ふが如し。されど智は健康なれど彼に知識なくんば、知識なくして智は靈界に屬するものを辨別せざること、たとへば完全の組織を有する健康なる目も感じ易き視力に關して毎々弱きことあるが如し。されど此のすべてに固有なるものは守らるれども、恩寵の之に近づかざるときは、此すべては辨別の作用に於て無能にして存すること、たとへば夜間太陽のあらざるにより、目は其目的物を揀取ること能はざるが如し。而してすべて(目も視力も)強壯にして自から完全なれども、或る物を辨別査識し得らるゝあるときは、主の光に於て光を見ん(聖詠三十五の十)といへる言は是に於て驗すべし。されども心中の太陽の恩寵が近づきて、願望を喚起し奬勵して不眠なるしむるも、智に清潔なくんば、智は恰も現象の愉快を以て我等を樂ましむる太陽の光の爲に容易く起る濃密なる雲と暗黑なる物體により不透明になれる空氣に似たるあるなり。

けだし視力が辨別に於て不確實なるときは、性も活動に於て薄弱なるべし。すべて

を照さゝる無き第二の太陽の愉快を感ずるを靈魂の爲に碍ぐるものは靈魂が衣被する身體に屬するものにして、彼は自から眞理の燦々と光り輝くを掩ふて、我等に到達せざらしむるなり。さりながら我が言ふ所の此すべてのものは之を査識せんこと必用なり、何となれば此のすべてのものを總合して缺くる所なく間然する所なく一人に於て之を發見することは難くして、一の或る靈的知識に於る完全に遂することは、多くの者之を能くせざるによる。此の缺點は左の理由によりて生ず、即靈智の缺乏にもより、意志の不順序にもより、師と誘導者を有せざるにもより、恩寵を遮るにもより、(錄して言ふあり「客嗇なる人の爲に富と大なるものを領ずるは善からず」と、シラフ十四の三)又境遇の爲位置の爲及ひ品性の爲に妨げらるゝにもよるなり。

眞理は靈的智覺の感によりてのみ人の自から味ふべき神に依るの感覺なり。愛は祈禱の結果なり、さればもし智は煩悶なくして祈禱に止まるならば、其直覺により智力を飽く能はざる願望に昇すべくして、人は智力を以て默識心通するによりてのみ熱心と切愛とを以て祈禱せん。祈禱は肉體的生活の望に關する概念を殺すなり。げだし勉勵して祈禱する者は世の爲に死せし者と同樣なるべくして、忍耐して祈禱に止まるは、是れ即人は自から己を棄つるなり、心の克己により神の愛は終に得らるべし。

眞潔の穗は禁食の汗の種子より芽を出す如く、放蕩は飽食により生じ、不潔は過度に滿腹するにより生ずるなり。腹の飢ゑて空しきときは恥づべき思念は如何しても靈魂に凭らざるべし。凡て嚥下す所の食物は之を以て液汁を增し、我等に於て天然の勢力となるべし。而して有機的肢體は其製造せられたる全身の膨脹力により充實して、之により或る有形なるものを偶然に見るあり、或は心中に於て圖らず思念と共に何か喚起せらるゝある時は、思念により何故か愉快なる感動の俄に起るありて全身に瀰蔓せん。眞潔にして思念に玷なき者の智は强固なりといへども、肢體に生じたる感覺により、其理性は直に攪亂せらるべくして、其居る所の位地より下るこそ、或る高處より落ちる如くならん。而して其思念の聖なるは動搖せらるべく、光明なる眞潔は肢體の燒くがために心中に入りたる慾の擾亂を以て汚さるゝなり。其時は彼の力は半は衰弱す、故に彼は其希望の第一の目的をさへ失念すべくして戰に入るに先だち、戰はすして捕虜となり、敵の努力を待たすして薄弱なる肉體の意に從ふものとならん。不斷に飽食せんと欲する强き嗜好は善良なる人の意

志を此のすべてに強て從はしむるなり。たゞ彼は貞潔の淒に堅固に止まるこゝろへごも、過度の飽食は彼をして其心に容るゝを決して願はざる所のものに從はしむるなり。而して一の思念の死するや、空しくして耻づべき妄想を包含する思念の集合は直ちに彼を圍みて、此の淨潔なる彼の臥床をば以て淫所となし、醜場となさん、されば思念の酣酔に乘じ此等と共に談話を爲して、女人の近づくを待たず其聖なる肢體を汚す時は、腹を過度に飽かしめたるにより肉體の海に起る所の波の勢力に自から投ずる智は、恰も海の暴風により激動洶湧する如く、如何に動亂するか。貞潔よ汝の美は赤地に偃臥するにより、汝の睡眠を奪ふ飢餓の苦みにより、食物を飾する爲に肋骨と腹との間が深溝の如くなれる肉體の苦難により、如何に清明になるか。すべて我等が內部に受る所の食物と凡ての安息とは、我等に於て穢はしき形像と、醜陋なる幻像とを形作るなり。而して此等の形像は生れて外に出づべく、我等が智の神秘なる菀園に現然とあらはれ、我等を激して耻づべき行爲と劣に相交らしむるなり。之に反して腹の空虚は我等が思想をも寂寞たる國と爲し、思念の爲に擾されずして、すべて動亂なる思念より沈默するものとならしめん。しかれども過度の飽食の爲に充滿したる腹は、是即幻像の國にして、其過度の飽食は人をして庵中に獨居するに拘はらず、愚なる妄想の爲に四門を開かしむるなり。げだし言ふあり、過度の飽食は多くのものを汚し、神聖なる恩寵と眞實なる無慾を賜はる時は、知るべしこは醜陋なる思念の汝に生せざるがために非ず、或は肉體の思念の起らざるがためにも非ず（是等の思念なくして日を送らんこゝは誰にも能はざるなり）又汝の爲に思念の易く打勝たるゝが爲にも非ず（けだし意思は如何に高きを極むといへども思念の爲に往々汚し亂さるゝなり）之に反して意思の働よりも更に善なる思念の爲に、智は此等と戰つて之を滅さゞる可らざる緊要に迫かれざるに因る。されど思念の一方に偏するあるや、早くも意志の外にある或る力を以て之を他の思念と引近せしむるにより、盜賊の如く奪はれん、げだし意志は智の住所たる心の內部に於て習慣により又は恩寵によりて其發酵を止むるなり。

苦行者の智は別にして神品の位は又別なり、天の憐により世の爲に死したる智は、たゞ或る事件に對してのみ破と苦行となしに醇正なる思念を有せん。肉と血とに配合したる完全は肉と血とより流れ出る思念を主宰すれども、人を生活せしむる思想が元行的生活の爲に打たるゝを未だ免れざる間は、此等の思念をも、又他の天

性に固有なる思念をもすべて無動作なる迄に至らしめざるべくして、其智の根本はすべての活動と傾向とに於て變化を四液より借らん。我等が神に世々光榮あるべし。アミン」。

第四十四　說教

默想を務むるは思慮ある者に肝要なる事。

愛する所の者よ、聽くべし汝の行の無益とならず、汝の日を徒らに過さずして、思慮ある者が默想により希望する益を奪はれざらんと欲せば汝は之に着手するに思慮を以てすべく、依賴する所あるべからず、汝多くの者と相似ざらんが爲なり。之に反して汝の意中に目標を置て、其生命の行を之に向はしむべく、此事を以て汝より練達なる者且は實驗により練達なる者に質すべし。而して默想の行のすべての徑路に於て實驗を顯すに至る迄は、此を爲すを罷むるなかれ。步一步進む每に汝は路に由て行くか或は之を離れ眞正の道路の外或る小徑に由りて行くかを審問せよ。而して一の顯然たる行爲により默想的生涯が汝に於て確實に成就せらるゝと信ずるなかれ。

感物を得んを願ひ、己が實驗を以て之を捉へんと欲せば、步一步進む每に、汝は物に其心中に記號と目標を置くべし、之により父等の眞實と敵の誑惑とを確知するを得ん。然して途上に於て智慧附られざる間は、此の些少のものも汝の助となるべし。默想の時に當りて汝の意思が右なる思念を以て自由に働くを得て、或る思念に對する權に於ても强制をうくるなきを心中に認むる時は、知るべし汝の默想は正しきを。

又奉事を行ふや、種々の勤めの時に、出來る丈心意の高超に遠ざかり、汝の舌上に句の根に絕るゝあり、汝の自由の關係なくして汝の靈魂に沈默の楷を置かれんに、默想に長く止まりし後此事の生するあらば、知るべし汝は其默想に前進展開して、溫柔は汝に二倍し始まりしをげだし單純なる默想は實に非難すべきものとす。哲學者と思慮者等に於る單純なる生涯は、他の肢體の協力より離されたる單獨なる肢體と同視せらるべし。

又心中に起る各思念の爲、各想起の爲及び汝の默想により生ずる直覺の時に於て、汝の目が淚に滿たされ、强ひずして汝の頰に淚の流るゝを其心中に認むるあらば、

知るべし敵を破るが爲に要塞に坑を鑿つことの目前に成就しかゝれるを。

又時として汝の意思は尋常の秩序の外預め考ふる所あるに非ずして、汝の內部に深く沈潛し、約一時間或は數時間、此狀態に在るを自から發見し、其後汝の肢體の大に疲勞する如くなるを認め、平安は汝の思念を支配して汝に於て同事を常に繰返すときは、知るべし雲は汝の行堂を庇ひゝりしを。

しかれども默想に充分の時を送るや、靈魂を種々に分割して之を占領する思念を心中に發見せんに、靈魂は此等の思念に時々強て奪ひ去らるゝ如く、其意思は何れの時にも既往に腦するものに持去られ、或は無益なる穿鑿に屈託せんとするときは、知るべし汝は徒に默想に勞し、汝の靈魂は心意の高超の爲に時を費すを、而して之が原因は當然に務むべきものに關し、殊に儆醒と讀經とに關して起る所の外部或は內部の怠慢なり汝は速に其行爲を修整すべし。

もし汝は是日に入り、汝を攪亂する慾の爲に平安を得ざるときは、怪むなかれ宇宙の內部は、太陽の光線の遠ざかりし後も、久しく溫暖なるべく、又空中に漲る藥物の香氣と香油の煙は散じて消失するに先だち、多時存するならば、矧や慾は肉店に血を舐るに慣れたる犬の如く、通常の如く之に食物を與へずんば、先なる習慣の力の挫けざる間は、戶の側に在りて吠ん。

怠慢が汝の心に盜の如く入りて、靈魂は暗中を彷徨し、家は殆ど暗黑に滿たさるゝや、左の徵候は近づかん、汝は信念の衰ふるを窃に自から感すべく、外見上のことには卓越すれども、汝の希望は減少すべく、汝に近きものを失ふを忍ぶべく、汝の靈魂は思念を以ても感覺を以ても接するすべての人とすべての物に對し、且は至上者に對してさへ、口と心に詰責を滿たしめん面して身體の害を畏れて、之が爲に小膽は毎時毎刻汝を占領すべく、時としては汝の靈魂も己の影に慓きて透奔する程恐悸を惹起されん、何となれば汝は不信を以て信を暗ましたればなり。知るべし、こゝに信といふは、衆人に一般なる信認の根本を指すには非して、思想の力を言ふ、即智の光を以て心を固め、良心の證明を以て神に對する大なる希望を靈中に喚起し靈魂自から己の爲に慮らずして、其配慮をすべて安然として神に負はしむる所のものを言ふなり。

されば汝が前進展開する時は左の明白なる徵候を近く其心に見るあらん、即汝はすべてに希望を以て堅めらるべく、祈禱を以て富まさるべく、凡て人々と會見して人性の弱きを感する毎に汝を益する所のものは、汝の心に何時も衰へずして、かく

の如き機會は其都度汝を驕傲より保護せん。而して又一方には近者の如何なる缺點も汝の眼中に注意に値せざるものとなるべし。かくの如くして、來世に留まらんとの希望を以て此體より出づるを渇望せん。凡て我等が爲に哀むべき事穢の陽にも陰にも汝と遇會するものに關しては、汝はすべての警戒を以て自負より遠ざかりしにより、此のすべてのものゝ汝に近づくは當然にして且は審判に依るものと思ふ。さればすべての爲に告解と感謝とを献げん。これぞ謹愼警戒して默想を守り、行爲の嚴なるに達せんことを願ふ者の徴候なる。

然れども衰弱者は將に來らんとする墮落の幾徴なる徴候には、必要を有せざるべし。何となれば彼等は神秘なる道德より遠ざかれば、此等の徴候の一が汝の心に徹底し始まるならば、汝は何れの方面に傾き始めつゝあるかを此時に察せよ。げだし汝は何の爲與なるを直に覺知せん。神は我等に眞の認識を與へ給はん。アミン」。

第四十五　說教

精細なる思慮の階級

愛する所の者よ、汝は常に自から己に注意する者となれ、而して汝に生ずる憂愁と汝の居る所の寂寞と、汝の智の幾微なると共に汝の知識の粗大なると、汝の默想の愈々長く續くと共に多くの療法を其行爲の順序により視察せよ、即内部の人を康健にするが爲に眞實の醫を以て遣はさるゝ試惑は或時には魔鬼を以てし、或時には疾病と身體の勞とを以てし、或時には汝の心の感病なる念頭と、後來に起るべきものを思出す恐ろしき想起とを以てすれども、又或時には心中の溫情と、極めて愉快なる淚と、心神の喜び及び其外すべて恩寵の連接と約束とを以てするものを視察せよ。此のすべてにより汝の傷は愈えかゝり、其瘡口は塞がりしや否、即慾は衰へ始めたるや否を汝は全く認めん。目標を置き斷えず己を深省して、左の事項を檢せよ。即汝の認むる所に依れば、如何なる慾は汝の前に衰へたるか、如何なるものは消失し、汝より全く離れて、如何なるものは沈默し始めたるか、されどもこは汝の靈の

康健の爲にして、汝を恐れしむるものゝ遠ざかりし爲には非るか、汝は智を以て彼等に克つを學びたれど彼等の爲に緣由となるべきものを奪ひしには非ざるか、此等のことを檢せよ、之と同く汝の疵の腐敗中に活肉の生じかゝりたる、即心の平安の生じかゝれるを確に見るや否、此事にも注意せよ、如何なる慾は漸々に烈しく逼り來りて幾ばくの時間を經るか、此等は肉體に屬する慾なるか、或は心靈に屬するものなるか、或は複雜混合的のものなるか、而して彼等は無力なるものゝ如く記憶の中に暗に惹起さるゝか、或は力を以て靈魂に反抗するか、且は權ある者の如くなるか、或は盜の如くなるか、感覺を管領するの王たる智力は此等のものに注意を何に向くるか、彼等が力を張りて戰ひ始むるや、之と格鬪するか、己の强きを以て彼等を無力ならしむるか、或は彼等を一願するだもせずして、彼等を空きに歸せしむるか、彼等の中如何なるものは格鬪の後に消滅して、如何なるものは新に顯出するか、慾の活動するは、或る方法を以てするもあるべく、或は方法なしに感覺を以てするもあるべく、又熱心なる活動と思念となしに記憶を以てして、刺激を起さゝるもあるべし、此のすべてに依り、靈魂の如何なる程度にあることをも亦確知するを得るなり。

前者は齊整に至らざりき何となれば靈魂は彼等に對して其力を顯はすといへども、苦行は尙其前に在ればなり、しかれども後者は使用の如何に關係す、聖書に言ふ如し、曰く「タワィド其家に住みけるに神は其四邊の敵を滅して彼を安んせしめたりと」サムィル後七の一、知るべしこは一の慾念に關するに非ずして、天然の諸慾と欲望及び刺激にも、又好名の慾にも關係すべく、之と同く貪慾にも關係す、即人々想像し之を心に浮ばしめて肉慾と願望とを喚起するものにも關係す、即靈魂が窃に之と相交るや、たとひ之と同意して實際に攝受することはせざれども、其形像を心中に齎き、之によりて富を聚むる貪心を養ひ、之により靈魂に此事を思念せしめて、其他の物と共に此物をも併有せんとの願を生せしむるものにも關係するなり。慾は悉く進擊的に戰ふには非ず、げだし靈魂に憂愁をのみあらはす慾あり、怠慢と煩悶と哀愁とは進擊的に敢て襲ひ來るに非ずして、たゞ心上に重きを負はすのみなり、しかれども心靈の剛毅は進擊的にゆゑに此のすべてに關する精細なる報道を有して、目標を知らんことは人に肝要なり、其靈魂が步一步進む毎に何處に達するか、其足は何の地を踏むか、バナアンの地なるか、或はイオルダンの濱なるかを自覺せん爲なり。

さりながら左の事にも注意を向けよ。知識は眞實なる光に依りて之を識別するが爲に充分なるか。或は曖昧に之を識別するか。或は此のごとき才能を全く奪はれしか。思念の潔くなり始めしを確實に發見するか。心意の高超は祈禱の時に過ぎ去るか。祈禱に近づく時如何なる慾は心を亂すか。默想の力が習慣以外常に心中に生ずる温柔と平安とを以て靈魂を庇ひしを自己に感知するか。感覺には說明することをも許されざる無形體なる者に對する概念の爲に、智は意志の關係なくして斷えず奪ひ去らるゝか。何物とも比する能はざる愉快を以て舌を沈默せしむる歡喜は俄に汝に燃ゆるか。或る滿足は斷えず心中より溢れ出でゝ智を全く引き去るか。時として或る樂みと或る喜びが知らず識らず全身に入るも此記憶に由りすべて地上にあるものを塵芥視し、之を空うするに至るや否は肉體の舌は此を言顯はす能はざることありげだし心中より流れ出づる此の第一の樂みは或は祈禱の時に起り、或は讀經の時に起り、或は又思念の不斷の練修と其繼續の爲に起りて心意を煖むるなり。しかれども此の樂みは此のすべてを待たずして屢々起り、又は休暇の時にも幾回か起ることあるべくして、之と同く夜間には睡眠と覺醒との間にありて、眠るが如くして眠らず、覺むるが如くして覺めざる時にも屢々起ることあるなり。

さりながら人の全身を皷動する此樂みの人に起る時は人は其際思ふなるべし、天國は他にあらずして即是なりと。

之と同く察すべし、靈魂は心を占領する希望の力を以て物體の記憶を滅すべき力を求め得て、言ふべからざる無疑固信により内部の威情を堅むるや否やを而して心は地に屬するものゝ爲に捕へらるゝ度あらずして、我等が救世主の爲に爲す所の已まざる傳達と間斷なき心の練修とを以て覺醒せらるゝや否之をも察すべし。此事を聽くときは汝は練習と傳達とに召さるゝの差異に關する認識を得よ。連綿として斷えざる默想は恒久にして易らざる練修を以て、速に此事を味ひ得る力を心に得しむべし。げだし受る者の怠慢に依り、之を得たる後更に失ふて、永く復た得られざることあるべし。されは誰か良心の證明に據り禍たるパウェルの言ひしと同じく此事を敢て言ひ得るか、曰く「鑒我れ篤く信ず、死も生も現在も未來も……我をハリストスの愛より離す能はず」（ロマ三十八、三十五）言意は身體に屬する患難も、必靈に屬する悲哀も、饑餓も、窘逐も、裸程も、孤獨も、閉戸も、災害も、劒も、サタナの使ど、力と、其惡なる謀計も、人の攻擊によりて滅さるゝ名譽も、讒謗も詰責も、故なくして徒に頬を批たるゝことも我を離すこと能はずと敢て言ひ得るか。

しかれども兄弟よ、もし汝は此の凡てのものが或は除あり或は足らざるあるを其心に發見し始めすんば、汝の勞苦と、憂愁と、すべて汝の默想は無益に己を疲らすなり。もし奇跡は汝の手により行はれ、死者を復活せしむるとも此とは比較にもならざれば、汝は直ちに其心靈を勵まし、衆人を救ふ者に泣て歎願せよ、願くは我が心の門の閾を取除き、內部の天より慾の暴風晦冥を一掃して白日の光線を見るを賜はらんことを、永く暗黑に居る死者と相似ざらんが爲なり。

不斷の儆醒と共にする誦經と、之に次で屢々行ふ叩拜とは、勉勵者に此等の幸福を齎らすを遲延せざるなり、之を得たる者は、即此の方法を以て得たりき、然るに之を新に得んと願ふ者は、默想を務むると共に我が已に逃べたる所の練修に必要あり、されど是に先だち自己の靈魂の外は何事の爲にも又一人の爲にも意思を束縛せられずして、道德の內部の練修に專ならんを要す、然れども之が實行に關しては其他の事に就ても我等を保證する一定の惑の特に近く自己に起る所のものを研究せんを要するなり、

默想を務め、神の仁慈を實驗上に試みたる者は、復た勸誘を要するあらず、反つて彼の靈魂は眞理に動搖する者の如く不信の爲に苦むことは寔もあらざるべし何となれば其智の證明は彼の爲に實驗を以て確められざる言の無數の多きよりも己を保證するに充分なればなり。

我等が神に光榮と美麗は世々に歸す「アミン」、

第四十六　說　教

眞實なる知識の事、試惑の事、及び陋劣薄弱にして學ばざる人のみならず、一時無慾を賜はり、思想の有樣に於ては完全に達して、死者の如くなれると共に、一分は淨潔に近づきし者等も、慾の上に高く立ちし者等も此世にある間は其生命を慾なる肉體と結合するにより、神意により、格鬪の中に居りて肉體の故に慾より擾亂を受く、故に驕傲に陷りて滅ぶるが爲憐みによりて彼等に試惑を遣はさるゝを確知するの緊要なる事。

或者等は日々法を犯し悔改を以て其靈魂を腐さんに、恩寵は彼等を受ることたゞ一再のみならず、何となれば凡て聰明なる性には限りなく變化の起るありて、各人の爲に變化は時々生ずればなり。思慮ある者は此を曉るの機會を多く發見するのみならず、彼が日々自から試みる實驗も特に此事に於て彼の智を增さん、もし彼は肅醒し、其智を以て自己に注意するならば、意思は其溫柔と其謙遜とに日々如何なる變化を受くると、或る源因の避けられざるあるや、俄に平安なる狀態より擾亂に至ると、人は大なる言ふべからざる危險に居る所以とを確知するを得ん。

聖なるマカリイが大なる先見と注意とにより、此事を明白にあらはして、兄弟に記憶せしめ、敎訓を爲したるは、反對なるものに變じたる時失望に陷らざらんが爲なり、何となれば淨潔の階段に立つ者にも自己に怠慢或は弛緩のあらざると同時に、墮落は常に不意に起るあること、猶空氣に寒冷の起る如くなるべく、反つて彼等が己の秩序を守る時にさへも彼等自己の竟志に反對なる墮落の彼等に生ずるあるによる。而して確實なる實驗を以て之を試みたる福なるマルクも此事を證明し、絕妙なる順序を以て、之を其書に著したるは、人をして聖なるマカリイが此を其書に述べたるは、偶然にして、眞實の經驗によりしには非る如く思はしめざらんが爲に

して、かくの如き二の證明者により、智は自から必要の時に慰藉を全く確實に受けん爲なり。此により彼は如何に言ふか「各人に變化あるは空氣に變化あるが如し」と言ふか。此の各人にといへる言を理會せよ、何となれば性は一なるによる。而して彼が之を言ひしは劣弱者と惡者との爲にて、完全なる者に至ては變化を免るべく、エウヒト等が證する如く、慾念なくして一の階段に變らず立つを得んと、汝の思ふなからんが爲なり、ゆゑに彼は各人にと言ひき。

細なる者よ、是れ何ぞや汝は言ふ、寒冷ありて其後幾くもなくして暑熱あり、同く亦急霰ありて少しく過ぎて晴天あり。我等が練習に於ても此の如く或は戰あり或は恩寵に依るの助あり、或時には靈魂は動搖の中にありて、激浪の之に向つて起るあれども再び變化は生せん、何となれば恩寵降りて神に依る喜びと、平安と、貞潔にして安和なる思念とを人の心に滿たしむるによる。げだし彼が此處に是の貞潔の思念を指示すは是より先に禽獸の如く不潔なる思念のありしを了知せしむるものにして、彼は訓論を與へて言へり、もし此の貞潔にして謙遜なる思念の後に劇變の生ずるあるも、失望悲嘆するなかれ、又恩寵の慰藉の時にも同く誇るなかれ、反て喜びの時には憂を待つべしと。然して病の發作するある時は我等に悲まざらんことを

を勸諭するは是れ我等は之を引誘せざるを要するのみならず、我等に天然固有なるものゝ如く、喜んで之を受くべきを示すなり。我等は左の人の如く失望に陷らざらん、即苦行の爲に何か期する所ある如く、完全にして變らざる慰藉をさへ期すると共に苦勞をも、悲哀をも、或る反對者の行動の生ずることをも許さずして、我等の主神も此世に於て此性に之を與ふるを適當のことゝは思はざるべしと言ふ人の如くならざらん。

マカリイが此敎訓を我等に與ふるは或者等が行爲を廢して、全く閑散なる者となるを免れん爲なり、又此事を思ふと共に失望により衰弱して、其進行に不活動なる者となり了らざらん爲なり。彼れ言へらく聖者はすべて此行爲を固く守りしを知るべし。我等此世に居る間に、此等の勞苦の後、餘有る慰藉の我等に伺に生ずるあるは、けだし試惑に對する戰と苦行とを以て我等が神に對する愛の實驗を每日每時我等より要求せらるゝものにして、是れ即我等が苦行に於て哀まざるべく要へざるべきを示すなり。かくの如くなれば我等の行路は幸に進步せん之に反して此事を逃れ、或は之に遮さからんと欲する者は、狼の獲物となるべしと。此の如き簡短の言を以て此意見を固め、此意見の極めて合理なるを證して、讀者の心中に疑圖を全く消滅したる此聖者に驚嘆するは實に當然なり。彼又言へらく、此より遠ざかりて狼の獲物となる者は、路に由らずして行かんと欲する者にして、彼は其心に之を强て求めんと欲するも、父等が布設せしに非ざる己の小徑に由り行かんと欲するなりと。彼は又喜びの時に哀みを待つべきことをも敎ふ、恩寵の働により俄に我等に大なる思想起りて、聖なるマルクの言ひし如く最高上なる性の心中の直覺に愕然として驚き、諸天使も我等に近づきて直覺を我等に滿たしむる時は、すべて反對なる者は遠ざかるべくして、すべて人が此の如き狀態にある時に於ては、平和と言ふべからざる安靜とは永く續きて絕えざらん。さりながら恩寵は汝を庇ひ汝を保護する聖なる天使等は汝に近接し、且此近接によりすべての誘惑者が退去する時も、汝は自負するなかれ、動搖せざる港に達し、變らざる空氣を得て、此の逆風の中よりも全く出でたれば、最早復た敵あるなく、惡なる偶會もあるなしと心中に思ふ勿れ、何となれば多くの者は此を妄想して危きに陷りしこと、爾なるニルの言ひし如くなればなり。或は又汝は衆人より高ければかくの如き狀態にあるは適當なれども、他の人々には其品行の缺乏の故に毫も適當にあらずと思ふなかれ、或は彼等は充分に知識を有せざるにより、かくの如き賜を奉はるれど、汝は成聖と靈的階段と變ら

ざる喜びの完全に達したるにより、此事に權利を有すと思ふなかれ。之に反して不潔なる思念と不適當なる狀態とを更に善く自から省察せよ、即是より少しく以前汝の昏蒙に對して起る所の思の錯雜と無秩序の爲に動搖する時、汝の心中に固められたるものを省察すべし、又汝は如何なる速力を以て慾に傾き、心の昏迷により之と談話して、汝が受けたる神聖なる知識と、才能と、其賜とに恥ちず驚かざりしことを思ふべし。而して知るべし、此のすべては我等各人を慮りて、其有益なるものを建設し給ふ神の照管が我等の讒遜の爲に之を我等に遣したるものなるを。之に反してもし其才能に自負するならば、汝を棄てん、されば汝は獨り思念の爲に誘はれて全く墮落せん。

終りに知るべし、汝の堅く立つは汝に屬するに非ず、又汝の道德の行によるにも非ずして、汝を其掌上に持する恩寵が之を成し、汝をして恐れざらしむるを。汝は喜歡の時に此事を己の意中に收納れよ、聖神父の言ひし如く、思念の高ぶらざらん爲なり、而して放任の時には、自己の罪に陷りしことを想起して泣くべく、涙を流して俯伏すべし、汝は此を以て救を得、之によりて讒遜を求めんが爲なり。然れども失望するなかれ、思を遜りて、己の罪を垂恩により赦さるべきものと爲すべし。

讒遜は行爲なくしても多くの罪を赦さるべきものと爲す。之に反して讒遜なくんば行爲も無益となるのみならず、我等が爲に多くの惡事を備ふるに至らん。予が已に述べし如く、讒遜を以て汝の無法を赦さるべきものとならしめよ。鹽は凡ての食物の爲なる如く、讒遜は凡ての道德の爲なり、彼は多くの罪の勢力を挫くを得べし。もし彼を求め得るならば、我等を神の子と爲し善行なくして神の前に顯はさんけだし讒遜なくんば我等が悉くの行爲と凡の道德と凡の練修は徒然なるなり。終に神は意思の變化を望み給ふ。意思は我等を極て善き者とも爲し、又放蕩なる者とも爲す。我等を神の前に無能力なるものとして立たしめんには、意思一つにて充分なるべく、意思は我等に代りて言はん。汝は箇程薄弱にして傾き易き性を受けたれど、恩寵の助けにより、時として幾ばく高められ、如何なる才能を受けて、天性より一層上に居るを感謝すべく、又放任せらるゝ時は何れ迄下りて、禽獸の如き心を得るを默然として神に告白すべし。己の性の不幸なると、如何なる速力を以て變化が汝に生ずるとを記憶せよ。或る聖なる長老の言ひし如し、曰く「汝に驕傲の念の生じ、汝に告げて「自己の德行を想起せよ」といふ時は、答ていふべし、老人よ自己の迷を一見せよ」と。知るべし迷とは放任の時に當り、思念に如何なる試を受けて恩寵が我等

を或は戰に引入れ或は我等の爲に有益なれば我等に助を現しつゝ各人の爲に建設する所のものを言ふなり。

視よ、此の奇異なる長老は此義を如何に輕快に言顯はしたるか。言へらく「汝の生涯の高きを思ふ驕傲の念の汝に生ずるときは、言ふべし、老人よ自己の迷を一見せよ」と。長老が此を言ひしは高き生命の人に言ひしものなること此によりて明白なり。けだし賞替せらるべき生涯を以て高き階段に立つ者の外常人はかくの如き思念の爲に援さるゝことある能はざるなり。此慾は既に德行を成就したる後其練修を靈魂より棄はんが爲、靈底に起るものなること明なり。もし欲するならば、彼の聖なるマカリイの一文書により諸聖人が如何なる階段に立つと、諸聖人を試みんが爲に何を放任せらるゝとを學び知るべし。此書は大要下の如し。

父マカリイは其最愛の諸子に書して、戰と恩寵の助の時彼等に如何なる神の攝理のあるを明に敎ふ。何となれば諸聖者が此世に居る間德行の爲に罪と奮戰することを彼等に敎ふるは、神の容智に適するものにして、何れの時も其目を神に擧げ不斷神に注目するによりて、神の聖なる愛の彼等に增加せんが爲なり、彼等援劍と傾離の恐れを免れて、不斷神に向ふときは信と望と神の愛とに確立せん。

今予が實に此事を述るは、人々と共に居り、何の處にも出入往來して、常に耻づべき不潔の行爲と思念とに從ふ者等に告るに非ず、又默想の外に在て行に嶮を守るも感覺の爲に時々刻々に墮落の危きに臨みて、何となれば全く彼等の望に依るに非ずして、彼等を心ならざる位置に立つるによる)たゞ其思念のみならず、其感覺をも全く保護する能はざる者等に告るにも非ずして、其身體と思念とに注意するを能くし、擾亂と人々に交際するとよりすべて遠ざかり、一切を捨て且其生命をさへ捨てゝ祈禱により其智を保護するの便宜を發見し、默想的生涯を棄てずして、恩寵の照看の變化を受け、主の管轄の臂下に居り、默想に向ふ精神を以て、世の事物に遠ざかり、恩寵の助けによりて窈に聰明に、逈む所の者等に告るなり。願くは此恩寵は我等をも此境に於て守らんアミン」。

第四十七　說教

此の章の意義及び祈禱の事。

簡短に顯はせる此章の意は左の如し、我等は此の二十四時間の中、晝も夜も悔改に

必要を有するを時々記憶せんを要すること是なり。悔改といふ言の意味は例へば我等は物を眞實の性質により確知する如く、悔改も既往の罪を赦されん爲、悔悟の念に充ち滿てる祈禱を以て神に近づく爲らざる請願と、將來を守るが爲の悲哀とにあり。故に我等の主も我等が薄弱の爲に其支柱を祈禱に於て示し給へり、曰く「儆醒せよ祈禱せよ誘惑に入らざらんが爲なり」マトフェイ二十六の四十一「祈禱せよ怠慢なるなかれ、如何なる時にも「儆醒し且感謝せよ」コロサイ四の二「求めよ、然らば得ん、尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば汝等の爲に啓かれん、蓋凡そ求むる者は得、尋ぬる者は遇ひ、門を叩く者には啓かれん」マトフェイ七の七、八「然して殊に其言を證定するが爲に夜半來りて餅を求めたる友の喩を以て我等を大なる勉勵に進ましめ給へり。主は言へり誠に「汝等に語ぐ、彼は友なるが故に起きて彼に與へざるも、其切迫に依りて需むる如くに彼に與へん」ルカ十一の八「故に汝等祈禱せよ怠慢なるなかれと。吁勇氣の爲に得も言はれざる何等の奬勵なるや。施與者が我等を勉勵して求めしむるは神聖なる賜を我等に與へんが爲なり。それ彼は我等の爲に慈惠なるものをば、其自から知る如く、すべて攝理し給ふならば、彼の此言は我等を勇氣と希望とに勵ます爲に大なる力を滿たさるゝなり。けだし主は背離の出來得可きことを死する以前に我等よりも去はずして、德行より邪惡に移るべき此變化は我等に甚だ近くして人と人の性は反對なるものを自己に受け易きを知るにより、不斷祈禱に勉勵して齋圖すべきを命じ給へり。もしも此世に保證の國のあるあらば、人の此國に達するや、其性は是時直に要求より上にあるべく、其爲す所も畏懼より上にあるべく、而して神は其照管を以て之を遂げしめて祈禱に齋圖すべきことは命じ給はざりしならん。けだし來世に於ては或事の請願を以て神に祈禱を獻げざるべければなり。此の自由の鄕に在ては我等が性は反對を恐るゝ畏懼の下にありて、變化と背離とを受けざるべし。何となればすべてに完全すればなり。此故に主の命じ給ひしは、たゞ祈禱と自己を守るが爲のみにあらずして、我等の爲に常々起る所のものゝ幾徵にして思議す可らざるが故に、何れの時にも不意に屢々發見するものゝ狀態は、我等の知識を以て曉る能はざるによるなり。けだし我等の意は甚だ堅固にして、善に膠着すといへども、主の照管は我等を誘惑の境に乘て且投する一回のみにあらざることは、福なるパウエルの言ひし如し、曰く「默示の至大なるによりて我が高ぶらざらん爲に、一の刺は我が肉體に與へられたり、卽サタナの使なり、我を擊たん爲、我が高ぶらざらん爲なり、我三次主に之を我より離さんことを求めたり

然れども主は我に謂へり、我の恩寵は汝に足れり、蓋我の力は弱き中に行はる」コリンフ後十二の七―九）

主よ、是れ既に汝の旨ならば、我等の幼稚なるも、汝に導かれて自から覺醒せんが爲に、此のすべてのものを要求す、矧んや人も我と同く汝の愛に醉はしめられ、酩酊の中に在りて、世には目を全く注がざるにより引誘せられて、善なる者に追隨するに於てをや、たゞに是のみに非ず、汝は我に肉體の舌にて說明する能はざる默示と直覺とを與へ、靈神上の勤を見、且其聲を聞かしめて、聖德を充ち滿てる汝の直覺を賜はるに於てをや、しかれども此すべてに拘はらず、我れパリストスによりて成全せられたる人は、自己を保護するが爲に不充分なり、何となれば予はパリストスの心を得たるに拘はらず、幾微にして予の力を以て悟る能はざるものあるによる、故に主よ、予が弱きと、患難と、牢獄と、械繫と、窮乏とに於て喜ぶは之が爲なり、これ性によるか、性の子によるか、或は其政によるか、今はたゞ予の弱きを喜んで忍受す、即試惑に於て予の弱きを忍受す、神の力の我に宿らん爲なり、もし此すべての後汝の住所が予の中に膨脹展開して、予も汝に近づきて守られん爲、試惑の杖に必要を有するならば、予は知る、我より多く汝に愛せらるゝ者はあらずして、隨て汝は我を衆人より高うしたるを、且汝は奇異にして光榮なる力を識るを予の同勞者たる使徒の一人にも予に與へし如くには與へ給はずして、汝は予を選器と名づけ給へり（行實九の十五）何となれば汝の愛の法を予は誠實に守るによる、此のすべての爲特に傳道の業の大に進歩して將來益々擴張するが爲にも有益なりしならば、汝は予に自由を賜ふべかりしを予は幾分か理會するなり、しかれども汝は予が此世に患難と憂慮となくして居らざらんことを嘉みし給へり、けだし汝の福音を世に傳ふる事業の大に增加するは、予が試惑により程汝の爲に重要なるには非ざるに因る。

終に思慮ある者よ、もし此すべては試惑の大なる賜にして、人が稱揚せられて、パウルと同く神に入る程は、更に愈々畏懼と戒愼とに必要を有して、其遭遇する所の試惑より益を刈るならば、誰か此の奪ひし者等が充ち滿てる保證の岡に達して、（マトフェイ十一の十二）我等と偕ならずしては全きを受けざる爲に（エウレイ十一の四十）聖なる天使等にも與へられざる堅固なる者となり得べきものを受けず、すべて靈神上にも肉體上にも反對する所のものを受けて、全く不變不易なる者とならんことを欲するか、試惑が彼に其思にも近づかざらんことを欲するか、然して此世の法は

悉くの聖書に顯はされたる如く、其意左の如し、即ち毎日幾千の打撃を常に受るも畏避退怯するなかれ、塲裡に馳走するを止むるなかれ、何となれば我等は一の些細なる機會に勝利を奪ふて榮冠を受くべきによる。

此の世は競爭にして競爭の爲の道塲なり。此の時は角逐の時なり。然れども角逐の國にも競爭の時にも法は置かれざるなり、即王は其戰士の爲に競爭を終ふる迄は界限を置かずしてすべての人は主宰たる王の庭にみちびかるべく、而して競爭したる者は、勝を奏するを許さやりし者も敗北したる者も、共に彼處に於て審査せらるべし。げだし不鍛錬によりて何の用にも立たざる人は不斷に撃破せられ、打勝たれて、何れの時にも無力にして存すれども、巨人の子の軍隊の手より其軍旗を俄に奪ふときは、其名は稱揚せらるべくして、彼は奮闘し勝つて著名になりし者等よりも更に讃美せられ、其友に愛りて榮冠と貴重なる賜とを受る機會は多く之あるべし。故に一人も失望するなかれ。たゞ祈禱を等閑にせざるのみならず、主に助を求むるに怠らざらん。

我等は此世に於て肉體に置かるゝ間は、たとひ天の穹窿迄昇りたりとも、行爲と勞苦となくして居り、憂慮なくして存する能はざることを確く己の意中に置かん。是れぞ我を免せ、即完全にして此より過ぐるものは恐にして考無きなり。

我等が神に光榮及び權柄及び美麗は世々にあるべし、アミン。

第四十八　說教

道德の各種、及び凡の道の完備。

凡そ道の完備は悔改と淨潔と己を成全するとにあり。悔改とは何ぞや先非を棄て之が爲に哀むなり。淨潔とは何ぞや、簡短に言へばすべて造を受けたる萬物を慈むの心なり。己を成全すとは何ぞや、謙遜の深きなり、即すべて見ゆるものと見えざるもの(見ゆるものとはすべて物體に屬するものを言ひ、見えざるものとは思想に屬するものをいふ)と其ものゝ爲に虛るとを棄ることなり。

他日再び問はれけるは「悔改とは何ぞや」と。答て言へり「碎けて謙る心なり」と。「謙遜とは何ぞや」と問はれければ答へて言へり「一切の造物の爲に死者の如くなる性狀を甘んじて己れに受けて之れを倍するなり」「慈む心とは何ぞや」と問はれければ答て言へり「一切の造物の爲人々の爲禽鳥の爲、獸類の爲、魔鬼の爲及び如何なる受造物の爲にも人の心の燃ゆるなり。彼等を想起するにより、又は之を看望するにより人の目は

涙を流さん。心を包容する大にして強き憐憫と、大なる忍耐とにより、人の心は和げられて受造物が受る所の如何なる害をも小なる哀みをも、或は聞き或は見るに堪ふる能はざるべし。故に無言なる者の爲にも、眞理の敵の爲にも、之に害を爲す者の爲にも毎々涙を以て祈禱をさゝげて、彼等の守り且憐まれんことを願ひ、又爬蟲類の爲にも同く大なる憐憫を以て祈り、其憐憫は其心中に無量に喚起せられて神に似るに至らん。」

又「祈禱とは何ぞや」と問はれければ、次の如く答へり「すべて此處にあるものより自由を得て智を閉づるなり。即心は未來に望む所のものを願望して其眼を全く之に向はしむるなり。しかれども此より遠ざかる者は、是れ其田に混合したる種子を種く者にして、彼は牛と驢とを共に軛に繋ぐ者と同じかるべし」復傳律令廿二の十「又「如何して人は謙遜を求むべきか」と問はれければ「下の如く答へり「罪を不斷に記憶すると、死に近づくの望と、貧しき衣服とを以て求め得べし。之を以て彼は何れの時にも末坐を擇ぶべく、如何なる場合にも極めて些細なる賤業を甘んじて己れに任ひ、不從順なる者とならず、不斷に沈默を守りて、集會に出づるを好まず、人に知られすして、何事にも選ばれざる者となりて存せんことを願ひ、何物をも制へ止めて自から充分の指揮をなさず、多くの人物と交はるを嫌ひ、利益を好まざるべし。然のみならず其心は何等の人々の非謗譏誣よりも高く上にあり、嫉妬よりも上にありて、其手は衆人に在りて衆人の手は己れに在る如くなる人とならず、獨り寂地に在て己の業を務め、自己を慮るの外世の何事をも自から慮らざるべし。簡短に之を言へば旅行の生活と赤貧と寂地に止まるとに在るなり。視よ謙遜は是より生じて心は淨められて完全に達したる者の徴候は左の如し。即人々を愛するが爲に日に十回火に付せらるゝとも歎かざらんこと、モイセイの主に言ひし如くなるべし、曰く「もしかなはゞ彼等の罪を赦し給へ、然らずば汝がしるしたまへる書中より吾名を抹し去りたせ」（出埃及記三十二の三十二）又福なるパウェルの言ふ如くなるべし、曰く「わが兄弟の爲には自からハリストスより絕たれんことをも願ふなり」（ロマ九の三）又言ふあり「今我は汝等異邦人の爲に受る所の苦を喜ぶ」（コロサイ一の廿四）他の使徒等も人々の生命を愛するが爲に種々の死を受けたりき。

此の一切の終は之を神と主とに總ぶ。彼は人間を愛するにより、其子を十字架の死に付し給へり。蓋神が世を愛して其獨生の子を賜ひ世の爲に十字架の死に付し給

へるは「イオアン」三の十六「他の方法を以て我等を贖ふ能はざるによるに非ず、之を以て其豐富なる愛を我等に敎へ、其獨生の子の死を以て我等を神に近づけん爲なり。しかれどももし彼に更に貴重なるものがありしならば、我等諸族を得んが爲に其ものをも我等に與へ給ひしならん。彼は其大なる愛により我等の自由を虐ぐるを喜び給はず、彼は之を爲し得るにも拘はらず、我等自心の愛を以て彼に近づかんことを喜べりされば「ハリストス」は自から我等を愛するにより、其父に從順し、屈辱と哀みとを喜んで己れに受けしこと、聖書に言ふ如し、曰く「其前にある喜びに易へて辱を意とせず十字架を忍び給へり」「エウレイ」十二の二「ゆゑに主は其付さるゝ夜に於て言へり、曰く「是我の體世の爲に與へて生を得しむる者なり」「ルカ」二十二の十九「又言へり「是れ我の血衆くの人の爲に流さるゝ者罪の赦を得るを致す」「マトフェイ」二十六の二十八「又言ふ「我彼等の爲に己を聖にす」イオアン十七の十九「悉くの聖人も成全なる者となり、其愛と仁慈とを衆人に注ぐを以て神に似るときは亦かくの如くにして此完全に達す。諸聖人は此徽候を切願す、即近者を愛するの完全を以て神に似んことを切願す。我等が諸父と修道士等も此完全の爲に我等が主「イイスス」「ハリストス」の生命に充たされて、常に之に似んとするときは、亦此の如くに行爲し

たりき。傳へ言ふ福なるアントニイは近者の爲よりも彼自身の爲に益あることは決して斷行せずして、近者の利益が彼の爲に最良の業務たらんことを希ふと之と同く父「アカフォン」の事をも言ふわり、曰く「余は癩者を尋ね、彼より其體を取りて彼に己の體を與へんを願ふ」と。完全なる愛を見るか。又彼は自身の外何物をか所有する間は、此を以て近者を安んせしめざるに堪ふる能はざりき。彼に小刀あり、兄弟來りて之を得んことを願ひけるに、父は此小刀を彼に持たしめずして其庵より出さゞりき。其他かくの如き人々の事を書したるものも之と同樣なり。然れども是れ何ぞ言ふに足らん。彼等の多くは近者の爲に己の體を猛獸と、劒と、火とに付したりき。もし自己の希望を物に感ずるあらずんば、誰も此の愛の階段に昇る能はざるべし。ゆゑに此世を愛する者は人々に對する愛を得る能はざるべし。誰か愛を得るならば、神其ものを衣るなり。然して神を得たる者は必ず神と共に他の何物をも得んことを肯んせざるのみならず、己の體をも衣ざるべし。もし誰か世を愛するを以て此世と此生命とを衣るならば、之を棄てざる間は神を衣ざるべし。げだし神は自から此事を證明す、曰く「もし誰か一切を棄てず、己の生命をも憎まずば、わが門徒となる能はず」と「ルカ」十四の二十六「たゞに之を棄つるのみならず、之を憎まむこと肝要なり。

之に反して誰か主の門徒となる能はずんば、如何して主は彼に寓り給はんや。

問　希望はかくの如く美にして、希望の生涯と其行爲とは易く、且其行爲は速に心中に成就するは何故なるか。

答　此時聖者の心中に天然の欲望起り、彼等に此杯を飲ましめて、彼等を醉はしむるにはる。ゆゑに彼等は最早勞苦を感せずして、患難の爲に無感覺となり、すべて進行を嫌くる間に於て彼等は思ふなるべし、進行は空氣に依りて成り、人間の足を以てせずと、けだし路の艱難は彼等の爲に見えずして、彼等の前には丘陵もなく、急流もなく、路の崎嶇は坦げられん云々〔イサイヤ四十の四〕而して毎時毎刻其注意を父の懷に向はしむるによる、されば其希望は彼等に遠く隔たりて見えざるものをもつて瞬間に指示す如く、神秘なる信仰の眼を以て熟視する者に之を察知せしむるに似たり、けだし遼遠なるものを望む希望の爲に心靈の部分を悉く燒かるゝこと火を以てするが如く、在らざる所のものも彼等の爲には現在するものとなるなり、彼等は其思念を全く彼處に引伸ばして、常に彼處に達するに急なり、而して或る道德を成すに近づくや、彼れ一つの爲に勞せず、悉くの道德を總合して一時に全く之を成す、何となれば此等の偉人は其進行を成すに他の人々の如く大路に由らずして、自から捷徑を選ぶによる、是れ或る著名なる者等の速に住所に達する所以なり、此希望は彼等を燒くこと火の如し、されば彼等は急ぎて已まざる進行に休息を與ふる能はずして、喜んで之を成す。イエレミヤが言ふ所のものは彼等にも之あらん、曰く「我れ彼の名を想起せず、又彼の名によりて言はず、然るに我が心にありて燃ゆる火の如く我が骨に透る」イエレミヤ二十の九〔神を忘れざる記憶は神の約束を望む希望の爲に醉はしめらるゝ彼等の心中に此の如く活動す。

道德の捷徑は近親的德道なり、何となれば甲の徑より乙の徑に至る生涯の多くの徑路の間には大なる距離あらず、場所も時間も要せず、浪費も許さず、直ちに事に着手してこれを成就すればなり。

問　人間の無慾とは何ぞや。

答　無慾とはたゞ慾を感せざるのみにあるに非ず、之を己れに受けざるにあり、譬聖人が得たる所の隱れ現はれたる許多各種の道德に因り、慾は彼等に衰弱して、易すく起る能はず。智は慾に關係して不斷注意するの必要あらざるべし、何となれば卓越なる品行の事を思ひ且談するにより、自覺と共に理に循ひて惹起せらるゝ思想を以て何れの時も滿たさるればなり。されば慾の起るや、智は或る理會の臨むに

第四十八　說教

より慾と親しむより直に奪ひ去らるべくして、爾なるマルクの言ひし如く慾は閑散にして爲す無きものゝ如く存せん。

智は神の恩寵により、道德的練習に滿たされつゝ、知識に接近するにより、靈魂の陋劣愚鈍なる部分に屬するもの〻如く存せん。げだし知識は彼を高きに取去りて、すべて世にある所のものより遠ざくるによる。ゆゑに聖者の無玷なると、其の智の幾微なると、移し易きと、銳敏なるとに因るも、又其苦行に因るも彼等が智は潔められて、其肉體の枯るゝにより清明なるものとなるなり。而して彼等は默想に精習し、之に久しく止まるに因り、おの〳〵內部の直覺を易く且速に與へらるべくして、其直覺する所のものは彼等を慫かさん。之に由り彼等は居常直覺に富みて、其智は理解する所の物に決して不足せざるべく、又靈果を產する所のものも決して無くんばあらざるなり。心中に慾を喚起せらるべき記憶は、長き間の習慣を以て、彼等の心中より拭ひ去らるべくして、魔鬼の權力は衰へんげだし靈魂は慾を思ふて之と親しむを爲さゝる時は、他の掛念の爲に占有せらるゝにより慾の力は靈的感覺を其爪に鉤くること能はざるべし。

問　謙遜の特質は如何なるか。

答　それ自負は靈魂を其妄想により敗壞し、之を高きに持去りて、之により靈魂が飛で思念の雲に入るを礙へざらん。因りて靈魂はすべての造物に循ひて旋轉すること、かくの如く謙遜も默想を以て靈魂を一所に纏めて靈魂は自己に集中するなり。靈魂は肉體の目にては認められず、見られざる如く、謙遜なる者も人中に認められざるなり。又靈魂は身體の內部に隱れて見えず、すべての人と変らざる如く、實に謙遜なる人も衆人より離れ、すべてに缺如するが故に、人々に見らるゝことを願はざるのみならず、其望みは左の如くなるべし。即能くするならば自己の內部に埋沒し、默想に入りて、之に止り、其從前の思想と感悟とをすべて全く棄てゝ、恰も造物の中に居らざる者の如くなると、未だ曾て存在せざる者の如くなると、己が靈魂にさへも全く知られざる者の如くならんを願ふ。ゆゑにかくの如き人は自から進に隱れ、己を閉して、世と離るゝ間は全く主宰の傍に居らん。

謙遜なる者は不節制の起るべき集會と、人々の集合騷擾喧躁遊步周旋又は娛樂等を一見するも、決して之に礙へられざるべく言語談話喚呼及び排斥には注意を向けざるべし。之に反し獨居してすべての人に遠ざかり、寂寞たる地に在て自己の爲に配慮しつゝ默想を以て衆人と絕緣するを最愛するなり。すべてを縮少すると、無

所求と、缺乏と、赤貧とは彼の爲に大に欲する所なり。彼の爲に願はしきは己れに多くの事を有して、間斷なく動作するにあるには非ずして、何れの時にも自由にして存して、掛念を有せず、此世のことに擾されず、かくの如くして其思念を外に出さゝるにあり。げだし多くの事に立入るならば、思念を擾さずして居る能はざるべきを彼は信認す、何となれば多くの行爲には多くの掛慮と多くの複雜なる思念の集合するあり、ゆゑに人は最欠く可らざる些少の必要を除くの外、思念の平安を以て悉くの世慮の外に在るの事は最早止むべくして、極めて善良なる思念を以て只管に配慮する思想をば放下せん。然して其要求が人の極めて善良なる思念を遮りて已まざるときは、人は且忍び且害する狀態にあらん。即是時より慾の爲に門は開けて、靜に思慮することは遠ざかり、讒邪は逃亡して、平和の門は閉さるゝなり。此のすべての故に讒邪なる者はすべての多事より己を不斷保護す。其時は彼は何れの時にも寧靜と安息と平和と溫柔と恭敬とに居るを認められん。

讒邪なる者には性急も、粗卒も、擾亂も、短氣にして輕浮なる思ひも決してあらずして、何れの時にも彼は平安に居る。もし天の地に接することありとも、讒邪なる者は歎かざるべし。凡ての沈默者は讒邪なる者に非ず、されど凡ての讒邪なる者は沈默者なり。讒邪ならざる者は己を節せず、然れども己を節するの不讒邪者を多く見るべし。溫柔にして讒邪なる、主の言ひ給ひしものは亦此を意味す。曰く「我は溫柔にして心卑ければ我に學べ、汝等は其靈に安息を獲ん」（マトフェイ十一の二十九）讒邪なる者は何れの時にも平安に居る。何となれば彼の心を搖撼し或は歎かすもののあらざればなり。何人も山を恐らすことは能はざる如く、彼の心も畏れざるなり。ゆゑにもし言ひ得べくんば、「げだし此く言ふは不適當にあらざるべし」讒邪なる者は斯世に屬せずといふべし。（イオアン八の二十三）何となれば哀みにも恐れず、變せず、又樂みにも驚かず、驕らずして、其のすべての樂と異の喜びとは主宰の意に適するものなるによる。讒邪には溫柔と自己に絶對に集中することを伴ふ。即威嚴の淨潔と聲音の諧調と寡言と、己れに菲薄なると、貧しき衣服と、倨傲ならざる遊歩と、目を下に垂るゝと、慈悲に抽んずると、涙の直に下ると、靜なる靈と、碎けたる心と、怒を遲さゝるとと、官能を濫用せざるとと、所有物を少うするとと、すべての需要を減ずるとと、すべてを勸忍するとと、忍耐と、恐れざるとと、一時の生活を憎むより生ずる心の堅固と、試惑を忍耐するとと、重くして輕からざる意思と、雜念を消すとと、貞潔の奥密を守るとと、羞恥と、恭敬とを伴ふべく、且此のすべての外不斷に沈默するとと常に己れの無知を訴ふるとを伴ふなり。

謙遜なる者には彼を援動攪亂せしめんとする切迫なる事は決してあらず、謙遜なる者は或時は獨り居りて自から耻づ。しかれども我が慈嘆する所のものは、實に謙遜なる者は神に祈願することをも、或は祈禱に着手するや祈禱を賜ばることをも、或は他の何物をか願ふことをも敢てせず、ずして、何を祈禱するをも知らざるにあり、彼は其面を地に俯伏するや、其崇拜する所の尊嚴者の面より彼の爲に出づる一の憐みと惠みとを待ち、悉くの思念を緘默して、其心の内部の眼は至聖所の讃美の門に昇せらるゝなり、彼處の里は冥閑にして、其の前にはセラフィムの目も塞がり、其の仁惠は軍隊を勵まし其の祝讃に立たしめて、彼等の悉くの品位を默せしめん、而してたゞ左の如く言ふを敢てせん、曰く「願くは主よ汝の旨の如く我に成らんことを我等も自己の事を彼と同く言はんアミン」。

第四十九　說教

信仰と謙德の事。

小なる人よ、汝は生命を得んを願ふか、信仰と謙遜を己れに守るべし、何となれば之

により憐みと助けと神より心中に告げらるゝ言とを得べく、同く亦隱密にも顯然にも汝と共にする守護者を得べければなり、此の生命の共與を得んを願ふか、正直を以て神の前を行くべし、知識を以てするなかれ、正直は信仰を伴へども、思念の輕薄と顚倒とは自負を伴ひ、自負は神より遠ざかることを伴ふ。

神の前に祈禱に立つときは、其思念は蟻の如くなるべく、地に匍匐する者の如くなるべく、水蛭の如くなるべく、啞なる小兒の如くなるべし、神の前に何か知識により言ふあるなかれ、嬰兒の如くなる意思を以て彼に近づき、彼の前を行くべし、父が其嬰兒たる子の爲に有する父たる照管を汝に喝はらん爲なり、言ふあり「主は嬰兒を守る」と詠百十四の五、嬰兒は蛇に近づき、摑んで之を其頸に掛るも、蛇は彼を害せず。他の人々が衣服に覆ひ包まるゝも寒氣は其全身に透る、全くの冬を彼は裸體にて行き嚴寒氷凍の日に裸體にて坐するも病まざるなり。げだし在弱なる肢體を守る測る可らざる照管は、彼の正直の體を見えざる衣服を以て覆ひ、彼に何の害をも近づかしめざるなり。

今や汝は或る測る可らざる照管のあるを信ずるか、其軟弱と平生病あるとにより何等の害をも直に受くべき軟弱なる身は、之と反對なる者の間に照管を以て保護

せられて、其の勝つ所とならざるなり。主は嬰兒を守る然れどもたい此の身の小なる者を守るのみならず、世に智者と稱せらるゝ者をも守る故に彼等は己の智識を棄てゝ、彼の全く充分なる容智に倚頼し、其望を嬰兒に擬して、其後彼の學習の勞を以ては感ずる能はざる智慧を既に學びぬ。神智を得たるパウェルは絶妙に之を言へり。曰く「此世に於て智なる者と意ふ者あらば智とならんが爲に愚者となるべし」コリンフ前三の十八)と。さりながら汝は信仰の尺度に達せしめんことを神に願ふべし。汝は此樂を心中に感ずるならば最早汝をハリストスより背かしむるものあらず。此時予に告るを難んせざるべし。又汝が毎時地に屬するものより遠く捕へ去られて、此の劣弱なる世と世にある所のものゝ想起とより隱されんことも、汝の爲に難からざるべし。此事の爲に倦らずして祈るべく、切に之を願ふべく、之を受くるに至る迨は大なる勉勵を以て嘆願すべし。而して又弱らざらんことを祈るべし。もし先づ己を強ひ、信仰により其慮る所のものを神の照管に換ふるならば、之を賜はらん。神は汝が意思の全く純潔なるを以て自己に信任せずして、神其者に信任し、自己の靈魂に倚頼するの此自由を汝に於て見るあらば、彼の知るべからざる能力は汝に寓るべく、汝は彼の能力の疑なく汝と共にするを明に感せん、是即多くの者が之を己れに感じて火に赴くも恐れず、水中を行くも溺れんを慮れて其意に躊躇するを爲さゝる能力なり、何となれば信は心の感覺を堅むるによる、故に或る見えざるものが人を勸めて恐るべき事物の現象に注意せざらしむると、感覺の爲に堪ふべからざる現象を看望せざらしむることを人は自から感ずればなり。

蓋し汝は思ふならん或者は彼の靈的知識を此の心的知識により受けんと。彼の靈的知識は此の心的知識を以て受くるを得ざるのみならず感覺を以て之に觸るゝことも或は心的知識を熱心に研究する或者に之を賜はることも能はざるなり。もし彼等の中靈的知識に近づかんを願ふ者ありとも、此の心的知識と其幾微の種々なる術計と、其多くの複雜なる方法とを棄てゝ嬰兒の如くなる思の狀態に己を立てざる間は靈的知識に毫も近づく能はざるべし。反て彼等の爲に大なる妨碍となるものは心的知識の習慣と理解とにして、漸々之を消滅せざる間は妨とならん。彼の靈的知識は純然無雜にして心的思念には照り輝かざるなり。靈智が多くの思念より自由を得て淨潔の獨一醇正に達せざる間は、靈的知識を感ずる能はざるべし。視よ、此知識の定法は彼世の彼生命を感ずるにあり、ゆゑに彼は多くの思念を排斥

す。此の心的知識は多くの思念の外他の智力の醇正を以て受るを得べきものを識る能はざることは、主の言ひ給ひし如し、曰く「もし轉じて幼兒の如くならずば神の國に入るを得ず」マトフェイ十八の三」しかれども觀よ多くの者は此醇正に達せずして、反つて其善良なる行爲により天國に於て享くべき部分の守られんを希望することは、主が種々に形容し給へる福音の眞顯を了會するにより我等之を確知することを得べくして、主は此の眞顯を以て各種の生涯に於る多くの變化を我等に示し給ひき、何となれば各人は神に進行する種々の途に於て悉くの方法により天國の門を自己の前に開くべきによる。

さりながらもし轉じて幼兒の如くならずば、誰も彼の靈的知識をうくる能はざるべしげだしたゞ是時より彼の天國の樂を感ずるを得るなり。天國のことは人皆言ふ彼は靈的直覺なりと。此直覺は思念の働を以て得らるべきにあらず、たゞ恩寵により之を味ふを得べくして、人は己を潔うせざる間は、之を聞くだに充分の力を有せざるべし、何となれば誰も學んで之を得る能はざればなり。子よ、もし汝は人々より離れて沉默し、信仰によりて生せらるゝ心の淨潔に達し、此世の知識を忘れて、之に倒るゝだもあらずんば、靈的知識は求めずして汝に得らるべし。言ふあり、塔を建てゝ之に油を注けよ、さらば其中に於て寶を發見せんと。されども必的知識の繩を以て縛らるゝならば、此繩を脫するより鐵械を脫するは、汝の爲に更に易しと予が言ふは不適當にあらざるべし、汝は疑惑の網より常に遠ざからざるべく、主の前に於る勇氣と主に對するの希望とを如何にして有すべきを決して了解せざるべく、何れの時も劒の尖を往來し、如何にしても憂慮なくして居らんことを願きて正直とを以て所總主の前に宜しく生活すると憂慮なくして居る能はざるべし。汝はすべし。げだし影の形に伴ふ如く、憐みも誰遲に伴ふ。終りにもし此を學ぶを願はい劣弱なる思念に決して手を假すなかれ。もしもろ〳〵の害ともろ〳〵の惡とすべての危險とが汝を圍繞して汝を嚇すありとも、之を念頭に掛るなかれ、之を齒牙にも置くなかれ。

もし汝は汝を保護する爲に全く充分なる主に一たび己を托し、其の汝を照管するに信任して、主に隨行するならば、復何事も掛慮するなかれ、己が靈魂に告げて汝の如く言ふべし、予が己の靈魂を一たび付したる者は我が爲に何等の事に對しても充分なり。予は此處にあらざるも彼は此を知る」と。其時は神の奇蹟を實に看破すべく、如何なる時にも神は近くして、神を畏るゝ者を救ひ、神の照管は見えずとも

も彼等を如何に圍繞するを看破せんじかれざるも汝と共にする守護者は肉體の目には見えざるにより汝は彼を疑つて在らざるものゝ如く思ふべからず、げだし彼は汝を安んせしめん爲に肉體の目にも現はるゝこと度々之あればなり。

人はすべて有形なる助と人間の希望を自から拋棄し、信念と清き心とを以て神の跡に隨ふならば、直ちに恩寵は彼に伴ひ、種々の助を以て其力を彼にあらはさん。先づ此の身體に關する顯然なるものに其力を洩し、其照慮を以て助けを彼にあらはすは之を以て神の照管の力を大に彼に感得せしめん爲なり。顯然なるものを了解するにより神秘なるものにも信を置くは、其の思想の幼稚と其生涯とに如何に適當なるやげだし人は此事に意を致さずんば人の爲に要用なるものを如何にして備ふべけんや人に近づきて屢々危險に充たさるゝ多くの打擊が人の其事を思ふことをもせざる際に過去ることあり、これ其際に恩寵は冥々に且最不可思議に之を彼より反拒するものにして、彼を守ることを恰も鳥の其雛を養ひ翼を張りて之に何の害をも近づかしめざる如くするなり恩寵は人に害の接近したりしことを無害にして存したることを人に目擊せしむるなり神秘にして讀る可らざるものに關しても恩寵はかくの如く人を救へ、解し難く悟り易からざる意思及ひ思念の狡猾を其目前にあらはすゆゑに人は彼等の關係と其の互の連合と其の誘惑と其中何の思念に人は縛捕せらるゝと彼等は如何に互に相生じて靈魂を害するとを易すく捜索するを得べし而して又恩寵は魔鬼のすべての奸計と其惡念の潛まる圍所を人の目前にあらはして之を辱め、未來を瞭解する才能を人に入れ其正直の爲に神秘なる光の照しかゝるは幾微なる思念を理解するの能力を充分に覺知せしめんが爲にして、もし之を確知せずんば人は何を忍受すべきか之を示すこと宛も指を以て示す如し。されば其時人は大なるも小なるもすべての事を祈禱に於て造成者に願はざるべからずとの意は此より人に生ずるなり。

此のすべてに於て神に依賴せしめん爲神聖なる恩寵が人の意思を堅むるときは、漸々人は試惑に入るを始むべくして、恩寵が人に其量に應ずる試惑を遣はすを許すは、人をして試惑の力を忍耐せしめん爲なり。而して此等の試惑に於て其の助の切に人に近づくは人が漸々學んで智慧を求め神に依賴して其敵を輕んずるに至る迄勇氣ならん爲なり。げだし人が靈界の戰に智慧を得て自己の照管者を認識し、自己の神を惑じて彼を信ずるに窃に確立せんことは、たゞ其堪ふる所の試驗の力に依るにあらずんば能はざるなり。

恩寵は人の念頭に多少自負心が現れて、人の己を高く思ふを見るや直ちに人に對する試驗の益〻烈しく且强まるに放任すべくして、人が己の弱きを認識し、走りて神の爲に證遮に捕へらるゝに至る迄は、此の如くならん。此により人は神の子を信ずると望むとを以て成人の量に達し、高められて愛に至らん。げだし神の人に對する奇異なる愛は人が其望を破壞せんとする境遇に居る時に認識せらるゝなり、此處に神は其力を人の救に於て現はし給ふ。げだし人は安息と自由の中に在ては、神の力を決して認識せざるべくして、神もたい其沈默の地と野とに於てする、即人々と共に居り共に集まりて喧躁するを棄はれたる處に於てするの外、何處にも其働を現ざゝあらはさゞりき。

道德に着手するや、殘忍にして猛烈なる患難の八方より汝に傾注するを怪むなかれ、何となれば事の困難を伴はずして成就するものは、道德とも思惟せられざるにまる。げだし醫イオアンの言ひし如く彼が名づけて道德（doers）と稱せらるゝ者が爲なるなり、言へらく、道德は困難を迎ふるを例とす、もし安息と遠るならば、彼は非難に値す。扁なる修道士マルクは言へり、凡て行ふ所の道德は神の誡命を實行するときは十字架と名づけらるべしと。故に主の國に於て「イイスス、クリストスに在りて生を渡らんと欲する者は皆窘逐せられん（ティモフェイ後三の十二。げだし主は言へり、我に從はんと欲する者は己を捨て、其十字架を負ひて我に從へ（マルコ八の三四）安息に生きんことを欲せざる者は我が爲に己の生命を喪ひて之を得ん（マトフェイ十六の二十五）彼が汝に先だちて汝の爲に十字架を供へたるは、汝自己の爲に死を定め、其後己の生命をさゝげて彼に從はん爲なり。

强きこと失望の如きはあらず、誰か之を征服するに右の手を以てせんか或は左の手を以てせんか。彼は頓着せざるなり。人が其意中に希望の生命を奪ふときは、之より狂妄なるものはあらざるべし。何等の敵も彼には抵抗する能はざるべく、如何なる患難のことを聞かしむるも彼の念を弱らしめず何となればすべて遇ふ所の患難は死より輕くして、彼は其死を己れに受けんが爲に其首を垂るればなり。もし汝は如何なる場所に於て如何なる行爲を以て、如何なる時に何事をか成さんと欲するも其意思にて目的と行爲と哀みとを預想するならば、汝の前に顯はるゝすべての不便不利に抵抗するが爲に何れの時にも勇氣にして怠らざる者となるのみならず、彼の安息に突進する思念の爲に常に生じて汝を嚇し且恐れしむる意思は汝の此等の思慮により汝より逃走せん。さればすべて汝と遭遇する困難なるものと

不便なるものとは汝の爲に便利にして容易なるものとならん。汝の所期に反對なるものは度々汝と偶會するあらん、然れどもかくの如きものゝ絶て全く汝と偶會せざることも亦往々之あるべし。

安息の望は、如何なる時にも人々をして大なるものと善なるもの、又は道德をも忘却せしむるは、汝の知る所なり。しかれども此世に肉體の爲に生活する者等も、もし不快を忍耐するを其心に決せずんば、其願意を全く遂行するを得る能はざるべし。實驗は此を證明するにより、言を以て此事を勸むるの要あらず。何となれば昔より今に至る迄人々の衰弱するは、他の何の爲にもあらず、即此が爲にして、たゞに勝を奏せざるのみならず、最良なるものをも奪はるゝなり。故に簡短に之を言はんに、もし人は天國のことを輕んずるならば、是れたゞ些細なる此世の安樂の望によるなり。而して人にはたゞ此の一の望のみあるに非ずして、烈しき打擊と恐るべき試惑とはすべて其望に專心注意する人の爲に頗りに備へらるゝも人の思想は此と相適するなり。何となれば肉慾が之を制馭するによる。

汝の如く言を進行せしめんと欲して、此說敎の爲に最初預想したる目的より離れたり、何ぞや、我等は主の爲に首途をなさんことを欲するすべての行動に於て、其意に患難を預想して目的となし、行路の終を其始に子細に確定するは、何れの時にも肝要なること是なり。人は主の爲に或事を始めんと欲するや、如何して度々左の如く問ふか、此事に安息ありや、此行路を勞なくして便利に過ぎ得べき方法あらざるか、或は此行路には身體を疲らすべき患難あらざるかと。視よ、我等は何處にもあらゆる方法を講じて安息を强て求むるを。人よ、汝は何を言ふか。天に昇り彼處の國をうけ、神と體合し、彼處の福樂に安んじ、諸天使と交り、永久不死の生命を受けんを願ふて、此行路に勞苦の有りや無しやを問ふか。奇怪の事かな。此の暫時の世に屬するものを願ふ者は、恐るべき海浪を涉り、過ぎ易からざる路を過ぐるを敢てして、其爲さんと欲する所の事に勞苦或は悲哀の有無のことは絕て言はざるにあらずや。之に反して我等は何れの處にも安息を探問す。さりながらもし如何なる時にも十字架の行路を心に想像するならば如何なる悲哀は此行路より易からざるか思及ばざる所ありて、たゞ之により魔鬼は最初より安息の約と其事の思念とを以て我等を捉ふるなり。

ふべきなり。

もし人は最初より患難勞苦を輕んずる者とならずんば、決して戰に勝利を得る者あらざるべく、朽つ可き榮冠をさへ受けずして、其願の讃美すべきに拘はらず、之を遂るに至らざるべし。何を以ても神の事を務めず、賞讃すべき善行の一にも進歩せず、安息に引誘するの思を許して、自から之と親み、等閑、怠慢及び怯懦を生じ、之に由りて全く衰弱するに至らん。此事を全く信用せざる人ありや。恐くはあらざらん。

心が道德に熱し始むる其時は、視覺、聽覺、嗅覺、味覺、觸覺の如き外部の感覺も、彼の天然の力に超ゆる稀有非常なる困難に勝を讓らざるべし。而して天然の刺激が適時に其働を顯すならば、身體の生命は糞土より輕からん。げだし心が精神を以て奮熱し始むるときは、身は患難の爲に憂へざるべく、畏れざるべく、恐れて縮まらざるべく、心は堅く、金剛石の如くなりて、あらゆる試惑に抵抗せん。我等もイエスの旨を奉する精神の奮熱を以て熱中せん、さらば我等が意中に怠慢を生ずべき何等の不注意も我等より逐拂はれん、何となれば熱心は勇氣と必靈の能力と身體の勉勵とを生ずればなり。靈魂は魔鬼に向つて天賦の強き熱心を動かすならば、魔鬼に何等の力ありや。然して憤心は亦熱心の所產と名つけらる。もし憤心は其力を働かし、心中に於て恐れざるものとなれるすべての力に強きを加ふるときは、苦行者及び致命者等が忍耐を以て受くる殉教の榮冠も天然の刺激によりて生ずる此熱心と憤心の二の働を以て得らるゝなり。人々は猛烈なる苦難の中に在りて怖れざる大膽なる者とならん。神は我等にもかくの如き憤心を與へて神を悅ばしめんことアミン」。

第五十　說教

遁世の益。

生活上の事に於て我等が眼前に臨む戰は、實に頑固に且困難にして、容易にはあらざるなり。人は幾ばく堅固にして勝たれざる者となり得るとも、格鬪と苦行の源因となるべきものが人に近づくならば恐怖は人を去らすして、魔鬼と顯然なる戰を爲す時よりも滅亡は更に速ならん。故に人が其心に恐るゝ所のものより遠ざからざる間は、敵には常に人を襲ふの便あり。もし僅に坐睡し始むるならば、敵は容易に人を滅さんげだし靈魂が世と有害の交際を爲して、之に繫がるときは、此交際は敵の爲に銳鋒利刃となるべし、されば若し之を迎ふるならば、自然に自から勝利を讓

るものといふべし。故に古來此路を經過せる我等が諸神父も、我等の智が何れの時にも一所に固く止まりて警衞看守する能はず、又其力あるにもあらずして、或時には之を害せんとするものを看破するさへ能はざるを知り、容智を以て之を盧りて、無慾を衣ること武器の如くし、錄して言へる如く多くの格圍より免れて、（かくの如くなれば其缺乏を以て人は多くの陷罪より救はるゝを得ん）慾の源因となるべき生活上の憧憬を免るゝ野に避けたり、是れ彼等が弱るとき滅亡の因たる忿怒慾望、怨恨名譽を迎へざらんが爲にして、野は此の凡てを容易ならしむるによる（けだし〳〵默想により其苦行を成すを得たりき、けだし彼處に於ては五感も自から惑る有害なるものを迎へて我等の敵に加勢する爲に助を得るあらざればなり。我等寧ろ苦行に於て死を迎へん。

第五十一　說教

人は何に由りて生命の外部の狀態の變ずると共に神秘なる思想にも變化を來すか。

人が無慾に居る間は、此生命より移ることの考は不斷に生ずるあり、ゆゑに人は其配慮を常に復活の後の生命に適用し、彼處に於るすべての準備をなさんことを何れの時にも考へて忍耐を得べく、其思念に種付けらるゝすべての榮譽と肉體の安きことを避けて世を輕んずるの念慮は毎時其心中に活發せん、されば人は其心に勇氣を得て死を致すべきすべての恐れを迎へん爲に、何れの時にも剛毅なる心を得べく、死をだに恐れざらん何となれば毎時毎刻死に注目すること或る接近するものに注目して之を待つ如くし、其配慮を以て全く疑はざる希望と共に神に托するによる。さればもし患難の彼と遭遇するあらば、患難は人に榮冠を送る所以のものなるを保證して確に之を知るものゝ如く、すべての歡喜を以て之を忍耐し、樂み且愉快にして之を受けん。けだし神が自から有益なる理由により、我

等の爲に冥々にして知るべからざる攝理を以て人に之を預定するを知ればなり。もかれども若し人は彼の智者のすべのて害惡に對する行動と謀計とにより、何に困てか或る暫時なるものを求め得べき機會に遇ふあらば、之と同時に肉體に對する愛は其心中に惹起されて人は長生のことを思ふべく、肉體の安きを思ふ念慮は毎時彼に起りて勢力を得て、肉體に屬するものは彼を制服せん、さればすべて彼の爲に此安きを破す所のものを如何にして己れに有するを得べきかと自から之を搜索すべくして、畏懼の念の爲下たらざる此自由を失はん、此により如何なる場合にも人を恐れしむる念慮に襲へられて、其畏懼の爲に源因を考へんとす、何となれば彼は無慾を以て高く世の上にありしとき求め得て、其求め得たる量に隨ひ、世の相續者として其靈中に富まされたる心の堅固を奪はるゝによる、而して彼は神の定めたる法と攝理とにより畏懼に服せん。我等が肢體の使用の爲に備へらるゝ其者に役せられて使徒の言ふ如く種々の畏懼を以て奴役に服するに罰せられん。（エ

ウレイの二の十五。

自愛はすべての慾に先だち、安息を輕んずるは悉くの德行に先だつ。其身を安息に付する者は、平安の地に於て身に苦阨を招致せん。少壯の時に樂む者は老て僕となり末後の日に悲歎せん。其首を水中に沒する者は、此の虛しき胸中に注ぐ所の稀薄なる空氣を自から吸收する能はざる如く、思を此世の忙裏に埋むる者も、彼の新なる世界の感を自から吸收する能はざるべし。死の氣は身體の組織を亂す如く、不適當なる觀玩も心の平安を亂さん。一身に健康と病とあらば、一は他の爲に亂されざる能はざる如く、一家に多くの財と愛とあらば、一は他を害せざるべからざるなり。玻璃は近きにある石と衝突するならば、完全にして存する能はざる如く、聖人も婦人と共に居り、彼と久く留りて、共に談話するならば、其淨潔を守りて汚されざる能はざるなり。樹は强くして已まざる水の流の爲に根こそげ曳拔かるゝ如く、世に對するの愛も身體に突入する試惑の流れの爲に心中より根を絕たるゝなり。藥物は惡液の不潔を體中に溢す如く、患難の强きも心を惡慾より潔めん。死者は生者より感ずる所の香氣を發する能はざる如く、修道士の靈魂も、人々の間に使用せらるゝ如く、沈默に沒すること墓に葬むらるゝときは、通常烟の如くあらはるゝ篤淨の氣を奪はるゝ者の如何を問はず、之に觸るゝなくして存する能はざる如く、苦行者も其體を宥すならば、其靈を亡びより救ふあたはざるなり。少女は恐ろしき觀物の爲に慙かさるゝや、逃走して父母の衣裾を摑

み、其助を呼ぶ如く、靈魂も試惑の恐れの爲に迫られ且碎かるゝ程は、急ぎて神に就き、斷えざる祈禱を以て彼を呼ばん。試惑が彼此相續て靈魂を襲ふ間は、祈願を增せども、再び自由を受くるや早くも意思の高超に從はん。

惡行の罰の爲に裁判者の手に付さるゝ者は、鞫問に近づくや、謙遜して直ちに己の不義を承認むるならば、罰は輕減せられて、小なる苦阨の後速に裁判を免れん、しかれどももし或犯人は頑として承服せずんば、彼を新なる鞫問に服せしむべくして、終に多くの拷問の後其體が疵の爲に掩はるゝときに至り、彼等は必ならずも自白すといへども之が爲に何の益をも受けざらん、我等も此の如く、不謹愼にして犯したる罪の爲に仁慈は我等をあらゆる者を審判する所の義なる裁判者の手に付して、われらを試惑の杖の下に引伸すを命するは、我等彼處に於て受くべき罰を輕減せられん爲なり、されば裁判者の杖の我等に近づくや、我等は謙遜して自己の不義を想起し我等を責むる者に自白するならば暫時の試惑の後速に救はれん、しかれどももし無情にして其阨を感せず、かくの如きの罪に實に罪ありて之よりも更に大なる阨を受ることの相當なるを承認めず、反つて人々を咎め、或時は魔鬼を咎め、又或時は神の義をも咎め、我等はかくの如きの事に罪あらずと主張して之を思ひ、且之を言ふとも雖も、神がわれら自己よりも善く我等を知りて我等を管轄するをば思はず、其裁判は全地に及び、其命令なくんば人は罰せられざるを思はずんば、すべて我等と遭遇するものは連綿として絕えざる哀みを我等に被らしむべく、我等の阨難は增々加はるべくして、我等自己を認識し、謙遜にして自分の不法を感するに至る迄は、此阨難は彼此相次で我等を縛ること繩の如くならん、（けだし之を感せずんば我等革新を得る能はず）而して終に阨難の多きを以て苦められたる我等は、最早通常の如く慰藉のあらざるごきに懺悔を爲すとも、己の爲に益あらざらん、しかれども此く己の罪惡を感じ始むるは、是ぞ神が我等種々の試惑の爲に疲るゝを見るや、神を以て我等に與へらるゝ賜にして、悉くの不幸及び患難と共に此世を去るを免れざらんとの考を生せん、己の罪を曉らざるは難きが爲に非ずして、無知による、或者は之と同樣の境遇に居りて、罪あれども、其罪を悔いず、却て之を否定し、他を罪するを以て此世を去ること稀なりとせず、しかれども仁慈なる神はもし彼等自から謙遜にならば、彼等を救して之を輕減せんことを期し、たゞに其試惑を輕減するのみならず、小なる中心の懺悔にも憐を垂れて、其の大なる罪をも赦さん。

第五十一　說教

人あり、大なる禮物を王に獻げ、之が爲に愛眼を以て賞せらる、かくの如く祈禱に涙を有する者をも世々の大なる王、神は其罪の大なる鼠を赦して、慈眼を以て彼を賞せん。羊は其園より脫し、牧場の外にさまよひつゝ狼穴の爲に窺へらる、かくの如く獸想を守るに托して其友の集會より離るゝ修道士も常に演劇に適き、其友を避けて彼に近づき、親物の巷を過ぎん。

高價なる眞珠を己の肩に擔ひ、賊の居る所の路を行きて、惡しき風聞さへも傳はるを聞く人は、每時戰慄す、恐くは襲擊に遇はんと、かくの如く貞潔の眞珠を擔ひて、世に此敵路に向つて進行する者も、墓の住所に、即希望の邦に達するに迄は、賊より免るの望あらざるなり。貴重なる眞珠を自から擔ふ者は擾れざるを得るか、かくの如く此者も敵が如何なる地に於て何處より何時彼を窺ひて俄に其希望を彼より奪ふを知らず、而して彼は自家の門に於て、即其衰老の時に於て奪掠せられん。

哀みの日に酒を飮む人は烟酔して自己の艱難なる位置に於る如何なる哀みをも忘る、かくの如く神の愛に酔はしめらるゝ者も、此世に於て、即號泣の家に於てあらゆる勞と哀みとを忘れ、其酬酔の故にあらゆる罪慾の爲に無感覺なる者とならん。彼の心は神を望むを以て堅めらるべく、彼の體は輕きこと羽翼の如くなるべく、彼の智は每時地より擧げられ、其思は凡て人間に屬するものより高く翔りて、至上者と共に不死を以て樂まむ。彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン」。

第五十二　說教

夜間の儆醒、及び其行爲の種々なる方法。

儆醒の勤に立たんと欲する時は、汝に告ぐる如く、神の助により行ふべし。例の如く汝の膝を屈めて、而して起つべし、而して汝の奉事を直に始むるなかれ、先づ少しく祈願して、祈禱を行ひ、生活を旅す十字架の記號を其胸と其肢體に畫するや、汝の感覺の妄んじて汝の思慮の靜まるに至る迄は暫時默然として立つべし。其後內部の眼を主に擧げて、汝の弱きを堅め給はんことを哀んで主に願ふべし、汝の聖詠を歌ふと汝の心の思とは主の聖なる旨に適ふものとならん爲なり。而して心中に默禱して次の如く言ふべし。

汝、主イイスス、我が神、其造物を眷々として顧みる者よ、我が慾念と、我等が性の弱きと、我等が敵の力とは汝に明なり。汝自ら彼の憎惡より我を匿し給へ、何となれば彼

の力は強けれど我等が性は顓み、我等が力は弱ければなり。ゆゑに汝善なる者よ、我が無力を知りて、我等が衰弱の重きを己れに負ふ者よ、我を思の動亂と慾の洪水とより守りて、我を此の聖なる勤行に堪ふる者と爲し給へ、我れ己の慾を以て勤行の美を敗壞せず、汝の前に無恥狂妄なる者とならざらん爲なり。

我等勤行を爲す時はすべて小兒の如き擾亂せる思を絕ちて、全く自由に己を導かんこと肝要なり。しかれども時間は多からずして、勤行の終らざる先に曉の迫るを認るときは、自願と認識とに依り通常の規則の中より一二の讃美を殘さん、擾亂に餘地を與へて、之により我等が勤行の爲に趣意を失はざらん爲なり。及び第一時のもし勤行を爲す時思念は汝に話掛け、汝に耳語きて「少しく念げだし汝の爲に用事は多端なり、疾く自由なるべし」と言はゞ、汝は此思念に同ずるなかれ。されどもし更に烈しく此を以て汝を安んせしめざるときは、直ちに一讃榮丈後に戻り、又は欲するだけ戻りて、祈禱の旨趣を含有する句々を熟思と共に數回反復すべし。しかるにもし思念は更に汝を亂し且妨ぐるならば聖詠を歌ふを止めて言ふべし「余が願は言を計算するにあるにあらず、住所に達せんとするにあり」けだし何等の捷徑により如何に予を導くも予は速に行かん」と。彼の愼を野に放てる民は山岳丘陵を跋え、或は登り或は下りて四十年の間野に彷徨したれども、遠くよりさへ約地を見るあらざりき。

もし儆醒に從事するとき、久しく立つは汝をして時の長きに堪へざらしめ、無力の爲に弱るあらんに、思念は汝に告げ、確言すれば奸黠者は思念によりて言始むることと、蛇によりて言ふ如く「終れよ、立ち續くる能はざればなり」と言はゞ、答へて言ふべし「否らず、予は一の「カフィズマ」の間坐せん、是れ睡眠より勝れり。もし予が舌は默して聖詠を朗唱せざるも、予が心は祈禱に於て神と談話し神によりて敎へらるゝならば、不眠は何等の睡眠よりも有益なり」と。立つことも亦聖詠を誦するのみなることも全き儆醒にはあらず。之に反して或者は全夜を聖詠に於て送り、他者は痛悔と感動せる祈禱と地の伏拜とに於て送らん。我等が神父の一人のことを言ふあり、彼が四十年の間祈禱を成せるは、左の一言なりきと、曰く「我は人なるにより罪を行へり、汝は神なるにより赦し給へ」と。彼が此句を哀んで復習するを他の神父等も聽きしが、其間彼は泣て止まざりしとぞ、彼は此の一の祈禱を以て晝夜の勤行に換へたりき。又或者は晚の小部分を以て聖

詠を誦し、殘る夜分は「トロパリ」を歌ふを以て送りたれども、他者は讃詞と誦經とを以て送れり。然して或者は膝を屈めざるを己の規則となしゝこと放蕩なる思念を攻撃する者の如くなりき。我等が神に光榮と權柄は世々にアミン」。

第五十三　說教

謙遜は如何なる尊敬を受るか、其階級は如何に高尚なるか。

兄弟よ、予は口を開きて高尚なる目的、即ち謙遜のことを言はんと欲す、しかれども予は恐れに滿たさるゝこと、猶自己の思慮に依り神のことを議せんとするを知る者の如し。謙遜は神性の衣服なり、人となりし言は此服を服して、之により我等の醫をなりし。以て我等と談話せり。されば凡て此服を服する者は、實に彼の高きより降りて尊威の大なるを隱し、受造物が仰ぎ望んで燒かるゝを免れん爲に謙遜を以て其光榮を掩ふたる者に似たるあり。げだし彼が受造物より部分を取り、かくの如くして受造物と談話せざりしならば、受造物は彼を熟視する能はざりしならん。彼が口づから言ふを面り聞くを得ざりしならん、何となれば彼が雲中よりイズライリの諸子に語りしとき、彼等も其聲をきく能はず、モイセイにつげて神は汝と言ひ、汝は其言を我等に傳ふべし、神が我等と言ひて我等死せざらん爲なり」〔出埃及記二十の十九〕といひたればなり。

此によりて見るに受造物は彼と公然對面を爲すを如何して得べきや神の顯現の畏るべきは、代求者も左の如く言ふに至れり、曰く「恐懼戰慄せり」と〔エウレイ十二の二十一〕何となれば彼が雲中よりイズライリの諸子に示されたる示現の恐るべきに搖撼し光榮は、其力最大にして、山は烟を發し、山の上よりイズライリの諸子はモイセイの命に循ひ己を淨めて神の聲を聞き神の示現を見るに堪ふる者とならんが爲に、三日の間準備整裝せり、しかれども時至るや其光の顯現と其轟く聲の強きとを受る能はざりき。

今は然らず、其來臨を以て世界に其思寵を注ぎ給ふや、彼は降るに天變地異に於てせず、火中に於てせず、恐るべき強き聲に於てせず、却りて羊毛にそゝぐ雨の如く、靜に地上に落る點滴の如くして、他の方法により我等と談話しつゝ現はれ給へり、何ぞや、彼は其尊威を肉體の帷幕の中に隱すこと、寶庫に藏めたる如くして、其指揮に

より童貞生神女マリヤの懐に於て己を建造し、我等の間にありて我等と談話し給へり、是れ我等看望するとき彼は我等が族中の一人にして我等と談話するを見つゝ慈かざらん爲なり。

故に凡て造物主が其體に衣て現はれ給ひし衣服を服する者はハリストス其ものを衣るなり、何となればハリストスは其受造物に現はれ給ひし此同形を以て全人間と共に居りて、全人間も其内部の人に之を衣んを願ひ、此同形を以て其同僕に現れ、尊敬と外部の光榮を服するに代へて之を以て飾らるればなり。故に有言無言の受造物はすべて此同形を衣たる人を見て、之に伏拜すること、主人の如くし、以て此同形を衣て消光し給ひし自己の主宰を榮せんとす、げだし如何なる受造物は謙徳ある者を尊視せざらんや。さりながら謙徳の光榮の衆人に現はるゝに至る迄は、此の聖徳を滿るの覩は輕視せられたりき、然れども今や此謙遜の大徳は世の目前に照り輝きて、すべての人は何れの處に於ても見るを得る此同形を尊ばざるはなし、此に依りて受造物は己の創造者と造成者の現象に接するを賜はりぬ、故に此同形は眞理の敵の爲にも輕んぜられざるなり、之を得たる者はすべての人間より貧しといへども、之を學びたる者は之を以て飾らるゝこと榮冠と紫衮衣とを以て飾らるゝ如し。

人は決して謙徳ある者を嫉妬を以て苦めず、言を以て傷つけずして、彼を輕んぜざるべし、げだし彼の主宰が彼を愛するにより彼は衆人に愛せらるゝなり、彼は衆人を愛して衆人も亦彼を愛す、人皆彼を慕ふ、ゆゑに何の處に近づくも到る所彼を見ることと光の天使を見る如くして、彼に尊敬を加ふ、もし智者或は教師は言はんとするも、彼等は默止す、何となれば彼等は言ふの權利を謙徳ある者に讓ればなり、衆人の目は彼の口に注ぎて、如何なる言の其口より出づるを待つ、すべての人は彼の言を待つこと神の言を待つ如し、彼の簡短なる言は智的想像を說明する賢哲の格言と同じ、彼の言は智者の耳に甘きこと、砂糖と蜜の咽に甘きより甚し、彼は言語に嫻はずして、其狀貌は卑しく且微なりと雖、彼の裁決は人々の爲に神の裁決の如し、謙徳ある者を侮蔑して言ひ、彼を視て活潑の人と爲さゞる者は、神に向つて其口を開く如し、しかれども輕んぜらるゝと同時に、謙遜なる者が彼の眼中に輕んぜらるゝなり、謙徳ある者は有害なる野獸に近づの尊敬はすべての受造物に於て守らるゝなり、謙徳ある者は有害なる野獸に近づかんか、僅に眼を擧げて彼に向ふや、彼等が猛烈は鎭まりて、彼に近づくこと其主人に近づく如くし、其首を俯伏して、彼の手と足とを舐る、何となればアダムが罪を犯

す以前に野獸を集め、樂園に於て彼等に名を命せしとき、アダムより發したる香氣を讒德ある者より感ずればなり。此香氣は我等より奪はれたり、しかれどもイエスは來りて之を新にして再び之を我等に賜へり。人間の馨香は之を以て治せられたり。又讒德ある者は死を致すべき爬蟲に近づくか僅に接近して其手を彼等の體に觸るゝや、彼等が腐蝕性と死を致すべき毒氣の烈しきは熄み、其手を以て彼等を遺すこと蝗の如くせん。彼は人々に近づくか人々は彼に注目すること主人に注目する如し。我れ何ぞ人々を言はんや、魔鬼だも其の全く無恥なると煩悶すると思念の全く高慢なるとに拘はらず、彼に來るとき、其奸計は破れ、其狡黠は爲す無くして存せん。

今や我等は神に依る讒遜の光榮の大なると讒遜に隱るゝ力とをあらはしたるにより、讒遜の如何なると人は如何なる完全により何時之を受るを賜はるとをあらはさん。又外見上讒遜なる者と眞の讒德を賜はりし者との間の區別を爲さん。讒遜は或る奥密なる力にして、完全なる聖者がすべての行爲を成就せし後受る所のものなり。此力は他にあらず、獨り德行に完全なる者に恩寵を以て與へらるゝものにして、天性此を受るの能ありて之に堪ふるによる、何となれば此德行は自から一切を含有すればなり。故に如何なる者たりとも、すべての人を讒德ある者と看做し得べきに非ずして、たゞ我等が述べたる定式に相應したる者のみを讒德ある者と爲すべし。

天性讒抑にして沈默なる者、或は善智なる者、或は溫柔なる者は皆既に讒遜の階段に達したるに非ず。反つて誇るに足るべきものを奥密に有すれども、誇らずして、其意に之を匿芥視する者は眞に讒德ある者なり。然れども誰か罪と過とを想起し、高ぶらずして之を記憶するも、其心は碎けずして、其智は此等のことを想起するとき驕傲なる思の高處より降る迄に至らざる間は、たゞひこは賞讃すべしと雖も、其者を讒德ある者とは名づけざるなり。何となれば彼には驕傲なる思の猶存するあり。て、彼は未だ讒遜を得ず反つて狡猾に之を自己に近づくるによる。ゆゑに我が言ひし如く賞讃すべしと雖も、讒遜は未だ彼に屬せず、彼はたゞ讒遜を願ふのみにして、讒遜は彼に有る無し誰か己の思慮を以て讒德の爲に源因を案じ出すの要あらされども、すべてに全く且自然に勞せずして讒遜を得たる者は、全く讒德ある者なり、彼はすべての人間と天性とに越ゆる或る大なる賜を自己に受けたれども、己を視ること罪人の如くし、何等の價値もあらずして自分の目にて自分を輕んずる人の

如くす、然れども あらゆる靈性の奥義に悟入し、全人間の能くし難き事をすべて確實に成就すると同時に、自から己を認めて何の價値もあらざる者と爲すなり。而して此事は狡猾を以てするにあらず、又強ふるに非ずして其心中に於て此の如きなり。

此の如き者となりて、かくの如く己を變化すること天性の如くなるは人に能ふべきか或は能はざるか。

終りに人が受る所の奥義の力は人に此事を成就せしむるにすべての德行に於てして、人の勞を待たざるに疑を容るゝなかれ。是れ即願なる使徒等が火の形狀に於て受けたる能力なり。此能力の爲に救世主は彼等に誡命して言へり、上より能力を受るに至る迄は、イエルサリムより離るゝなかれ、行實一の四と、此のイエルサリムは是即德行にして、能力は即謙遜なり、而して上よりの能力は即撫恤者なり、別に之を解釋すれば撫恤の神なり。此事につきては神の書に奥義は謙遜なる者に啓示せらると言へるも亦此義を示す。謙德ある者は奥義を表顯する此の啓示の神を其內部に受るを賜はる。故に或る聖人は言へり、謙遜は神聖なる直覺を以て靈魂を成全すと。

終りに人は自分にて謙德の尺度に達せりと其心に思ふを敢てするなかれ、時として人に起る痛悔の一念により、或は人に流るゝ少許の涙により、或は人が天性に有し又は盡力を以て占有したる一の或る善行によりて凡ての奥義の充滿を成すものと悉くの德行の寶藏となるべきものとを得るあらば、我言ふ、是れ皆此の賜と共に少許の練習を以て得たりと思ふなかれ。之に反して人は悉くの反對の靈に勝ち、諸の道德の行爲中顯然に行はざるものと未だ得ざるものとを一も殘すあらずして、敵の悉くの城砦に勝ち、之を從はしめて、其後此賜を受けたるを自から精神にて感じ、使徒の言ふ如く「神は我等の神と共に證す」（ロマ八の十六）といひ得るならば、是れ即謙遜の完全なる。之を求め得たる者は顧なり、何となれば彼はイイエスの襲を每時接吻して之を抱けばなり。

しかれども もし人は質問して「予は何を爲すべきか。如何なる方法を以て謙遜を受るに堪ふるを得たりと爲に思ふや、視よ之と反對なる思は予の心中に廻轉するを見る、之によりて今は失望に陷ると言ふならば、此の質問者には左の答を與へらるべし、門徒は其師の如くなり、僕は其主人の如く

なりて足れりと言ふ是なり〔マトフェイ十の二十五〕之を誡命して此の賜を授くる者の讒謗を得たる所以を見て彼に法るべし、然らば之を得ん。彼は言へり〔蓋此世の君來る、彼は我に何をも有するなし〔イオアン十四の三十〕悉くの德行の完全により讒謗を受くべきを見るか。此の誡命を與へたる者に效はん。彼は言へり〔狐には穴あり、天空の鳥には巢あり、唯人の子には首を枕する處なし〕〔マトフェイ八の二十〕然れども此を言ふはすべて萬姓諸族の中に成全成聖せられて充滿に達したる者等より榮せらるゝ者にして、彼は彼を進はしたる父及び聖神と共に今も何時も世々に至らんアミン」

第五十四　說教

問答各種

問　すべて慾を刺激する所のものに遠ざかるは宜しきか。靈魂は戰を逃れて自から安息を選ぶときは、如此の逃避を以て靈魂の勝利と爲すべきか、將た敗走なるか。

答　簡短に之を答へん。修道士には凡て惡慾を刺激する所のものに百方遠ざかること肝要なり、縱ひ最小の慾なりとも之を動作にみちびきて慾を成長せしむるものを自から斷割し、私にも又公にも稱する修道士の名と其行爲を一致せしめんこと肝要なり。思ふに此の內部の人の近きに止まるを以て、我等が中に居るパリストスに依賴する我等の希望を知識と全く合一せしむるに至らんがだし我等が智力は彼處に獨り閑靜に止まる時は慾と戰ふものは最早智力にはあらずして恩寵なるべく、たゞ其時は慾其ものも彼に於て發動せざるべし

問　もし人が靈魂の潔淨の爲に爲す所あらんに、他の人々は之を了解せずして其人の靈的行爲の爲に誘はるゝあらば、他の人々の誘はるゝが爲に人は其神聖なる行爲より自から遠ざかるべきか或はこは見る者の爲には害ありといへども其目

的の爲に有益なるものを爲すべきか。

答　此事につきて言はんもし人は其智を淨むるが爲に有益なるものは何になりとも先の神父等より受けし如く正しく之を爲して、此目的に達する、即潔淨に達する、を自から假定したれども他の之を知らざる者等は彼の此目的の爲に誘はるゝ者にあり、彼が節制し、或は禁食し、或は嚴重なる閉居を守りて其目的の爲に有益なる所のものを爲すは他の人々の誘はれんが爲に、あらずして其智を淨めんが爲なり。しかれども誘はるゝ者は彼の行爲の目的を知らざるにより彼を非難するならば是れ其者は自から怠慢に委して彼が己の爲に假定したる靈界の目的即其靈魂の潔淨を瞭解するに堪へざるにより實に責を受けん神聖なるパウェルに彼等の事を記して言へり「蓋十字架の敎は滅ぶる者の爲には愚なり」（コリンフ前一の十八）然らば今は如何に爲すべきや。十字架の言は其言の能力を覺知せざる此等の人々の爲に愚とせらるゝにより、パウェルは默して傳敎せざるべきか。さりながら視よ、今も十字架の敎はイウデヤ人の爲又エルリン人の爲に躓きとなり、又誘となる、之によりて彼等の誘はれざらんが爲に我等も眞理を默すべきか。しかれどもパウェルはたゞに之を默せざるのみならず、大聲に呼で言へり。

「我等に在りては我等の主イイスス、ハリストスの十字架の外に誇る所なし」（ガラテヤ六の十四）と。十字架に於る此讃美を聖者の宣べられたるは他を誘はんが爲にあらずして傳ふる所の十字架の力の偉大なるによる。ゆゑに聖なる者よ汝も己の爲に神の前に假定して、汝の良心が咎めざる目的と相照して其行爲を成すべし。而して其の行爲は神の書と聖なる諸神父より受けし誡命とに依り之を試査すべし。もし此等のものは汝を罪せずんば他の誘はるゝを恐るゝなかれ。げだし衆人を等しく信せしめ、或は衆人の意に適合して奧密に神の爲に勞するを得る者は一人も之あらざるべし。

嗚呼福なる者よ、自己の全力を用ひ、我が諸神父の進行したる正しき路により、彼等が次第順序を經て漸々に昇りたる階級にしたがひて、靈魂の潔淨に實に進行する修道士は福なるかな、彼は審智と患難を忍耐するにより高められて、潔淨に近づくに至るべく、他の狡猾なる次第順序に依るにあらざるなり。

靈魂の潔淨は我等が性の元始の賜なり。慈より淨められるゝなくんば靈魂は罪なる病より愈されずして犯罪の爲に失ひたる樂を得ざるなり。もし誰か淨潔を賜はらば、即心の健全を賜はらば、其の智は實に靈的感覺を以て樂むを實際己れに受けん

とすげだし彼は神の子となり、ハリストスの兄弟となりて、其遭遇する善なるものをも悪なるものををも感するに暇あらざればなり。

願くは神は其旨を我等に認識せしめ給はんことを、我等常に、其旨を行ひて、我等が主イイススハリストスの恩寵と仁慈に依り永遠の安息に達せんが爲なり。悉くの光榮と尊敬と叩拜は彼に歸して、今より永遠無窮の世に至らん「アミン」。

第五十五　說教

克肖なる父、奇蹟者シメオンに與ふる書。

聖なる者よ、汝の書は單に形容せし文字には非ずして、反て之により汝の我に對する愛を顯はし且證することを鋭を以てするが如し。汝は予を想像せし如く自から之を書にもあらはして、非常に予を愛する所以を實際に表し、隨て其強き愛により予の爲に其最をも忘れたり。げだし予が汝の成德に當すべき所のものと、我れ自己の救の爲に盛るや、汝に問ひて其眞理を汝より確知すべかりしものを汝は大なる愛により先んじて予に書せり、思ふに是れ哲學の工夫により成せるものにて、此の精

徹なる問題を予が前に提出して、予の靈魂を深く沈沒せる怠慢より覺醒するが爲ならん。然れども汝が予の爲に量を忘れたる此愛により、予も己の乏しきを忘る、故に予が注意する所のものは予の之に堪へ得るや否やにあるに非ずして、汝の祈禱の如何して遂げらるべきかにあり。げだし予は己の爲に量を忘れて、汝も其願の成ちんことを祈禱により神に願ふ時は、汝の祈禱により願ひしものは神を以て汝に與へらるゝこと其忠なる役者に與へらるゝ如くならんこと疑なし。

書中第一の問題は次の如し、

問　主の誡命は盡く守らざるべからざるか或は此等の誡命を守らざる者の爲にも救はるべき方法ありや。

答　此事は意ふに何人も問ふの必要あらざるべし。げだし誡命は多しと雖も、必ず守らざるべからざるにも及ばざりしなら救世主は之を與ふるにも及ばざりしなり。又必要もあらざる餘計の事は一も言はざるべく、又爲さゞるべきによる。主宰が來りて生命を施す誡命を吾人に與へ之を以て吾人が慾に溺るゝ狀態を洗濯する療法となし給ふや、其目的は靈魂を最初の犯罪の爲に生じたる敗壞より淨めて、元始の狀態に興復するにあり。病める身體の

爲に療方ある如く慾に溺るゝ靈魂の爲に誡命あり。誡命は罪なる靈魂を醫すが爲に慾に對して立定せられしものなることの明白なるは、主が其門徒に明に告ぐる所の如し、曰く「我が誡を有ちて之を守る者は、是れ即我を愛する者なり、我を愛する者は我が父に愛せられ、我も彼を愛し、且己を彼に顯さん」（イオアン十四の二十一）、又曰く「爾等若し相愛せば、世は之によりて爾等の我が門徒たるを知らん」（イオアン十三の三十五）。愛は心靈の康健の時に求め得らるべくして、誡命を守らざる靈魂は康健にあらざること明けし。

誡命を守るは靈的なる愛に比すれば更に下し。げだし畏により、或は未來の順報の爲に誡命を守れども、愛に依るにあらざる者の多きが爲に、主は愛に依り誡命を守らんことを多く勸誘し給ふ。これにより靈魂に光を與へん爲なり。主は又更に言へり「人々爾等の善き行を見て天に在す爾等の父を讃榮せん爲なり」（マトフェオ五の十六）といへり。しかれどもし誡命にして守られざるときは、主の敎へ給ひし善き行は必中に顯はるゝあたはざるべし。主は又誡命は眞理を愛する者の爲に重擔にあらざることを告け給へり、げだし言ふ、凡そ勞苦する者及び重を任ふ者は我に來れ、我爾等を安んぜしめん、蓋我が軛は易く我が任は輕ければなり」（マトフェオ十一の二十八、三十）。又主は自から悉くの誡命を我等勉勵して守らざるべからざることを告も誡命し給へり、曰く「此の至小さき誡の一を毀ち且是の如く人に敎へし者は天國に於て至小さき者と稱へられん」（マトフェオ五の十九）。我等が救の爲に立定せられたる此のすべての誡命の後に於て、悉くの誡命を守るを要せずとは言ふにを能はざるなり。もし之を守らずんば靈魂其ものは潔淨なるものとなる能はざるべし。主が誡命を與へ給ひしは慾と罪とに陷りしより淨めん爲に療法として與へ給ひしなり。

誡命を破りしにより吾人に敗壞を輸入したることは汝の知る所なり。されば誡命を守るにより健康の再び回復せらるゝことも、最早此により分明なり。之に反して誡命を行ふなくんば、先つ彼の必靈の淨潔に引入るゝ路に由り行くに至る迄は、必靈の洗淨を願ふことも望むことも我等は爲すべきにあらず。誡命を行ふなきも神は恩寵にはも必靈の洗淨を吾人に賜はんと言ふなかれ。是れ主の制裁にして敎會もかくの如きを願ふべきを我等に命せざるなり。イウデヤ人等はベセシよりエルサリムに歸るに當り、天然に開通せる路を進行し、此の如くして、己が聖城に達し、主の奇蹟を見たりされどイエゼキイリは天然以上なる默示の動により、攝取せ

られてイエルサリムに到着し神妙なる默示により將來復興の親見者とはなりぬ。心靈の淨潔のことに關しても此と同きものあり。或者等は其踏破せる正しき路に由り、多難なる生活の間に於て誡命を守りしにより、其血を以て心靈の淨潔に達するも之と相反して他者は恩賜により吾人に賜はるべき淨潔を祈禱により願ふことも、又誡命を行ひて送るべき生涯を辭することも許されざるは奇といふべし。げだし如何にして永生を圖ぐべきかと問ひたる富者に主は明に告げて言へり、誡を守るべしと。然るに富者が重ねて何の誡なるかと問ふや、先づ彼に惡行を止むべきを命じて其後天然の誡命を記憶せしめたり。然るに更にいよ〳〵之を確知せんと欲せば汝の所有を售りて貧者に施し、己の十字架を執り來りて我に從へ〔マトフェイ十九の二十一〕といへり。是れ言意はすべて己れに所有するものゝ爲に死して其後我に於て生きよ、慾の舊世界を脫して謀とに出づる知識を脫ぎ棄てゝ、其後眞理の單純なる知識を衣よとなり。げだし主は己の十字架を擔へと言ひて、之によりすべて世にゆるものゝ爲に死すべきを人に敎へ給へり〔マトフェイ十六の二十四〕而して人が自から舊人を殺し、或は慾を殺す時は告げて曰へり、來りて我に從へ〔ヨハネ十の二十七〕とは、爾なるパウェルの言ひし如し、曰く「血肉は神の國を嗣ぐ能はず、朽つる者は朽ちざる者を嗣かざらん」〔コリンフ前十五の五十〕又言ふ「慾の中に朽つる舊き人を脫げ其時は人を造りし者に似たる知識を以て新しき者を衣るを得ん」〔エフェス四の二十二、二十三〕又言ふ「肉の事を念ふは神に對して仇なり、神の律法に服せず、且服する能はず、げだし肉に居る者は肉に屬するものを念ひ、靈に屬する念を以て神の悅を爲す能はず」〔ロマ八の七、八〕聖なる者よ、汝は心の潔淨と汝の所謂靈に屬する念を愛するならば、主宰の誡命に就くこと、我等の主宰が命じ給ひし如くすべし、曰く「生命に入るを愛せば誡を守れ」〔マトフェイ十九の十七〕之を守るは之を與へし者を愛するによるべく、畏懼により、或は報賞の爲には非ざるべし。げだし義中に隱るゝ樂を味ふは義を行ふ時にあるに非ずして、義を愛する情の我等が心を蝕する時にあり、又罪人となるは、罪を犯す時にあるに非ずして、罪を嫌はずして悔いざる時にあり、されば昔も今も人中誰か誡命を守らずしてありとは予は言はざるべし。之に反して予は思ふ、誡命を守らず、禍なる使徒等の跡を追ふて行かざる者は、聖なる者と稱せらるゝにも當らずと。

汝が論及する所の福なるワシリイと福なるグリゴリイが野を愛する者となり、教會の柱石となり、光となりて默想を讃美し、默想に達しれるは誠命を行ふを練習せざる時にありしに非ずして、彼等は最初より世に居りて社會に住する者の守らざるべからざる誠命を守り、其後靈魂の潔淨に達して靈的直覺を賜はりぬ。彼等が城中に居りし時は、旅者を受け、病者を眷み、裸者に衣せ、勞する者の足を洗ひ、人が彼等を强て一里を行かしめば、之と偕に二里を行きしを〔マトフェイ五の四十一〕保證するなり。而して社會の生活に要用なる誠命を守りて、其智は元始の堅固と神聖にして奥妙なる直覺を感じ始むるや、其時彼等はいそぎ出でゝ野間の默想に避きて此時より其内部の人と共に止まりぬ。ゆゑに彼等は恩寵により召されてパウエルスの教會の牧者となるに至るまでは思辨者となりて靈的直覺を守りぬ。

汝が論述せる大ワシリイは時により共住生活を讃美したれど、時により遁世を讃美せしことに關しては、予按ずるに眞實勉勵する者はおの〳〵其力に應じ自から豫想したる差別と目的とにより二の方法を以て己れに益を求むるを得べし。けだし衆人と共住するは時により有力者の爲に益あれども、時により劣弱者の爲にも益あり、野に於るも之と同樣なるべし。衆人共住は心靈の健全に達せし者と、智が靈

を以て筌解せられし者及び人間の生計の爲に已を殺せし者の爲には、もし其行を節制するならば、害とならざるなり。而して彼は神を以て此事に召されたるによりたゞに自から益をうくるのみならず他の神父等の名により他の人々をも益せん。しかれども誠命の乳に養はれていよ〳〵成長せんを要する劣弱者の爲にも衆人共住は同く有益にして、學習し、啓發し、試惑の爲に苦み倒れて又往々起き、心靈の健康を得るに至る迄は有益なるなり。乳汁の流れに養はれざる嬰兒あるなく、誠命の乳に養はれずして上達し、慾に克ちて潔淨を賜はる一の修道士もあらざりき。野も之と同じ、我等が已に言ひし如く、或時は弱くして遁逃により救はるゝ者の爲に益あれども、或時は有力なる者の爲に益あり、前者の爲にも益あり、後者の爲に益あるは彼等慾念を燃し、之を成長せしむる爲に煽となるべきものゝ備はらざるが爲にして、有力なる者の爲に益あるは彼等慾を養ふ所のものに圍まれて惡者の戰を逆へんとする時に於てなり。實に汝の言ひし如く野は慾を眠らしむるなり。しかれども人に要求する所のものはたゞ此の一つにあるに非ず、即慾を眠らしむるのみにあるに非ずして、之を根絶するにあり、即我等に向つて頑固に逆ふとき之を克服するにあるなり。眠れる慾はもし之を働かしむる源因に會ふならば、直に惹起せられん。

然れども汝は言はん、慾を眠らしむるは獨り野のみにあらざるを汝は如何して知るか。記せよ病中或は大なる不快の時には慾は我等を攻撃するの力あらざることを、而してたゞに此のみにあらず彼等は互に地位を讓るときは互に眠らしむることも稀なりとせず。げだし虛榮の慾は其地位を放蕩の慾に讓り、放蕩の慾は又好名の慾を鎭むるなりと。野を願ふはたゞに慾を眠らしむるが爲のみにあらず、外誘に屬するものゝ缺乏して、あらゆるものより遠ざかるにより、我等に智を增さん爲にも、パリストスに於る靈的內部の人の我等に於て新にせられん爲にも、何れの時にも我等は自から己を省察する者とならん爲にも、我等の智が每時儆醒して、己を保護し、其希望の記憶を奪はれざらん爲にも之を願ふなり。

汝の第一問に對してはもし此事の爲に必要の起るあらんも、意ふに之を以て充分なるべし。此後我等は第二問につきて述ぶべし。

其問は左の如し、

問　我等が主は我等を天の父の大德に肖せしめん爲、我等に憐憫を命せり、然るに修道士は憐憫よりも默想を尙ぶは何故か。

答　視よ、此に對する答は次の如し。汝が此の大なる生涯、即默想のことを研究するに例と標準とを福音經により顯はせるは善し。我等は憐憫の事を論究せん、然れども或る餘計なるものゝ如くこれを無視することを力めざらん。主が我等を天の父に肖せしめん爲に憐憫を命じたるは憐憫は其者を神に近づかしむるによる。ゆゑに我等修道士たる者は憐憫を除外せずして、然も出來るだけ配慮と援助とより遠ざかることを盡力じつゝ默想を尊奉するは、其時我等と遭遇する緊要の事に反對せんと欲するにはあらず、反つて默想に意を致すは神を思ふに專必し、之により潔淨を攪亂の後に大に自から回復して、神に近づくを得んが爲なり。もし時として兄弟に何か欠くべからざる緊要の事の起るありて、我等に請求するときは、此を等閑にすべからず。ゆゑに不斷己を强ひ、すべて靈智ある性に對して何の時も內部に於て憐憫なる者となるべし。げだし主の敎は我等をかくの如く勸誘し、我等が默想の特質も此に在りて、或る空虛なるものにあるに非るなり。我等はたゞに此の內部の憐憫を守るを要するのみならず、事情と必要が助を請ふある時は其愛を公然とあらはすことをも等閑にすべからざるなり。況や默想者は己を完全なる默想に一定して何人にも遇はざらんことをさへ定めたるには非ずして、己の爲に默想を一週間或は七週間指定する者の規則に從ふ時に於てをや。げだしかくの如き者は規則を

以て指定せられたる時の間にも、近者に對する憐憫の行爲を止めて此の時の充つるを待つべからず。たゞ極めて無情なる戰想を守らん。我等は知る近者に對して愛なくんば智は神聖なる談話と愛とを以て照さるゝ能はざるを。

今日賢明なる修道士にして食と衣とを己れに所有するも近者の飢ゑ且裸體なるを見て其有する所のものを彼に與べす、幾分か貯ふる者之ありや。或は誰か同一の肉體を有する人が病に疲れ、癈弱の爲に苦みて看護に必要を有するを見るも、獸想を愛するよりも更に重んずる者之ありや。若しかくの如き事のあらざる時は、我等は近者に對するの愛と慈悲とを心に守らん。けだし此の事の切近せる場合に於て神は我等より其愛を實地に行ひて之を表はさんことを要求す。故にもし己れに何物をも有せずんば、貧者の爲に己を愛慮と擾亂とに投するを我等に許されずして、何物をか有するならば此事を我等より要求せらるゝこと明なり。且我等が受る所の生活の種類により、人々と共に住すると其集會仲間關係するとより遠ざかるならば、我等は己の庵と修道的隱遁の居所とを棄て、世に徘徊し病者を訪問して、此の如きの事に時を送るに己を委すべからず。けだしかくの如くならば高きより卑きに遷るの嫌あること明なり。然れども誰か多人の社會に居り、其近きに人々ありて、彼等と共に止る所の其地に於て健康或は疾病の時に當り他の人々の勞により安んせしめらるゝならば、自らも同く之を爲さゞるべからずして、其假僞なる獸想を外貌にあらはすべからず、是れ自己にはすべての慰安を他より要求すれども、自己と同一の形貌を有する肉體の子の困迫なる境遇にあるを見るとき、確言すれば棄てられて苦む所のハリストスを見るとき之に遠ざかり且は之より隱るゝことを爲さゞらん爲なり。凡てかくの如き者は無慈悲なりとす。

アヴワイダのイオアンとアルセニイとを予に記憶せしむるなかれ、彼等の中己をかくの如き務めに適用せし者ありやといふなかれ。汝はかくの如き人々の何の行爲にも近寄らざるなり。げだし汝は如何なる慰安よりも遠ざかること彼等が遠ざかりし如くならば、主はかくの如き務めを願みざるべきを汝にも命せん。しかれども汝は彼等の完全より遠ざかりて、如何なる時にも肉體の勞に居り、人々と與に交るならば、何故汝は誡命(己の力に準じて汝が守らざるべからざる)を等閑にし、聖者の大なる生涯を送ると詐稱して其に近づくことを

もなさゞるか。

じかれごも予は兄弟を等閑視する者の爲に證責となるべき聖大マカリイの行狀を記憶せざる程等閑には非ざるなり。マカリイ一日行きて病める一兄弟を訪ひけるが、大人は病者に何か欲するなきや否やを問ひけるに、病者は答へて言へり「軟かなる餅少許を欲す」と（當時すべての修道士は大抵一年に一度自から餅を燒けり。是れ其土地の風なりき）福なる此大人は最早齡九十歲なりしも、直ちに起ちて、スキトよりアレキサンドリヤに至り、其聖中に携へたる乾餅を以て軟なる餅に換へ、之を以て兄弟に供したりき。

然るにすべて當時の修道者中最老練にして沈默と冥想とを大に重んじたる人あり、父アカフンといひけるが、彼は大マカリイの如くにして更に大なる事を爲しぬ。此の奇異なる人は大なる豁寬の時に當り、自己の製作品を賣らん爲に市場に至りけるが、一の病臥せる旅人を見たり、彼は其病者の爲に家を賃して彼と共に居り、手づから作工し得たる所のものを以て彼の爲に費し、病者の健康を復するに至る迄六ケ月間看護を爲したりしとぞ。さて此のアガフォンは彼の事を傳ふる如し）言へり、「余は瀕者を見て彼に自己の體を與へ、己れに彼の體を取らんことを願ふ」と。是れぞ

即完全の愛なる。

至愛者よ、神を畏るゝ者は誡命を守らんことを好願して、之が爲に配慮す。ゆゑに其求むる所のものを己の手に得らるべきを實際に認むるときは、之が爲に危難にも服せん。生命の施與者は誡命の全きを他の悉くの誡命を包容する二の誡命に聯結して、其中に籠めたり、即神を愛すると、又神の造物を愛する、即神の像を愛するとの二誡に籠めたり。而して第一者は靈的直覺の目的を充たしむれども、第二者は直覺と實行とを共に充たしむるなり。げだし神の性は純然、蕪雜不可見にして何物にも必要を有せざるは固よりにして、自覺も其深思冥想に際しては身體上の働にも、如何なる協力にも、想像の粗きにも、必要を有せず、其働は單純にして、崇拜せらるべき源因者の純然にして肉體上の感覺に超越するに準じ、智力の唯一の部分に顯はるゝなり。之に反して第二の誡命即愛人なるものは性の二樣なるに依り智の作用により見えずして行はるゝものは肉體を以ても同樣之を行はんことを願ひ實行により遂ぐる所の誡命は自覺を以ても遂げんことを要するなり。

人は二の部分より成る、即靈魂と肉體とより成る、かくの如く人に於るすべてのも

のも其成分の二重なるに準じ、二樣の慮を要求するなり。げだし實行は何處に於ても直覺に先だつにより、卑下なるものを先づ實地に行はずんば、何人も此の高上なるものゝ範圍に昇り達する能はざるべし。されば今日近者に對する愛を求め得ることに關しても、もし其行爲に機會を與ふる時と處とに應じ力に從ひて身體を以て行ふを得べき部分の殘るあるときは、靈魂を以て之に進歩せんと敢て言ふ者は一人もあらざらん。げだしたゞ之を實行することは確信すべきものとなりて之を知ることを得べし。ゆゑに此事に於て出來る丈信誠にして眞實なるを得る時は、何物とも比する能はざる純然なる槪念により高尙神聖なる直覺の大なる範圍に到り達すべき力を靈魂に與へらるゝなり。之と相反して人は近者に對する愛を見ゆる行爲により身體を以て途ぐるを得べきなき處に於ては、近者に對する我等が愛は、たゞ意思にて行はるゝものを以て神の前に充分なり、矧や閉戸的默想の行爲と之に進歩するとは其の練習に於て充分なるものさして存するに於てをや。

しかれどももし我等は默想のすべての部分に於て缺る所あらば、之に誠命を合併して、其不足を補はん。即官能的實行を合併して之を補はん。而して此は我等が生命の平安を補ふものなるにより、我等の身體を苦しめて以て之を遂行せん、もし我等は通世の名に依り徒らに勞するならば、我等の自由は己を肉に從はしむる爲の口實と認められん。げだしすべて人々と交際をなさずして、思を全く神に沒する者はもし一切の爲に死して之に遠ざかるならば、人々に事へて其意を悅ばすべきことを彼に命せられざるは明なり。さりながら七週間或は一週間默想の規則を守るも其規則を行ひし後は人々と相會し、其に相交り彼等と共に己を慰安して憂に居る兄弟を眷みず却て之を以て週間の規則を嚴守すと思ふならば、其者は無悲慈にして且殘忍なり。彼は慈悲の缺乏により、自尊により、又謬想により、己を屈下して此の如きの行爲に關係するをなさゞることは自から明白なり。

病者を輕んずる者は光を見ざらん。哀む者より己が面を背ける者の爲に日は暗黑ならん。而して苦む者の聲を輕んずる者の子は盲目にして己の家を手探にて搜さん。

己の無智を以て默想の大なる名を辱めざらん。げだしすべての行爲に時と處と差別とあるべし。其時はすべて爲す所の事の神意に適するや否やは神に知られん。然れども之無くんばすべて完全の尺度を心懸る者の爲す所は無益なり。己の弱きを

他の慰問せんことを待つ者は己を讒るべく、近者が誘惑にかゝる時は彼と偕に勞すべし、何等の自尊にも邪なる奸計にも遠ざかりて默想的行爲を喜んで遂げん爲なり。練達なる聖者の一人の言へるあり、修道士を驕傲の魔鬼より救ひ、淫慾の燃ゆるに際して貞潔を守るに助くるを得るは、彼の病床に橫たはりて肉體の患に胃さるゝ者を訪問するに如くはなし」。

讒遜の必要の爲に如此の思慮あることを合するならば、天使的默想の行爲は大なり。げだし何時窃去られ又は奪ひ去らるゝは自からも知らざればなり。兄弟よ、予が此事を言ふは我等默想の行爲を等閑にして之を輕んぜんが爲にはあらず。げだし我等は何處にも默想を勸說し、今も其言に矛盾すとは自から認めざるなり。何人も予が言ふ所の中より或ものを分ち取るなかれ、又引拔くなかれ、他のすべてのものを側に置き、たゞ此一事をのみ愚にして其手中に留むるなかれ。多くの場所に於て予は左の勸諭を與へたりしことを記憶す、即何人にか己の庵中に於て全く閑散なる者となる場合があるならば、之により不意に吾人を捉ふる劣弱の奈何ともすべきなきにより、庵中より全く出でんことを思ひ、外界の爲す所のものを庵中の爲すといひしことありき。然れども予が全く出

づといひしは左の事には非ず、たとへば我等は時として幾週間の間か外に出づるありて、其間に近者の安然と活業とを求めざるを得ざる緊要の事に際會するならば、汝も此を以て無用と名づけ無益と認むるなるべし、之に反しもし誰か己を以て完全なる者と思ひ、神の前に止まるとすべて見ゆるものより遠ざかるとを以て此世に居る悉くの者より上なりと思ふならば、此の誠らしき口實に依るも汝は之を肯はざるならん。神の敎導の下に行はるゝ思慮ある行爲は大なり。神は其惠みにより我等に神の言を遂行するを賜はらんと欲する事は爾等も是の如く之を人に行へ」（ルカ六の三十一）。彼に光榮と尊敬は歸す「アミン」。

又汝は其書にあらはして言へり、神を萬物の上に愛さんと願ふ修道士は、己が靈魂の潔淨のことを慮らざるを得ずと、もし之が爲に充分の力を有するならば汝の言ふ所太た好し。しかれども汝は又いふ靈魂は未だ慾に克たざるにより祈禱に於て勇氣を有せずと。これにより予は無知と雖彼と此との矛盾は予の目前に顯はるゝなり。げだし靈魂は慾に克たずんば、如何して潔淨のことを慮るを得ん。げだし神龕なる眞實の規則は靈魂が未だ慾に克たざるときは、此事を彼に命せざるにより、是れ汝は眞實より上なるものを切願するを示す。げだし人の願ふ所のものにより愛

する所のものを認知し得べきには非ずして、愛する所のものにより願ふ所のものを推知し得るなり。〔人が愛さゐる所のものは願ふこともせざるなり〕慾は潔淨の門前に閉されし門なり。もし人は此の閉されし門を開かずんば、心の無玷潔白なる境園に入らざるべし。靈魂は祈禱の時に勇氣を有せずと汝の言ふは正し。げだし勇氣は慾より上なるのみならず、潔淨よりも上なり。此の接續の順序の如何なるを予は汝に告げん。忍耐と己を强ふることを以て潔淨の爲に慾と戰ふこと是なり。ゆゑにもし靈魂は慾に克つならば、潔淨は求め得らるべくして、眞の潔淨は祈禱の時心に勇氣を得しむるなり。

今此の論及する心靈の潔淨を祈禱に於て願ひつゝ、神の書と我等の諸神父が我等に命ずる所のものを神に願ふならば、我等が願は驕傲自尊の行となるべくして、何故修道士は遁世的生活に入るかとの責を免れざるべし。さりながら聖者よ、予は思ふ子は其父を疑ひ左の如き言を以て父に願ひ「我に術を敎へ給へ」或は「我に或物を與へ給へ」と言はざらんかくの如く推量計較して「神に願ひ、我に是〳〵是のものを與へ給へ」と言ふは修道士に不適當なり。げだし神の照管の我等に於るは父の子に於るより超越することは汝の知る所なり。故に或は思を以て犯せるとに論なく、我等の意志以外に犯せる罪の源因の爲には、讒遜して之が爲に涕泣し、傷める心情により稅吏の言を以て言ふは要するに我等に適當なり、曰く「神よ我れ罪人を矜み給へ」と〔ルカ十八の十三〕而して主の敎へ給ひし所を陰にも陽にも行ひて言ふべし、曰く「凡そ汝等命せられし事を行ひし時には謂へ我等は無益の僕なり行ふべき事を行ひしのみ」と〔ルカ十七の十〕是れ汝は無益のものにして憐憫に必要を有するを汝の爲に證せんが爲なり。慾に克つに讒遜を以てして輕侮を以てせざるときは其閉されし心の門を開くものは、行にあるに非ずして、碎けたる心情と靈魂の讒遜となることは汝自からも之を知らん。げだし病者は先づ讒遜して其病の本復のことを慮るべくして、其後最早王となることを切に願はん、何となれば淨潔と心靈の康健は靈魂の國なるによる、此の靈魂の國は如何なるか病者は父に告て「我を王と爲し給へ」といはず却て先づ其病の爲に慮るべくして、全く健康になりし後は其父の國は自然に自己の國とならん。罪人もかくの如く悔改をさゝげ、己が靈魂の健康をうけつゝ父と共に潔淨なる性の範圍に入りて其父の榮により王たらん。

我等は想起す、聖使徒パウェルは自己の罪を書して、己の靈魂を最下劣等の位置に立

第五十五　說教

つることを、言ふあり、曰く「ハリストスイイススは罪人を救はん爲に世に來れり、罪人の中我第一なり、然れども我が矜恤を蒙りしは先づ其全き寬忍を我にあらはしたる爲なり」〔ティモフェイ前一の十五、十六〕げだし我は昔謗る者、窘逐する者侮る者たりしも、知らずして信せざるに由り之を行ひし故矜恤を蒙りたり」〔同上十三〕と。パウェルの此事を言ひしは何の時なりしか、如何なる時に於てしたるか。大なる苦行と能力を充ち滿てる行動の後なりき、イウデヤ人及び異敎人より種々なる患難をうけて屢々死に瀕したる後なりき。而して彼は又其昔日の行動をすべて回顧し、己を潔淨に達したる者と爲さゐるのみならず、當然に己を認めて門徒と爲すことをさへ思はざりき。げだしいへり「我は使徒と名づけらるゝに堪へず、ハリストスの敎會を窘逐せし故なり」〔コリンフ前十五の九〕而してすべての人に愈り慾に對して勝を奏せし時は言へり「我の體を制して之に服せしむ、他人を敎へて自から棄てらるゝ者とならざらん爲なり」〔コリンフ前九の二十七〕。さりながら他の處に於て使徒は己の大なることをも記すと言ふならば、此事に關しては、使徒は自から汝を說得せん。げだし言はん、此を爲せるは好んで爲したるにあらず、自己の爲にあらずして、傳道の爲なりといはん。而して信者を益する爲に此事を告白するときは、此の如き自誇の爲に何等の理智もなきはれたる者の如くに己を想像し、呼んで證言して言へり「汝等我に此を爲さしめたり」と〔コリンフ後十二の十一〕と、又言ふ「主に循ひて言ふに非ず、乃ち無智者の如く誇りて言ふなり」と〔コリンフ後十一の十七〕親よ聖パウルは此の至當信實なる模範を我等に與へたるを、我等終に之を守りて此事の爲に熱心せん。もし神が遣はさず又賜はざる時は高尙なるものを神に求むるを辭せん、何となれば神に事ふるが爲に選ばるゝ器を神は知り給へばなり。げだし福なるパウェルは其後も靈魂の爲に國を願はずして言へり「ハリストスより絕たれんことをも或は願ふなり」と〔ロマ九の三〕されば如何して我等は誠命を守らず慾に克たず、負を償はずして神に知らるゝに先だち靈魂の爲に國を願ふを敢てすべけんや。

ゆゑに聖なる者よ、汝に願ふ、此事を汝の思にも入るゝなかれ、汝の爲に何事の起るありとも、すべての爲に先づ忍耐を求めよ。而して我等に起るものゝ爲にも、我等が思の爲にも、大なる謙遜と心の傷みとを以て己の罪の赦されんことゝ心の謙遜とを願はん。

一の聖者あり、書して言へり「己を罪人と思はざる者の祈禱は主に受けられず」と、も

第五十五　說教

第五十五　說教

し或る神父等は心靈の潔淨の如何なるとを、無慾の如何なるとを記せりと言はんか、之を記せるは我等をして時に先だち要望して強て之を求めしめんが爲にあらず、げだし錄して言へり、神の國は願に來らず」と（ルカ十七の二十）も し何人にか此の如き望願のあらはるゝあらば、これ彼等は最早己の爲に驕傲と墮とを得たるなり。之に反して我等は悔改の行爲と神に悅ばるゝ生涯とを以て心の範圍を齊整せん。もし心の國が潔淨にして汚されずんば、主に屬する者はおのづから來らん。神の高上なる賜を顯然とし。て求むるは神の救會の嘉みせざる所にして、此事を許容したる者は己の爲に驕傲と墜墮とを得たりき。其然りパウェルと雖も患難を以て誇り、ハリストスの苦みに與かるを以て神の高上なる賜と思ふならば、如何ぞ我等は神を愛するを愛し始めたり、然れども愛す又汝は其書に記して言へり、汝の靈魂は神に達せずといふ、然のみならず、汝の爲にることの大願を有するに拘はらず、汝は愛に野の遊世生活は大に願はしといふ。此を以て汝は心の潔淨の始を置けるを證し、神を念ふ記憶が猶熱して汝の心中に燃え始めたるを示せり。もし眞實ならば是れ大事件なり、しかれども汝が此を書せんことを予は願はざるべし、何となれば是れ一

第五十五　說教

の階級に屬するにあらざればなり。もし疑問の爲に此事を言ひしならば、其疑問は亦他の秩序を要求せり。げだし其靈魂が慾に克たざるにより、祈禱に於て勇氣を有せずと言ふ者は、其靈魂が神を愛するを愛し始めたりと敢て言ふべきか。もし靈魂は慾に克たずんば、神聖なる愛の靈中に起り、之に從ひ奧密に進行して、通世生活に至るの方法ある無し。汝は言へり、汝の靈は慾に克たずして神を愛するを愛し始めたりと、是れ秩序無きなり。慾に克たずして神を愛するを愛し始めたりと言ふ者は我れ其何を言ふを知らず。

しかれども汝は言はん、余は「愛す」とは言はざりき、愛を愛し始めたりといへりと。もし靈魂が潔淨に遠せずんば此は位置を有せざるなり。もしたゞ言論の爲に之を言はんと欲するならば、汝獨り言ふに非ず、すべての人も神を愛するを願ふと言はんたゞに「ハリスティアニン」等のみならず、不正に神を拜する者等も之を言ふべくして、すべての人は此言を發すること自己固有の言の如くせん、然れども此の如きの言を發するに當てはたゞ舌の動くのみにて、心は何を言ふを覺知せざるなり。病者にして己が病めることをさへ知らざる者多し。惡習は靈魂の病にして迷謬は眞實を失ふなり。人類中此病に罹るも己を布告して健全なる者と爲し、多くの人々より賞

議を博する者甚だ多し。もし靈魂は惡習を愈されずして、靈的健康により生るゝ爲に曾て造られたる天然の健康に導かれずんば、人は超性的なる腦神の賜を願ふあたはざるべし、何となれば靈魂は慾の病に苦む間は、其の感覺を以て靈的なるものを覺知せざるべく、又之を願ふことをも能せざるべくして、たゞ耳に聞くにより且は昔によりて之を願ふのみなればなり。終に予は上文にも當然に言へり、完全を願ふ者はすべての誡命を守らざるべからずと、何となれば誡命の神秘なる作用は心靈の力を醫せばなり。而して其作用は如何しても單純にあらざらんげだし錄して言へり「血を流すに非れば赦なし」エウレイ九の二十二ハリストスの人となれるにより改新を受け、ハリストスの苦と死とに分を有し、而して其後血を流して之を新にしたるに依り、我等が性は新にせられ神聖なるものとせられて、新なる完全の誡命を受るに堪ふるものとなりぬ。之に反してもし此誡命を人類に與へられしは血を流す以前にあり、我等が性の新にせられ神聖なるものとせらるゝ以前にありしならば、恐らくは此の新なる誡命も昔の誡命の如く、たゞ心中に惡習を截斷するのみにて、惡習の根を心中に殄滅することは能はざりしならん。今は然らず靈魂が守る所の神秘なる作用と新にして靈的なる誡命に隨行せし者等は敬神に目在しつゝ靈魂を新にし且之を聖にして、其悉くの部分を奥密に醫するなり。げだし各誡命が慾を心中に隱然として愈すことの如何なるは、衆人の爲に明にして、其効力は愈す者にも愈さるゝ者にも切に感ずること血漏の婦之ありし如くなればなり。

至愛者よ、もし靈魂の慾に染みたる部分が愈されず新にせられず、奥密に聖にせられずして、靈的生涯を以て結付けられずんば、靈魂は康健を得ざるべく、受造物に起る所のものゝ哀ましむるを免れて之より自由を得る能はざるは汝の知る所なり。而して此治療は恩寵により成るを得るは福なる使徒等に之ありし如くなるべし、何となれば彼等は信仰を以てハリストスの愛により全うせられたるによりてなり。しかれども時として靈魂は律法に依り健全を求め得ることあり、げだし誡命の作用と眞實なる生涯の難業苦行によりて、慾に克ちし者は、知るべし、彼は律法に依り心靈の康健を求め得たることゝ、此世が具體化せるものゝ外に斷乳されしとゝ、其從前の品性を已れに斷絶して靈的品性に再生せらるゝことゝ元始の如くなりしことゝ、恩寵により內部の人を理解し得たる者の如くなれることゝ、靈の範圍にあらはれて純然無雜なる新なる世界が彼を受けたりしことゝを知るべし。

しかれども智が新にせられて心も聖にせらるゝ時はすべて彼に起る所の概念は其入る所の世界の性に準じて喚起せられん。先づ神聖なるものに對する愛を喚起せらるべくして、彼は天使と親與するごとく靈的知識の奥秘を發見するごとを渇想せん、而して其智は受造物を識る靈的知識を覺感すべく、聖三者の奥義を洞觀するごとく我等の爲に崇拜せらるゝ攝理の奥義を洞觀する直覺力は彼に照り始めて、其後未來の望は知識と全く合一するに至らん。

終に予が汝に審したるものにより自己の性狀を理會すべし。もし靈魂は慾の範圍に閉さるゝも神を眞實に愛し始むるを得るならば、更に靈界の奥義を質問して之を探知するの必要あらざるべし。之に反して慾の管下にあるときは學習と知識とを益を生せずして、潔淨の面前を閉されたる門を開くが爲には不充分なるごと明なり。されどもし靈魂より慾を除き去るならば、智は光り輝き、性の潔淨なる位置に立てられて、疑問に必用を有せざるべし、何となれば其位置に於て發見せらるゝ幸福を明に見んとすればなり。げだし我等の外部の官能が觸るゝ所の自然と事物とを感ずるは學習と疑問とによるに非ずして、各官能は其遇ふ所のものを疑問の助を借らず自然に感ずるなり、（げだし感ずる者と感せらるゝ者との間を媒介する殺はあらず）盲者には日月の榮光の事や、星の集合の事や、貴重なる寶玉の晃々と光り燁くごとを幾ばく言ふといへども、其の有る所の美を受けて、之を判斷し、之を想像するは、たゞ其名稱に依るのみにて、其知識と斷定とは直視して得る所の愉快を去ること遠し）かくの如く靈的直覺のごとに於ても之と同樣に想ふべし。げだし靈の神妙なる奥秘を洞觀する智力は、もし其性の康健により、パリストスの光榮を充分に直覺するならば、質問せず學習せずして、たゞパリストスを信じ且望むの切なるに準じ、意志の自由を超えて、新世界の奥秘を樂まん、爾なる、パウェルの書する如し曰く「人もし之を見ば豈猶望まんや、忍耐して待つべし」と（ロマ八の二十四、二十五）終に我等は之を待望し獨り澹泊にして我等が內部の人と共に居り、思念の印するごとも、何等の複雜なるものを看望するごともあらざる處に居らんこと肝要なり、何となれば智は其看望する所のものより形象をうくればなり。世を看望する時は其流轉する形象の變化と合し其數中に於て彼等より形象と同形とを己れにうくるなり、げだし此等の形象は其許多なるに準じ、其變化の異なるに隨ひ、思念を喚起すべくして、思念が喚起せらるゝときは之を智力に印せらるゝなり。しかれども智は內部の人に透徹して、彼處には形狀の變化となるべき何等のものもある無

しかれども智が新にせられて心も聖にせらるゝ時はすべて彼に起る所の概念は其入る所の世界の性に準じて喚起せられん。先づ神聖なるものに對する愛を喚起せらるべくして、彼は天使と親與すると靈的知識の奥秘を發見すると渇想せん、而して其智は受造物を識る靈的知識を覺感すべく、聖三者の奥義を洞觀すると我等の爲に崇拜せらるゝ攝理の奥義を洞觀する直覺力は彼に照り始めて、其後未來の望は知識と全く合一するに至らん。

終に予が汝に書したるものにより自己の性狀を理會すべし。もし靈魂は慾の範圍に閉さるゝも神を眞實に愛し始むるを得るならば、更に靈界の奥義を質問して之を探知するの必要あらざるべし。之に反して慾の管下にあるときは學習と知識とは益を生せずして、潔淨の面前を閉されたる門を開くが爲には不充分なること明なりされどもし靈魂より慾を除き去るならば、智は光り輝き、性の潔淨なる位置に立てられて、疑問に必用を有せざるべし、何となれば其位置に於て發見せらるゝ幸福を明に見んとすればなり。げだし我等の外部の官能が觸るゝ所の自然と事物とを感ずるは學習と疑問とによるに非ずして、各官能は其過ふ所のものを疑問の助を借らず自然に感するなり、（げだし感ずる者と感せらるゝ者との間を媒介する數はあらず、盲者には日月の榮光の事や、星の集合の事や、貴重なる寶玉の晃々と光り輝くことを幾ばく言ふといへども、其の有る所の美を受けて之を判斷し、之を想像するは、たゞ其名稱に依るのみにて、其知識と斷定とは直視して得る所の愉快を去ること遠し）かくの如く靈的直覺のことに於ても之と同樣に想ふべし。げだし靈の神妙なる奥秘を洞觀する智力は、もし其性の康健により、ハリストスの光榮を充分に直覺するならば、質問せず學習せずして、たゞハリストスを信じ、且望むの切なるに準じ、意志の自由を超えて、新世界の奥秘を樂まん、福なる、パウェルの嘗する如し曰く「人もし之を見ば豈猶望まんや、忍耐して待つべし」と（ロマ八の二十四、二十五）而して終に我等は之を待望し、獨り澹泊にして我等が內部の人と共に居り、思念の印するこども、何等の複雜なるものを看望することもあらざる處に居らんこと肝要なり、何となれば智は其看望する所のものより形象をうくればなり。世を看望する時は其流轉する形象の變化と合し其數中に於て彼等より形象と同形とを己れにうくるなり、げだし此等の形象は其計多なるに準じ、其變化の異なるに隨ひ、思念を喚起すべくして、思念が喚起せらるゝときは、之を智力に印せらるゝなり。しかれども智は內部の人に透徹して、彼處には形狀の變化となるべき何等のものもある無

く、又其合成せられたるものが他の之と異なるものを以て合成せられたる形象により別たるゝことをもあるなくして、すべては獨一のハリストスのみなる時は、智は純然たる直覺をうくべくして、もし此直覺なくんば他の何物も心靈の喉を薫せずして、靈魂は祈禱の時に勇氣を受けざることと明なり。何となれば直覺は靈魂の粧なればなり。智が眞理の知識の範圍に居る時は疑問に要あらざるべし。げだし肉體の眼は先づ質問して其後太陽を熟視するには非ざる如く、心靈の目も先づ研究穿鑿して後に靈的管轄を直視するに非ざるなり。聖なる者よ、此の如くなれば汝が渇望する奥妙なる直覺も心靈の康健を求め得たる後に智にあらはるゝなり。されど研究と審問とに賴り此の如きの奥義を確知せんと欲するならば、是れ靈魂の無智なり。けだし顯なるパウェルも奥秘と言ひ難き言人の語る能はざる者（コリンフ後十二の四）を見聞せりと言ひしは、學問或は何等の物體的方法によりしにはあらずして、靈的範圍に奪ひ去られて奥秘の顯現を見たるによる。

終に聖なる者よ、汝は潔淨を愛するならば、すべての爲に斃す所の愛を絶ち、其心の葡萄園に入りて彼に於て働き、慾を其靈中に滅して、人世の怨惡を知らざらんことを力むべし。潔淨が神を熟視し、光り輝きて靈中に花を開くは、願に由るにあらずして、何等の人の怨惡も識らざるによる。もし汝は其心が新世界の奥秘の收藏所たらんことを願はゞ、先づ身體の行作と、禁食と、儆醒と、奉事と、苦行と、忍耐及び思念を貶し蹂する等の事を以て己を富ますべし。聖書を讀み之を深く考ふるを以て其智を結付くべし、誡命を自己の目前に書すべし、勝たれて勝つときは慾の負を返すべし。面して祈禱上不斷の對談と祈禱の言に思を沈むるとを以て、汝が預め感受したる何等の形象をも何等の同形をも其心に根絶すべし。其智を常に救世主の攝理の奥義を深く考ふるに習はすべく、處に於ても時に於ても言語にあらはすものよりは極めて高上なる知識と直覺とを己れに願ふを棄てゝ、誡命と潔淨を求むるの勞とを積行すべし。而してすべての爲に燃起せられたる哀みの火を以て自から主に祈願すべし（これ主が使徒、致命者及び神父等の心に入れたる哀みなり）。さらば哀みは汝の心に消滅して、聰明なる生涯を賜はらん。ハリストスに合一するを以て一切を絶つは此生涯の始中終を成すなり。もし汝は奥秘を直覺せんを願はゞ、誡命を自から實地に耕すべく、たゞ之を識るに進行するのみにあらざるべし。靈的奥義の範圍に如何にして入るべきを先づ確知するを切に願ふて其後これに着手すべし。

誡命の能によりて達し得らるゝ潔淨は、奥義の第一と稱せらるゝなり。然して直覺

は智の靈的看望にして、既に有るもの又は有らんとするものを悟りて全く愕然たるに至るなり。直覺は智力の觀察にして萬姓諸族に於る神の攝理に慥嘆し、神の光榮と新なる世界の不可解とを悟りて、之が爲に心は碎かれ且新にせらるゝなり、たとへばハリストスに於る嬰兒の如し、新にして神なる誡命の乳に養はれて、無玷なる者となり、靈界の奥義と知識の開發の爲に慣錬せられて、知識より知識に昇り、直覺より直覺に、理會より理會に昇りて、奥密に敎導せられ、且堅められて、愛にて高められ望にて合せられて、喜を感起せらるゝに至らん、されば彼は神を以て高められて、其造成せられたる創造の天然の榮を以て褒賞せらるゝなり。

知識の開發により智は此等の靈界の牧地に昇り、仰れて又起き勝ちて又勝たれて、精舍の爐中に分金られ、かくの如くして淨められん、されば惠は彼に下りて汝が願ふ所の聖三者を直視する直覺力を實驗上に賜はらん。げだし性を直視する直覺に三有り、之によりて智は高められ、其精力をあらはして練習せらるゝなり、即創造せられたる靈智ある者と、靈智なき者と、靈に屬する者と肉に屬する者との性を直視する二の直覺と、又聖三者を直覺することは是なり、故に智は先づ存在するもろ〳〵の受造物に注目して、知識の看破により之を點檢せん、然れども感覺に屬せざる者の爲には思想上の看望を以てするなり。智は自己を直覺する爲にも看望するを爲す、故に外部的哲學者は受造物を想考するに際し其智を以て誇りぬ。故に信仰の機密を受けたる子等の直覺は信念と結合し、聖書の草塲に於て牧せらるべくして、其直覺は智をすべて外部に漂ふより纏めて一に集中し、ハリストスと饑合するを以て之を結付くること、大ワシリイとグリゴリイの如くなるべし、而して其の注意は聖書に記されし奥妙なる言に在り。ゆゑに知識を以て理會する能はざる所の言は信仰の助により我等が爲に容易に明白なるべくして、此に關する知識は潔淨によりて生ずる所の直覺によりて受るを得べし、知識より上にして肉體の感覺にも智の聰明なる力にも觸れざる靈的奥義の爲に神は我等に信仰を與へ給へり、たゞ此信仰により我等は此奥義の存するを認識すべくして、又此信仰により奥義に關する希望は我等に生ずるなり、神は萬物の主なると、主宰なると、創造者にして且造成者なるとは信仰を以て承認むべし、然れども我等主の誡命を守らざるべからざると、啻き誡命は主の自から言ひし如く、長を守れども、ハリストスの生活を施す誡命は、錄して言ふ所の如く、愛を守る所以を會得せざるべからざるとは知識を以て之を決するなり、曰く、我もわが父の誡を守りて其愛に居る（イオアン十

五の十一故に子が其父の誡命を守るは畏れによるに非すして、愛よりすること明白にして、隨て我等にも其誡命を愛により守るを命ずること左の如し、曰く「若し我を愛せば我が誡を守れ、我父に求めん、彼は別に撫恤者を遣はす」云々（イオアン十四の十五、十六）靈的奥義の顯現を賜はるを名づけて撫恤者の來臨とはいふ、故に使徒等が受けたる聖神を受くるは是れ即靈的知識のすべての完全なり、主が其父に求めて彼等に撫恤者を與ふるを告げ且之を約したるは彼等が誡命を行ひて己を淨むる時彼等と共に世々に居らん爲なり、誡命を守るにより智は靈的智識の奥妙なる直覺と顯現との恩寵を賜はる所以を見るか、然れども汝の賢明が豫想したる如く誡命を守るの行爲は默想により成就せらるべき神聖なる奥義の直覺を妨ぐるには非るなり。

故に汝に願ふ、もし汝は愛の範圍に達したるを心に感ずるならば、新なる誡命を與へし者を愛するにより之を守るべく畏を以てするなかれ、爾なるパウェルが神聖なる愛を以て燒かるゝとき言ひし如し、曰く「誰か我をハリストスの愛より離さん」愛患なるか、或は牢獄或は窘逐なるか云々と、而して之に加へて言へり、曰く「蓋我篤く信ず死も生も現在も未來も我が主ハリストスイイススに賴る神の愛より我を離すこと能ばず」（ロマ八の三十五、三十八、三十九）彼は大なる報酬或は尊敬或は靈賜を豐に授けらるゝを渴想すること汝の聖德が渴想する如くなりしと何人にも思はしめざらんが爲に、次の如く言へり、「ハリストスより絕たれんとをも或は願ふ」（ロマ九の三）遂ざかる者を主に歸せしめんが爲なりと。又彼は汝が奥密なる道世的直覺を尋ぬること其生國を尋ぬる如くなりしには非すして、他の人々も思寵により愚々賜はる所のものを單に渴想するを汝知らんを欲するか、彼が他の處に於て言よを聞くべし、曰く「我れ諸人の方言及び天使の言を語るとも、もし愛なくんば、我れ鳴る銅或は響く鉢の如し、我れ預言の能あり、凡の奥義と凡の智識とを明にするあり、且凡の信能く山を移すありとも雖ももし愛なくんば我無きが如し」（コリンフ前十三の二、三）何となれば此に引入るゝ正しき門戸は愛なればなり、もし愛を得るならば愛は我等を此に引入れん。されどもし愛無くして恩寵により之を賜はるならば、何の時か我等は必ず之を失はん、何となれば高上なる聖德と神妙なる生涯を求め得て之を守るものは愛なればなり。もし修道士は愛を尊はるゝならば、其心は神の住所たる平安を直ちに尊はれて、我等の主が出入する恩寵の門は彼の爲に閉されん。主の言よ所によるに、曰く「我は生命の門なり。我によりて人は生命に入りて牧地を

獲ん。〔イオアン十の九〕これ其靈的生命を養はんが爲にして、彼處には怨惡も誘惑も彼に妨ぐるあたはずして、神聖なる愛は知識の開發と奥妙なる直覺のすべての處に彼を出入せしむることパリストスの自由を有する者の如くならん。されば汝は此の眞理を知らんを欲するか、即靈的生命は實に智の神聖なる直覺なるを知らんと欲するか、大なるパウェルに聽從せよ。げだし彼は呼て言へり、愛なくんば此事は我に益なし、もし正しき門に由りて入らずんば〔即直覺に入らずんば〕我は之を願はず、もし恩寵により之を與へらるゝも、予は愛を得ざるときは之を強て願はざるべし、何となれば愛なる天然の門に由りて入りしにはあらさるによる。此により先づ聖三者を直視する第一の直覺なる愛を得んこと肝要にして其後は靈的直覺は與へられずしておのづから我に成らんと願なるパウェルの賢明を瞭解せよ、彼は恩寵を以て與へらるゝ賜を悉くすでゝ至要なるものを願ひ、或人の言ふ如く賜を受けて之を守る所以のものを願へり。受造物を直視する賜はモイセイにも與へられ、多くの人々も之を賜はりぬ、されど恒久にして易はらざるものを賜はりしに非ずして、たゞ默示に於て之を賜はりしのみなりしかれども聖神を以て洗を受けて恩寵に充たされたる我は我の中に居るパリストスを感ずるを己の內部にうけんことを欲するなり。げだしパリストスは其實在を以て我等が性の革新を成し、我等は水と聖神とを以て彼を衣て、言ひ難き機密により彼は我等を自己と合して、其體の諸肢と爲し給へり。然れども此處に於てはたゞ聰質の形式を以てするのみにして、新なる世界に於て彼は他の諸肢に生命を嘗然に與へ給はん。此によるに神聖なるパウェルは愛なくんば之を嘉せざりしに何故汝は愛に先だちて之を願ひ且求むるか。しかれども誡命を行ふは我が直覺の爲に妨とならんと言ひて、近者に對する愛を汝は明に非謗し、愛よりも直覺を重んじ、見る可らざる處に於て之を見んことを願ふ。賢なる者よ、我等が未た直覺を見る能はざる間に直覺其ものは其所に於て己を我等に示さん。それ靈魂は自然の成長に循ひて新なるものと新なる知識を己れに受け、世に存在する所のものに接觸して日にいよ〳〵之を學習す、かくの如く靈神上の事に於ても人は智の聰明なる生涯に成長して前進擴充するに循ひ、靈的直覺と神聖なる感覺とを己れに受けて之を學習するなり。而して愛の範圍に到り達する時は神に屬するものを其所に於て直視せん。然れども神に屬するものゝ人に降らん爲に人が力を費す間は彼は降り來らざるべし。もし人は敢て妄想して靈界の事に眼を擧げ、時ならずして之に通曉せんとすらならば、其視力は直に鈍り、眞

實なるものに代へて妄想と幻像は人にあらはれん。もし思慮ある才智を以て此事を圣く悟るならば、時ならずして直覺を強て求めざらん。もし汝は今も直覺を見ること思ふならば、此直覺は幻影にして、直覺には非ざるなり。何となれば凡て想像に屬するものには類似と空想的形象のあるありて、之と同く眞實なる直覺もあればなり。げだし視よ、錯雜なる性中にも妄想の生ずるあれども、時として眞實なる直覺も有り得べし。もし直覺は眞實ならば、光は顯はれて、其直覺せらるゝものは殆ど現實なるものゝ如く見らるべし。しかれども之に反するときは、目は現實に代へて影を見るべく、水なき處に水を見るべく、地に在る樓閣が上方に聳がりて空中に懸るを見ん。有形なるものゝかくの如き現象により想像に屬するものゝ事をもこれと同く想ふべし。

もし智の視覺は誠命を行ふと默想的生涯の行爲とにより淨められずして、愛の光を完圣に受けず、かリストスの革新に成長進歩せず、靈界の天使的行爲を尊ぬる階段に立ら、知識の卓越を以て靈性に近づかずんば、神聖なる直覺を眞に見る者となる能はざるべし。而してすべて自から智なりと思ふ所の類似は妄想と名づけらるべくして、眞實とは名づけられざるなり。智が彼に代へて此を見るは是れ智の淨められざるより生ず。げだし眞實の性は常に不易にして存すべく決して變じて類似とならざるべし。されば形像を妄想するの原因となるものは智の病にして其淨潔にはあらざるなり。

客觀的哲學者にも是あり、何となれば神より眞實なる敎をうけざる所のものを以て神的と思惟したるによる。彼等に聰明なる力の滅じて又起るに依り、其思想の槪念に依り、彼等は即或物なりと己が自負心を以て歸結すると共に、彼等が存在する所以を斷定して其生出の開發と形像の變化とは彼等の爲に彼となり此となれかしといふ。而して不適當なる自負心を以て此事を談論し、獨一の神を分ちて多神となし、思想を弄して、互に相論じ相和して、其思念の無智なる妄想を性理論とは名づけたり。

故に感覺に屬する性と感覺以上なる性と聖三者其ものを直視する眞實の直覺はかリストスの啓示により分與せらるゝなり。パリストスは首として其實在を以て人性の改新を遂げ、第一の自由を挽回して之を其性に與へ、其生活を施す誠命を以て眞理に昇るの途を我等の爲に自から啓き給ひしや、人々に此直覺を敎へて之を指示せり。されば人性はたゞ人が第一に苦を忍耐すると練習と憂患とを以て慾に

沈める舊人を脫ずること恰も新に生れし赤子の母腹より持來れる衣を脫する如くなる。其時にのみ眞實にして妄想にあらざる直覺を見るを賜はらん。其時智は靈的に更生し、靈の世界にあらはれて、其生國を直視するを得るなり。

故に今日受造物の直覺は、たとひ美なりといへども、知識の影にして、其美は夢中の妄想と異なるなきなり。此により啓示の靈を以て新なる世界を直視して、智が之を精神上に樂むは、是れ即恩寵の働にして、知識の影にあらず而して其美は使徒の嘗せるものと擇ぶなきなり。言ふあり「神が彼を愛する者の爲に備ひし事は目未だ見ず耳未だ聞かず人の心に未だ入らずと、唯我等には神己の神を以て之を顯せり、蓋神は察せざる所なし神の深きをも察するなり」（コリンフ前二の九、十）と。而して此直覺は第一の直覺よりは極めて高尙なる直覺を受るを得るに至るまでは智の糧とならん、何となれば智が完全なる愛の範圍に引入れらるゝに至るまでは、一の直覺は他の直覺を人に遞傳すればなり。愛は靈に屬するものゝ收藏所にして、心の潔淨に居を占むるなり。智は愛の範圍にある時は、恩寵働きて靈的直覺をうけ、神秘なるものゝ親見者とならん。げだし予は言へり、聰明なる直覺の啓示の賜は二

けだし或時には信の熱切なるが爲に恩寵により與へられざ、或時には誠命を行ひしが爲、及び潔淨の爲に與へらるゝなり。恩寵により與へらるゝものはたとへば福なる使徒等に與へられしものゝ如く、彼等が智を淨めて直覺の啓示を賜はりしは誠命を行ひしによるにあらずして、信の熱切による、何となれば正直にしてハリストスを信じ燃ゆるが如くなる心を以てハリストスに從ひ疑ふ所なければなり。さればハリストスが其崇拜せらるべき攝理を行ひて撫恤者たる神を彼等に遣はすや、彼等の智を淨め且完うして舊き慾に沈める人を彼等の內部に有效的に殺死し、新なる神に屬する人を彼等に有效的に復活して彼等は彼と此とを感知したり。此の如く福なるパウエルも奧密に改新せられて、其後奧義の啓示を直覺せり。然れ共此際にもパウエルは之に依賴せざりき。彼は恩寵と賜とを有效的にうけたり。然れども其生命の全時進行して已まざりしは、是れ主が彼と共にすること其忠なる者と共にする如くし、途上談話して彼をダマスコに遣はすとき賜はりし恩寵に出來るだけ報ひ奉らんが爲なりき。イイススの彼と顯然談話したることは審さるゝあらず、然れども アナニヤが彼に告げしことは錄して言へり「兄弟サウルよ、途にあらはれたる我等の主イイスス（ハリストス）は我を汝に遣はせり、汝の目見るを得て聖

神に滿てられんが爲なり」と。行實九の十七」而して彼を洗するや、彼は聖神に滿てられて、啓示の神秘なる奥義を感じたること、イイスが聖使徒等と共にせしとき成りしものゝ如くなりき。イイスス言へり「我尚多く汝等に言ふべき事あれども汝等今容るゝ能はず、然れども眞實の神來らん時彼は汝等を凡の眞實に導き且將來の事を汝等に示さん」（イオアン十六の十二、十三）。

福なるパウェルは聖神を受け、聖神を以て新にせられて、啓示の奥義をも賜はりしや、其時彼は啓示の神を以て直覺を樂み、言ひ難き言を聽き、性に超越する直覺を見、天の能力を直覺して無限の歡喜に入り、神に屬するものを樂めりき。されば「エウクテイト」と稱する異端者等が無智により主張して、パウェルは自己の願により此上昇を得たりといふ如きことはあらざるべきなり。智が彼處に上昇することは全く能はざるものとす。之に反してパウェルが啓示の神を以て攝取せられたることはコリンフ人に達する書に於て誇れる人々に對し自から書する所の如し、げだし彼等は己を以て聖使徒等に擬し、其思念の妄想を表白して、之を靈的直覺とは名づけたり。此事は多くの異端者等にも關係す、即近くはオリゲンにも、ワレンテインにも、ディスサノフの子にも、マルキオンにも、マネスにも、其他使徒時代より始まりて今も處々に方々に現はるゝもろ〳〵異端の首領等にも關係するなり。

終に魔鬼の妄想の爲に智力を害はれたる人々あり、福なる使徒等の教を敗壞せんと欲せしかば神の使徒パウェルは其現出せる魔鬼の働の影に誇れる異端者の高慢を無に歸せしめざるべからざるを餘儀なくせられき。故に謙遜と大なる恐れにより自己の神聖なる直覺を記し、之を他人に歸して書しぬ。げだし言ふ「我ハリストスに在る一人を知る此の人は十四年前に（肉體に在りてか知らず、肉體の外に在りてか知らず神之を知る）樂園に擧げられて道ひ難き言、人の語るを能はざるものを聞きしを知る」と（コリンフ後十二の二、四）彼は攝取せられて、心ならず其智を以て直覺により第三重の天に至れりと言ふ。彼は直覺を感せりと書せり、語るを聞けりと言へり、然れども直覺の言或は其有樣の如何なりしをば書すること能はざりき。げだし智が啓示の神により此を其位地に於て見るや、其時之が爲の位地にあらずして此を言ふの命をうけざりき。然れども、たとひ此を語らんと欲するも能はざりしならん、何となれば此を見たるは肉體の官能を以てしたるに非ざればなり。智が肉體の官能により受くる所のものは、肉體の範圍に於て再び之を說明するを得べし、然れども己の內部に靈的範圍に於て明白に直視し、或は聞き或は感する所のものは、肉

體に歸るときは、之を復說する能はず、たゞ、此を見たるを想起するのみにて、如何樣に見たるかは明に轉達する能はざるべし。

魔鬼の妄想に敗壞せられたる異端の首領等は此を以て證責せらるべし、たとへば穹蒼の上に第宅あり、之に智を引入れて、任意に學ばしむといふ如き、智が天上に昇るといふ如き、審判により除名せられし者等が居る所の住所のことの如き、上なる能力の多樣なる狀態と其能力の有勢なることの如き是なり。是れ皆自負心に醉はしめられ、魔鬼の働の爲に麻痺せしめられたる智の影なり。是を以て福なるパウエルは一言を以てすべての直覺の面前に門を閉して、其門を沈默の內部に持去りぬ、即智は此を說明するを得るも之が許しをうけざる處に持去れり、げだし言ふらくすべて肉體の範圍に於て舌が言ひ顯すを得る直覺は心中の思の妄想にして思寵の作用にあらずと。

終に汝の成德は此を記憶して深き思念の妄想に注目すべし。銳才なる修道士は常に此戰に遭遇することを屢々にして、彼等は浮誇の養成せらるべきものを推究穿鑿して、新設を願ひ、之を表示するが爲に爲さゞる所なきなり。

エデッサの產にマルバスと名づくる者あり、高き生涯を送りて、最重き勞苦と患難と、を忍耐したるに拘はらず、一朝にして「エウクティト」と稱する異端の創設者とはなりぬ。げだし言ふあり、彼はサワといへる福なるイウリアンの門徒となり、曾時の間彼と共にシナイ又はエキペトに往來したりけるが、當時の大なる神父等に遇ひ、又福なるアントニイにも遇ふて、彼より靈魂の淨潔の事、及び救の事を語れる奧妙なる談話を聞き、情慾のことに關する幾徹なる問題をも聞けり、アントニイ說明していへらく智は潔淨の後に靈界の奧義を曉る直覺力を有せん而して靈魂は誠命を行ひて舊き慾を脫ぎ、原始の性の康健に達するならば、恩寵により無慾を賜はるを得んと。マルバス年少氣銳の時に當り、此等の言を聽取するや、火の如く熱心して己の邑に歸りけるが、好名の慾の燃ゆるに乘じ、自から通世者の室を擇びて、戰鬪と甚しき憂患と不斷の祈禱とに己を捧げたりき。然るに好名の慾の燃ゆる、即聞きし所の高上なる賜を得んとする望の起るや、彼は眞理の敵と對戰する熟練を學ばず、強者又は有力者を滅亡に誘引する敵の姦計、欺瞞及び狡猾を曉らず、たゞ戰鬪と憂患と無所求と苦行と節制とに依賴するのみにて、自卑と謙遜と中心の悔悟とを求めず、即惡者と對抗するに此等の勝たれざる武器を求めず、事を遂げ、誠命を守り、患難を忍耐するときは、己を無益の僕と思ふべしといへる聖書の言をさへ記憶せずし

て、たゞ其平生爲す所に據り、己を高しとする自負心のみ熾になりて、聞きし所の高上なる賜を得んと欲する思に焦がれたりしが、多時を經過したる後魔鬼は、彼に謙遜の行なくして、たゞ其聞きし所の奥義を知らんが爲に直覺を渇想するのみなるを認むるや、彼に無限の光の中に現はれて言へり、我は即撫恤者なり、父より汝に遣はされたるは其行爲の爲に願ふ所の直覺を見るを汝に賜ひ、無慾を汝に與へて、將來汝を行爲より安んせしめんが爲なりと。然して之が代りとして惡者は不幸なる者より叩拜を要求せり。然るに此愚者は惡者の戰を感せざるにより、直に喜んで彼を受け、彼に叩拜して、之と同時に彼の權下に立てり。されば敵は神聖なる直覺に代へて邪なる妄想を彼に滿たし、眞理の爲に勞するを廢せしめ、彼を稱揚して、無慾の空望を彼の前に置り、告げて言へり、「今や汝は戰鬪にも身體を苦しむるにも、慾念又は嗜好と戰ふにも必要あらず」と。而して彼は「エウクティト」なる異端の首領とはなれり。彼等はます〳〵蔓延して憎むべき不正なる敎を始むるや、當時の主敎の爲に逐はれたりき。

又他に同じエデッサの邑にアシナスと名づくる者あり、今に至る迄歌はるゝ多くの三曲を作著し、高き生涯を送りけるが、名の顯はるゝに至るまでは、難業苦行を以て無分別に己を束縛せり。魔鬼は彼を誘惑し、其庵より引出して、ストリイと名づくる山の嶺に立て、彼に車輪と馬の狀を示し、約して言ひけるは神はイリヤの如く汝を樂園に攝取せん爲に我を遣はせりと。然るに彼は小兒の如くなる智慧を以て欺瞞に陷り、車輪に乘るや、此妄想は全く破れて、彼は大なる高處より自から身を投じ、彼處より地に落ちて、笑ふべき死を遂げたりき。

予が玆に此事を述ぶるは徒然なるに非ず、聖者の滅亡に渴する魔鬼の鳥瞥を我等認識して、智的生涯の高きを非時に願はざらん爲なり。然らずんば我等は惡敵の爲に笑はれんげだし慾に滿たさるゝ青年が忌憚なく空論して無慾の奥義を決定するは今も我が見る所なり。

慾に滿たされて有形なるものと無形なるものとの關係を推究する人々は、健康を守る規則を敎授する病者と擇ぶなきに關し、聖者の一人は次の如く審せり、曰く「福なるパウェルは門徒等の誠命を輕んじ、慾に克たざりしも、潔淨に依りて能ふべき奥義の直覺に於る幸福を渴想するを知るや、彼等に告げて言ひけるは先づ慾の舊人を脫すべし、其時は造物主に似たる奥義の知識を以て新にせられし新人を衣るを願ふべし、實に恩寵を以て成れる我及び他の使徒等の幸福を願ふなかれ、何となれ

ば神は、其欲する所の者を矜み、其欲する所の者を頑にすればなり」〔ロマ九の十八〕。けだし誰か神の面に抗し、或は其旨に逆はんや。神は或時には報謝なくして賜へども、或時には戰鬪と潔淨の後に於てもこゝにこれを與へ給はずして、之を藏するは、其所に於て直覺を惡ばんが爲なり」。

然れども此賜に比すれば小なるものに關しても神はかくの如く處理し給ふを見ん、即罪を赦すこと是なり。げだし視よ洗禮は報謝なくして施し、信仰の外はすべて要求する所あらず、しかれども洗禮の後罪を悔改するときは、徒に之を赦さず、勞苦と憂愁と悲哀と傷心と流涕及び長時の涕泣を要求して、其後は最早赦す。盜賊をば十字架上一言の懺悔の爲に報謝なくして赦し、彼と共に天國に在らんことを約したりしも、罪婦よりは亦信仰と流涕とを要求せり。されども致命者と表信者とよりはその中心の信仰の外患難と拷問と鉋削と殘虐又は種々樣々なる患難をも要求せり。

故に汝の聖德よ、此等の事を堅く信じて、最初と最後とに法目せよ、直覺の時に非るに直覺を强て求むるなかれ。而して汝は肉體に包まるゝ間は悔改の行に勉勵し、誡命を行ふに忍耐する者となりて慾と戰ひ、魔鬼の罵詈を用心せよ、而して之と同く慾に頓く同意をなさしむる偏頗の世に於て易はらざる完全を宣言する者等を警戒すべし。此事は聖なる天使、父と聖神の役者等より尙高上にして、彼等も中間者の新なるを待つは、敗壞の奴たるを免れて神の子の自由に入らん爲なり。げだしこゝに太陽が昇りて又雲中に入り、時に空氣の好成合あれども、時に旱魃あり、或時には喜あれども、或時には悲のある處に於て完全は有り得べきか。此に抗諍するは是れ狼の類なること或る聖者の言ひし如し。しかれども神は眞實なる制定と其聖なる教とを以て我等が生涯の基礎を確立せん。光榮と權柄と美麗は今並に無窮の世に彼に歸すべしアミシ」。

第五十六　說教

神を愛する事、世を避くる事、及び神に於て安んずる事。

神を愛する靈魂は己の爲に安心を神に、神獨りに於て求むるなり。如何なる外部の關係をも先づ自から解くべし、其時は必を以て神と連合するを得ん。何となれば物

體と分離するは神と親與するに先だてばなり。麵麭は嬰兒が乳養せられし後食用さして與へらる、かゝの如く神事なる事に大に發達せんと企圖する人も先づ自から世より遠ざからんを欲すること嬰兒が母の懷と乳房より遠ざかる如くならん。身體上の働の心靈上の働に先だつは歷史のアダムに嘘入られたる生氣に先だたち し如し。身體上の働を求めざる者は心靈上の働をも有する能はず、何となれば後者の前者より生ずるは、麥穗の麥粒より生ずる如くなればなり。然して心靈上の働を有せざる者は靈神上の賜をも奪はるゝなり。

現世に於て眞理の爲に忍耐する苦痛は善の爲に苦む者に備へらるゝ樂とは比較にもなる可らず。淚を以て種く者は喜びを以て穫ん。汗を以て求めたる麵麭は農人の爲に甘からん。義の爲に甘しゝことも パリストの知識を受けたる心に甘し。輕侮と脫黜とは善意を以て忍耐せよ神の前に勇氣を有せん爲なり。人は如何なる無慈悲の言をも知識により忍耐して、此言を發せし者に自分は預め不義を爲さゝりし時は、たゞ此際己の頭上に刑罰を加へらるゝも譯も爾なり、如何となれば自分は知らざるも不朽に築冠を加へらるればなり。知識を以て虛榮を避くる者は其心に來世を感せん。世を樂てたり、と言ふも、或る當用の爲に人々と爭ひ己を安んぜんとする者は全く盲なり、何となれば全身を自由に樂てたれども、一の肢體の爲に爭ひ戰へばなり。現生に安息を逃るゝ者の智は最早來世を探知せり。しかれども貪利に縛らるゝ者は慾の奴なり。金錢を求むる事をのみ貪利と思ふなかれ、何にても汝の意志の繫がるものを求むるは貪利なり。身體を以て苦めざるも官能に自由を與ふる者を賞讚するなかれ、卽ち開く口と、迷へる目是なり。靈魂に規則を命じ、慈悲を以て救を立てんとするときは、他の行爲により稱讚を求めざらんことに靈魂を習はすべし。一の手を以て爲して他の手を以て濫費すべからず認められざらん爲なり、けだし彼處には隣の深きを要すればなり。然れども知る べし負を負ふ者に罪を免すは義の行爲に屬するを、其時は到る處に安靜と清明とを汝の心に認めん。義の路に入る時は凡ての行動に於て自由に統かん。

此事につきて或る聖者は次の如く言へり、曰く「慈悲者はもし正當ならざるときは盲なり、知るべし自己の證力と勞とを以て得たるものより他に與ふべくして、詐僞と不義と狡猾とを以て得たるものよりすべからざることを。彼は又他の處に於て次の如くいへり、曰く「貧者に撒かんと欲せば自分のものにより撒くべし。之に反し

てもし他人のものにより撒かんと欲するならば、これ最苦き業なり」と。予は之に加へて言はん、もし慈悲者は己の義よりも高く立たずんば彼は無慈悲なり即慈悲者は己のものにより人々に施すのみならず、他の人々より受る所の不義は喜んで忍耐して彼等を憐まん。施を以て義に勝つならば、其時加へらるゝものは義人等が受くる法下の冠には非ずして福音的完全者の福音的榮冠なり。げだし己の所有により貧者に與へ、裸者に衣せ、人を愛すること己の如くし、侮らず、罵らざる等の事は舊き律法も之を宣言せり、されど福音的攝理の完全は命ずること左の如し、曰く、凡そ汝に求むる者には與へ、汝の物を取る者には復之を促すなかれ〔ルカ六の三十。ゆゑに或る物品又は他の外部に屬するものを不正に奪はるゝを喜で忍耐するのみならず、生命をも兄弟の爲に犧牲となさんこと肝要なり。これ慈悲者なり、されどもたゞに施與を以て兄弟に慈悲をあらはす者は慈悲者にあらず。之に反して其兄弟を哀ましむるを見聞して心の燃ゆる者と兄弟の爲に頬を打たるゝや之に報ひて彼の心を哀ましむる程無恥の心を有たざる者も亦慈悲者なり。

儆醒の業を脩ぶべし。汝の靈に近く慰藉を見ん爲なり。默讀を練習せよ、汝の智が常に神の奇蹟に昇せられん爲なり。貧しきを忍耐すると其に之を愛せよ、其心を一に集中して高く飛ばざらしめん爲なり。廣き生活を嫌へよ、其思を援さず守らん爲なり。事の多端を制して獨り己の靈魂を慮れ、内部の安靜を濫費するより之を救はん爲なり。貞潔を愛せよ祈禱の時神の前に恥ざらん爲なり。其行に淨潔を求めよ、汝の靈魂が祈禱に於て照され、死の記憶により汝の心に喜を點火せん爲なり。小なるものを戒めよ、大なるものに陷らざらん爲なり。汝の業務に怠慢なるなかれ、其友の間に立つ時恥ざらん爲なり。及び路の用意を爲さゞる者と認められ、隨て友が汝を獨り途中に棄てざらん爲なり。其行爲を知識にて導くべし、凡ての進行に非難をうけざらん爲なり。其生活に自由を求めよ暴風雨より免れん爲なり。快樂に資くるものを以て己の自由を縛るなかれ僕の僕とならざらん爲なり。其衣る所は貧しきを愛せよ、汝に生ずる思を貶せん爲なり。燦爛を愛する者は讒逐なる思を得ること能はず、何となれば心は外部の狀態の如くに其の内部に印せらるればなり。

空談を愛して淨智を求むるを能くせし者ありや。人間の譽を捉へんを切に願ふて讒逐なる思を得たる者ありや。或は不節制にして肢體を弱めつゝ智の淨く心の讒逐なる者となり得る者ありや。智が五感に誘引せらるゝ時は彼等と共に禽獸の食

を食はん。然れども五感が智に誘引せらるゝ時は彼と共に天使の糧をうけん。
謙徳には節制ですべてに制限あると伸ぶ。然れども虚誇は淫行の従者にして驕傲の行なり。謙徳は恒久の自制により直覚に達し、心靈を貞潔にて飾らん。然れども虚誇は思慮の間断なき擾亂と動揺とにより遇ふ所のすべての者より不潔の財を集めて心を汚す。彼は又邪なる眼を以て物の自然を覩て耻づべき想像を心に充たす。然れども謙徳は勉に直覚を以てし己を制限して之を得たる者を讃栄に喚起す。
世に休徴と奇蹟と異能を行ふ者を默識心通する者に比するなかれ。世に飢る者を飽かしめ多くの民を神を拜するに陽せしめんよりは默想の無爲を愛せよ。己を罪の機繫より解くは奴隷を苦役より脱せしむるに愈れり。汝は三の成分の一致により復活せしむるよりも汝の靈魂と神との一致により汝の靈魂と相和するは其救導を以て愈見の異なる者を和せしむるより愈れり。グリゴリイ言ふ「神の爲に神學を教ふるは善し、然れども人の爲に己を淨き者と爲すこと是なり」。熟達老練にして納なるは其智の顯鋒により教道を川の如く流すよりも汝の爲に益れり。其思を神聖なる事に喚起して、慾の爲に汝の靈中に伴れたるものを起すを慮るは死者を

異能を行ひ、死者を復活し、迷ひし者の反正の爲に勞して、大をる奇蹟を行ひ、其手により多くの者は神を識るに導かれしも、此すべての後他の人々を復活せしめたる自分は憎らしく嫌はしき慾に陷り、自己を殺して、其行の顯然とあらはるゝや多くの人の爲にも誘惑となる者多し。何となれば彼等は猶心の病に在りて其靈魂の康健のことを慮らず未だ自から薄弱を免れざるに他の人々の靈魂を愈さんと此世の海に出發したればなり。ゆゑに予が言ひし如く彼等は自己の靈魂の爲に神に望を失へり。五官の薄弱は慾を常に猛烈ならしむる火焰を迎へて之に堪ふる力あらざるなり。ゆゑに五官の爲に戒愼するは更に必要なり。即すべて婦人を見ざることゝ、安息に耽らざることゝ、金銀及び其他の物を求めざることゝ他の人々を指揮せざることゝ、彼等に對して誇らざることゝは必要なり。
反論する技倆の汝に足らざるが爲に人々汝を不學者と假定するは、無耻の爲に智者の一人とするより愈るべし。謙遜の反對の數を持する者をば自己の德行の力を以て責めよ。言の說得を以てするなかれ。汝の口の溫恭と安靜とを以て悖逆者の無耻の口を閉ち、彼をして默せしむべし。
汝の素行の貴きを以て放肆者を責めよ。然して五官の耻なき者をば汝の目の節制

を以て責むべし。

其生涯の諸日汝は何處に至るとも、己を旅行者と認めよ、交際に恋なるにより生ずる害より救はれん爲なり。何れの時にも己を何も知らざる者と思ふべし、他の意見を自意の如く定めんを欲するとの疑察非難を避けん爲なり。口を以て常に祈禱せよ、然らば汝を惡言せざらん、何となれば惡言は惡言より生じ、祈禱は祈禱より生ずるによる。如何なる事に於ても己を以て敎ふるに足らざる者と思ふべし、然らば其すべての行爲は智者と認められん。自から理會せざることを人に傳ふるなかれ、汝己を辱しめざらん爲なり。汝の行爲を參照するにより、汝の僞のあらはれざらん爲なり。されどもし或る有益なることを人に告げんと欲するならば、敎へらるゝ者の樣子にて言ふべし。權と無恥とを以てせず、愼め自己を罪して、汝は彼より下きを示すべし。聽く所の者に謙遜の式を示し、彼等をして汝の言を傾聽して行爲に着手せしめん爲なり。さらば汝は彼等の眼中に尊ばれん。もし能くするならば此の如き場合には涙を以て言ふべし、自己にも汝に聽く者にも益を與へん爲なり。神の恩寵は汝と共にせん。

もし汝は神の恩寵を受けて、天命と有形造物の命運を觀察するを樂む、いはゆる知識の初等なるものを賜はりしならば、己を預備し、誹謗の靈に對して自から武裝せよ。さりながら武器を持たずして此方面に立つなかれ、恐らくは汝は埋伏して汝を誘惑する者により速に死せん。涙と不斷の禁食は汝の武器となるべし。異端者の敎を講ずるを自から戒愼せよ、何となればこは誹謗の靈を起して汝に敵せしむることを屢なこれ有ればなり。腹を滿たすときは、神聖なるものゝ或る醜趣と旨意とを無恥に穿鑿するなかれ、恐らくは汝は悔ゆるあらん。汝に言ふ所のものを理會せよ、飽滿せる腹を以て神の奥義を讀るは能はざるものとす。神の照管のことに關する師父等の書を頻りに讀みて飽くを知らざるべし。何となれば彼等は智を神の造物と神の行爲に於ける大法を窺ふにみちびきて、自から之を堅め、其精徵を以て之を昭明なる思想を求むるに預備し、潔淨を以て神の造物を了解するに適せしむればなり。全世界に讀らしむる爲に神の選詔し給へる福音を讀むべし。萬姓諸族に於ける神の照管の力により路用を己れに得ん爲なり。及び汝の智は神の奇跡に潛心せん爲なり。此の如きの講讀は汝の目的と適合す。汝の講讀は何の爲にも攪されざる安靜を以てすべく、肉體のことを多く慮ると浮世の動亂とを免れて自由なるべし、すべての感觸より極て勝れる最美なる趣味を美なる了解により其靈底に感せん爲

なり、靈魂が自から此に恒なるにより之を感せん爲なり。練達なる人々の言は汝の爲に神の言を賣買する虛飾者の言とならざるべし、汝其生命の終に至る迄暗中に止まらずして、此等の言より生ずる利益を尊はれざらん爲、及び戰時には狼狽する者の如く動搖を示さずして、看々善を尋ねつゝ坑に陷らざらん爲なり。

汝は如何に徹底せんと欲すとも、汝の爲に內部に入りし證徵となるべきものは左の如くならん。向ふ所の目的を覩て其眞實を感ずる爲に恩寵が汝の目を開き始むる時は、汝の目は瞬間に涙の川を注ぎ始め、汝の臉は其多きを以て洗はるゝことたゝ一回のみにあらざるべし。其時感覺の戰は鎭まりて汝の內部に收縮せん。もし誰か此に反對して汝を敎ふるならば僭するなかれ。涙の外他の更に顯然たる證徵を身體に於て尋ぬるなかれ。されど智が受造物より一層高まる時は、其證にも涙あらざるべく、何等の感動も感觸もあらざるべし。

「汝は蜜を得るか足る程に食へ、恐らくは食ひ過して之を吐出さん」箴言二十五の十六。靈魂の性は動かし易くして輕快なり、時により靈魂は突出しつゝ高く昇りて、其性よりも極て高きものを確知せんを渴望し、聖書を讀み諸物を觀察するに由て或は理會する所も往々之あらん、さりながら許されて己を其理會したる所のものと比較するならば靈魂は其觀察の度に於て其知識の到達する所のものより下く且小なることあらはれん、ゆゑに其思念は恐懼と戰慄と畏怖の爲に翼はるゝことも其高上なる靈界の對象に觸るゝを敢てせしを自から恥ぢて再び己が虛しきに歸るを急がんとするものゝ如し。對象を以て暗示せらるゝ恐懼の故に何か畏るゝ念慮の靈中に惹起さるゝあらんに、理性は靈の智覺に暗鬱し沈默を學びて恥ざる者とならしめん。滅亡を免れん爲なり、超絕するものを尋ねずして靈魂より高上なるものを穿鑿せざらん爲なり。故に汝は理會し得べきことを與へらるゝときは理會せよ、無恥を以て輿義に觸るゝなかれ、叩拜せよ、讃美せよ、默然として感謝せよ、蜜を多く食ふことの善からざる如く、神の言の穿鑿に耽るなかれ、恐らくは懸隔せる對象を視んを願ふや、未だ彼に近づかざるに、其路の不便の爲に衰弱して汝の視力は傷はれん。げだし或時は眞實に代へて或る幻像を見ん。而して智も搜索の爲に煩悶するときは其目的を忘れん。此によりソロモンは「垣の無き壞れたる城の如し」箴言二十五の二十九と美妙に言へり。忍耐なき人も實に此の如し。故に人は其靈魂を淨むべく、汝の性の外にあるものゝ爲の配慮を自から拋擲して、其概念と感動に貞潔と謙遜の幕を掛けよ、さらば此によりて汝は天性の內部にあるものを發見せん、

何となれば奥義の啓示は謙遜なる者に與へらるればなり。

もし汝は其靈魂を祈禱の行爲に專にして智を淨め、夜間の儆醒を守りて、光明なる智慧を得んと欲せば、世の觀玩に遠ざかり、人々と面會するを絶つべし、たゞひ有益に托すとも、汝と同性情同思想にして汝と共に奥義を談ずる者の外は、風習に依り友を己の庵に受るなかれ、外的談話を斷絶し、解除して、之を全く廢したるが爲常に心ならずして惹起さるゝ心的談話の混合を恐れよ。汝の祈禱に施濟を結付けよ、さらば汝の靈は眞實の光を觀んげだし心が外物に援ざるゝことの止むに隨ひ、智は神聖なる思想と行爲とを理會するにより、通曉と慧悟とに達するを得るなり。げだし少しく勉勵するならば、人間の集會を神と對談するに換へ、一の談話を他の談話に換へんと欲せば、直覺の機微なる路を汝に啓示する聖書と諸聖人の傳とを學ぶべし、たゞひ最初は近きを暗ますとも、之を學ぶべし。

祈禱に立つて其規則を行ふときは世に見聞したるものを思ふに代へて其通讀したる神の書を思ふことを得べく、此思により浮世の事に就て記憶せし所のものを忘るゝに至るべし、かくの如くして智は潔淨に達せん。讀經は祈禱に立つとき靈魂に助けんと曾されしも、靈魂は讀經により祈禱を以て照明せられんと曾されしも此の謂なり。而して讀經は外的混合に代へて祈禱の各種類に機を給するなり。ゆゑに靈魂は讀經を以て照明せられて恵らず援されずして常に祈禱せん。

靈的對象を研究するは肉體を愛する者と腹を喜ばす者との爲には不適當なること、恰も眞潔の事を談ずるは淫婦に不適當なるが如し。極めて薄弱なる體は齊粱なる食物を厭ひ且は之に堪へざらん。浮世のことに占領せられたる智る神聖なる事の研究に近づく能はず。火は濕りたる薪に燃付かざらん。神聖なる熱愛も安佚を愛する者の心に燃付かざるなり。淫婦は一人に情誼を守らず、多くの事に絆さるゝ靈魂も神聖なる敎訓に忠なるものとなりて存せず。自己の目を以て太陽を見ざる人はたい之を聞くのみにて、其光に觸れざるにより、人に其光を說明する能はざるべし、靈神上の行の美を心を以て味へざる者も此の如し。

日中の需要の爲に餘有る時は之を以て貧者に頒ち與へよ、而して行て勇氣にして祈禱を献げよ、即神と談話すること子の父と談話する如くせよ、施濟の如く心を神に近づくるものはある能はざるべく、又任意なる貧の如く安靜を心に生ずるもの

もあらざらん。質朴の爲に衆人が汝を無智と名づくるは、名聲の爲に賢明と名づけ才能の完全なる者と名づくるより愈れり。もし誰か馬に坐し施をうけんとして汝に手を伸さば、否むなかれ、何となれば此時彼は貧しくして乞人の一なることは疑なければなり。然して與ふる時は大聲と愚癡なる顏色とを以て與へ、請ふ所よりも多く給せよ。げだし言ふあり、汝の碎片を貧者の面前に投せよ。然らば多時ならずして報を得ん、傳道之書十一の一。富者を貧者より區別するなかれ、適當なる者を不適當なる者より辨別するなかれ、盡くの人は汝の爲に善なる行に因りて一樣なるべし。げだし此方法により不適當なる者をも善に誘引するを得べし。何となれば靈魂は有形上のものにより敬神に誘引せらるればなり。主が稅吏又は淫婦と食を共にして不適當なる者を斥けざりしも、此方法を以て不適當なる者を敬神に誘引せん爲なり。又有形上に類り無形靈神上に近づかしめん爲なり。ゆゑに作善と尊敬とを以て悉くの人を平等視し、或は不信者たり、或は殺人者たるを問ふなかれ、矧んや彼も汝の爲に兄弟たり、汝と同性にして誤りつゝ眞理を錯りしには非るをや。

人に善を爲すときは彼より報酬を待つなかれ、さらば彼の爲にも此の爲にも神は汝を賞賜せん。然して汝の爲に能くするときは善を爲すべく、未來の報酬の爲に爲すなかれ。もし極貧の親則を其心に諜して神の恩寵により憂慮を免れ、極貧を以て世より高く立つならば愼めよ、貧者を愛して施を爲さん爲に獲るを嗜むなかれ、一者より取りて他者に與へんが爲に其心を擾亂に投するなかれ。人々に從屬して己の尊敬を貶すなかれ、彼等に諂願して浮世の事を慮るが爲に眞智の自由と尊貴とを失ふなかれ。何となれば汝の階段は慈惠者の階段より高ければなり。汝に願ふ、如何にしても從屬せざらんことを。慈惠は子を育つるに似たり、されど獸想は完全の敵なり。もし汝に財產あらば一時に之を散せよ。されど何物をも有せずんば有せんことを願ふなかれ。己の庵を淨潔にして奢侈と數物とを去れ、何となれば汝の欲せざるに拘はらず、こは汝を節制にみちびくを餘儀なくせしむればなり。すべてのものに缺乏するは人に節制を敎へん爲なれ。然れども我等自から許して彼と此とを有するときは己を節制する能はざるべし。

外部の戰に勝利を得たる者は內部の戰を畏れざる勇氣を有せん、されば彼等を危惧せしむるものは二としてあるなく、前後より來らんとする戰に彼等は動搖せざらん。知るべし戰とは感覺により及び不注意により必中に起る所の戰にして例へ

ば耳又舌により或は與へ或は取るときに起る所のものをいふ。是れ皆心中に入りて昏迷を生ぜん。ゆゑに外部の擾亂の至るに際し靈魂は心中に起る所の秘密なる戰に自から注意して、內部に蜂起するものに安靜を以て克つ能はざるべし。然れども人は其城門を閉づるとき、即感覺を閉づるときは、內部に戰ふべく城外に惡を謀る者等を恐れざらん。

此を知りて默想を務め、事の多端を以て己を煩さずして、すべて身體の精力を祈禱の勞に向け、神の爲に勞して、日夜神のことに配慮する間は極めて緊要なるものにも乏しきを有せざるべしと確信する者は、神なり。何となれば神の爲に放心より又勞よりも遠ざかればなりしかれども誰か手工せずしては默想を務むる能はざるときは、手工を輔助とし用ひて働くべし、利益の爲に慾心よりするなかれ。手工は弱者の爲に課せらる。然れども最完全なる者の爲には彼は擾亂の因とならん。けだし貧者と怠慢者の爲に神父等は手工に從事すべきを定めたれども、緊要なる行とせしたるには非ず。

神が汝の心を深く內部に於て感動せしむる時は拜と跪とを斷えず行ふべし。もし魔鬼が汝を勸めて他の行爲に從事せしめんとするも、其心に何を感るをも許すなかれ而して其時此により汝に生ずるものゝ如何なるを見て慌噪せよ。もし誰か日夜祈禱してパリストスの十字架の前に己を捧ぐることを面縛せられし者の如くならば苦行者の戰に於てかくの如く重要にして且難きものは他に一もあらざるべく又かくの如く魔鬼の猜忌を起すものもあらざるべし。其熱愛の冷ならずして涙の乏しからざらんを欲するか此を練習せよ、人よ、予が汝に告ぐるものゝ爲に日夜盛りて他の何事をも願はずんば、汝は福なり。其時光は汝の內部に輝き汝の義は速に照し始めて、爛漫たる花園の如くなるべく水に乏しからざる泉の如くなるべし。視よ苦行により人に如何なる幸福の生ずるかを。人は祈禱に膝を屈め手を天に擧げ面はパリストスの十字架に向ひ其悉くの思を一に攝めて神に祈るに集中ずるこゝ屢々之あらん而して人が涙と感動とを以て祈禱するや其間に之と同時に忽焉として其心に樂みを注ぐ泉の沸騰するあり。て其肢體は弱わり、目は閉ぢ面は地に俯して、其所思は變化すよりて人は其全身に慈起さるゝ歡喜の爲に叩拜を爲す能はざることあらん。人よ讀む所のものに注意せよ。けだし齋闘せずんば獲る所あらざるべく、熱心に門を叩き、其側に不斷倣醒して止まらずんば聽かれざるべし。默想を守るに堪へざる者の外誰か此を聞きて外部の義を欲する者ありや。されど

もし誰か默想を練習する能はずんば、はだし門の內部にあること能はず。神の恩寵を以て人に與へらるればなり。他の路を登つるなかれ、然らずんば生命の二の路に於て其一を失はん。外部の人がすべて世に關するものゝ爲に死せず、たゞ罪の爲のみならず、すべて肉身的行爲の爲にも死せずして、之と同く內部の人も邪なる思の爲に死せず、肉體の自然の感動が騷りて、罪の甘美が人に起らざるべく、其肢體は此生命に於て潔淨を受けざるべく、神聖なる思は其靈中に入らずして、感じ得ざるものとなりて存せん。且人は天性の免る可らざる要求の外は、生活の爲の歲を其心中に働かしめずして、之が爲の配慮を神に托するに至らざる間は、靈的酩酊は人に起らずして使徒が自から慰めたる（カラティヤ二の二十）慰安を知らざるべし。されど予が此事を言ひしは、失望せしには非ず。もし誰か完全の最頂に達せずんば神の恩寵を賜はらずして、神の慰安を避へざらんといふには非ず。けだし人は不適宜なるものを輕んじ之より速に助を感せんもし少しく忍力を用ふる、ならば其靈魂の爲に慰安を見るべく、罪の赦しを捉ふべく恩寵を賜はりて多くの幸福をうけん。さりながら彼は世を離れたる者の完全に比すれば、彼處に福樂の與

へられざるを知るべし。されど予が此事を言ひしは、失望せしには非ず。もし誰か完全の最頂に達せずんば神の恩寵を賜はらずして、神の慰安を避へざらんといふには非ず。けだし人は不適宜なるものを輕んじ之より遠ざり、全く捨ざかりて、善に歸るならば、速に助を感せん。もし少しく忍力を用ふる、ならば其靈魂の爲に慰安を見るべく、罪の赦しを捉ふべく恩寵を賜はりて多くの幸福をうけん。さりながら彼は世を離れたる者の完全に比すれば、彼處に福樂の與

後に加へられしなり。

慾の原因より自由に遠ざからざる者は必ならず罪に誘引せられん。罪の原因は左の如し。酒なり、女なり、富なり、肉體の強壯なり、さりながらこは其性質に於て罪なるにはあらず、天性が此等により罪なる慾に易く傾くによる、故に人は注意して此を規慎ずること肝要なり。もし己の弱きを常に記憶するならば戒愼の擬を破らざるべし。極貧は人々の魂をする所なり。然れども高慢なる靈魂と高超なる意氣とは殊に神に醜せらる。富は人々に貴ばる、然れども謙遜なる靈魂は神の尊敬する所なり。

善なる活動に始を置かんと欲する時は、先づ汝に及ぶ所の誘惑の爲に自から備をなして、眞理に蹉躓するなかるべし。けだし人が熱信を以て善なる生涯を始むるを見るや種々の恐るべき誘惑を以て彼を迎へ、此により畏れて善意を冷ならしめ、神に悦ばるゝ行爲に近づくの切愛を全く有せざらしめんとするは敵の常なればなり。而して敵が此を爲すはかくの如きの力を有するによるに非ず（もし之を有するならば人ば如何なる善をも爲すこと能ばざるべし）義なるイオフに於て我等の確知する如く神が彼に許し給ふによる。ゆゑに德行に遵はさるゝ誘惑は勇氣に之を迎ふるの備をなして、其後活動を始めよ。之に反して誘惑を迎ふるの豫備をなさずんば德行の活動を自から禁止するなり。

神は善なる活動に於る補助者たることに疑を容るゝ人は、己の影を恐れ、充ちて豐なる時にも飢に疲れ、四圍の磽確なる際にも暴風に滿たさるゝなり。之に反し神に依賴する者は、心は堅固にして、其身敬すべきことはすべての人に明かに顯はれ、其賞讃は其敵の面前にあり。

神の誡は世のあらゆる財寶より高く正にあり。之を獲得せし者は自己の內部に神を見ん。神の照慮に常々安んずる者は神を家宰として得ん。神の旨を行ふに渴慕する者は天使等を嚮導と爲さん。罪を懼るゝ者は恐ろしき進行を成して跌かざるべく、晦冥の時には己の前にも己の內にも光を見ん。罪を懼るゝ者の足を主は保護して、失脚する時には神の憐は先だゝん。己の破誡を小なりと思ふ者は以前より尙甚しく陷り、七倍の罰を獲はん。

讒遜を以て施を種け、さらば審判に於て憐を刈らん。汝は善を亡ぼせし程は新に之を得よ。汝は神に蜚蠊に代へて眞珠を汝より取らざらん。例へば汝は貞潔を亡へり、もし淫行に止まらば神は汝より施を受けざらん。何となれば汝は

誠を破り心により肉體の罪なるを汝に要望すればなり。世の財產を蓄てんと志して他の何物の爲に罪を負すか。汝は植付けられしものを棄て、他物の爲に來り戰ふか。

聖ヱフレム言へり、收穫の時は冬服を以て炎熱に敵せざらんと。此の如く各々種く所のものを穫るなあ。すべての病は之に相當なる藥を以て愈さるゝなり。汝は嫉妬に勝たれるか、何故睡眠を圖ふに盡力するか。過は尙小にして熟せざる間に之を滅し、枝葉の蔓延して成熟するに先だつべし。瑕瑾は汝に小なりと見ゆるも論斷すなかれ、何となれば後來無窮なる命命者を得て其前に奔走すること囚奴の如くなるべきによる。最初慾に敵する者は速に彼を主宰せん。

侮を禦ぐ方法を垂に有ちながら喜で之を忍耐するを得る者は、神を信ずるにより點數を贏ふ。うけん、冤罔ひらるゝ冤罪を順良にして勝忍する者は、完全に遂し、聖なる天使等も彼に勤かん。げだし他の如何なる修行も、かくの如く高尙にして行ひ難きはあらず。

試みられて己の不變なるを見るに至る迄は、汝は己を有力なりと信ずるなかれ。かくの如くすべてに於て己を試むべし。正しき信仰を己に蓄よ。汝の敵を蹂躙せん爲なり。汝の才智に高ぶるなかれ、恐らくは汝は天然の賜きに躓きを許されて、其時自己の墮落により己の賜きを確無せん。己の知識に信任するなかれ、恐らくは敵は中間に入り狡猾を以て汝を捉へん。汝の舌を溫良ならしめよ、然らば汝は必ず羞辱に遇はざらん。愉快なる口を蓄よ、然らば人は皆汝の友とならん。自己の事業を決して自負の言にて誇るなかれ、恐らくは叢を啓かん。人は何を以て誇るを爲すべきに於て神は人に變化するを許し給ふ。人の辱められて讒遜を畏ばん爲なり。ゆゑに汝はすべてを神の預知に托し、此の生涯に處る不變なるものとなり。

ある如く信せざらんこと照管は悉くの如く行動して不斷其目を神に注ぐ爲なり。然れども此照管は己より淨めて、當に神を思ひ、神獨りを人を包容すればなり。然れども此照管は己を罪より淨めて、當に神を思ひ、神獨りを思ふ者の外には、明に見えざるなり。然して神の爲に大なる試驗に及るときは、神の照管は特に彼等に顯はるゝなり。げだし其時は彼等神の照管を感知することを恰も肉眼を以て見る如くなるべくして其各自に及ぶ所の試驗の度と源因とに準じて此の苦行者を勇氣に勵ますことたとへばイアコフ、イイスヌナヴィン、三人の童子ペトル及び其他の聖者に成る人間の狀態を以て現れて彼等を敬虔に勵まし且堅め

たる如くなるべし。しかれども汝は言はんこは撕理により神を以て聖者に與へられしものにて彼等は獨り特別に此の如き異象を賜はりしなりと。然らば聖なる致命者等を以て汝の爲に勇氣の標準とせよ。彼等はしばしば多數相共に或は一個一個に多くの場所に於て且は種々なる場所にあらはれたる力により鐵にて絶らるゝと人性の爲に堪ふる能はざる百般の苦みとを脆き體にて忍耐せりけだし此の如き者等に聖なる天使等の顯然と現れたるは彼等神の爲にもろ〳〵の患難を充分忍耐したるにより神の照管が豐かにあらはれて彼等の剛勇を表はし以て其敵を辱かしむる所以を彼等各人に確知せしめん爲なりけだしかくの如きの異象により諸聖人の堅く支ふる程は諸敵も其忍耐に激成せられて益々猖狂に至りぬ。

世に知られざる苦行者及び遁世者に關しては何を言はんを要するか彼等は野を以て城市となし天使等の里となし又住所となせり其行の齊整の爲に天使等は常に來り臨めり而して獨一主宰の戰士として時により彼等は互に共に戰へり彼等は總世野を愛しけるが神を愛するにより山間巖窟又は地の深所を住居となせり而して彼等が地に屬するものを棄てゝ天に屬するものを愛し天使に倣ふ者となれるや聖なる天使其者も之が爲彼等に其狀をあらはして隱さゝることは當然にして其悉くの願を充たし時としては彼等にあらはれて如何に生活すべきを教ふ而して又或時には彼等が迷ひし所以を說明し或時には聖者等自らも質問せり是れ當然なり或時には天使は路に迷ひし者等を救ひ或時には圍らざる災害と恐ろしき危難の際に彼等を取り去りぬ例へば蛇より救ひ或は岩石或は木片或は投石の爲に危きより救ひし如し或時にはもし敵が聖者を公然侵擊するときは顯然と彼等にあらはれて彼等を助けんが爲に遣はされし所以を言ひ而して彼等に勇敢大膽及び慰藉を增加へたり然れども他時には彼等を以て病を癒したれど或時には其の苦みに罹れる聖者を自から癒し或時には食はざるが爲に疲れし彼等の體に手を觸れ或は言を以て超自然なる力を與へて彼等を堅めたり然して或時には彼等に食物麵麭又は蔬菜をも供し或は麵麭と共に他の或る食ふべきものをも供へ而して或者には其死期を告げ他者には其有樣をさへ示したりき。それ聖なる天使の我等に愛を表するとき義人等の爲にすべて能ふべきの配慮を爲すとを多く計算せんを要するか彼等が吾人の爲に配慮するは長兄弟の少者に於ける如し。予が此事を言ふは「主は凡て之を呼ぶ者に遲き」聖詠

百四十四の十六）所以を人皆確知し、主の意を悦ばすことに己を献げ全心を以て其跡に随ふ者等に於る主の照管の如何なるを見るを得しめん爲なり。

神の汝を照管するを信ずるか、何故汝は煩悶して、一時に屬するものと汝の肉體に要用なるものゝ爲に心を安んせずして懸念するか。之に反して神の照管するを悟せず、随て汝に要用なるものを神以外に自から謀るか、汝は人類中最も憐むべきものなり。何の爲に活くるか否活きんとするか。汝の衰みを主に負はしめよ。彼は汝を養はん（聖詠五十四の二十三）猥然なる恐懼を恐るゝなかれ（箴言三の二十五）一たび永遠に己を神に献げたる者は必ず安んじて生命を送らん。無慾なれば平安を感せざるなり。誘惑に入らずんば誰も心神の聰慧を得ざらん。勉強して讀むなくんば思念の機微を察せざるべし。思念の安静なくんば智は神秘なる奥義に進まざるべし。信に依て望むなくんば靈魂は誘惑に對して勇敢なる能はざるべし。神の顯然たる保護を試知せずんば必ず神に依頼する能はざらん。もし靈魂はハリストスの苦難を認識して之を味ひずんばハリストスと親與するを得ざらん。

矣なる憐憫により、矣くべからざる需要の爲に己を殺す者を神の人と認むべし。げだし貧者を恵む者は神を得て己の後見と爲す。而て神の爲に貧しくなりしものは乏しからざる寶を獲ん。

神は何物にも必要あらず、然れども人が神の像を安んせしめて、神の爲に之を尊敬するを見る時は樂まん。人あり汝の所有するものを汝に請ふ時は、心に左の如く言ふなかれ「我が靈魂の爲に此を存置かん、此を以て自から安んせん爲なり、我の爲に要用なるものは他所より神は後に與へん」といふなかれ。此の如き言は不義にして神を知らざる人には適せん。義人にして善なる人は己の貴きを他に與へずして恩寵の時を事なくして經過するを許さゞるなり。貧窮して切迫する人は神より痛せられん、何となれば主は何人をも棄てざればなり。然るに汝は貧者を放逐して神より汝に與へられし骨きを離れ神の恩寵を自から遠ざけんとす。故に與ふる時は惡んで次の如く言ふべし神よ、光榮は爾に歸す、安んせしむべき者に遣ふことを予に賜へばなり」と。然れども與ふべきものを汝は一も所有せざる時は、殊に喜ぶべく神に感謝して、左の如く言ふべし「我が神よ、汝に感謝す、汝は此の思寵と尊敬とを予に與へ、即汝の名の爲に貧しくなるを予に與へ、病と貧とを以て汝の誡命の路に置かれたる患難を甘むるを予に賜ふこと、此の路を進行せし汝の諸聖者の嘗めたる如く

せしによる」と。

衰弱するときは言ふべし「神により生命を嗣ぐべきものを以て神より試みらるゝを賜はりし者は煩なり」と、けだし神は靈魂の康健の爲に病を遣はせばなり。聖者あり、左の如く言へり、曰く「予は認む、主の意に適して働かず、己が靈魂の救の爲に熱心に聞はざる修道士は必ず誘惑に陷るを神より許さるゝなり、閑散なる者となならざらんが爲、及び多くの閑散により惡事に傾かざらんが爲なり」と。ゆゑに神が怠慢なる者と等閑なる者に誘惑を被らしむるは、彼等誘惑の事を思ひて無益なることを考へざらん爲なり。然して神を愛する者の爲に神の常に此く爲し給ふは、彼等を瞹解せしめ、智慧を增して、其旨を彼等に敎へん爲なり。ゆゑに彼等が衰弱して、此事の起れるは等閑と怠慢との爲なるを疑なく確知するに至る迄は神に祈願するも速に聞かれざるべし、けだし錄して言へり、曰く「我なんぢ等が手を伸ぶる時目をおほひ、汝等が多くの祈禱をなすときも聞くことをせじ」〔イサイヤ一の十五〕と。是れ他の人々に就ても言ひ得べしといへども、特に主の途を棄てたる者の爲に書されしなり。

さりながら神は大仁慈なりと言ふにも拘はらず誘惑に於て常に叩き且求むるときは聽かれざるのみならず、却て我等が願を輕んずるは何故かげだし預言者は此事を我等に敎へて言へり、主の手は惠を乘るゝ爲に小ならず主は聞く爲に耳を重くせず、却て我等が罪はわれを彼と分離し、我等が不法は彼の面を背けて聞かざらしむと〔イサイヤ五十九の一〕。何の時も神を記憶せよ、さらば災難に陷るときは彼も汝を記憶せん。

汝の性は慾を受け易きものとなり、現世には試惑多く、惡は汝より遠ざからずして、汝の內部にも汝の足下にも橫溢す。立つ所の地位より下るなかれ、神が惠み給ふときは免るゝを得ん、目と險の相近きが如く、試惑も人々に近し、而して神が汝を益せん爲に容智を以て之を預め設け給ひしは、汝常に彼の門を叩かん爲なり、患難の恐れによりて彼を念ふ記憶を汝の心に種込まん爲なり。汝祈禱に於て彼に近づき不斷彼を記憶して汝の心の聖にせられん爲なり。而して汝が祈願するときは汝に殆き給はん、さらば汝は汝を救ふ者の神なるを確知すべく、汝を造りて汝の爲に二重の世界を造りし者を自覺せん。即一は一時の師たり敎誨師たるものを造り、他は父の家たり、永遠の嗣業たるものを造れる是なり。神が汝を造りて患難の近づき難き者となさゝりしは、汝も神の如くならんとの非望を起し、

最初は明星たりしも後來驕傲により、サタナ」となりし者の嗣ぎしものを同く嗣がざらん爲なり。然して之と同く汝を造りて遽せざる者となさず、移らざる者となさざりしは、汝不靈なる造物の性に似たる者とならざらん爲なり、汝に於て善なるものが汝の爲に無益なるものとなりて存することを無言者たる禽獸の天然の特質の如くならざらん爲なり。げだし汝に向つて此刺を研がれしにより、利益と感謝と謙遜の幾許生ずるかは何人にも易く了解し得ん。此に由て見れば我等は出來得る丈善に進みて惡を避くべき所以と、此より流れ出づるものは名譽も不名譽も我有とせらるゝ所以とは顯然たるなり。不名譽を以て辱しめらるゝ我等は畏る、然れども名譽を以て屢まさるゝ者は感謝を神に捧げて、德行に發展せん。神が此等の保育者を增し給ひしは、汝彼等を免れて自由になり、患難の近づき難き者となり、すべての畏懼より遠ざからずして、多神主義に陷るを免れん爲なり。例へば他の多くの者が汝と同く慾を有して汝と同樣の不幸に打たるゝに拘はらず、此世の瑣々たる權威或は有形の美の爲に瞬間にして多神主義に陷るのみならず、愚にして自己をも神と名づくるを敢てせし如くなるを免れん爲なり。ゆゑに神は汝に忠難に居るを許し給へり。

しかれども時として汝が遠離して神を怒らしめざらん爲にも、神が汝を罰に投じて汝を其顏より滅さゞらん爲にも、之を許すことあり。生活の安全と長るゝ所なきの故に生ずる所の不信及び其他の誹謗に關しては、是より先予が述べしものを敢て非難する者あらずんば、言はざるべし。神は苦みと慾とを以て汝の心に神を念ふ記憶を增し、反對者を恐るゝにより汝を神の仁慈の門に就かしめ、之より救ふを以て神を愛する心を汝の中に蒔付けたまへり。而して愛を汝に入れ、義子たる榮を以て神に近づかしめて、其恩寵の幾ばく豐富なるを汝にあらはせり。げだし反對なる者が一も汝と會するあらずんば此の如き神の照管と善慮とを汝は何處より探知すべきか。故に神を愛する心は此により汝の靈中に大に增殖せらるべし。即神の賜を瞭解すると其照管の大に餘あるを記憶するとにより增殖せらるべし。此のすべての幸福が汝の爲に悲哀によりて生ぜらるゝは汝の感謝するを學ばん爲なり。終りに神を記憶せよ。神も汝を常に記憶せん爲なり。然して汝を記憶して汝を救ふときは彼よりすべての幸福をうけん。無益なる事に思を馳せて神を忘るゝなかれ、神も汝を其戰時に忘れざらん爲なり。己の富裕に於て神に從順なるべし。患難に於て神に對する熱心堅固なる祈禱を以て神の前に勇氣を有せん爲なり。

主を念ふ記憶を心に有して主の前に不斷己を潔くせよ、久しく彼を記憶せずして、彼に就く時勇氣を有せざる者とならざらん爲なり。げだし神の前に於ける勇氣は神と頻に對談すると多くの祈禱の結果なり。人々に交際すると之を續くるとは身體に賴る、然れども神と交通するは心中の記憶と祈禱に注意すると全婚祭とに賴る。神を念ふ記憶を久しく守るにより靈魂は時として駭異と驚訝とに至ることあり。主を尋ぬる者の心は樂むべし、諺を受る者は主を尋ぬべし、さらば望を以て確立せん、悔改を以て彼の顏を尋ぬべし、聖詠百四の三、四さらば其顏の聖なるを以て聖にせられて、其罪より淨められん。凡て罪ある者は主に趨り就けよ、彼は罪を赦して其過を輕んせんげだし彼は豫言者を以て誓つていへり、曰く「主言ふ我れ生く、罪人の死を欲せず轉じて生きんを欲す」（イエセキエリ三十三の十一）又言ふ「順はずして悖れる民に終日我が手を伸して招けり」（イサイヤ六十五の二）又言ふ「イズライリの全家を憐む」（イエゼキエリ三十九の廿五）我に歸れ、我亦汝等にかへらん（マラヒヤ三の七）又言ふ「罪人が其途を棄てゝ主に歸り法律と公義とを行ふ日には、彼の不法を記憶せず、乃ち生きて死せざらんと、主はいひ給ふ。而してもし義人は其義を棄て、罪を犯し、不義を爲さば彼の義を記憶せず、却て覆を其前に置かん、されば彼は其行に止まりて暗中に死せん」（イエゼキエリ十八の二十一―二十四）是れ何故なるか、げだし罪人は主に歸る日には其罪に跌かざるべけれど、義人はもし如此の罪に止まるならば、其義は彼を罪を行ふの日に救ばざるによる。然して神はイエレミヤに左の如く告げていへり、曰く「汝卷物を取り我が汝に語りし日、即ちイウデヤの王イオシヤの日より今日に至るまでを之に錄せよ、我が汝に語りし如く此民に降さんとするすべての災を聽き恐れておのゝ〳〵其惡しき途を離れ轉じて悔改せん、さらば我其罪を赦すべし」（イエレミヤ三十六の二、三）又容智者も言へり「己の罪を掩ふ者は一も益する所あらず、されど己の罪を認めて之を背棄する者は神より矜恤を蒙らん」と、（箴言二十八の十三）またイサイヤも言へり曰く「主を尋ねよ、尋ねて彼を呼べよ、近づきて罪人は其途を離れ不義なる人は其思を棄て而して我に歸れよ、然らば汝等を矜まん。げだし我が思ひは汝等の思の如くならず、我が途は汝等の途の如くならずサイヤ五十五の六、八）もし我に聽き遵はゞ地の美なる者を食はん（イサイヤ一の十九）我に來りて我に遵ふべし、然らば汝等の靈は生きん。主の途を守りて主の旨を行ふ時は主に依賴して彼を呼ぶべし、我呼ぶときは我こゝにありといはん（イサイヤ五十八の九）

誘惑が不義者を襲ふや、彼は神を呼んで其救を待つの希望を有せず、何となれば其の安寧の日に神の旨より遠ざかりしによる。戰を始むる先に助を己れに尋ねよ、疾病の先に醫を捜せよ、患難が汝に來る先に神に祈れ、さらば不幸の時神を尋ねて神は汝に聽き給はん。失脚する先に呼んで願ふべし、祈禱せんごして立つ先に誓約を用意せよ、即此處より旅立することの用意せよ。ノイの方舟は平安の時に預備せられて其木は百年の前に仕上げられたり、されば怒の時不義者は亡びたれど義人の爲に舟は庇護となりぬ。

不義なる口は祈禱の爲に塞がらん、何となれば良心の責めは人を勇氣を有せざるものと爲せばなり。善良なる心は祈禱に於て喜んで侮を忍耐すれごも、世が生くる所の者は侮を忍耐する能はず、却て虛誇の爲に動かされて怒を發し無智なる激動により擾亂し、或は悲哀に圍まれん。此の如き德行に進歩するは如何に難くして神より如何なる榮を受くるや。此の德行に進歩する者、即侮を忍耐し大量ならんを欲する者は、親族に遠ざかりて旅行者とならんごと要用なり。何となれば本國に於ては此德行に進歩する能はざればなり。親族の中に在りて苦難を忍耐するは一の大なる有力者に適すべく、此世が死する所の者のみ此を能くせん。何となれば彼はすべて現在の慰めに望を絕てばなり。

恩寵は讒逐に遠からざる如く、病の發作は驕傲に近し。主の眼は讒逐なる者に向ふ、彼等を樂ましめん爲なり。されど主の面は驕傲なる者に反す。彼等を讒逐ならしめん爲なり。讒逐は神より常に憐みを受く。之に反して不仁と小信とは恐しき出來事と相會す。すべてに於て衆人の前に己を卑うせよ、さらば此世の王の前に高められん。敬禮と叩拜を以てすべての人に先んせよ、さらばヲフィルの金を進獻する者よりも尊ばれん。

己を卑うせよ、然らば己れに神の榮を認めん。げだし讒逐の芽を出す處に神の榮は流るゝなり。もし汝はすべての人が汝を公然卑めんことを切に願ふならば、神は汝を頌揚せらるゝものとなさん。もし其心に讒逐を有するならば、神は其榮を汝の心に示さん。汝の大なるに於て侮り易き者となれ、されど汝の小なるに於て大なる者となるなかれ。輕侮に居るを力めよ、さらば神の名譽に滿たされん。內部に疵を滿たして尊敬に居るを求むるなかれ。名譽を斥けよ、尊崇せられん爲なり。名譽を愛するなかれ名聲の汚れざらん爲なり。名譽に汲々たる者より名譽は前面に逃れん、されど名譽を避くる者に名譽は後より追及して衆人の爲に其讒逐の告示者とならん。

もし汝は尊崇せらるゝを免れん爲に自から己を輕んせば、神は汝を宣示せん、もし實に己を非難せば、神は悉くの造物に汝を頌讃するを命じ、汝の造成者の光榮の門は汝の前に開けて、汝を頌讃せん、何となれば汝には實に神の像と肖とあればなり。道德は光り輝けども人々には微々たる者として、あらはれ、生活は淡泊に知識は賢明にして、心神の謙遜なる者を誰か見たるか、すべてに於て己を謙る者は福なり、何となれば高められんとすればなり。げだし神の爲にすべてに於て謙りて己を抑損する者は神を以て稱讃せられん。神の爲に飢ゑ渇く者に神は其幸福を滿たしめん。神の爲に裸體を忍ぶ者は神を以て不朽と光榮を衣せらるゝなり。神の爲に極貧となる者は神の眞實なる富を以て慰められん。神の爲に己を賤めよ、さらば汝の榮譽許增加するを識らざらん。畢生己を罪人と爲せ、さらば生涯の間汝は義とせらるゝ者とならん。己の賢明に於て無知となれ、無知にして賢明と見ゆるなかれ。謙遜は凡庸無學の人をも高うするならば、大にしてるか思ふべきなり。

虛誇を逃れよ、然らば稱讃せられん。驕傲を畏れよ、さらば高められん。虛誇は人の子に與へられず、尊大は婦の生む者に與へられず。もし汝はすべて浮世に屬するものを自由に棄つるならば、之を追ふ者を避けよ、貧慾なる者を避くること、貪慾其ものを避くる如くせよ。奢侈なる者に遠ざかること、奢侈其ものに遠ざかる如くせよ。放蕩なる者を避くること、放蕩其ものを避くる如くせよ。げだし此等の事は記憶するのみにても心を擾すならば、殆んやかくのごとくをや。義者と親近せよ、彼等により神に近づかん。謙遜を有する者と交際して彼等の品性に習へ、げだしかくの如き者等を看望するは益あるならば、殆んや彼等が口授の教に於てをや。

貧者を愛せよ、彼等により汝も憐を捉へん爲なり。好爭者と近接するなかれ、恐らくは汝も安靜の外に立つを餘儀なくせられん、病ある者特に極貧なる者より發する惡臭は嫌はず耐忍せよ、汝も肉體に包まるればなり。心に哀む者を賣むるなかれ、恐らくは彼等が杖は汝を打ち、汝は撫恤者を求むれども得ざらん。不具者を賤むなかれ、人皆同尊にして、地獄に赴けばなり。罪人を愛すれども其行を憎め、罪ある者を其瑕瑾の爲に輕んずるなかれ、彼等の誘はれたるものを以て自分も同く誘はれざらん爲なり。汝も地の性を稟けし者なるを記憶して、衆人に善を作すべし。汝の祈禱を要求する者を斥くるなかれ、彼等を和ぐる慰藉の言を奏ふなかれ、恐くは彼等は亡

びて彼等の靈を汝より求められん。之に反して醫は娼街の病を癒すに清涼劑を以てすれども、之と反對なるものをは溫煖なるものを以てするを記憶せよ。

人と面會する時は彼に其度に超て尊敬を表するに己を强ひよ。彼の手と足とを接吻し、大なる敬意を表して頻りに彼を抱き、彼を己の眼の上に擧げて、彼が有せざるものゝ爲にさへ彼を稱揚せよ。然して彼と別るゝ時は彼の爲にすべて善なることを言ひ、何にても尊敬すべきことを言ふべし。けだし此等の擧動を以て彼を善にみちびき、彼をして汝の待遇の厚き敬禮に自から恥るあらしめ、彼に德行の種子を種けばなり。汝が得たる此の如きの習慣により善なる象樣は汝に印せらるべく、自から高き謙遜を得て大なるものに易すく進歩せん。然のみならず汝の尊敬する者は何か缺點を有するあらば、汝のあらはせる尊敬により自から恥ぢて、汝より療方を易すく受けん。此習慣、即衆人に對して懇勤謙厚なる習慣を汝は常に有すべし。信仰の爲にも惡行の爲にも誰をも激するなかれ、誰をも憎むなかれ、誰を何に於てか非難し、或は規責するを戒愼せよ。何となれば我等には公平無私なる審判者の天に在すあればなり。されどもし誰をか眞理に向はしめんと欲するならば、彼の爲に哀むべし、涙と愛とを以て彼に一二言言ふべし、然れども彼に怒を發するなかれ、さらば仇怨の徵候を汝の中に認めざらんがだし愛は人を怒り、或は激し、或は騷急に人を責むる能はざるなり。我等が主ハリストス、イイススの爲に善なる良心により生せらるゝ讒謗は愛と知識の表示とならん。彼に光榮と權柄は父及び聖神と共に今も何時も世々に歸す。アミン。

第五十八　說教

神は靈魂を益するが爲、慾に近接するを許す事、及び苦行的行爲の事。

或る罪事に陷るは人間の弱きを顯はす、何となれば神は靈魂を益するが爲、慾に近接するを許し、第二の重生の先に靈魂を慾より上に立つるを有益とし視ざればなり。靈魂の慾に近づき易きは良心を刺激するが爲に有益なり、然れども慾に留まるは傲慢なり、恥を知らざるなり。凡て聰明なる靈魂の神に近づくを得る方法三あり、或は信の熱切なり、或は畏懼なり、或は主の敎訓なり。もし此の三の方法の中其一が先だゝずんば誰も神の愛に近づく能はざるべし。

第五十八　說教

思想の錯亂は嗜甘より生ずる如く、心意の疑惑と熱中は饒舌と放談とより生ず。浮世の事を慮るは心靈を躁がし、其擾亂は安靜の心を攪し、且奪ふなり。常に何れの時にもすべて浮世の慮の外にあるは天に屬する業務に己を捧げたる修道士に適當なり、自己に沈潛して現世に屬するものを一も全く己れに見ざらん爲なりげだしすべてかくの如きものに用なき者とならば日夜引誘なくして主の法を學ぶを得ん。心意の淨からざる身體の勞は無結果なる腹又は枯れたる乳房と等しかるべし、何となれば神に屬する知識に近づく能はざればなり。彼等は身體を疲らせざるも心中に慾を絕つを慮らず、故に一も刈るあらざるなり。棘中に蒔く者は一も刈る能はざる如く、怨恨と貪慾を以て己を卑うする者は何事にも成功する能はすして、多くの不眠の爲、又は事の困難の爲に床上に呻吟せん。ゆゑに聖書は證して次の如く言り、曩を行ひ、主の誡命の一をも棄てざる民の如く我に義と眞實とを求め、我(神)に近づかんを欲す。彼等は言ふ「我等禁食するに汝見ざるか、我等己を謙るに汝知らざるは何ぞやと、汝等の禁食の日には汝等の旨を行ふ」(イサイヤ五十八の二三)即汝等の惡しき思念を行ひて、之を燔祭の如く偶像に供へ、汝等の自から認めて神とする奇怪なる想像に供へ、すべての蓄物中最貴重にして汝等の善良なる行と

第五十八　說教

精潔なる良心により我に捧ぐべき所の自己の體を彼等に獻せんとすと。

美田は百倍の果を達して其當事者を樂ましむ。もし靈魂は神の記憶と日夜眠らざる儆醒を以て光り始まらば、主は彼を其處に護せん爲に雲を起して、蓋は彼を庇ひ、夜は日の如き光を以て照して、其光は暗中に耀かん。

雲の月光を遮る如く腹の蒸發は神の容智を靈中より逐出さん。枯れたる薪の火畑に於る如く、飽滿せる腹の身體に於るも亦此の如し。一の燃え易き物質を添ふるは火焰を增々大にするなり。甘きを嗜む身體に神に屬する知識は住まず、其體を愛する者は神の恩寵を捉ふる能はざらん。產の苦みは所生を樂ましむる果を世に生ずる、如く、咽の苦みは靈中に果を生ず。即神の奥義を識る知識を生ず。然れども怠惰なる者と甘きを嗜む者には恥の果を生ずるなり。父が子の爲に慮る如く、ハリストスも主の爲に苦む身體を慮りて、常に其口の近きにあり。智恵と共に行はるゝ行爲を得るは價を付すべからざるなり。

其思は一切浮世の外にある者は旅行者なり。未來の幸福を希ふに依り其生活のすべての日を飢と渴とに送る者は哀哭者なり。世外に居り、常に神に祈稿して未來の幸福を捉へんとする者は修道士なり。修道士の富は哀哭の中に發見する愚癡と心

の密室に光り始むる信念とより起る喜なり。其思に一を他より區別せずして衆人を憐む者は憐憫者なり。肉體の配合の爲に汚されずして身を守るのみならず、獨居する時も自から己を恥づる者は貞潔者なり、もし貞潔を愛するならば讀經の練習と長き祈禱とを以て恥づべき思念を逐ふべし、其時は天然の引誘に向つて武器を有せん、されど之なくんば心に淨潔を見るあたはざるべし。もし慈悲者たらんを願はゝ先づすべてを輕んずるに己を習はすべし。恐くは智は此の重みに引誘せられて、其界限より脫せん。げだし慈悲の充ち滿てる完全は侮辱に堪へんと決心する者の忍耐により證せらるゝなり。讓遜の完全は無寶の誣告を喜んで忍耐するにあり。もし汝は寶に慈悲者ならば、汝に屬するものを他より不當に奪はるゝときも、內心に哀むなかれ、其損害を傍人に語るなかれ。汝を侮辱する者の爲に受くる損害の汝の慈悲に呑まるゝは、酒の酸味の水の多きに呑まるゝよりも甚し。汝を侮辱する者に報ゆるに善を以てして、慈悲の多きを證するは、福なるエリセイが彼を捕虜にせんと企てたる敵に行爲せし如くなるべし。げだし祈禱して彼等を盲ならしむるや、之を以て如何なる力のあるを示したれど、彼等に食と飲とを與へて放釋するや、之を以て其慈悲の如何なるを證したりきサムイル後六の十三至二十三。

寶に讓遜の德ある者は侮辱せらるゝも心は擾されず、其侮辱せらるゝを自から保護する爲に何も言ふあらずして、讒言を受ること眞寶を受る如くし、其讒言せられたるを人々に信せしむるを力めずして、却て之が赦を請はん。げだし或者は放蕩ならざるも放蕩者の名を甘んじて己れに蒙り、他の者は姦淫に遠ざがりしも、姦淫者の名を忍受して、其犯さゞりし罪の結果を己れに負はんことを涙を以て證し、其靈魂が凡の淨潔と無玷とを以て飾らるゝや、其の爲さゞりし、不法の赦を泣て侮辱者に願ひたりき。然れども又或者は密に自から守る所の生活の卓絶なる規則を人々の頌讃せざらんがために、神聖なる鹽をこれに和し、其安靜の變せられざらんが爲に愚者の如くなる狀を爲し、其完全の高きに居り、聖なる天使等を有して其剛勇の宣言者となすに至れり。

汝は己を讓遜なりと思ふ。他は自から己を罪すれども、他に罪せらるゝ汝は之を忍せずして、己を讓遜の德ある者と宣言す。汝は讓遜の德あるや否を知らんと欲せば、此を以て己を試みよ。人々が汝を侮辱するとき汝は心を擾さゞるや否や之を以て試よ。

救世主が名づけて父に邸宅多しとの給へるは彼の方面に居る者の智の種々同じ

からざる程度を指していふ、即智の程度に循ひて樂む靈的恩賜の卓越と其差異とを言ふなり。げだし邸宅多しと名づけしは地位の等差に依るには非ず、賜の等級に依りていふなり。たとへば各人は視力の淨潔と其感受性とに準じて物體の太陽を樂む如く、又光は分たれて多くの光を發するに非すといへども、一の燈火により一家に照る光耀の種々同じからざる如く、來世に於ても悉くの義人は一の方面に個々別々に分れ居るにはあらざれど、おの〳〵己の程度により、一の思想の太陽を以て照され、己の價値によりて喜びと樂みとを己れに引誘すること恰も一の空氣により一の位置と寶座と觀場と其形狀とより引誘する如くなるべし。されば誰も其友の程度の高き卑きを見ざるべし、これ其友の優越なる恩寵と自分が之を失ふとを認むるや、其者の爲に哀みと憂の原因とならざらん爲なり。然り哀みも嘆息も無き處に此事はあざらるべし。之に反しおの〳〵己れに與へられたる恩寵に依り、己の程度によりて、內部に樂まん。されば悉くの義人の外は一の觀場と一の方面とあるのみにて、此の二の階級の外他に中間の階級あるなし、即一の高き階級と他の下き階級あるのみにて、其中に應報の殊異多樣にして同じからざるあるなり。もし此は正しくんば（實に正し）左の如く言ふより無思慮なる、否無智なるものあり

や、言へらく「我が爲には地獄を逃れて足れり、天國に入らんことは慮らざるなり」と。げだし地獄を逃るゝは是即天國に入るの謂にして、之と同く天國を森はるゝは即地獄に入るの謂なればなり。聖書は我等に三の方位を示さず、如何に之を言ふか。人の子其榮を以て來らん時は綿羊を其右に、山羊を左に置かん」といふ〔マトフィ二十五の三十一、三十三〕群を呼びしは三に非ずして二なり、即一は右にして他は左にあるものなり。彼等が居る所を各區畫していへり、曰く「此等の者、即罪人は永遠の苦に往き義人等は永遠の生命に往く」といふ〔マトフィ二十五の四十六〕日の如く輝かん」〔マトフィ十三の四十三〕又「東より西より來りて、アウラアムと共に天國に席し、而して國の諸子は外の幽暗に逐はれん、彼處には哀哭と切齒とあらん」といふ〔マトフェイ八の十一、十二〕これ何等の火よりも恐ろしきなり。ゆゑに上なる階級に反對の位置ありて、こは最苦しき地獄なることを汝は之により瞭解すべきにあらずや。

ゆゑに人々に神の仁慈を敎へ、神の照管の間斷あらざるを以て彼等を誘導し、迷より引出して、眞理の知識に入らしむるは最好の業なり。げだしハリストスに於ても使徒等に於ても其行爲の狀態は此の如くにして且最も高尙なりき。然ごもし人は

此の如き生活の狀態と人々と頻りに交際するに當りて存する所のものを顧みて自から良心の弱きを感じ、其安靜は擾され、知識は暗まされ、隨て其智は五官を謹し之を從はしむるの必要を更に有し、他を益さんと欲して自己の健康を害し其意志の本來の自由を棄てゝ心を混亂せしむるならば、此の如き者は我等に勸むる使徒の言を記憶すべし、曰く「堅き食は成人の用ふる所なり」と〔エウレイ五の十四〕ゆゑに自から省みるべし、督を以て逃べ給へる言を主より聞かざらん爲なり、曰く「督師よ己を醫せ」と〔ルカ四の二十三〕自から己を罪して己を康健に謹るべし、さらば其善なる品行は其外部の言論の代となるべく、其行動は其口の聲に代りて敎ふべし、而して己が靈魂の康健なるを識るときは他を益すべく、自己の康健を以て彼等を醫すべし。げだし人々より遠ざかる時は、善行に熟心するを以て彼等に善を爲し得べくして、こは自から薄弱にして己を醫すの必要を彼等より多く有しつゝ言說を以て多少の善を爲すより愈れり、「若し督にして督を導かば二人ながら坑に陷らん」〔マトフェイ十五の十四〕堅き食物は敎訓せられたる官能を有して、如何なる食物にも堪へ得る健康者に適當なり、即すべての感觸の打擊に堪ふる者と完全に敎訓せられたるに因り如何なる事に遇ふも之が爲に心の惱みを知らざる者に適當なり。

魔鬼が邪侈なる記憶を以てかくの如き人々の智を汚さんと欲する時は、先づ虛誇を愛するを以て彼等の忍耐を試むべくして、此思想の初起は慾とは見えざるべし。其智を謹するによりて何等の不適當なる念頭をも直に揷入することの能はざる者等に對して、魔鬼は常に此の如く行爲するなり、然るに人を其城堡より奪ひ去りて、人が最初の思想と談話するを始め、此城堡より遠ざかる時は、魔鬼は淫行を想起せしむべきものを以て人を迎へ、其智を誘導して放蕩なる目的物に向はしむるなり。されば人は其突然の打擊により先づ心を擾されん、即是に先だちし思想の貞潔が如此の目的物と會し、之を仰望するにより、統治者たる智の遠ざかるにより擾されん。されば魔鬼は人を全くは汚さゞるも、少なくも其以前の品位より貶せん。さりながらもし智は翻然回歸して、第二の思想の侵擊の因となるべき思想の第一の打擊に先んずるならば、其時は神の助により慾に易すく克つことを得べし。

慾を遠ざくるに道德の記憶を以てするは、之に抵抗するより愈れり、何となれば慾が其範圍より突出して進み戰ふや、其像と肖とを智に印すればなり、此戰は思念を太く紊亂震撼せしめつゝ智力に對して大なる權を得ん、然れどもし予が既に述べたる第一の規則に循ひて行爲するならば、慾を逐ひし後其痕跡も心中にあらは

れざるべし。

身體の勞苦と神聖なる書を學ぶは清潔を護るべくして勞苦は希望と畏懼とを堅むるなり。而して人々に遠ざかると不斷の祈禱は希望と畏懼を心中に確立するなり。人は撝恤者を受るに至る迄は善の記憶を其思に印する爲に神聖なる書は人に要用にして、不斷の誦讀により善に向ふ志は人に新にせらるべく、而して其靈を罪惡の途の幾微より護せん、何となれば人は迷を遠ざけて靈を益する記憶を捕捉すべき神の能力を未だ受けずして、心の散亂により冷淡に近づけばなり。げだし人に作用する心靈の力に神の能力が降る時は、聖書の法に代り神の誡命は心中に根を張るべくして、其時は奥密に神に學びて有形物體の助に必要あらざらん。何となれば心が物體により敎へらるゝ間は、直に之に伴ふに迷と忘とを以てすれども神を以て敎授せらるゝときは記憶は無害に守らるればなり。

善なる意思と善なる願意とあり、又惡なる意思と惡なる心情とあり。第一の級は靈中に生ずる感動にして恰も海中に起りて波を揚ぐる風に似たるあり。第二の級は支柱と根基なり。善の爲に應報あるは根基の堅きによる、意思の感動によるにはあらず。靈魂は變じ易き意思の感動を以ては平安に導びかれざるべし。されど感動は心の深きに根基を有せざるに拘はらず、もし之が爲に各々應報を握せば汝の爲に或は幸福或は其と反對なるものの更迭すること日に幾千回なるを知らざらん。悔改により近頃慾の途より脫して、祈禱の時に當り地上物體の上に高まらんと盡力すれども能はず、反つて飛騰する力あらずして猶地の面に匍匐する智は是そ羽翼の未だ生えざる鳥なる。然れども讀經と練習と畏懼と德行の多きを慮るこの助を以て其思念を一に集中せん、何となれば此事の外何も能く知らざればなり。而して此は暫時の間智を汚されずして守らん、しかれども其後記憶が起りて心を擾し且汚さん、何となればたゞ長き間地に屬するものを忘るゝを以てのみ智を導き入るべき自由の平安なる空氣を人は未だ感知せざればなり、げだしこれたゞ有形的羽翼を得たるのみ、即表面に行はるゝ道德を得たるのみにして、直覺的道德をば未だ見ず、又之を感ずるを賜はらざるなり、然れども此等のものは人が天に屬する者に近づきて地に屬するものより遠ざかる智の羽翼なりとす。

人が物體に屬するものを以て主に事ふる間は、此の物體に屬するものゝ狀態は人の思念に印せられて神妙なるものを人は有形的狀態に於て顯はす。されど人が內部に屬するものゝ感應を受る時は、其感應に準じて智も漸々に物の形象より上に

高まらん。

「主の目は心の誰遜なる者を顧み、其耳は彼等が祈禱を聆く」(聖詠三十三の十六)誰遜なる者の祈禱は口より耳に直に入る如し。汝の沈默の時に於て誰遜の善なる行爲により呼よべし。曰く「主我が神よ、汝は我が暗きを照し給へと。

汝の靈が暗を出づるに近づかんとする時は、視よ汝の爲に表徵となるべきものは左の如し。心は汝に燃ゆること火の晝夜燃ゆる如くなるべし。ゆゑに汝は全世界を糞土塵芥視し、汝の靈中に不斷惹起されて煩熱する新なる思想の甘味により、食をも欲せざらん。淚の泉は俄に汝に興へらるゝこと强ひずして流るゝ急流の如くなるべくして、汝のすべての行爲に混せん。即汝の讀經と汝の祈禱と汝の冥想の時に於てするか、或は食と飮とを爲すか、すべての行爲に於て淚の之と溶解融和するを認めらるゝなり。己の心中に此を發見する時は實に有望なり。何となれば故ば海を渡りだればなり。ゆゑに恩寵が日々に汝に增殖する程は其行に勉勵し子細に看守せよ。之に反して汝は此を己れに遇見せざる間は汝は未だ其途を終へずして神の山に入らざるなり。然れどもし汝が淚の恩寵を發見して之を受けたる後淚は熄みて汝の熱切は他の何物にか變改するあるなく、即身體の薄弱あるなくして冷淡になるときは汝は禍なり。汝は或は自尊に或は怠慢に或は衰弱に陷りて何を滅したるかしかれども淚を受けし後之に隨つて生じ其後人に偶會するものは何なるか、此事は後に他の處に於てあらはさん。即かくの如き奧義を托せられたる神父等又は聖書により敎へられし如く照管の事の章に於て之をあらはさん。

躬行を有せずんば道德のことを言ふなかれ。主の爲及び主に因りて哀むは主の前に如何なる祈禱獻祭よりも貴重にして、其汗の臭氣は何等の芳香にも愈れり。身體の勞なくして成れるすべての德行は時の未だ至らずして精神の入らざる胎實と看做すべし。義人の奉納は其目の淚にして、神に受けらるゝ獻祭は不幸の時に於る歎息なり。義にして肉體の重きに苦められ、に捧ぐされば其聲の叫びに應じて聖なる諸品は彼等に來り助け、其望を嘉みして、之を慰めん。何となれば聖なる使等は聖なる人々に親近して其苦みと哀みに關係を有てばなり。

善良なる練習と謙遜の德は人を地上に於る神となし、信仰と施濟は人を助けて速に淨潔に近づかしむ。熱愛と心の悲嘆とは一の靈中にある能はず、これ猶大酔に於て意思を統御する能はざる如し。けだし此熱愛を靈魂に與へらるゝならば、涕泣と

悲嘆は直に其靈中より奪ひ去らるゝなり。酒は樂みの爲に與へられ、熱愛は心靈の喜の爲に與へらる。酒は身體を煖むれども神の言は心意を温む。熱愛を以て燃ゆる者は望む所を沈思する爲に心を取去られて、其思を來世の爲に備へん。げだし酒に酩酊したる者は物の顚々倒々する形象を表現する如く、希望に醉ひ且煖められし者は患難も世に屈する如何なる事をも知らざるなり。正直の心を有して熱心なる希望を有する人々の爲には、其恒久なる練習の後淨潔を受るに依り、此のすべてのものと他の之に類するもの即道德の路を進行する者の爲に備ふる所のものを生ず。而して此は行路の始めに心の信を以て成らん、げだし主は信心の望む所のものをすべて造り給へばなり。

患難の海の爲に、神を愛するにより、正直と好事的ならざる品性とを以て其腰に帶しめて、その背を向けざる者は福なり。彼等は速に天國の港に救はれ、善く勞せし者等が居る所に安せしめられ、其不幸の爲に慰藉をうけて、其希望の樂みに滿たさるゝなり。希望を以て彎曲の路に入る者は後に退却するあらず、推究穿鑿の爲に支へられざるべし。却て海を渡る時は路の彎曲を熟視しつゝ己が知らざる間に海峽急流又はかくの如き海路の平坦ならざるより救はれし爲に感謝を神に獻げん。しかれども多くの推理を爲し、大に智者たらんを願ひ、思想の遲疑と畏懼とに沈み、己を豫備して有害の源因を豫見せんと欲する者等は、往々常に自家の門に坐するものとなるなり。

路に遣はされたる惰者はいふ「徑に獅子あり路に盜賊あり」と（箴言二十二の十四）。これ「巨人の子を彼處に見て我等は其前に在りて蝗の如くなりき」（民數記十三の三十三）と言ひし者と相類す。是れ終焉の時に當り、尙途中にあらはるゝ者にして、彼等は常に智者とならんを願ひ、すべてに始を置くをも欲せざるなり。しかれども無學者は航路に出發しつゝ身體のごとは少しも慮らず、又此勞により如何なる成功の有るか無きかも自から考へずして、最初の熱愛を以て渡らん。願くは智慧の餘りある希望を神に托し、勇氣にして血のみちみてる途に始を置くべし、汝常に惘然にして神に屬する知識を奪はれし者とならざらん爲なり。慇病なるもの、風を伺ふ者は種かず（傳道書十一の四）。神の爲に死するは恥と怠慢を以て生くるに愈れり。神の事に始を置かんと欲する時は、先づ證喞を爲して、最早此世に生存せざる人の如くすべく、死に豫備して現生に望を絶つ者の如くすべく、臨終の期に達したる者の如くす

べし。而して實に此事を意中に有せよ、此生命を長うせんとの望は智力を弱むればなり。故に如何しても無用に智慧付けらるゝなかれ、信仰の爲に其心に餘地を與へよ、後に殘る所の許多の日子と死後審判の後にあるべき思議すべからざる世とを記憶に存せよ、然らば衰弱は何の時にも來らざること容智者に來らざる如くなるべし、謂へらく今世の千年は義人の世に於ける一日にも比されざらんと（聖詠八十九の四）すべての善業を勇氣にして始めよ如此の業に二心を以て就くなかれ、汝の心を以て神に依賴するに逡巡するなかれ、恐らくは汝の勞は無益になり、汝の所爲は累となならん。之に反して主は仁慈にして主を尋ぬる者に恩寵を與ふると酬勞者の如くするは我等の所爲によるにあらずして、熱心と我等が靈の信仰とによるを汝の心に信ずべし。げだし言ふあり、汝の信せし如く汝に成るべし」と（マトフェイ八の十三）。

神により生存する者の所爲は左の如し、或者は終日地に頓首し、之を以て奉事を行ふに易ふ、即時課を行ふに易ふ。他者は祈禱の數を其積行する屈膝と常に相合す。又他者は涙の多きを自から神の奉事に換へ、之を以て滿足す。或る者は讀む所の旨趣を力めて推究し、之を以て其定められたる規則と相合す。他者は神の奉事を行ふ能はざる程飢ゑて其靈魂を疲らす。しかれども或る者は讀經に時を送り其心は之を以て援めらる。或る者は神の書の神妙なる旨趣を考へて、之が爲に捕へらる。或る者は句中に於て其感を打たるゝ奇蹟を以て驚かされ、尋常の如く讀むを中止して、沈默に占領せらる。他者は此のすべてを玩味し且之に歷候して後に戻り、動かざるもののとなりて存す。之に反して或る者はたゞ少許を玩味し、高慢して迷に陷りぬ。或る者の爲に規則を守るに妨ぐるものは重き病と薄弱となれども、他者の爲に妨ぐるものは或る習慣又は或る欲望、又は貪欲又は物體に屬するものを集むるに向ふ偏愛の克つて主となること是なり。或る者は躓けども更に起きて貴重の眞珠を得るに至る迄は其背を向けざりき。故に常に喜びと熱心とを以て神の事に始めを置くべし。もし汝は慾より潔まりて、心の動搖を免るゝならば、神は自から汝を向上せしめて、汝に助け、其旨に準じて汝に智慧を增さん、されば汝は慥く可き完全を受けん。彼に光榮と權柄は今も何時も世々に歸す「アミン」。

第五十九　說教

修道士の生活の秩序及び其梗概と區別、德行は如何なる樣子にて互に相生ずるか。

新に智力にあらはるゝ熱切なる思念の爲に心中に燃ゆる無量の熱愛は勉勵して已まざる練習により生ず。然して此練習と之を守ることは其熱愛を以て智を銳敏にし、之に視覺を與ふるなり。此視覺は前文に述べたる意思の熱切を心中視覺の深きに生じ、名づけて直覺とはいふなり。然して此直覺は又熱愛を生ずべくして、直覺の恩寵を以て生せらるゝ此熱愛により涙の流れを最初は少量に生せん、即人に涙は一日數回流れて其後乏しくならん、然れども之に次で漣々たる涙を生ずべく、漣々たる涙により靈魂は意思の平和により高められて智の淨潔に達すべく、智の淨潔により人は神の奥義を知るに達せん、何となれば淨潔は戰止みて平和の成るにより奥密に存在するによる。此後智は顯現と異象とを見るに達することを豫言者イエゼキリの見たる如くならん。是れ靈魂が神に近づく三の階段を

あらはす。此すべての爲に始となるものは神に對する善良なる豫圖是なり。それ默想の行爲の種類は不變不易にして、浮世の事を大に自から絕ち之に遠ざかるによりて生ずるなり。此等の行爲の各種類のことは多く言ふを要せざるべし、何となれば此等は衆人に知らるればなり、さりながら之を書すはたゞに害なきのみならず予が證する如く讀者の爲に大に有益なるにより之を書すを緩慢にするの故なきなり。

其種類は左の如し、飢渴なり、讀經なり、及び各人の力に應じて終宵眠らざる儆醒なり、日中又は夜間にも屢々有益に行ふ許多の叩拜なり。叩拜を三十と定め、其後脊き十字架を拜し、此を以て終るは是れ汝の爲に最少限となすべし。しかれども己の力に應じて此叩拜の數を增す者も之あり。或は清醒なる心を有し、强ふるなく、意思の鬱騰もあるなくして、地に俯伏し、一の祈禱に三時間を費す者も之ありて、此の二の種類は各人に其價値に準じて與へらるゝ恩惠若くは恩寵の富を顯はし且證するなり。しかれども强ふるを免るゝ祈禱と之に止まる方法とは如何なるか、此事は口述を以ても書に筆するを以ても之を說明せず、此祈禱の順序をあらはさゝるを以て予は當然と認む、何となれば讀者は讀む所のものを理會せずして、あらはす所の

ものを無益と爲すべく、或はもし彼は此を知るならば此事に於る秩序を知らざる者を賤むべくして、前者に於ては之を一笑に付すべく、後者に於ては譴責の言を發せん。さらば其時は使徒が豫言する者につきて用ひし言の如く予も此の如き事に於て異國人と認められん。故に此事を確知せんことを願ふ者は前文にあらはせる路を行きて、其爲す所の練習を智力と應せしむるを致すべし。而して實に此事に着手する時は自然に之を確知すべくして、終に師を要せざるべし。けだし言ふあり、庵中に坐せよ、さらばこは自然に汝をすべての事に教へん。眞實なる神に光榮は世々にあるべし。アミン。

第六十　說教

世より極て上なる窄き路を進行する者に對し魔鬼の戰ふ種々なる手段の事。

我等の敵たる魔鬼が此苦行に就く者等に對し狡猾にして其戰を殊異多樣にするは古來の習慣にして、彼等に對し種々なる器械を利用し、其人の意向に依り其戰の方法を變ずるなり。意志の緩慢にして思想の薄弱なる者には特別の注意を向けて、最初より强く攻擊す、けだし彼等に對し堅固にして猛烈なる試惑を開始するは、行路の始めに惡謀のあらゆる方法を彼等に經驗せしめんが爲にして、最初の苦行により彼等に畏を抱かしめ、其途は彼等の爲に慘憺として通過し易からざるものゝ如く見え、左の如く言はしめん爲なり、曰く「もし行路の始めがかくの如く苦しく且難くんば、前途幾多の攻擊に誰か終に至る迄堪ふるを得ん」と。故に此時より彼等は最早再び起ちて前進する能はざるのみならず、其安心を與へざる憂慮の爲に他の何事をも見るさへ能はざるべく、久しからずして魔鬼が彼等と殘忍なる格鬪を作すは、かくの如くして彼等を敗走せしめん爲なり。之を確言すれば神は自から魔鬼の彼等を打負すに放任して、毫も彼等に助けざるなり。何となれば彼等は自身と冷淡とを以て主の苦行に就きたればなり。けだし神は言へり「主の事を行ひて怠り、手を止めて血を流さゝる者は詛はる」（エレミヤ四十八の十）又言ふ「主は彼を畏るゝ者に近し」（聖詠八十四の十一）けだし神は畏れず冷淡ならずして魔鬼に抵抗すべきを命じて言へり、たゞ彼を滅すに着手し、突進して彼と戰ひ勇氣にして抵抗せよと、天下のあらゆる敵に汝を畏れしめんと主は言ひ給ふ（復傳律令十一の二十五）けだし

神の仁慈の爲に甘んじて物體上に死せずんば、神より離れて獨らず靈神上に死せん。

故に汝の運命は此の如くならば、不滿を懷かずして神の爲に一時の苦みを甘受すべし、神の榮に入らん爲なり。げだし主の苦行に於て肉體上に死するならば、主は自から汝を褒賞すべくして、汝の尊き遺骸には致命者の榮を神は與へ賜はん。ゆゑに予が前文に言ひし如く彼等は最初怠慢懦弱にして己を死に付するを決せざりしにより、其時よりすべての戰に劣等なる者とあらはれ勇氣なき者とあらはるゝなり。之を確言すれば神は戰闘に於て彼等の追擊窘逐せらるゝに放任す、何となれば眞實に神を尋ねずして、却て試むる如く、或は嘲笑する如くに神の事を企つればなり。此により魔鬼も自から最初より彼等を探知し、彼等が意思の如何を試みたり。ゆゑに恰も暴風の如く彼等を追擊す、げだし諸聖人に於て見慣れし精神上の力を彼等に於て見ざればなり。神に進向する人の自由に依り、及び神の爲に或る目的を達せんとする意向に依り、神も協力し、且扶助して、人に其照管をあらはす。さればもし人は怠慢ならずして、神も放任せずんば、魔鬼は人に近づく能はざるべく、或は試むる能はざるべじ。されどもし誰か自負と高慢とを以て、或は疑念と二心とを以て恥づべき思念を入るゝを自から許すならば、魔鬼はかくの如き者等を試むるを請求せん。

しかれども尋常にして未熟なる新進修道士をば聖にして大なる者を試むる如くに請求せざるべし。げだし此の如き者等の魔鬼の手に陷るを神は放任せざるを知るによる（何となれば彼等には魔鬼の試惑に對して充分の力無きことは神の知る所なればなり）たゞ予が既に述べたる源因の一ある時は神の照管の力は彼等より遠ざからん。是れ魔鬼の戰の第一手段なり。

魔鬼の戰の第二手段

然れども勇強剛毅にして死を無視し、大なる熱心を以て出で戰ひ、すべての誘惑と死とに己を付し、此世の肉體的生活とあらゆる誘惑とを輕んずる者等を見るや、之を迎ふるが爲に、魔鬼は猝然にはせず、久しく自から彼等にあらはれず、持重して彼等に餘地を與へ、彼等が第一突進の際には彼等と相會せずして、之と戰を交へざるなり。げだしすべて戰闘の始は最熱烈なるを知り、苦行者の大なる熱心を有することは彼の知る所なればなり。然れども魔鬼の此くは爲すは彼等を懼るゝが爲に非す、彼等を繞りて魔鬼を驚かす神の力を懼るゝなり。

ゆゑに彼等のかくの如くなるを見る間は、彼等に觸るゝことだも敢てせずして、時を待つ、即彼等の熱心の冷になると彼等が意中に備へたる武器を彼等自から脫して、彼等に協力救援する神の言と其記憶とに違反するの時を待つなり、而して其怠慢の時に當り彼等に注目して、其最初の意志より多少離るゝと、彼等に流るゝ姑息の念慮により彼等を屈服せしむべきものを彼等が自から創設すると、怠慢より生する意思の高超により其意と其心情に冷淡が王となりて其靈魂の爲に滅亡の坑を自から穿つことに注意せんとす、魔鬼が彼等を攻擊するを中止するは、甘んじて之を爲すに非ず、彼等を惜み又は彼等を恥づるによるにあらず、げだし彼等を無視すればなり、之に反して予は斷定す、燃ゆるが如くなる熱心を以て神に突進し、小兒の如くなる感念を以て苦行に出で、何等願慮する所なく世を棄つるも、神に依賴し、神を信じて、何者と戰はんとするをも知らざる者等を或る力は圍繞するありと、故に神は彼等の爲に魔鬼の惡計の猛烈なるを拒ぎて彼等に近づかしめざるべし、敵は彼等を常に護る守護者を見て牽制せらるゝなり、げだし勁の源因、即祈禱と勤勞と謙遜とを自から己れより棄てずんば、保護者と助力者は決して遠ざからざるなり、愼んで此事を己の心に銘せよ、何となれば甘美を嗜むと安佚を愛するとは放任の源因なればなり、然れども誰か弱らずして之を節制するならば、神の助は決して彼を棄てずして、敵には彼に近づくを許されざるなり、もし何の時か彼を暗解せしめん爲に彼に近づくを許さるゝありとも、聖なる能力は彼に伴ひ、且固む、ゆゑに彼は魔鬼の誘惑を畏れざるべし、何となれば彼の思想は此能力の爲に勇みて誘惑を輕んずればなり、げだし神聖なる能力の人々を救ふるは、譬へば人あり小童に游泳を教ふるが如し、溺れんとする時は彼を水より携出さん、何となれば小童は救者の手によりて泳げばなり、ゆゑに溺れんを怯るゝときは、彼を手に持する者は自から彼を勵まし、呼んで言はん、畏るゝなかれ、我は汝を持す」と、又譬へば母が小兒に步むを教へ、遠ざかりて彼を呼び己れに就かしむる如し、彼れ其母の許に行かんとし搖々として足も肢體も軟弱なるが爲に仆れんとする時は、母は趨りて彼を其懷に抱かん、神の恩寵も此の如し、淨潔且正直にして己を造成者の手に托し、全心より世を棄て、行きて主に從ふ所の人々を扶け且救へん、然れども出でゝ神に從ふ人よ、汝は其苦行の何れの時にも其途の始めと、最初此事を始めたる時の熱心と汝が初度己が家を出でゝ軍隊に入りたる時の燃ゆるが如くなる思想とを常に記憶せよ、かくの如くして毎日己を試みよ、汝の著たる武器の一により、及び汝が苦行の始めに

汝に燃えたる熱心により、其心の熱愛を冷却せしめざらん爲なり、又汝が苦行の始めに汝の着たる武器の一を奪はれざらん爲なり而して軍營の中に在りて不斷其聲を揚げよ、右方の子、即其意思の勇氣を鼓舞振作して他の一方、即敵の一方には汝の清醒なるを示すべし、ゆゑに汝を驚かす試惑者の突擊を最初に發見するあらば、弱わるなかれ此突擊は思ふに汝に益あらん、何となれば汝を救ふ者は此事に於て汝を益せん爲に何の設備もなさゞるときは何者にも徒に汝に近づくを許さゞればなり。

さりながら最初に怠慢をあらはすならば、恐らくは此處に怠慢をあらはすならば、前進行動するとき汝は衰へて、汝を襲ふ患難に抵抗するに最早堪へざる者とならん、即飢餓、疾病、恐るべき妄想及び其他の患難の如き是なり。汝は苦行の立定者の意思を誤解するなかれ、何となれば汝の何を期するを敵の發見せざらん爲に敵に對して汝に扶助を與ふればなり、之に反して不斷神を呼び及び其恩寵の前に泣くべし、汝に扶助者を遣はさゞる間は涙を流して自から勞すべし、げだし汝を救ふ者を一たび己の近きに發見せば、最早汝に抵抗する敵の爲に勝たれざるべし、視よ此處に至るまで言せるものは是れ魔鬼の戰の第二手段なり。

有力にして剛毅なる者に對する敵の戰の第三手段。

故に此すべての後、魔鬼は何人に反抗するも、最早彼と鬪ふ力はあらざるべし、之を確言すれば彼を堅めて彼に助くる者と鬪ふ力はあらざるなり、人は此救援により敵より上に擧げられ救援する者より能力と忍耐とを借るべし、ゆゑに粗き物體的なる身を以て無形にして靈的なる者を制するに至らん、されどもし敵は神より受けたる此のすべての能力を認め、人の外威は見ゆる物體と聞ゆる聲音の爲に打負されずして、諂媚と誘惑との爲に弱らざるを見る時は、此欺瞞者は彼の人に助くる天使を人より引離さんが爲に何等の方法をか見出さんを願ふ之を確言すれば此欺瞞者は助を施さるゝ人の才智を盲まして無助者たらしめ、人に驕傲の念慮を起して、人のすべての剛毅は自己の能力を以て反對者と殺人者とより己を守護するものの如く思はしめんを願ふ、ゆゑに時として人は斷定す、敵に勝てるは偶然なりと、又時として斷定す、敵の無力の爲に勝てりと(たゞ想起するのみにても心の戰慄すべき他の方法と誹謗的念慮とのことは茲に予は言はず)然して或時は敵も神より出る啓示の狀に托し、其美觀を中間に引出して、夢中には人に或物をあらはし、不眠の時には聖なる天使に容を變し、漸々人を惑めて幾ばくなりとも自己に同意せし

むるを得んが爲にも人の其手に渡さるゝを得んが爲にもすべて爲さゞる所無きなり。しかれども善智なる人は其意思を無難に保持するならば、之を確言すれば彼に協力する者を忘れざる記憶を保ち、其心の目を天に注ぎて、彼に耳語する所の者を見ざるときは、敵は他の方法を發見するを新に企てん。

頑固なる敵の第四の戰の事。

終に敵には左の一計の存するあり、げだし天性が之と親和するにより之を以て人を滅亡に致さんことを特に希望す。其狡計は如何なるか。人の天然の必要を以て人を窘逐する是なり。苦行者の智は感じ易き物を屢々見るにより、及び其物の近づくにより昏まさるべくして、之と接近するときは易すく戰に打負かさるゝなり。矧や其物は直切人の目前にある時に於てをや。ゆゑに兇猛なる魔鬼は事の諳練と老熟とを以て此方法を利用す。即剛毅にして有力なる多くの苦行者の之が爲に陷りしをば實驗上に之を確知して、狡猾に此事を行ふ。げだし獸想を以て保護せられ、其居る所は罪の手引と源因とより遠ざかるにより、彼は人をして此を實地に行はしむる能はずといへども、力めて苦行者の智をして此を幻像に於て見せしめ、眞實の假面の裡に假僞なる妄想を形造らしむるなり。其妄想するものを渴望せしめん爲に彼等に痩感を起し、耻づ可き思念に心を留め、之と同意せしめて、彼等を罪ある者となし、たゞ此により其幇助者を彼等より遠ざけんとはするなり。げだし人の勝利と、其凱旋と、其財寶と、其保護と、すべて苦行者にある所のものは其意思によりて行はる、されば若し意思は位置より動きて、彼の高處より地下に降り、自由を以て一瞬間に之に同意を表するならば、事は暫時の間に成らんこと、多くの聖者が婦人の美を妄想する際に起りし如くなるべきは敵の知る所なり。若し彼等は一里二里、或は一日の距離と雖も、世に近づくならば、敵は實際婦人を彼等に引誘せんが爲に奔走するは毎々の事なりき。しかれども世と遠ざかり居る者等を此網中に捉ふる能はず、故に妄想により彼等に婦人の美を不適當なる形狀にてあらはし、之に心を留めしむるに或は衣服の裝飾を以てし、或は交際の自由を以てし、或は身の裸體を以てするなり。此等により敵は或者等を實に打負かせり、然して他者は其意思の汗沒により妄想の爲に欺かれて、之により絶望の深きに達し、世に傾きて其靈魂は天の希望を失へりき。

然れども他者は彼等に比すれば更に剛なり、ゆゑに恩寵に照されたる彼等は敵と其妄想に打勝ち、肉體の樂を蹂躙して、神の愛に練達なる者となりぬ。敵は又黃金寶

物、又は純金製の寶を妄想により彼等に見せしむること往々之あり、而して或時は實際に此を彼等に示して、かくの如きの種々なる妄想により其或者の進行を止め、其網と長き網の一を以て彼等の足を鈎るに或は成効すること有らんことを希望したりき。

然れども汝主よ、我等が弱きを知れる主よ、我等を此の如きの誘惑に入るゝなかれ、有力にして大に練達なる者たりとも、此の如きの戰より勝利者として出來らんことは未だ必し難し。

誘惑を以て聖者と戰ふとき、誘惑者たる魔鬼に此すべてを許さるゝは此の如きの誘惑を以て彼等が神を愛するを試みられん爲にて、彼等は遁世により、此等の物を遠ざけ、劍奪と空乏とに際し寶に愛神者たるや否神を愛するに止まりて眞實に神を愛するや否而して此等の物に接近するときは神を愛するにより之を輕んじ、之を賤むに盡力するや否やを試みられて、彼等自ら勝利を讓らざるや否を試みられん爲なり。且かくの如く試みらるゝは之により神に知らるゝ者となるのみならず、魔鬼其者にも知らるゝ者とならん爲なりげだし多くの事を以てすべての者を試み、能くするならば探知して之を誘惑せんことを神に請求するこゞ義人イオフを請求せし如くせんことは魔鬼の素願なればなり、ゆゑに些少なりとも神の旨あらば誘惑者たる魔鬼は接近して制し難からん、然れども不法なる魔鬼の彼等と戰ふ時は其試みらるゝ者の力に準ずべくして彼の願に依るにはあらざるなり。而して神を愛するに堅立する所の眞の愛神者は此を以て試みらる、彼等は此のすべてのものを輕んずるや否常に讒遜にして、すべての者に榮を歸するや否苦行の時に當り己を神の手に付し、主よ汝は力あり、此苦行は汝に屬す、汝は我等の爲に戰つて勝てよ、と神に告ぐるや否を試みらるゝなり。其時彼等の試みらるゝは金の鎔鑛爐に試みらるゝ如くなるべし。

さりながら假僞なる愛神者も如此の誘惑を以て探知せらるべく、認識せらるべくして、彼等は敵に地位を讓り、有罪者となりて、其心の汗浸の爲、或は其驕傲の爲に不潔なる者となりて神より離落つるなり、何となれば諸聖人に徹底したる力を彼等は受くるに堪へざればなり。しかれども我等に協助する力は勝たれざるなりげだし主は全能にして、あらゆる者より强し、ゆゑにもし戰に臨み、苦行者に降るあらば、何れの時にも死すべき體に於て勝者となるなり。もし彼等が勝たるゝあらば主なくして勝たるゝものなること明にして、是れ彼等は自己の任意に循ひ忘恩によりて

神を己れより遠ざけたるなり、ゆゑに勝利者に助くる力を彼等は賜はらざるのみならず、其の力破の時に當り常に自から有したる力をも奪はるゝを自から感ずるに至る。さりながら如何樣に此を感ずるか、彼等が墮落は其眼中に樂しく且は愉快なる如くあらはるゝべく、敵に對する戰の慘酷を忍耐するは彼等の爲に困難なるを見ん、先には彼等熱切と敏速とを伴ふ天然の運動突擊により、熱心を以て勝を得たりしも今や彼等は其靈中に之を見ざるなり。

苦行の始めに當り、怠慢懦弱なる者は此等の格鬪を懼るゝのみならず、樹葉の颯々たる響にも畏を抱きて心を擾し缺乏の際には些少の窮迫と飢餓と聊の薄弱にも打勝たれ、苦行を棄てゝ逡巡せん然れども眞實にして棟達なる苦行者は蔬菜野果だも飽食せざるのみならず枯草の根を以て己を養ひ、定めたる時間の先には何物をも食ふを肯んせず、薄弱の身を以て赤地に寢ねん、彼等が眼は身體の非常の衰弱の爲に僅に見るありて、其壓迫の故に肉體と殆ど分離せんとするに至るも、自から勝利を讓らずして、堅固なる自由を棄てざらんけだし一時の生命と之が安息を有せんよりは、神を愛するにより己を強ひんことを願望して、德行の爲に勞するを更に愈々愛すればなり。されば誘惑の來るや彼等は特に之を樂みて之を以て更に成全せらるゝなり、其前に臨める大なる勞苦の中に在りてもハリストスを愛する心に動搖を來さず、生命を失ふに至る迄は勇氣にして攻擊を忍耐するを熱心に願ふて退かざるべし、何となれば此を以て成全せらるればなり、我等が神に光榮は世々に歸す「アミン」。

第六十一　說教

心を神に近づかしむる爲に人に益するもの、事、如何なる眞實の源因は人に助を窃に近づかしめて、如何なる源因は人を謙遜に導くか。

己の弱きを認識する人は福なり、何となれば此認識は人の爲にすべて善良なる進歩の基礎となり、根本となり、又原因となればなり。人は己の弱きを確知して實に之を感するならば直に其靈を認識を暗ます衰弱より起して、警戒の心を備へん。しかれどもし人は或は身體或は靈魂を疲らすものを以て些少の試惑なりとも放たるゝあらやんば、己の弱きを決して感知する能はざるべし。之を放たるゝ時は己の

弱きを神の助と比較して其助の大なるを直に認識せん。之と同く其使用したる多くの方法と警戒と節制と庇蔭と其靈魂の保護とを研究し、之により靈魂の安全を得んことを望めども見ずして其の心は畏懼と戰慄の爲に安靜を有せざらん。時は、人の心の此畏懼は人の爲に他の或る協力者の必要にして欠く可らざるを顯はし且證するものなるを曉るべく、且之を認識すべし。けだし心は之を擊ちて其內部に格鬪するの恐れにより何か足らざる所あるを證して之を知らしめ、安然として居る能はざるを此を以て明示せらるゝなり。何となれば予が既に言ひし如く神の助けは之を救へばなり。さりながら神の助の必要なるを認識したる者は多く祈禱を行ふべくして、祈禱を增加する程ばいよ〳〵心は諠逐にならん。けだしすべて祈る者と願ふ者は諠逐にならざる能はざればなり。碎けて諠る心を神は輕んせず」聖詠五十の十九ごいふ。故に心は諠逐にならざる間は舞揚して止む能はざれども、たゞ諠逐は之を纏めて一に集中するなり。

人は諠逐になるときは直に憐みは人を繞るべくして其時心は神聖なる助を確知せん。何となれば其心に惹起さるゝ確信の力を看出せばなり。然して人は神聖なる助の實に人を救援するを感知する時は、其心は瞬間に信仰に滿たさるゝなり。

此よりして人は了解せん、祈禱は助を求むる者の避難所なると、救濟の泉なると、安全の寶なると、大なる暴風より救はるゝ港なると、暗黑に居る者の光なると、無力なる者の支柱なると、誘惑の時の保護なると、病の分離期に於る救助者なると、戰鬪に於る救命の盾なると、敵に向つて砥がれたる矢なるとを了解せん。簡短に之を言へばすべて此等の幸福の多きは祈禱により人に近づくを發見して、今より後人は最早信仰の祈禱を以て樂まん。人の心は希望により光明なるを得べくして、如何にも口頭一片の言頭により從前の昏蒙に止まらざるなり。さりながら此の如く之を了解する時は、寶物の如くなる祈禱を靈中に求め獲て大なる歡喜により、祈禱の狀態ば變じて感謝の聲とならん。されば視よ、各物に其固有の方式を定めたる者の論じたる言は左の如くいへり、曰く「祈禱は感謝を捧ぐる喜なり」と。是れ即彼は神を認識するにより行はるゝ祈禱即神より遣はさるゝ祈禱をいへるなり、何となれば其時人は祈禱するにすべて此恩寵を感知せざればなり、乃ち中心の喜びと嘆美とを以て、數ふ可からざる拜跪により、謝恩的動作を斷えず顯はし、神の恩寵の前に認識と嘆美と慈愛とを多く喚起せらるゝにより、俄に其聲を高め、神を歌頌讃美しつゝ感謝を捧げ、非常の慈愛により其舌を

動かさん。

實に此處に到達し妄想を以てせずして、多くの標識を實に心中に置き、久しく自から己を試みて、多くの特徴を察知したる者は、子が言ふ所を知らん、何となればこれ眞實に違はざるによる。ゆゑに今よりして後無益なることは思ひ止むべく、不斷の祈禱により、畏懼と戰慄とを以て神の前に退かず止まるべし、神の大なる助を奪はれざらん爲なり。

此等の幸福はすべて己の弱きを認識するにより人に生ずるなり。げだし神の助を望むの大願により、祈禱に止まりて、人は神に近づけばなり。而して其望願を以て神に近づく程は、神も其賜を以て人に近づきて其大なる讓遜の爲に恩寵を人より奪はざるなり、何となれば裁判者の前に於る寡婦の如く、敵を防がんことを退かず呼べばなり。故に宏慈なる神が恩寵の賜を止むるは、人の爲に神に近づくの源因とならん爲及び人が其要求の爲に益となるべきものを流出する者の前に離れず止まらん爲にして、神は或る願をば速に成就せしめ、即ち是なくんば誰も救はるゝ能はざるものをば速に成就せしむれども、他の願をば之を成すを遷延し、而して又或る場合には敵の焚盡す力を人の爲に拒ぎ且散らせざるも、他の場合には誘惑に陷るを許すは、是れ予の既に言ひし如く、此試が人の爲に神に近づく源因とならん爲なり、人の學んで誘惑に實驗を有せん爲なり。視よ聖書に言ふ所は左の如し、主は多くの民を遣し、彼等を滅さずしてナワインの子イイスヌの手に付さゝりしは、之を以てイズライリの子を教へん爲、イズライリの子イイスヌの子の齋をして其教訓に注意し、厥を學ばしめん爲なり。「士師記」三の一、二」けだし己の弱きを認識せざる義人の行爲は恰も剃刀の尖に在る如し、彼は墜堕と人を害する獅子、とより全く遠ざからず、驕傲の魔鬼より遠ざからざるなり。而して又己の弱きを知らざる者は讓遜に乏しく、讓遜の足らざる者は完全に達し得ずして、完全に達せざる者は常に畏に居らん、何となれば彼の城郭は鐵柱と銅闘の上に確立せず、即讓遜の上に確立せざればなり。されど讓遜は人が砕けたる心悔と己を賤んずる思念とを常に得らるゝ方法を以てするに非んば、受る能はざるべし。ゆゑに敵も人を迷はしめん爲に蹤跡を捜すこと屢々之あり。げだし讓遜なくんば人の行は成る能はずして、其自由の手書に神の印を押されざるなり、之を確言すれば今に至るまで彼は僕にして、其行は畏を免れざるなり、何となれば讓遜なくして其行を修め誘惑なくして學ぶことは何人にも能はざるべくして、既に學ぶなくんば誰も讓遜に達せざればなり。

此によりて見るに主は聖者に謙遜の爲及び熱切の祈禱に心を碎く爲に源因を遺置くは主を愛する者をして謙遜に由り主に近づかしめんが爲にして、彼等をして直ちに其天性の嗜慾と耻づべき不潔なる思念に偏し易きことを以てすることしばしばこれあり、且詰責と、凌辱と、人々より頰を批たるゝ事とを以てすることも亦しばしばこれありて、時としては疾病と身體の薄弱とを以てし又他時には赤貧と欠くべからざる雷用に缺乏することを以てし、或は強き畏懼を以て苦しむると、放棄と常に彼等を嚙着する顯然たる魔鬼の戰とを以てし、或は種々なる畏るべき出來事を以てするあり。是れ皆人に謙遜に達する源因を有せしめんが爲にして、或は病弱なる苦行者をして、其の居る所の境遇により、或は未來の恐れにより、惰眠に陷らざらしめんが爲なり。ゆゑに誘惑は必ず人々に益あり。しかれども此事を言ふは人は耻づべき思念を以て甘んじて己を弱らすべくして、其の記憶は人の爲に謙遜の發端とならんとの間には非ず、又人は勉めて他の誘惑に陷らざるべからずとの義にもあらず、反つて人は善なる行爲を以て何れの時にも謹愼し、其靈魂を守るべくして、人は即受造物なると、隨て變化に屬するものなるを思ふべしとの謂なり。げだしすべての造物は己を保護するに神の力を要すべくして、凡て他より保護を要する者は之を以て天然の弱きを顯はす。然して己の弱きを認識する者の必ず謙遜ならんことを要するは、己の爲に必要なるものを其與ふるを能くする者より受けんが爲にして、もし人は最初より己の弱きを知り且目擊するならば、怠慢にならざるべくして、怠慢にならずんば睡眠に耽ることもあらずして、其覺醒により凌辱者の手に付さるゝことあらざるべし。

終に神の途を進行する者はすべて遭遇するものゝ爲に神に感謝して、自己の靈魂を責め、且罵るべくして、照管者を以て之を許さるゝは自己の或る怠慢により或は其心を覺醒するが爲なると、或は人が漸々高慢し始めたるが爲なるとに外ならざるを知らんこと肝要なり。故に人は擾亂せざるべく、進行と苦行とを棄てざるべく、己を責むるを息めざるべし、二倍の禍の人に及ばざらん爲なり。何となれば義を流す神に不義はあらざるによる。然り、此あらざるなり。彼に光榮は世々に歸す。アミン」。

第六十二　說教

神聖なる書の悔改を奬勵する諭言、及び人間の弱きに對して此を陳べられしは人々生活の神より離れて亡ぶるを免れんが爲なる事、及び之を轉じて罪を犯す緣由と爲すべからざる事。

諸神父が其神聖なる書を以て要求する悔改に於るの勇氣と使徒及び豫言者等の書にあらはせる悔改の旨趣とは、我等之を轉じて罪を行ひ不可侵なる主の定法を破るが爲の助けと爲すべからず、是れ古より諸聖人の口により悉くの書と立法に於て罪を滅さんが爲に神の力を以て定められしなり。げだし彼等は悔改の希望を有せしむる爲我等が感情に絶望の恐れを豫め除かんごとに工夫を費せり、故に凡ての人は急ぎて悔改し敢て罪を犯すを免るべからざりしなり。就中神はすべての書にあらゆる方法を以て長を勸誘して、罪は神の憎む所なるをあらはせり。げだしノイと同時代の族は如何して洪水に滅びたるか、人々狂亂してカインの女の美を望みたる姪蕩の爲にあらずや、貪銀、偶像、妖術及び戰爭は當時にはあらざりき。又ソドムの邑は何故火に焚かれたるか、其肢體を欲望と不潔とに委しあらゆる汚穢不適當の行を以て自由自在に管理したる爲にあらずや。一人の淫行の爲に神の家子イズライリの子孫の二萬五千人は瞬間に死を速ぎしにあらずや。偉人サムソンが母胎の中に在て神を以て聖別せられしは、ザハリヤの子のイオアンが生前天使の祝福を受けて大なる能力と大なる奇蹟とを賜はりし如くなりしに、神に棄てられしは何故なるか淫婦と同棲して聖なる肢體を汚したる爲にあらずや。神が彼より遠ざかりて彼を其敵に付したるは之が爲なりき。然してダヴィドは神慮に適ひ、其の德行の故に、列祖に許約せられしものは其裔より發し、全世界の救の爲にハリストスは彼より光り始むるを賜はりし人なりしが、或る婦人の美を目擊して、其靈に矢の落つるや、彼と淫行を遂げたる爲に罰せられしにあらずや。之が爲に神は其家に戰を起し、ダヴィドの多涙を以て悔改を表したるに拘はらず其同胞は彼を逐へり、然るに涙を以て其褻を濕せしにより、神は豫言者を以て彼に告げて言へり、曰く「主は汝の罪を除けり」〔サイムル〕後書十二の十三。又彼より先なる或者等をも記憶せん、四十年の間神品の職を以て飾られたる義な

る老司祭イリイの家に神の怒と死の降りしは何の爲か。其二子オフニとフィヂッスの不法の爲にあらずや。げだし彼自分は罪を犯さずして二子は父の同意なくして罪を犯せり。然れどもこは主の前に罪を犯したる彼等を罰する熱心の父にあるあらずして、主の命令よりも尚更に彼等を愛したるによるものにして、主は其生存の日を悉く無法に送りし彼等にのみ其怒を現はすと人をして思はざらしめんが爲なり、故に此の荒唐なる罪の爲に其熱心を主に近き者に、司祭に、士師に、君主に、主に神聖とせられて奇蹟を行ふを信任せられし者にあらはすなり。神の立法を犯したる者の現はるゝや神は決して注意なくして舍かざるを此を以て知らしむるなり、イエゼキリの書に記されし如し、言へらく見えざる劒を以てイエルサリムを滅さんことを命じ、其人に告て言へり、我が祭壇の前に立つ者等より始めよ、而して老人をも青年をも遺すなかれと。イエゼキリ九の六。是れ恐れと恭敬とを以て神の前を行き其旨を行ふ者等は神に近くして愛せらるゝ所以と、剛勇なる行と清潔なる良心とは神の前に聖とせらるゝ所以とを之を以て證するなり。主の道を辱しむる者は主も辱かしめて、彼等を其面前より遠ざけ、其恩寵を彼等より奪ふ。げだしワルタサルに對し判決の俄に出で手を以て壁つ如くなりしは、何の爲か。イエルサリムに於て神前に供へたる不可侵なる供物に手を觸れ之を奪掠して、妃妾と共に自から之を食ひし爲にあらずや。かくの如く己の肢體を神に献げて更に之を俗事に用ふるを敢てする者等も、見えざる打撃により亡びん。

故に我等は神聖なる書を以て與へらるゝ勇氣を以て悔改を期し神の言と其警告を輕んぜざるべく、其行の不當を以て神を怒らしめて、神に事ふるが爲に一次永遠に聖にしたる肢體を汚さゞるべし。げだし視よ、我等も神に聖せらるゝことイサヤ及びエリセイの如くなるべく、豫言者の子と、他の聖者、及び童貞等の大なる奇跡を行ひ神と相對して談話したる如くなるべく、又すべて彼等の後にありては例へば貞潔者イオアン、及び聖なるペトル、及び其外新約の福音者又は傳道者等の一隊が己を主に聖として、一は主の口より、他は默示により主より奥義を受けて、神と人々の間の媒介者となり、全世界に天國を傳へたる如くなるべきによる。

第六十三　說教

修道士の生涯の美は如何して保護せらるゝか、神に榮を歸するの順序。

修道士はすべての行狀と動作に於て凡そ彼を見る者の爲に建德の模範とならんことを要す、光線の如く光り輝く許多の德行の爲に、眞理の敵も彼を見て「ハリスティアニン」に堅固不拔なる救の希望あるを自覺せざらんを欲すとも得ずして、八方より、彼に集ひ來ること、宛も眞實なる避難所に集ひ來る如くならん爲なり、之が爲に敎會の角は敵に向つて高められるべく、多くの者は修道士の德行と競爭せんが爲に進んで世を棄つべくして、修道士は其生涯の美の爲に衆人に尊敬せられん、何となれば修道士の生涯はハリストスの敎會の名譽なればなり。

ゆゑに修道士はすべての關係に於て秀美なる行狀を有せんことを要す、即見ゆるものを輕んずると、嚴格なる無慾と、肉體には全く心を用ひざると、高き禁食と、沈默を守ると、官能の齊整と、視るを戒むると、此世に屬する何事の爲にもすべての爭を絕つと、言語の簡なると、怨を棄つると、思慮に於ては誠實にして、才智の怜悧と活動と運用に於ては僞なくして正直ならんことを要するなり、彼の爲に必ず知らんことを要するは、現世の空しくして暫時に過ぎ去ることと、眞實にして靈的なる生命の近きことを是なり、人々に知らるゝ者或は非難せらるゝ者とならざるべく、何人にも交り或は之と契を結ぶを以て己を縛らざるべし、居所は幽靜なるを有すべし、常に人々を避け、弱らざる忍耐を以て祈禱と讀經とを務むべし、名譽を好まざるべく、賄賂の爲に心を奪はれざるべし、此生命に繫がれざるべく、誘惑は勇氣にして忍耐すべし、世の欲望と世事の穿鑿と記憶とより自由なるべし、常に眞實なる一方に意を致して、之を熟思すべし、哀みて皷に被はれたる面を有し、晝も夜も不斷淚を流すべし、然して此のすべての外特に自己の貞潔を守り腹を悅ばすことと大小の缺點とより免れて淸潔なるものとならんこと肝要なり、視よ簡短に之を言へば修道士の德行は世のために全く死者の如くなると神に接近することを證するにあるなり。

ゆゑに我等は何の時にも此等の德行に意を致して之を得んこと肝要なり、然れどももし誰か此等を詳細に解明して、概括的簡短にあらはさゝるは何の要ありやと問ふあらば、答て言はん、是れ緊要の事なり、是れ自己の生命に注意する者が此等の德行の或るものを其靈中に搜して此の計算せるものゝ中何に於てか乏しきを發見するあらば、之により彼は或る德行に於る自己の缺點を認識せんが爲にして、此記上するものは彼の爲に見て之を想起するの益とならん爲なり、然るに此處に解明したるものをすべて已れに得る時は予が未だ記さゞる他の德行をも彼に識らしむるを得ん、さらば彼は聖なる人々の爲に神に祭を歸するの起原者となるべく

して、此生命を去る以前に猶此處に於て靈魂の爲に安息の位置を備へん、我等が神に榮を世々に歸せん。アミン」。

第六十四　說教

默想の路を進行する者に如何なる轉變變化を生ずるか。

神より定められたる默想に生活せんと其心に決したる者は、己を整備して、默想の順序に循ひ、餘日を其練習に送るべし。汝の靈魂が內部に暗黑を滿さるゝ場合ある時（こは神の恩寵にて定められたる默想の順序に於て常に之有るなり）たとへば太陽の光線の地上雲霧の爲に蔭はるゝ如く、或る時間心神の安慰をうばゝれて靈魂を蔽ふ慾雲の爲に恩寵の光が內部に暗くなり、隨て歡喜を生ずる力も多少汝に減少して、非常なる混雰の心意を蔽ふ時は、汝思慮を擾すなかれ、靈魂の無知に手を假すなかれ、忍耐して諸父の書を讀み、己を祈禱に強ひて助を待つべし。汝の知らざる助は速に來らん。げだし地の表面が太陽の光線により、地を包圍する大氣の暗黑の中より現るゝ如く、祈禱も慾雲を靈中に散じ盡し、愉快と安慰の光を以て心意を照すを得ん、これ祈禱が神聖なる聲中より自から糧を借り、心意を庶護する儆醒を有する時常に我等の思念に生ずる所のものなり。諸聖人の書を不斷に學ぶは不可思議なる靜嘆と神聖なる愉快とを靈魂に滿たしめん。我等が神に光榮は世々にあるべし。アミン」。

第六十五　說教

默想者の事。

默想者が其行爲を以て無邊の海に至る、即沈默の生涯に至るを理會し始むるは何の時なるか、其勞の結果を產するを多少望むを得るは何の時なるか。

予は汝に或事を語げん、此に疑を容るゝなかれ、又予が告る所の他の言をも頗細なるものゝ如く輕んずるなかれ、何となれば之を予に傳へたるは信ずべき人々にして、予は此言に於ても、又予のすべての言に於ても汝に眞實を告ぐればなり。もし汝は自己を其目の瞼に懸け、之に由り涙に達するときは、其生涯の間に最早何物をか

得たる如く思ふなかれ。げだし今に至る迄、汝に隱れたるものは世に事べ、即世の生活を營みて神の事は、外部の人を以て之を爲せども、內部の人は猶無結果なり、何となれば其果は、涙を以て生ずればなり。涙の域に到り達する時は、知るべし汝の智は此世の獄より出でゝ、其足を新世界の礎に立て奇異にして新しき空氣の香を嗅ぎ始めたるを。其時は涙を流すを始めん、何となれば靈兒の誕生が近づきたればなり。衆人一般の母たる恩寵は來世の光の爲に神聖なる形像を奧密に靈中に生出せんを願ふ。然して產期已に至る時は、智は彼處にある所の或物に喚起せらるゝこと、猶嬰兒が其肢體の內部に吸收し、之を以て常に養はるゝ呼吸に類するありて、こは彼の爲に猶非常なるにより、之に得堪へずして、俄に其體を動かし、盛の甘きを混和したる叫聲を發す。而して之を以て心中の兒の養はるれば養はるゝ程涙は增加するなり。然れども此の子が書する涙の順序は默想者に間歇的に生ずるものを言ふには非ず、何となれば默想を以て神と共に居るすべての人にも時として此安息の生ずるのありて、或は抽象的直覺に居り、或は聖書の言を學び、或は祈禱的談話を爲す時に生ずるあればなり。さりながら予は此の涙の順序のことを言ふには非ずして、甚夜不斷哀む者に生ずる所のものを言ふ。

しかれども此等の狀態の眞實なる價値を眞實的確に發見する者は默想に於て之を發見せん。げだし彼の目は渾々として已まざる源泉の如くなること二年有餘に亙るべくして、其後彼は思慮の鎭靜に至らん。然して性の幾分をか籠めて思慮の鎭靜に至りたる後彼は聖パウェルが言ふ所の安息に入らん（エウレイ四の三）而して此穩靜なる安息の後、智は奧義を直覺し始めん。其時聖神は彼に天上の事を默示し始むべく、神は彼に住みて神の果を彼に復活せしむるなり。ゆゑに多少明了を欠き推察的なりとはいへども、人は自から其內部の性の種々なる改新により變化を受るを感ずるなり。

予は自己の記憶に充つる爲にも、又此文を讀むすべての人の記憶に充つる爲にも、聖書により、及び義なる口により傳へられたるものゝ中より借り、又自己の實驗よりも少からず借りて、其儘此を書するは之を益用する者の祈禱により予の爲に助ことならん爲なり。何となれば予は此事の爲に少からざる勞を用ひたればなり。然れども又聞くべし、今予が汝に告ぐるものは僞らざる口により敎へられしものなることを。思慮の鎭靜の範圍に入る時は、涙の多きは汝より奪はるべくして、其後涙は適宜に、又は緊要の時に汝に生せん。是れ最適確なる眞理なり、之を備言すれば

すべての教會はかくの如く信ずるなり。

第六十六　說教

世に貧者となりて、神を尋ぬる爲に出發したる神の僕は、眞理の了解に達せざらんを恐れて尋ぬるを停止すべからず。又神聖なるもの、神の奥義の研究を愛するにより生ずる熱愛を冷にすべからざる事、及び智は慾の記憶により擾さるゝ事。

人の昇進する等級は三あり、新進修道士の等級と、中間の等級と、完全なる者の等級是なり。初級に居る者の意思の有樣は善に傾くといへども、心の感動は慾にあり。第二の級は慾に從ふ狀態と無慾との中間に位し、右と左の思想は一樣に人に起りて、既に言ひし如く、彼は光明をも暗黑をもすべて發して息まざるなり。されば若し神聖なる書を頻に讀むを暫く停止し、內部の守りと充分なる尺度の行爲の生ずべき外部の警戒と共に力に應じ智を以て考る者を眞理の狀態を以て鼓舞する神聖なる智的想像を心に畫くを暫くも止むるならば、人は慾に引誘せらるゝなり。若し如上の事を以て天然の熱愛を養ひ、討究穿鑿して、遠く此に向ふを罷めず、たとひ之を見ずといへども、神聖なる書を讀みて其意を會するに循ひ、思想を養ひて、其左方に傾くを止め、眞理の狀態の下に何等の邪なる感得をも己れにうけず、特に愛を以て其靈魂を守り、倦まざる祈禱を以て忍耐して神に願ふならば、神は自から彼に其願を遂げしめて、彼の爲に其門を開くべく、特に其謙遜の爲に之を開き給はん。何となれば奥義の啓示は謙遜なる者にあらはさるればなり。しかれどもし此希望中に死するならば、たとひ彼の地を近きに見ずといへども、予は思ふ彼の嗣業は古義人等が完全に達するを望んで見ざりしと同じかるべきこと、聖使徒の言ふ所の如くならん。（エウレイ十一の三十九）彼等は其の悉くの日を自から勞苦して希望の中に世を終へたりき。然らば我等は何を言ふべきか。もし人は完全の象樣なる約地に上るを得ず、即天性の力に依り、眞理を明かに理會するに達せずんば、之が爲に彼は此事を停止して、其の悉くの意向は左方に傾き最下劣等の級に止るべきか。或はたゞすべての眞理を悟らざる爲に最下劣等の級に止まりて、之を認識せず、且は之を願望せざるべきか。或は予が述べたる中間の路迄昇り達するは彼に適當なるかげだ

したい鏡を以て見るが如くなる外には之を見ざるべしといへども、遠く望みて、此希望を以て祖先に並ぶべく、たとひ此處に於ては完全なる恩寵を賜はらずといへども常に恩寵と交り、全幅の精神を之に向けて畢生之を願望するにより、彼は惡念を截斷するを得べくして、神が此希望を其心に滿たしめたる丈にて此世を逝らん。すべて譴遜を有するは極めて美なり、神聖なる書の了解を以て導かるゝ智に神を愛するを敬ふる、靈的敎訓は、靈魂を以前の惡なる思想より內部に擁護して、智を未來の幸福を記憶するを以て守らん、彼れ其怠慢の爲に弱らず極めて善なる記憶に代へて世事の記憶に占有せられざらん爲なり、何となれば之が爲に彼は奇異なる感動の力を漸々冷却し、無益にして愚なる慾望に陷れば也。我等が神に榮を歸すべし。

第六十七　說教

神に依賴する種類、當然に神に依賴する者と無思慮に且無智にして依賴する者の事。

心の信仰により神に依賴するあり、こは最美にして思慮と知識とに一致す、又他の此と異なる無法の結果なる依賴あり、こは僞なり速に亡ぶべきものにはすべて意を致さずして、豈も夜も已を全く主に托し、世の何事をも慮らずして、德行の爲に勵精するに依り、時を全く神聖なる務に用ひ、隨て己の爲に衣食を備ふると、肉體の爲に住所を營む等の事を疎にする人あり、かくの如き人は最美にして智慧を以て主に倚賴するなり、何となれば主は彼の爲に欠くべからざるものを備ふればなり。これ實に眞正にして最賢明なる倚賴なり。かくの如き者の神に依賴するは當然なり、何となれば神の僕となりて神の事に勵精し、如何なる事故ありとも怠慢に陷らざればなり、かくの如き者は神が特に其照看をあらはすに値す、何となれば彼は神の誡を守ればなり、曰く「先づ神の國と其義とを求めよ、然らば此等のもの皆汝等に加はらん」〔マトフェイ六の三十三〕肉體の慮を慾に變するなかれ〔ロマ十三の十四〕、けだし我等がかくの如き傾向により、世は我等にすべてを備ふること或る僕の如くなるべく、必ず我等に從ふこと主君に從ふ如くなるべくして、我等の言と我等の旨に悖らざるべし。かくの如き人は不斷神の前に立つを妨げざらんが爲に身體の欠く可らざる需要に對する憂慮に沈まず、神を畏るゝ心により、すべてかくの如くなる心意の滿足と誇大とを得んとする大なる或は小なる掛念を免れて自由なる者

となる一事の外他を一も慮らざるべし、然れども之を慮らず之が爲に苦辛せずして奇跡により之を受けん。

しかれども心は全く地に埋もれて、常に蛇と共に塵を食ふ人は決して神に悅ばるゝ事を慮らず、反てすべて肉體に屬するものゝ爲に疲れ且弱り、人々と不斷交遊して浮戲放心するにより、一の德行にも意を致さず却て之が爲に何等の口實をか設く、かくの如き人は實に此の怠慢と遊蕩の爲に善行より遠ざからん、而して或物に缺乏し或は死の爲に迫まられて、自己の不法の結果に壓せらるゝ時は、彼も大方次の如く言ふならん、我れ希望を神に托す、ゆゑに我を哀なき者と爲して我に猶豫を與へ給はんと。無思慮なる者よ此時に至る迄汝は神を念はず、其行の放蕩を以て神を辱かしめて、神の名は異邦人に非難せらるゝこと錄して言ふ所の如し、〔ロマ二の二十四〕然れども今や口を開きて敢て言はんとす、曰く「彼に希望を托す彼は我を助けて我を慮らん」とかくの如き者等を辱しめん爲神は幸に豫言者を以て告げ給へり曰く「彼等は日々に我を尋ね求め我が途を知らんことを欲す、義を行ひ神の法を棄てざる民の如く義鞫を我に求む」と〔イサイヤ五十八の二〕其意思は神に近づかざれども忠難に圍まるゝときは希望を以て手を神に擧ぐる此の無思慮なる者はかくの如き者等の數に屬す、かくの如き者を百方了解せしめんが爲に彼を火に焚くを要すること幾回なるか、何となれば神に希望を有するに相當なる事を彼は一も爲さゞればなり、之に反して其惡行の爲及び爲すべきことに怠慢なるが爲に罰に相當するも恒忍なる神はたゞ其憐により彼を忍耐し給ふ、故にかくの如き者は已を欺くなかれ、其生活の如何なるを忘るゝなかれ、神に倚賴すと言ふなかれ、げだし罰せられん、何となれば信の行は一も彼にあらざればなり、彼は遊蕩に止まるも、神の行に生涯を送る者の如く、神は緊要なるものを我に與ふるを信ずと言ふなかれ、或は未だ曾て念頭に神を有せざるも、今や陷りしにより「希望を神に托す彼は我を救はん」といはん爲に無分別にも自から井に投するなかれ、無思慮なる者よ、自から欺くなかれ神の爲に勞すると働きて汗を流すとは神に倚賴するに先だつ、神を信ずるならば善く働くべし。

さりながら信は行を要して、神に倚賴するは德行の爲に苦を受るに於て顯はるゝなり、神が其造物の爲に慮りて能はざる所なきを信ずるか、汝の信仰は之に相當する行爲を伴ふべし、其時は神は汝を聞かん、風を支へて一掴にせんと盡力するなかれ。

人は野獸或は殺人者或は之に類する者等の居る路を知らずして行くこと屢々之あらん、視よ神の一般の照管は彼を如此の害より救ひ、或は惡獸の過る迄何と以てか旅人の進行を遲滯せしむることあり、或は人あり彼と相遇ふて其途より遠ざからしむることあり、又或時は毒蛇の路に臥して見えざるあらんに、神は人の其咬害に罹るを欲せず、蛇をして俄に啾々たる聲を爲して、其所を離去らしめ、或は蛇が其前に匍匐するを旅人をして見て用心し、其害を免れしむることあり、人は獨り自ら知る所の隱れたる罪の爲に此事に當るに堪ずといへども、神は其憐により彼を禍より避けしむるなり、又家或は壁或は巖石の鳴動顚倒せんとして、其處に或る者等の坐するあらんに、神は仁慈なり、坐せし者等の其所を起つに至る迄又は何を以てか彼等を他に移して其處に一人も止らざるに至る迄は、天使に命じて其顚倒を支へ且止めしめ、彼等の立去るや直に倒るゝこと屢之あり、然して或者は不意の事件に遭遇するも何等の害もうけざることあり、げだし之を以て其力の限りなく大なるをあらはさんと欲するなり。

すべて此等のことは一般的にして、何の處にも之ある神の照管の働なり、然れども義人は離れざる照管を已れに有するなり、げだし他の人々には神は命じて自己の事を已の思慮にて處理し、神の照管と共に自己の知識をも益用すべきを以てすれども、義人は自己の事を處理するが爲に此知識に必要あらず、何となれば此知識に代へて信仰を受け「凡そ神の知識に悖ふ高慢を敗ればなり」（コリンフ後十の五）ゆゑに前文に數へたるものを一も恐れざることなし、如く勇ましく（箴言二十八の一）すべてに對し信仰を以て勇むは是れ主を試みんが爲にあらず、主に目在して、聖神の能にて武裝せられ、之を以て圍まるゝによる。されば其恒久にして易はらざる憂慮を神に捧ぐる如く、神も彼の事を次の如く言はん、曰く「愛の時我彼と偕にし、彼を拔け、彼を榮せん、壽考を以て彼に飽かしめ、我の救を彼に顯はさん」（聖詠九十の十五、十六）衰弱して其行に怠慢なる者は如此の希望を有する能はず、しかれどもすべて神と偕に居り、其行の善良なるを以て彼に近づきて其心の目は眠らず彼の恩寵に向ふ者は神聖なるダウィドの言ひしものを自己の爲にも言ふを得ん、曰く「我が目は我が神を望みて瘁れたり」（聖詠六十八に四）彼に光榮尊

第六十八　說教

世を棄つる事、及び自由の交際を愼む事。

世を遁れ、世の人々に遠ざかるを愛し、始むる時は、涕泣と思慮ある中心の悲痛の如く我等を世と分離し、我等に慾を殺して、我等を靈神上の事の爲に喚起皷舞するものはあらざるなり、げだし溫柔なる者の身は其愛さるゝ者の讓遜に倣ふ、之と同く人の笑を惹起し、交際に恣なるにより、意思の高超する程、我等を世と世に居る者又は世にありて飮酒に耽り放蕩に委する者等の仲間たらしめて、神の睿智と奥義の認識とより我等を遠ざくるものはあらざるなり、これ放蕩なる魔鬼の行なり、さりながら至愛者よ、汝の哲學を余は實驗して熟知したるにより、愛を以て汝に懇請す、願くは敵の害を豫防せんことを、恐らくは妄語は汝の爲に十字架上に酢を嘗めたるパリストスを愛するの熱情を汝の靈中に冷にせん、恐らくは敵は汝の美なる習と神の前の勇氣とに易へて、汝の不眠の時は多くの妄想を汝の靈に滿たし、汝の睡眠の時は盲昧なる噂語を以て之を房にして、聖なる神の使等は其惡臭に堪へざらんことを、其時は汝は他の爲には失脚の因となるべく、自己の爲には鋭き棍棒とならん、故にパリストスの謙遜に倣ふに己を強ひよ、彼が汝に入れたる火の迅速に燃えて、世のすべての憧憬の新人を殺すものとをこれによりて殄滅せんが爲なり、げだし余は聖なるパヲエルと共に敢て言はん我等は神の殿なりと〔コリンフ前三の十六〕故に我等は神の自から潔き如く彼の殿をも潔くせん、之に住するを欲し給はん爲なり、又彼の自から聖なる如く其殿をも聖にし、すべて善良身正なる行を以て之を飾り、神の旨の安息の香と淨潔にして熱心なる新禱とを以て之を薫せん、これ世の動亂に屢關與しては得る能はざる所のものなり、かくの如くなれば神の光榮の雲は靈魂を陰ひ、其威嚴の光は心中に輝き始めて、神の里の悉くの住者は喜ひと樂みにみたされ、赤裸々にして無疵なる者等は聖神の火焰により消滅せん。

故に兄弟よ、不斷已を責めて下の如く言ふべし、曰く「不幸なる靈魂よ、予は禍なり、汝が身體を脫する時は近づけり、今日棄てゝ永久に見ざるべきものを何の爲に樂むか、以前の生活を回顧し、注意して思慮判斷せよ、汝は何を爲したるか、何故かく爲したるか、汝の行は如何なりしか、其生活の日を誰と共に送りしか、或は地上に於る汝

の行爲の勞を誰か益用したるか、其戰を以て誰を喜ばしめて、汝が世を去る時誰に出でゝ汝を迎へしめんとするか、誰の爲に艱難勞苦して、彼に喜んで就かんとするか、來世に誰を友とし得て、汝が出で去る時汝を受けしめんとするか、如何なる田に雇はれ働らきて、日暮汝が別去る時誰か汝に工錢を與ふるか」と。

靈魂よ、己を試みて省察せよ、汝の領地は何の處にありて、當事者の爲に苦きを產する田を汝は通過せしや否や、慨嘆と不安とを以て號び且呼べよ、汝の神は體物と燔祭とよりも之に安んじ給はん、汝の口は悲痛の聲を發せよ、聖なる使等はこれを喜ばん、汝の眼の淚を以て其險を洗へよ、聖神は汝に止まりて惡の汚穢より汝を洗はん、淚を以て汝の主を和げよ、彼は汝に助けん、マリヤとマルファを呼べよ、彼等は哀泣の聲を汝に敎へん、主に呼んで次の如く言ふべし、

主イエスス ハリストス 我が神よ、ラザリに泣きて、彼に哀みと同情の淚を遏ぎし者よ、我が愁嘆の淚をも受け給へ、汝の苦難を以て我が慾を醫し、汝の血を以て我が血を淨め、汝が生活を施す體の香氣を以て我が體と和し給へ、願くは諸敵が汝に飮ましめたる酷は敵の我に飮ましめたる苦味よりも我が靈を樂ましめん、願くは十字架の木の上に伸べ給ひし汝の體は魔鬼を以て引下されたる我が心意を汝に伸ばさん、願くは不信者を以て十字架に釘せられし汝の至聖なる手は我を滅亡の淵より汝に引上ぐること、汝の至聖なる口の約せし如くならん、願くは詛はれし者等の爲に批たれ且唾せらるゝを自ら甘んぜし汝の面は不法を以て傷はれたる我の面を照さん、願くは十字架の上にありて汝が父に交付したる汝の靈は汝の恩寵を以て我を汝に導かん、汝を尋ぬる爲に悲痛する心は我にあるなく、子輩が自己の嗣業に引入れらるべき痛悔も碎けたる心も我にあるなし、主宰よ、慰藉の淚は我にあり無し、我が智は世事の爲に昏まされ、悲痛して汝に眼を擧ぐる力を有せず、我が心は誘惑の多きにより冷却して汝に對する愛の淚に煖められるゝ能はず、然れども汝主イイススハリストス神、萬善の寶藏なる者よ、全くの痛悔と疲れざる心情とを我に與へ給へ、我が靈を全うして汝を尋ぬるに着手せん爲なり、げだし汝なくんば予は何等の善にも遠ざからん、故に善なる者よ、汝の恩寵を我に與へ給へ、永遠無限に汝を其懷より出す父は汝の狀を我が中に新にせん、我は汝を棄てたり、汝は我を棄るなかれ、我は汝より去れり、汝は來りて我を汝の牧場に導き、汝が選べる群中に我を數へ入れて、汝が神聖なる奧義の衆を以て彼等と共に我を養ひ給へ、彼

等が純潔なる心は汝の住所にして、汝の啓示の光の瞭然と彼處に光り耀くは、是れ慰籍なり而して此懸安は汝の爲に種々の患難と殘害とに於て苦辛したる者等の爲なり。我等が救世主イイススハリストスよ、願くは汝の恩寵と汝の仁慈とに依り我等も此光輝を世々に惠まれん。アミン。」

第六十九　說教

懸念を有せざるは默想者の爲に有益にして、其出入は有害なる事。

懸念の多き人は溫良なる沈默者となる能はず、何となれば彼を煩はす事故の避く可らざるは彼をして欲せずと雖强て之に從事し、之に時を遂るを餘儀なくせしめて、其安靜と沈默を散ずればなり。ゆゑに修道士は實に其智力を保護し、殊に心中に起る所の小なる動搖を止め且除きて、其出入するものを思念の安靜により辨別せんと欲せば、己を神の面前に立て、常に髮らずして其眼を神に舉げんこと肝要なり。修道士の頻に繁忙なるは彼等がハリストスの誡命を行ふが爲に用意するの薄弱なるを示す徵候と爲すべくして神聖なる務の爲に彼等の短所を顯はすなり。感覺の弱る時に方て懸念より脫するなくんば其靈中に光を尋ぬるなかれ安靜も沈默も尋ぬるなかれ、事の忙はしきに際して其忙はしきを增すなかれ、さらば其智に於ても或は其祈禱に於ても高超を見るなけん。連綿として斷えざる祈禱なくんば神に近づく能はざるなり。祈禱の勞の後新なる懸念を智に課するは思を浪費せん。

祈禱の時に於る淚と、叩頭と、祈禱を續くるに爲に燃ゆるが如くなる熱心とは淚の甘きを愛する熱愛を心中に惹起して、心情は賞讃すべき愉快と共に神に高く舉げられ、呼んで言はん、我が靈は汝勇毅生活の神に渴く、主よ我れ何の時か來りて汝の顏の前に出でん。聖詠四十一の三。此酒を飮みて其後之を忘はれし者は、棄てられて如何なる憐むべき狀態にあるか、其衰弱の爲に何を取上げられたるかを獨り自から知るあらん。

人々と面會することも、彼等と談話することも、默想を專ら務むる者の爲に幾ばく惡しきか。實に兄弟よ、默想を守らざる者の爲に惡しきよりも特に惡しゝ。たとへば大なる白雨の俄に降りて樹果を枯らし且滅す如く、人々に面會することも、たとひ

甚だ暫時にして一見したる所は善良なる目的に出で、許可せられしものゝ如しと
いへども、默想の融和により僅に開披して、悔改の水邊に植ゑられたる（聖詠一の三）
靈魂の莖を優しく美しく飾りし德行の花を枯らさん。又たとへは嚴霜が僅に地中
より萠出たる野菜を襲ふて之を燒く如く、人々に面會することも德行の蔬菜を生
じ始めたる智の根を燒かん。或事には節制なれども、或事には少しの缺點を有する
人々と談話するは、常に靈魂を害するならば無智にして思慮なき人々と面會談話
するは、更にます〳〵有害なるにあらずや。予は最早俗人とは此事を言はず。たとへ
ば貴族にして尊敬すべき人あり、爛酔して己が身の貴族たるを忘れ、其地位を汚す
ときは、酒により彼に入りたる他の思念の爲に其尊敬は一笑に付されん。此の如く
靈魂の貞潔も人々に面會すると彼等と談話することにより擾されて、其戒愼を忘れ、
其意の企圖は人の思に消滅して、生命を賞讃すべく建設するが爲のすべての基礎
は根絕せられん。
故に默想の中に在る者に意思の高超と共に偶然に起るべき人々との面會及び放
心或は何物をか見或は聞く爲に之に近づくのみなりとも、其視覺又は聰覺の門に
より入るものは神聖なるものゝ爲に心の冷淡と昏盲とを人に生せしむるに最早

充分なるべくして、節制なる修道士に暫時にしてかゝる害を被らしむるを得べく
んば、不斷の面會とは之を何とか言はん。腹より出づる蒸發氣
は智に神聖なる認識を受るを許さずして却て之を昏ますこと恰も濕地より騰り
て空氣を暗ます濃霧に似たるあり。然れども驕傲は暗中を行くを解せずして賢明
の何たることの理會を有せず。げだし彼は昏迷に居りつゝ如何して此事を知るを
得ん。此により彼は自から空虛薄弱にして主の路を認識するに堪へざるも、其昏ま
されたる思想を以て衆中に傲然たるなり。ゆゑに主は其旨を隱して彼に知らしめ
す、何となれば謙遜なる者の路を行くを欲せざればなり。我等が神に光榮は世々に
あるべし「アミン」。

第七十　說教

夜間儆醒の行の愉快により神に接近し人に顯然た
る者の行路の事、及び此の當事者は其生活の凡の日
を蜜にて養はるゝ事。

人よ、すべて修道士の爲す所に於て夜間の儆醒より重要なる何等の務かありと思

ふなかれ。實に兄弟よ、儆醒は節制者の爲に重要にして最欠く可らざるなり。もし苦行者は身體に屬する事と暫時に過ぎ去るものとを慮るが爲に分心擾亂することあらずして、己を世より守り、儆醒を以て己を護するならば、其智力は暫時に飛揚することと羽翼を生ずる如くにして、高く神を樂むに至り、神を榮するに速に達すべくして、動かし易きと輕きとにより人間の理解に超越する知識に入らん。もし修道士は思慮を以て儆醒を務むるならば、己を見ること肉體を有せざる者の如くなるべし。げだしこれ實に天使の品位の行爲なり。此務に全生を送る者は其覺醒と心の不眠と其意思を神に專ら向はしむることにより、大なる賜なくして神に乘てらるゝ能はざるなり。此儆醒を務むるに自から勞し之を以て卓越する靈魂はヘルワイムの如き目を有し視力を不斷高めて、天の覩場を直覺せん。

予は思ふ知識と思慮とを以て此の大なる神聖の勞を選び此重きを己れに任はんと決心したる者は、此の選べる頌讃すべき行爲に於て格鬪して、豈は衆會の擾亂と事物の懸念とより己を護せざること能はざるべし。然らずんば之により受けんを希ふ奇異なる果と大なる樂みとを失ふの虞あるによる。此事を等閑にする者につきては、予は敢て言はん、彼は勞すると、眠を禁ずると、讃美の歌を續くると、舌を苦しむると、徹夜の叩拜とを以て己を疲らすの何故なるを知らずして、反つて其心は聖詠を唱ふにも祈禱にも關るなく、恰も習慣により導かるゝものゝ如く、無思慮に勞するものなりと。若し此は予の言ひし如くならずんば彼が毎々勞して種を播くに拘はらず、大なる恩寵と果實を穫るの力とを奪はるゝは、何故なるか。げだしもし此等の懸念に易へて神聖なる書の誦讀に黽勉し、之を以て智を堅め、特に祈禱の爲に灌漑となりて祈禱に密着合同すると共に智に光明を與ふる儆醒に助くるならば、此誦讀により正しき路に向つて嚮導者を得べく、祈禱的直覺を存養するすべての爲に種子となるべきものと、意思を高超より遮止すべきものとを得て、旋回して無益なるものに養はるゝをゆるさゞるべく、神を念ふ記憶を不斷靈中に蒔き、神意を悦ばしめたる諸聖者の路を指示して、智は銳敏と聰慧とを得るに至らん。一言にてこれを言へばかくの如き行爲の成熟なる果實を得ん。

人よ、何故かく無思慮に己を處するか。夜は徹夜の拜を行ひ、詩章歌頌祈願を以て自から勞すれども、晝に至り暫時の勉勵により人と共に苦むが爲に神の恩寵を賜はるを汝には難澁にして容易ならざるものゝ如く意ふか。何故汝は自から勞して夜間に揣くも、晝に至り其勞を涙して無結果なる者となり、其得たる所の不眠と惶々

たる心と熱愛とを浪費し、人と物とに接するの煩はしきを以て徒らに己の勞を減して、之が爲に何等の確たる辯解もあるなきかげだし汝の爲に日中爲す所と心的談話の熱愛とは夜間の練習に相應するものとなりて、彼此の間に間歇あるなくんば、暫時にして汝はイイスの懷に投ずるを得ん。

さりながら汝が無思慮に生活すると、修道士の徹夜せざるべからざるは何故なるを知らざるとは此事を定められしはたゞ汝を困しめんが爲にて之より生ずる他の何の故にもあらずと思ふ。しかれども苦行者等が何の希望を以て睡眠に抗し、天性を强ひて、其身體と意思の不眠なる狀態により毎夜其願を獻ぐるの何故なるを思寵に依り確知するを賜はりし者は、日中保護の力を知るべく、ごは夜間の默想により智に如何なる助を與へ、思想の上に如何なる檻を執りて如何なる淨潔に達すると、强ふるなくして智に德行の群を如何に與へらるゝとを知り、思想の貴きを自由に認識せん。然して予は之に加へて言はん、もし身體は無力の爲に弱りて禁食する能はざらんときは、智は一の警醒を以て靈魂を尊貴にみちびき、心に開悟を與へて靈神上の力を確知するを得んたゞ願くは日中反抗する事故の增加するが爲に滅されざらんことを。

ゆ名に神の前に惺々たる心と新生命の認識とを得んと欲する汝に願ふ、汝は畢生儆醒を務めて怠るなからんことを。げだし之により汝の目は開かれて、此生涯のすべての禁と正義の路の力とを見んとすればなり。然れどもし願くは之れあらざらんことを。汝に怠惰の念の再び生ずるあらば恐くは彼は汝に巢を作らん、何となればすべて此の如きを常に汝に許す汝の扶助者は汝を試みんと欲するによる、何の理由により汝は或は熱愛に或は冷淡に變ずるか、或は身體の薄弱によるか、或は常に汝が執行する聖詠を歌ひ續くることゝ、心を込むる祈禱と、汝が行ふに慣れたる無數の跪拜の勞を忍耐するが爲に力の乏しきによるか之を試みんと欲するによる、ゆゑに愛を以て汝に願ふ、もし汝に此力足らずして、之を遂ぐる能はずんば、坐すといへども整醒し、心にて祈禱せよ、眠に就くなかれ、すべての方法を用ひ、坐して善良なる思想を練りつゝ不眠を以て之を呑まずなかれ、然らば恩寵に依り以前の熱愛と輕快と能力とは再び汝に來りて踊躍し、神を感謝しつゝ大に悅懌せん。何となれば此の冷淡と如此の悒鬱とは人を試驗し且探知するが爲に許さるゝものなればなり。もし人は己を奮起し、熱愛と少しく己を强ふることを以て之を己より振落すならば、恩寵は彼に近づくこと

以前の如くなるべくして、すべての幸福と種々の助けの隠るゝ他の能力の來るあらん。さらば人は以前の悒鬱と其變せし輕快と能力とを想起し、此差異と、動かし易きと、かくの如き變化を俄に己れに受けたるとを想像し、愕然として猶かん。さらば此時より聰慧なる者となるべくして、もし此の如くなる悒鬱の人に起るあらば、先の經驗により之を知らん。然れども人は初度に奮闘せずんば、此經驗を得る能はざるべし。人は身體の性の衰弱せざる限りは、少しく己を奮起して戰時に忍耐するならば、幾ばくか智慧付けらるゝを見るか。しかれども此は最早爭闘には非ず。薄弱のために已むを得ざるなり。げだし此場合に天性と闘ふは益なきなり。さりながら他のすべての場合に於てはすべて人に有益なるものに己れを強ふるは人の爲に甚だ善なりとす。

不斷の默想と併て讀經すると、節制して食を甞むると、儆醒とは、其默想を破るべき何等の事故もあらずんば、速に意思を皷舞して愕然たらしめん。默想する者等に豫め力むるなくして自然に生ずる意思は、其流るゝ涙と其瞼を洗ふ富とにより、兩眼を洗盤の如くならしめん。

しかれども汝の身體は節制と儆醒と默想に專なるとにより鎭められざれど、汝の身體に天然の感動にあらずして放蕩なる慾念の起るあらば、知るべし汝は驕傲の意思を以て試みらるゝを。其食に灰を和し、其腹を地に貼け、汝の何を思念したるを探究して、其性の變化と其天然に悖る作用とを審知せよ。其時は思ふに神は汝を憐み汝に光を遣はして、汝に謙遜を學ばしめ、汝の罪は汝に成長せざるべし。ゆゑに自ら悔改を認めず謙遜を見付けずして、我等の心が神に安んずるに至らざる間は、奮闘して盡力するを止めざらん。彼に光榮と權柄は世々にアミン」。

第七十一　說教

罪なる敗壞は如何して生じ、如何して止むか其力と勢力の事。

人は罪の源因を實に中心より憎まざる間は、罪の勢力により引出さるゝ感觸を免る能はず。此は血を流すに至るも人に屈し下らざる最無慚なる戰にして、人の自由は德行に對する愛の一致を之により試さるゝなり。是れ即刺殺と名づけ、又格鬪と名づけらるゝにして、不幸なる靈魂は此の一の惡臭により靈中に生ずる避く可らざる戰の爲に弱らん。是れ罪の廣大なる力にして、之により敵は貞潔者の靈魂を

常に援じて、淨潔なる感動は未だ曾て自己に全く受けざりしものを强て試みるなり。愛すべき兄弟よ、茲に於て己の忍耐と熱心と勉勵とを證せん。げだし是れ謂ゆる見えざる苦行の時にして、修道士の品位は常に之に勝つなり、此戰と會するに當り、敬虔なる心はもし力めて武裝せずんば、速に援されん。

主よ、すべての助の泉なる者よ、汝は此の時に於て、此の苦難の時に於て、彼の己を汝天の新郎に喜んで聘定し、汝と聖なる盟約を締ぶに眞實なる情を以てして虛僞を以てせざる靈魂を堅むる大なる力なり。ゆゑに眞理に對して誇る所の堅固なる城郭とすべての高處とを勇氣にして破壞する力を彼に與へ給へ、恐らくは其戰の血を流す時に當り、堪へ難く忍び得ざる壓迫により、其企圖の無效となり了らんことを。

此の猛烈なる戰爭に於て貞潔は苦行を常に支ふるには非ず、げだし人は試惑のために助なくして棄てらるゝによる。此の決戰に於て試みられたる無力の者は禍なり、何となれば此戰は己が思念と同意を爲して自己を打擊に付する者に對し、得たる所の慣習により大なる力を有すればなり。

至愛者よ、閑散を豫防せよ、何となれば彼に死の隱るゝことは確に知られて、彼無くんば修道士を捕獲せんと要求する者の手に陷る能はざるによる。彼の日に於て神が我等を審判するは、聖詠の爲にあらず祈禱を廢したるが爲にもあらずして、此の放下により魔鬼に入口を自由に與へらるゝによる。然れども魔鬼が自から其所を發見し、入りて我等の眼扉を閉る時は、暴虐と不潔とを以て我等に執行して、當事者を神の定罪と至重の罰に服せしめん、されば此の切要なるにはあらざれど、然も賢哲の晉する如くハリストスの爲に蒙るに値するものを放下したるにより、我等は彼の屬下とならん。己の意志を神に從はしめざる者は神の敵に從ふ、故に此の汝には小なりと見ゆるものも我等を捕ふる者を防禦する城壁とならん。啓示の精神に依り、庵中にて此を遂行することは我等が生命を守る爲に敎會の秩序を維持する智者を以て定められたり。此を放下するを不智者は認めて輕微と爲す。げだし此より生ずる害を彼等は看取せざるにより、彼等の路の始初も中間も無知の自由にして慾の母なればなり。小なるものを放釋して罪に所を與へんよりは之を放下せざるの愈れるに如かず。げだし時に合はざる此の自由の終は無慚なる奴隸の役なればなり。

汝に五感が活動して勢力を有する間は、何物に遭遇すとも、己を死者と思ふべし、何

となればもし汝のすべての肢體に罪なる火焰の滅するあらずんば救を得る能はざればなり。もし修道者の中誰か其心に此を自から豫防せんと言ふに同じ。其友を欺く者即其類を批たるゝも彼は之を知ることをさへ欲せずと言ふ者あらば、是れは律法に依るに詛に當る。之に反して自から己を欺く者は惡行の過失たるを知れざるも、知らずとして自から之を蓋ふによりて如何なる罰をうくべきか。しかれども彼が之を知る所以は良心の責めは之を證す。知らざるを伴るを彼の知るは彼を苦めん。

呼慾の爲の機會は何ぞ愉快なるや。人は時として慾を斷つべく之より遠く離れて安靜を樂み、慾念が止むときは欣然として喜ばん。然れども人に慾の源因をあらざらしむることを能はず。故に欲せざるも誘はるべくして、我等は慾中にあるときは哀めども之が機會の我等に止まらんことを愛す。自らは罪を願はざれども我等を之に引誘する源因をば樂んで受く。此により後者は前者の勢力に於るの本源となるなり。慾の機會を愛する者は心ならず欲せずして慾の屬下となり之に苦使せらるゝなり。罪を惜む者は罪を犯すを止むべく之を告白する者は赦を受けん然れども人は先つ罪を敵視する心を求めずんば、罪の慣習を止むる能はずして、罪を犯したるを告白する先には赦を受る能はざるなり。げだし敵視は眞實なる譴逐の源因にして、告白は恥ぢて心中に生ずる傷める心の源因たるなり。

非難に値するものを惜まずして、之を其心中に懷抱する間は、此のすべての勢力の爲に其惡臭と汚穢とを感する能はざるべし。不合宜なるものを自から棄擲するに至らざる間は汝は如何なる恥に被はれて、之が爲に幾ばく赤面すべきかを察せざるなり、しかれども自己の重荷を他人の上に認むるときは、汝に在る所の恥を察知せん。世より遠ざかるべし。其時は世の惡臭を察知せん。しかれども遠ざからずんば、世の幾ばくも臭穢なるを察知せずして、反つて直に其惡臭に圍まるゝこと、芳香に圍まるゝ如くなるべく、其恥の露出を以て光榮の帷幕と爲さん。

世と世の闇黑に遠ざかりて獨り己れに注意する者は、禍なり。げだし聰慧と思慮とは生命を無益なる行爲に送る者に働き或は助ることを能はざるべし。然り、其援さるゝ思慮は何れか當然なるを如何して區別するを得んや。酩酊して眠を催すを免れ、此酩酊せしむる子の如何に飽くを知らざるを他人の上に發見する者は禍なり。其時は彼は己の恥を識らん。しかれども人が己の罪により酩酊したる子を自己に懷抱する間は、爲す所のものはすべて彼の爲に相應と見ゆること幾許なるか。もし天

性は自己の順序を失ふならば、酒に醉はしめらるゝも或は色に醉はしめらるゝも全く一樣なるべし。何となれば彼も此も緊要なる狀態より脫して、彼を以ても此を以ても一樣なる激發は之を己れに容るゝ體中に起ればなり。方法は異なれども溶解は一なり。變化は一樣なれども、源因の差は種々同しからずして、然も各人の感受性によりても辨別せらるゝなり。

凡ての安樂には艱難隨ひ、神の爲に受るすべての不幸は安樂を伴ふ、すべて此世にあるものは敗壞に屬せざるなうして、敗壞は此世に於ても、來世に於ても、又其出發の際に於ても、反對の源因により生じ、殊に放蕩なる奢侈により、或は此奢侈と反對して之を塾にする際に忍耐する苦難により生ずるならば、神が人を愛するにより此をも定め給ふは、或は其旅行の時に於て、或は其終りに於て、我等に罰を嘗みしめんが爲にして、其時は最早神の豊なる憐により甲の場合には或る報酬として乙の場合には聘質として路を過ぎしめんが爲なり。末後の際に至る迄善を求むるを禁せざれども、實に惡をば禁ず、何となれば惡に樂てらるゝは錄して言ふ如く罰に當る者なればなり。此世に於て罰せらるゝ者は自己の恥の爲に自己の地獄を嘗みるなり。

苦しき奴隸の役に先だつ自己の自由を戒めよ。戰に先だつ慰めを戒めよ。試惑と會するに先だつ知識を戒めよ。然れども悔改を成すに先だちて此と會せんを願ふ心の起ること屢々之あり。けだし我等は皆罪人にして何人も試惑の外にあるにあらざれば、德行の一も悔改の外にあるにあらざるなり。何となれば悔改の行爲は決して完全なる能はざればなり。悔改は救を捉へんを願ふ悉くの罪人にも義人にも常に適當にして、成全に畛域ある無し、何となれば最完全なる者の完全も實に終りある能はざればなり。此により悔改は死に至る迄時をも又行をも限られざるなり。記せよ、すべての快樂は之に憎むべきものと苦味とを伴ふこと離れざる同道者の如くなるを。

變化の源因の合せざる喜を戒めよ。けだしすべて高上なる照覽の際るゝものに關して汝は之が變化の界限と源因とを理會認識する能はざるなり。直道に由り行く者と假定する者を恐れよ、何となれば彼等は謂ゆる道路の外を往來すればなり。容智を以て世の大艦を御するを能くする者はすべて世にあるものに變化すべきを厭し給へり、されば此の變化の外にあるものは影なり。

肢體の安息には熱中と思想の擾亂とを伴ひ、過當なる行爲には煩悶を伴ひ、煩悶に

は熱中を伴ふ。さりながら甲の熱中は乙の熱中と同じからず。安息によりて起る第一の熱中には放盪なる戰を伴へども、煩悶より起る熱中には己が默想の院を築くく所々に流轉するを伴ふ。然れども適當にして熱心を以て續くる行爲は無價なり。此が減少は快樂を增し、過當なるは熱中を加ふ。兄弟よ汝の性の愚の汝に克つを忍耐せよ、何となれば汝は彼の永遠なる權威の榮冠を受くべき容智に備へらるればなり。其知識は肉體を有する者の才智より一層上にありて、天の像即世の王の來るとき成らんとする彼の樂みに備へられたるアダムの身を以て援助を恐るゝなかれ、性の變化と擾亂とに驚かさるゝなかれ、何となれば此樂を愉快に受る者の爲には非ずして、死すべきを挫折する生命に居り、嬰兒の如き性を換ましめ、奢侈を寬縱して之を燃着融解せしむる生命に居るに非ざるなり。實驗の爲に汝が引入らるゝ苦行の難きを忍耐せよ、神より榮冠を受けて此世を去りし後安んせんが爲なり。彼の終りなき安息と諂はざる生命と完全にして易らざる攝理の定則と、天地萬物に宰たる神を愛するを要する生憐たることとを記憶せよ。パリストスの恩寵を以て我等も之を賜はらん、彼に光榮は始無き父及び聖神と共に今も何時も世々に歸す。「アミン」

第七十二　說教

心を守る事、及び幾徹なる直覺の事。

窃に庵中に居りて、眞實なる直覺の力を未だ得ずんば、常に「トロバリ」と「カフィズマ」を誦するとき、死の記憶と未來の望とを以て己を練るべし。是れ皆心を一に纏めて眞實の直覺に至る迄旋轉するを許さゞるなり。何となれば精神の力は慾より强ければなり。而して未來の望により神を記憶するを以て己を練るべく、「トロバリ」の趣旨を善く會得するを勉めて、すべて汝を慾望に奬勵する外部に屬するものを戒めよ。然

れども此と併て汝の庵中に於て汝が行ふ所の小なるものをも戒めよ、己の思想を常に試み、其すべての務に於て汝は目を有せんことを祈禱せよ、汝に喜びは此れより流れ始まるべくして、其時は蜜より甘き衰みを發見せん。

適切にして顯然なる德行を以てするにあらずんば、誰も慾に克つ能はざるべく、靈的知識を學ぶにあらずんば、誰も心意の高超を鎭壓する能はざるべし。我等が心意は輕し、もし或る默想を以て拘束せずんば、高飛して息まざらん。然れども前文に述べたる德行に於て全備するなくんば、此守護を受る能はざるべし、何となれば人は敵に勝たずんば平和に居る能はざるによる。而してもし平和が王たらずんば、如何して平和に許されたるものを見るを得ん。慾は隱れたる心の德行の爲に障碍となるべし、先づ顯然たる德行により慾の貶黜せらるゝなくんば、之が爲に內部の德行はあらはれざるなり。げだし牆外にある者は牆內にある者と交通する能はざるによる。太陽を圍黑の中に見る者はあらず、德行もかくの如し、打續く慾の擾亂の際には靈性にあらはれざるなり。

神の願と渴望とを汝に感せしめ給はんことを神に祈るべし。げだし此直覺と神の渴望の汝に生ずる時は世より遠ざかるべくして、世も汝より離れん。しかれども默想と苦行と之が爲に定められたる讀經に從事するなくんば、何人にも此を感せしむる能はざるべし、後者なくんば前者を尋ぬるなかれ、もし尋ぬるならば其尋ぬるものは漸々に變じて有形なるものとならん。會得する者は會得せよ、容智なる主は我等汗を以て此餠を食はんことを欲し給へり、是れ惡意によるにあらず、我等に不愼棟あらずして我等死するを免れん爲なり。げだし德行は各他の德行の母なり。故に德行を生む母を棄てゝ母を搜す先に往て其女を尋ぬるならば、其德行は靈魂の爲に低價なるものとならん。もし之を自から棄てずんば速に死せん。

第七十三　說教

神を愛する表徵及び其働の事。

神に向ふ愛は天然に熱烈にして、もし人に過度に落るときは、其靈を狂喜なるものと爲す。故に此愛を感じたる者の心は之を容れて之に堪ふる能はず、却て其起れる愛の性質に準じて彼に非常の變化はあらはるゝなり。視よ、此愛の適切なる表徵は左の如し、人の面は火の如く喜ばしきものとなりて、其體は煖められるゝなり。恐れと

耻とは彼より去りて、彼は狂喜する者の如くなるなり。心を一に趨むる力は彼より消失して、彼は失神する者の如くならん。恐るべき死を見て喜びとなし、其智力の直覺は天上の事を思念するを止むる何等の斷絶をも如何しても許さず。在らずしては誰にも見えざるものは談話することも現在する者の如くならん。其天然の知識と觀察とは過去りて、外物の爲に惹起さるゝ感動を彼は官能を以て感知せず、何となれば何を爲すとも其を全く感せざればなり。因りて其智は直覺に騰上して、其意思は常に他の或者と談話する如くなるべし。

在昔使徒及び致命者等は此心酔を以て醉はしめられたり。一者は辛苦艱難し、誹謗を忍耐して、世界を周行し、他者は其斬伐せられし肢體より血を流すこと水の如くなりき。恐るべき苦難にも畏縮せずして剛毅に之を忍耐し、智者たりしも無智と認められたりき。而して或者等は野に、山に、巖穴又は地窟を遍歷し、紛亂の中に在て最整然たる者なりき。願くは神は我等をも此恩に達せしめ給はんことを。

汝は讒遞の都に入る以前に慾の擾亂を免れて安ずるを自己に認むるならば、信ずるなかれ。げだし敵は汝に或る網を備ふればなり。反つて平安の後に大なる動搖と大なる擾亂とを待つべし。もし德行の途上に於てあまねく住所を經過せずんば、其勞より安んずるを見ざるべく、聖なる讒遞の住所に達する迄は敵の奸計より免れて安息するを得ざるべし。神よ汝の恩寵を以て我等にも此に達するを得しめ給へ。

「アミン」

第七十四　說教

德行の種類。

苦行的生活は聖德の母にして、靈的知識の初級と名づけらるゝハリストスの奥義を感ずるの第一報は此より生ずるなり。誰も自づから欺くことなかれ、先見に誘ることなかれ。汚されたる靈は潔淨の國に入らずして、諸聖人の靈と配合せざるべし。涙と禁食と靜默とを以て汝の貞潔の美を平均にせよ。神の爲に受る小なる患難は患難なくして成就する大事に愈れり。何となれば任意の患難は信の實驗を愛にて證すればなり。之に反して安息の行爲は良心を眠らしめたる結果なり。故に諸聖人はハリストスを愛するにより其練達を自から證するに患難に於てしたれごも、爽快に於てせず。何となれば勞なくして成就するものは世の人々の義にして彼等は

外部に屬するものにより矜恤を行へごとも、自己には一も得る所あらざるによる。然れごも汝苦行者にしてハリストスの苦難に傚ふ者よ、自己に於て勗ふべし、ハリストスの榮を味ふを汝に賜はらん爲なり。けだしハリストスと共に榮せられん（ロマ八の十七）もし體はハリストスと共に榮せられざるなり。終に人間の榮を輕んずる者は神の榮を賜はり靈魂と共に其身體も榮せらるべし。けだし體の榮は神の助を以てする貞潔の從順にして、智の榮は神の事の眞實なる思辨なり。眞實なる從順に二樣あり、一は行爲に於てし、一は誹謗に於てす。故に體が苦むときは之と共に心も亦苦まん。もし神を知らずんば神に對する愛情は汝に起る能はず。もし神を見ずんば、神を愛し始むる能はず。然して神を見るは神を認識したる結果なり、何となれば彼を直觀するは彼を認識するに先だゝざればなり。

主よ我に與へ給へ、汝を認識して汝を愛し始むるは智力を以て研究するにより得らるべき知識を以てするには非ずして智が汝を直觀しつゝ世の感觸を意中より棄ひ去る直覺により汝の性を讃榮する知識を我に與へ給へ。空想を生む意見より上に昇り、十字架の鎖を以て縛らるゝ汝を熟視して、之に智力を釘し、智的想像の影響を脫して、汝を不斷直觀する超性的直觀に自由に安んずるを我に與へ給へ。汝に對する愛の我に成長すると汝の愛に追隨して此世を棄つることを我に遂げ行はしめ給へ。我を起して汝の讒遜を曉らしめ給へ、けだし汝が聖なる處女に賴り我等の肢體を借りて之を己に負へる此住所に於て世に消光し給ひしは、此の不斷忘るべからざる記憶により我をして其性の讒遜を樂んで感得せしめん爲なり。

十字架に上る方法は二あり、一は肉體を釘するなり、他は直覺に入るなり、初は慾を脫したる結果にして、次は心神の働の結果なり。體は智に從はずんば智は從はざらん、智の國は體を十字架に釘する是なり、而して自由は靈智に從はざるときは智は神に從はざらん。初心にして幼稚なるを免れざる者に或る高上なるものを授くること難し、汝の王の童子たる國よ、汝は禍なる哉（傳道之書十の十六）己を神に從はしむる者には萬物も幾んど彼に從はん。己を認識したる者には一切の智識を與へらる、何となれば己を認識するは一切に於る知識の充滿にして一切は汝の靈魂の下に汝に屬すればなり。汝の生涯に讒遜が王となる時は、汝の靈魂は汝に服從して、之と共に一切は汝に服從せん、何となれば汝の心に神の平和の生るゝによる。しかれごも汝が讒遜の外にある間は、たゞに慾のみならず、すべての事情も不斷汝を窘逐

せん。實に主よ、もし讖遜ならずんば我等を讖遜ならしむるを罷むるなかれ。眞實なる讖遜は知識の所產にして、眞實なる知識は試惑の所產なり。

第七十五　說教

不斷の禁食の事、自己に集中して一所に止る事、其結果の事、及び凡て此等を正しく適用するを知識により區別するを學ぶ事、

久しく右と左に試みらるゝ予は二の方法により幾回か己を試み敵の無數の打擊を受け、大なる救援を竊に賜はり、多年の間に經驗を求め獲て神の恩寵により實地に確知したるもの左の如し。すべて善良なるものゝ基礎と、靈魂を敵の伴黨より回復し光にみちびきて生命に至らしむるの路は、是れ皆自己を一に集中すると常に禁食すると此二の方法に在り、即腹を節制すると一所に出でずして止り神を思ふを以て不斷の業とすることを審智と善智とにより己の爲に立てゝ規則とすることは是なり。感覺の從順は是より生ずべく心意の覺醒は此より生ずべく、身體に起る烈しき慾の鎭壓は此より生ずべく、思念の温良は此より生ずべく、思の清き感動は此より生ずべく、道德の行に勉勵するは此より生ずべく、高尙にして精微なる智的想像は此より生ずべく、意思を誘ふすべての妄想より全く遠ざかる純然たる貞潔は此より生ずべく、聰明と先見は此より生ずべく、神聖なる言の助により智の到達すべき深遠奧妙なる觀念と、心中に生ずる內部の感動と、聖なる力と眞實なる觀察とに於ても空しき妄想に於ても精神上に係るものゝ分開と區別とは此より生ずるなり。思想の海に於て緩慢と等閑とを截斷する徑路の間の恐れと、如何なる危きをも蹂躙して如何なる恐れにも勝つ熱心の畑と、すべての願欲を輕んじて之を心に消滅すると、之と併て暫時なるものに於ける何等の記憶をも忘れしむるの熱愛とは此より生ずるなり、之を略言すれば眞實なる人の自由と、心中の喜びと、パリストスと共に天國に復活するとは此より生ずるなり。

しかれどももし誰か此の二の方法を等閑にするならば、知るべし彼はすべて前文に述べたるものを以て己を害するのみならず、此の二の德行を輕んじたるが爲にすべての德行の基礎をも動搖せしむるを。此等の德行はもし誰か之を己に涵養し

て此を守るならば心中に於ける神聖なる練習の起初となり、首腦となり、パヂネトスに至るの門となり、路となるべく、もし誰か之より離れ遠ざかるならば、之と反對なる二の惡弊に達せん、即身の放浪と無耻なる嗜甘とに達せん。これ如上の事に反對の始にして、此等は心中に於て慾に所を與ふるなり。

一の源因の第一起初は先づ柔順なる感覺を解放して之を節制の鏈鎖より脫せしめん、然らば此より終に何事を生ずるか。墮落に近づく不適宜にして不意なる集合と、視覺を聳動ずる激浪の擾亂と、身體を管領して之を鎖に繫ぐ目の假に燃起つと、思の偏し易きと、墮落に向ふ遏む可らざる思念と、神の事に愛情の冷なると、默想を貧ぶ念慮の漸々に衰べて其行爲を全く棄つるとを生せん、然して心ならざる種々の狀態に於て人に顯はるゝものと、此方より彼方に流轉する際に遇ふ所のものとに因り己に忘却せる惡しき行の再び新にせらるゝと、是より先に知らざる他の行を學ぶとを生せん。さらば神の恩寵により、心に守る記憶を忘れたるが爲に既に心中に死して斷盡したる慾念は再び動き始めて、心を之が爲に働かしめん。視よ是れすべて其他の事は詳しく言はず、且穿鑿せされども、彼の第一源因により現はるゝものなり。即身の放浪により獸想の難きを任ふを忍耐せざるが爲にあらはるゝもの、即我等は豚の行を始むるならば如何なるか、即ち如何なる行なるか。これ其腹に際限なく不斷滿たすを許して身體の需要を充す爲に示されたる靈智ある實體の適當に守るべき時を有せしめざるにあるにあらずや。然しで是より終に何事を生ずるか。頭は重く、體は大に難澁にして堪へ難く僧は弱りて之により神の奉事を欠くの餘儀なきに至ること是なり、何となれば奉事に於て堆の叩拜を行ふに懶きと、通常の叩拜を粗畧にするとと、意思の昏暗と、冷淡と、思念の擾亂と、大なる昏闇とにより心が頑になりて思慮する力のあらざると、重密にして透見す可らざる濃霧の全心に瀰蔓するとと、すべての神事に際し又讀經に際しても強き煩悶を生ずるとによる、げだし人は神の言の甘美を咀嚼するに堪へざればなり、又緊要なる事を成すに大なる懈惰と、地上到處に放浪せんとする制す可らざる心意を生ずべく、四體に液の多く聚ると、夜々色慾に滿たざるゝ汚穢なる幻像と取り留めなき形像の不潔なる妄想とを生ずべくして、此等は靈魂に透り心中に於て其望を不潔に成遂ぐるなり。されば不幸なる者の臥榻と衣服又は其全身も耻づべき不潔の多きに汚されて、其者に遷ぐこと泉よりする如くならん、而して

こは人に夜間にのみあるにあらず、日中にもあらん、何となれば身體は常に不潔を流して、其思念を汚すより人は之が爲に貞潔を楽つればなり。人の全身を、擦ぐる愉快は不斷堪ふべからざるの熱により生ずべくして、誘惑する思念は彼に起りて其前に美貌を現じ、何れの時にも之と交談するを以て心意を刺激し且擾ぐらん。されば人は理性を昏ますにより、之を念ひ之を慕ひつゝ少しも躊躇せずして此思念と配合するなり。是れ預言者が言ふ所のものに同じ、言へらく視よやソドムなる妹に報ゆるを、彼は奢侈にして食物に飽き足れり云々〔イエゼキイル十六の四十九〕此事を大なる賢哲の一人は述べて左の如く言へり、曰くもし誰か大なる奢侈を以て身體を養はゞ、其靈魂を戰に陷れん、さらばもし己に反りて自から勞を任じ、自己を制するが爲に己を強ひんとするも、肉體の非常に燃ゆるが爲に爲し能はざるべし、何となれば其慾望を以て靈魂を捕ふるにより起る所の刺激と肉痒とは強く且遍ればなり。此等の無法なる者の幾微を此により察するかと。彼は又言へり、肉體の快樂の温柔なると潤膩なるとを以て青年の慾は靈魂の受くる所となり、死は靈魂を圍みて人は神の審判に落つ。

之に反して己が本分の記憶に占有せらるゝ靈魂は己の自由に安んず、されば其懸念は大ならずして、道德のことを慮り慾を制し德行を守りて、悔ゆる所あらざるべく、成長するに隨ひ哀なき喜を誘引し、善なる生命を安然なる淺に引入れん。しかれども肉體の快樂は慾を熾にして、之を心中に回復するのみならず、靈魂をも根こそげ捩取るゝ共に不節制無秩序の爲に腹を燒きて甚しき奢侈に至らしめ、肉體の要求を時ならず充たしめん。此に勝たるゝ者は少しの飢をも忍耐して己を制するを欲せず、何となれば彼は慾の俘虜たればなり。

是れぞ嗜甘の恥づべき結果なる。之と相反して前文に著はす如く忍耐し一所に止りて默想を務むるの結果は靈魂に大なる益を與へん。故に敵も我等が天性を充さんを欲する天然の要求を熾ならしめ、惡なる思の想るを知りて、即此の如きの時に我等をして天然の要求を燒ならしめ、惡なる思の想像を我等に撒き、能くするならば慾をして猛烈なる戰に於て天性に勝たしむるに盡力す、而して人は罪中に溺る。故に敵の時を知る如く我等も自己の劣弱と自己の性の力とを知らんこと肝要にして、我等の力は彼の時に於て突擊と運動とに抗する爲に足るあらずして、意思の微細なることは我等の眼中に輕くして毛の如し、ゆゑに此等を察し我等と遭遇するものに抵抗する能はざるべし、されを不幸にして

我等は屢々陷り我等の敵の試みを多く實驗したる故に、終に智慧附けられて、我が安息の望を輕なしく遂ぐるを自から許さず、而して飢渴に勝を讓らざるのみならず、飢餓の我等を疲らし且苦しむるある也其默想の地より移らず、我等の爲に便利の處に轉せずして、野より離るゝ爲に口實と方法とを自から設くることを爲さゞらん。げだし是れ敵の顯然たる謀計なり。しかれども野に居るならば、誘惑にかゝらざるべし、何となれば婦人をも又汝の品行の爲に如何なる有害なるものをも見ず

して、不適當なる聲を聞かざるによる。

「爾は何爲れぞエギペトの途に在りてグオンの水を飮みしや」（イエレミヤ二の十八）

といふ、予が汝に告る所のものを理會せよ、小なるものに於て自己の忍耐と自己の棘達とを敵にあらはすべし、大なるものを汝より捜さゞらん爲なり、此の小なるものは汝の爲に其敵を斥くる所以を指示して、彼に時を有せしめざるべく、汝の爲に太なる係蹄を穿たしめざるべし、げだし敵に聽從して己が默想の地位より五歩だも退くをゆるさゞる者は、聽從して野より離れ、或は里に近づくべきか、己が默想の庵にありて窓より一見するさへ肯んせざる者は、庵より出づるを肯すべきか、曉來最少量に食を吃するを僅に肯ずる者を時に先だちて食ふ念慮は捉へ得べきか、何等の低廉なるものにも飽くを恥づる者は、高價なる食物を願ふべきか、己の容貌を見廻すことさへ肯せざるものは他の美形を見るの好奇心に捉へらるべきか、此に因りて見れば或者は最初小なるものを輕んじて之が爲に打勝たれ、かくの如くして敵に大なるものを以て攻撃するの端緒を與ふること明なり、此世の生命を暫時たりとも長うせんと、此事の爲に懸念するをなさゞる者は、願ふ所の死に誘引する殘害と苦難とを恐るべきか、是れ思慮ある戰なり、何となれば賢者は大なる苦行を企つるを自から許さずして、其小なるものに於てあらはす忍耐は彼等を大なる勞苦に陷るより保護すればなり、

是故に魔鬼は心中不斷の新禱を廢せしめんが爲に最初より盡力し、其後定められたる時間に身體を以て行ふ新禱と規則とをも輕んずるを勸むるなり、かくの如くして最初に意思は或る小量の食物と瑣細にして言ふにも足らざる食物とを時に先だちて食ふの弱きに從ふ、されど陷りて其節制を破るに及んでは人は過度を放埒に滑り入らん、先づ人は己より衣服を脫するとき、或は身體の要求の爲に出づるあり、又は水邊に來るあるときは、其體の露出を見んとし、或は其肢體の他の美を見んと欲する望の爲に勝たれて（雖言すればこは其眼中に瑣々たるものと見ゆ）其

感覺を鈍らし、或は敢て手を其衣裡に入れて其體を撫るを始むべくして、之に次で其餘のことは最早彼此相接して起らん而して是より先に心の堡砦を保護して、前文に言ひし如く、或る一事の爲に憂ひし者は、其時己の爲に廣くして危き入口を開かん、何となれば思念は水の如し、各方面より堰止めらるゝ間は善き秩序を守れども、少しく其堡砦より外に出る時は、其防備の破壞と大なる荒廢とを生ぜんげだし敵は日夜我等の目前に立ち、我等が感覺の開けたる口により入らんとして、之に注目し、之を期待し、且之を熟視すればなり。ゆゑに我等は前文に言ひしものゝ中或る一事に於て懈怠を自ら許すときは、狡猾にして無恥なる此犬は我等に其矢を放たんか而して或時には天性は自から安佚と放縱と戲笑と思の高超と怠慢とを愛するを始めて、慾の泉となり、擾亂の淵となれどもるゝなり、しかれども我等は終に吾が無視する所の小なる勞苦を以て大なる勞苦に換へんげだし此の我等が輕視する勞苦は、既に示したる如く、多大の苦行と、遂げ易からざる勞苦と、最烈しき格鬪と、重き打擊とを預め遠ざくるならば、此の先んずる小なる勞苦により甘美なる安息を己れに求むるに誰か急がざらんや。

噫聰慧よ、汝は如何に嘆美すべき哉、如何にしてすべてを遠く先見するか、汝を得たる者は福なり。彼は青年の怠慢より救はれん。もし誰か其所有の瑣細なる物を以て大なる慾の療法を購求むるならば、彼は爲し得て善し。昔一哲學者あり、弱きによりて體を左右に搖動しけるが、此を覺るや、直ちに己を直なる態度に復して坐しぬ。人あり一見して大に之を笑へり、然るに彼は答ていへり、予は此を恐れしにあらず、乃怠慢を恐る、何となれば小なる怠慢は大なる危險を引起すこと度々なればなり。然れども予は秩序を破りしを速に改めたるが爲に此を以て予の覺醒と恐る可きにあらざるものをも輕んぜざることを示せり」と。視よ、哲學は人が何を爲すとも、たとひ微にして重要ならざる事に於ても、常に謹愼する者となるにあり。人が己の爲に大なる安息を預備して寢ねざるは、或る反對なるものを迎へざらんが爲にして、好時に之が源因を絕たば、瑣細なる事により小なる哀を忍耐し、之を以て大なる哀を滅すなり。

然れども無思慮なる者は此世の國の床上に安んじ、怠慢の爲に罰せられんよりは苦行の苦みを忍耐するの愈れるを知らずして、遠き國よりも近く小なる安息を貴ぶ。死は智者の望む所なり、たゞ願ふ覺醒せずして或る行を成せし爲に責を受けざらんことを。故に智者は言ふ、己の生命の爲に眠らずして惺々なるべし、何となれば

心意の眼は眞死と同性質にして、死の象なればなりと。抱神者ヲシリイ言へり自己に關係する或る小事に卓越すといふを信するなかれ。

事が汝に生命を與ふるに關係するならば煩悶するなかれ、此事の爲に死するを迎へんとするなかれ、何となれば怯懦は煩悶の表徴にして、怠慢は彼と此との母となればなり。膿病なる人は二の病に苦むを自から報告す、此世を愛するは不信の表徴なり、然して此世を愛するは、不信の表徴なり、然れども之を輕んずる者は全靈を以て神を信ずるなり。

未來を待つことを自から證明するは頑心により生ず、即或は頑心により生じ、誰か危難と苦行と誘惑となしに神に近づきし者あらば汝も彼に效ふべし、心の剛毅と危難を輕んずるとは左の二の源因の一により生ず。頑心には驕傲を伴ひ、信念には心の謙遜を伴ふ、人は先づ己の量に臨ひ神の旨を行はずんば、神に依賴するを得る能はざるべし、げだし神に依賴すること心の勇氣とは良心の證明より生じて、ただ我が智の眞實なる證明により我等は神に希望を有するなり、然れども智の證明は人が力に準じて爲さいるべからざる所の事に怠るを良心の少しも咎めざるにあり、もし我が必は我を罪せずんば神の前に毅然たるべし（イオアン一書三の二十一）ゆゑに勇毅は道德と善なる良心に進歩の結果にして、苦しき行爲は肉體に屈從する是なり、神に依賴するを多少己れに感ずる者は、此の殘忍の主人たる肉體に餘儀なく役事するを最早肯せざるべし、我等が神に光榮は世々に歸す（アミン）

第七十六　說教

沈默と默想の事

不斷の沈默と默想を守ることは左の三の源因により人に生ず、或は人間の名譽の爲或は道德に銳意熱心するが爲に生じ、或は人が或る神聖なる交通を己の內部に有して之に心を引かるゝにより生ずるなり、故にもし何人にか此の後なる源因の一あるなくんば、彼は先なる劣弱を病む者なること必せり、道德は身體上に行はるゝ種々樣々なる行の顯現には非ずして、其希望に於る最賢明なる心にあり、何となれば正しき目的は彼を神に依るの行に結び付くればなり、智は身體上の行なくして

も善を成すを得べし、しかれども身體は心の聰慧なくんば何を爲すとも之より益を引出す能はず、さりながら神の人は善なる行を成すが爲に便宜を發見するときは、其爲す所の勞を以て神に愛を證せざるに堪ふるあたはざるべし。第一は常に進

步す第二は頻に進歩すれども、時としては然らず。しかれども人が慾を起すの源因より常に遠ざかるを以て頂事と思ふなかれ。我等が神に光榮は世々に歸す。「アミン」

第七十七　說教

肉體上の感動。

時に合はざる好色の強き念慮あるなくして肢體の下部に生ずる感動の燃ゆるが如く起り、心ならずして靈魂を不幸に引誘するは、腹を飽かしめたるの結果なること疑なし。しかれども腹は食の節制を守るも、肢體は如何なる狀態にてか心ならず感動するならば、知るべし身體其ものに慾の泉のあることを。されば此戰に於て己の爲に強固にして勝たれざる武器となすべきは、婦人の顏を視るより遠ざかるにあり、何となれば自然が自己の力を以て爲し得る所の者に反對者は逆こと能はざればなり。げだし子を生むが爲又此苦行を務むる者を試みん爲に神が天然に下種し給ひしものを自然は忘却するとも思ふなかれ。しかれども欲する所の望が目的物より遠ざかるは、肢體に於て慾念を殺ぎ、之を忘れしめて、之を滅さん。或る思念は最遠き目的に關してたゞ意中にのみ生じ、輕微にして僅に覺ゆる感動を起さん。しかれども或る思念は目的を視るに必意を埋めしめ、之を自から忘れしめずして、切に慾念を煽動し、之を以て人を養ふこと、たとへば油が燈の燃ゆるを養ふ如く、既に死して消えたる慾念を燃起すべくして、肉體の海は思想の船を動搖攪亂するなり。子を生むが爲に我等に固有する天然の感動は、外より附加するものなくんば、任意の淨潔を亂して、貞潔を動搖せしむる能はざるべし。何となれば神に向ふ善良なる任意に勝つべき力を神は天性に與へざればなり。然れども誰か或は刺激の爲或は肉慾の爲に煽動せらるゝならば、其時彼をして天性の境を脫して自己の本分を超えしむるものは、天性自然の力にはあらずして、意思の引誘により、我等が天性に附加する所のものなり。神は何を造るも、すべて秀美に且適當に造り給ひき。されば天然に適合する定限を我等に於て正しく守る間は、天然の感動は我等をして強て路を離れしむることは能はず。反つて肉體に一の整然たる感動起り、我等に天然の慾あるを知らしむるのみにて、貞潔を妨ぐべき羞恥と援劍とを生せしめざるべく、又刺激の爲に心意を暗まさゝるべく、平安なる狀態より恐るべき狀態に引誘せざるべし。しかれども時として感じ易き慾に誘はるゝあり。之が爲に刺激も往々天然に悖る方向を取る、或は食に耽り、或は飮を貪りて定量の外に超ゆるあり、或

は婦人に接近し、又は觀望し、或は女談に耽り、之が爲に體中に慾火の燃えて速に蔓延するあらば、此時は或は體中に液汁の多きに因り、或は種々なる物を覩るに因り、その天然の温良を變じて猛烈とならしめん。

然れども時として我等が自負の爲に神意により肢體に感動を起すことあり、而して此感動は最早以前の如きものにはあらざるなり。げだし此戰は自由なる戰さ名づけらるべくして、人性一般の行路は、此戰に於て顯然とあらはるゝなり。されど我等が自負の爲に放任に因り生ずる此戰の事につきては、知るべし、こは我等が久しく己れに注意して勞苦するのみならず、多少己を進歩せりとさべ思ふとき、我等に謙遜を學ばしめんが爲に此戰を爲すを許さるゝをされや此源因あるなく、我等の力に應せずして起る所の他の戰は、これ我等の怠慢により生ずるなり。げだし天性は美食の爲に感じ易き嗜慾は加へて或る物を自己に受るときは、其造成の時に定められたる秩序を守るを最早肯せざるなり。患難と庵中に止まりて出でざるさを隨意に拒みし者は卵を變し始むるを餘儀なくせらるゝなり。げだし患難なくんば怠念の誘惑と訣別する能はざるべし。勞苦の加はる程は罪は少なくならん。何さなれば、患難と危懼とは肉慾を殺せども安息は之を養ひ且長せしむればなり。

終に我等は窮乏にあるときは、神と其使等は悦べども、安息にあるときは、魔鬼と其役事者の悦ぶことを予は明白に確知せり。神の誡命は患難と困迫の中に成就せらるべきものなるに、我等は之を賤んずるならば、これ最早我等は神の命令に反き、我等が安佚によりて生ずる慾念の爲に誡命を輕んずるを謀るものにして、道徳の因たる困迫と患難とを無爲ならしめ、我等自己に受る所の安息の量に循ひ慾に所を與ふるなり。何となれば壓迫せらるゝ體に於ては意思は徒らに高超する能はざればなり。誰か勞苦と患難とを悦んで己れに任ふときは、思念を力めて抑制すちを得べし。何となれば此等の思念は勞苦の爲に休息せしめらるゝによる。人が以前の罪を記憶して己を罰するときは、神も彼を安んせしめんを嵐り、神の路を離れたるが爲己れに罰を加へて悔改の號と爲すを神は悦び給ふべくして、人が靈魂を强ふる程は、其尊敬は特に神を以て增加せらるゝなり。然れどもすべて道徳に源因せざるの喜は之を受けたる者に肉慾の感動を直ちに煽揚す。さりながら我等が此を言ふは、其意すべての慾望に關するものにして、天然の希望に關するには非るなり。我等が神に光榮は世々にあるべし。アミン。

第七十八　說教

誘惑の各種類、及び眞理の爲に起る誘惑を忍耐するは幾許愉快にして、善智なる人は如何なる階級により昇進するか。

道德の彼此相承るは道德の路の難く苦しきものとならざらんが爲なり、序に循ひ之に進歩して此事に於て自己の爲に輕減を見るを得んが爲なり、而してかくの如く善の爲に忍耐する困難が或る善なるものゝ如く慕はしきものとならん爲なり。けだし誘惑を悦んで忍耐するの自信なくして、己を之に備へずんば、何人も眞實の無慾を得る能はざるべし。又己を患難をうくるに備へたるにより身體上の安息に超ゆるものを受るを得べしと信じたる者の外は、何人も誘惑を忍耐する能はざるべし。故にすべて己を無慾に備へたる者は、先づ患難を愛するの心を喚起せらるべくして、其後此世にあるものを求めざらんとの思を生せん。而してすべて患難を忍耐するに着手する者は、先づ信仰を以て堅められて、其後患難に就かん。物體に屬するものを己れより奪ひ去れども、官能の勢力即視ると聽ぐとを自から除かざる者は、己の爲に二倍の患難を備へて、二倍に苦み且悲まん。之を確言すれば嗜慾に屬する物を己れより奪ひ取れをも、感情は此等を樂まば、何の益あらん。けだし此等の物によりて起さるゝ感應により人は以前事を行ふ時に容忍せしものを同く容忍せん。何となれば之に慣習したることの記憶は其意中より去らざればなり。然れども其物なくして、其物を思ふ心の想像は、人に痛苦の感を起すならば、もし其物が我等の側にありて、我等に接近するならば、之を何とか言はん。終に遁世的生活は太だ美はし、何となれば大に協力して思念を太く抑壓し、遁世的生活に止まるを以て我等に力を入れ、人に及ぶ避く可らざる患難を大に忍耐するを教ふればなり。

生活の狀態の汝と同じからざる人は、たとひ極めて智なりとも彼より教訓を借らんと求むるなかれ、實地に試みずして自己の推究に依り判斷する該博なる哲學者よりも、無學なれど實驗を以て事を試みたる人に己の思想を信任すべし。實驗とは何ぞや。實驗を得るとは人が或る事物に接近せず、之に關する知識を己れに受けずして、時々之を熟視するのみなれども、之と久しく交るにより、其益と其害とを實驗上明に覺知するをいふ。げだし物は外見上有害なるが如く見ゆれども、內部には全

く益を滿てるを認めらるゝこと往々之あり。之と反對なる者のことも之と同く了解すべし、即物は有益なる如く見ゆれども、內部に害を滿てること稀なりとせず故に見たる所は有益なる其物より損害を受る者多く之ありて、知識の證明は眞實にあらざるなり。故に如何なる判斷を要するを忍耐して熟思するを能くする勸敎者を益用すべし。此によりて見るに信用すべきの價値あるものは、すべての敎訓を與ふる者にあるには非ずして、たゞ先づ自から己の自由を善く管理して非難と讒言とを恐れざる者にあるなり。

途上に於て躓ずべからざるの平安を見る時は、恐れよ、何となれば諸聖人が艱難の足を以て蹈破れる直道を遠く離るればなり。けだし汝が未だ帝都に達せずして途上にあるに當り、汝の神都に近づく表徵となるべきものは左の如し、大なる强き誘惑は汝を迎へ、いよ〳〵近づきいよ〳〵進めば汝に臨む誘惑は殊に加はらん故に其途に於て最大最强なる誘惑を己の心に感ずるならば、知るべし此時汝の靈魂は實に高上なる新なる階段に窃に入り、其立つ所の地位に於て恩寵の增加したるを、何となれば恩寵の大なるに準じ之と同樣の尺度を以て神は靈魂を誘惑の悲みに引入るゝによる、而し其引入らるゝ誘惑は惡習と顯然たる行爲とを止むる爲に或者等が遭遇する如くなる世俗的誘惑にはあらざるなり。之と同く誘惑を以て有形的擾亂なりと解するなかれ、是乃ち修道士の爲に其默想に適當する所の誘惑にして、此事は後に至りて詳述せん。而して靈魂は薄弱にして大なる誘惑に堪ふる充分の力ある無く、隨て其誘惑に入らざらんことを願ひ、神も之を聽許するならば確に知るべし、靈魂が大なる誘惑の爲に充分の力を有せざる程は大なる賜の爲にも不充分にして、大なる誘惑に近寄るを禁せらるゝこと如く大なる賜をも禁せらるゝことを、何となれば神は大なる賜を與へざればなり。神に造られし者等の理會すべからざる神の容智に依るに、賜は誘惑に準じて神を以て定めらるゝなり。終に神の照管を以て汝に遣はさるゝ甚しき誘惑に依り汝の靈魂は神の威德より如何なる尊敬を受くるかを理會せんがけだし慰安も悲哀に準ずべければ

問　然らば何ぞや先づ誘惑ありて其後賜あるか、或は先づ賜ありて其後最早誘惑は來るか。

答　もし靈魂は己の尺度よりも大なるものと看て受けたる恩寵の神とを先づ窃にうけずんば、誘惑は來らざるべし。此事は主の自から受け給ひし試みも、同く亦使

徒等のうけたる試みも之を證するなり、彼等は撫恤者をうけざる間は試に入るを許されざりき。幸福を受くる者には誘惑をも忍ぶこと適當なり、何となれば彼の患難は幸福の後にあればなり。衆人と此の如く爲し給ふは善なる神の旨なり。而して此事は實に是の如く恩寵は誘惑の先にありと雖も、然れども自由の實驗の爲に誘惑を感ずるは必ず恩寵を感ずるに先だつ。げだし恩寵は何人にも決して誘惑の實驗に先だゝざるなり、恩寵は智力に於ては先慮すれども感情に於ては遲延す。而して此等の誘惑の時に於て毫も相同じからざる二の正反對なる感情を有する、即喜と恐れとを有するは己に我等に適當なり喜を有するは、げだし諸聖人の啓かれたる路により、確言すればあらゆる者を復活せしむる者の啓かれたる路により行く者と認めらるゝによる、こは誘惑を考査するにより明白なるべし然して我等恐れを有せざるべからざるは、驕傲の爲に誘惑を受るを免れん爲なり。さりながら謙遜なる者は恩寵を以て智慧附られて此のすべてを區別し、且確知するを得べし、即如何なる誘惑は驕傲の結果なると、如何なる誘惑は愛を蒙る者を鞭撻するが爲なるとを區別するを得べし。善良なる行爲に入りし時と、其行爲が成長したる時の誘惑は心の驕傲に向つて之を瞭解せしむる爲に放たるゝ誘惑とは同じからざるなり。

第七十九　說教

驕傲の事。

驕傲なる神の敵の試惑。

其思を以て神の仁慈の前に高ぶり、傲然として神の仁慈を辱かしむる無恥の人々

謙遜の德ある神の友の誘惑。

靈魂を以て靈魂を發達成長せしめんが爲に起る所の誘惑あり、靈魂は之を以て教訓せられ、試驗せられて、苦行に引入れられんが爲なり。其誘惑は左の如し、怠慢なり、身體の難澁なり、四肢の衰弱なり、煩悶なり、思想の擾亂なり、身體の衝弱より起る孤疑なり、身體の靈魂と、死せるが如き心と、謙遜とを得べくして、人の造成者を渴想し始むると否とは之を以て確知せらるゝなり。照管者は誘惑を以て受る者の力又は其必要に平均せしむ。愚安と打擊と、光と暗と、戰と助と、之を畧言すれば狹きと廣きとは我等に渾然として融合するなり。而して是は人が神の助により進歩する記號となるべし。

に對し、神意によりて起る誘惑は、左の顯然たる魔鬼の誘惑にして、心靈の力に超絶するなり、即人々の有する智慧の力を奪はるゝと、其慢心を抑へん爲に放たるゝ放蕩なる思を內部に感じて、安心を與へざると、速に怒ると、すべてに我意を張りて諍論し、非難せんを欲すると、心に衆人を輕んずると、才智の全く迷ふと、神の名に對する愚にして笑ふに堪へたる非謗之を確言すれば涕泣に値する非謗と、其思想は人々之を輕んじて、其尊敬を無視し、陰にも陽にも種々の方法を以て之に恥を蒙らしめて魔鬼より侮辱せらるゝと、終に世と交際往來して、顧えず嘿々し、荒唐放言し、常に己の爲に新奇を尋ね、且は僞預言をさへ搜し、己の力に過ぐる大なるものを約せんとすること是なり、視よ心靈上の誘惑は此の如し。

身體上の誘惑に屬するものは下の如し、即纏綿として久きに亙り、人の易く治すべからざる病の發作と、惡者及び無法者と始終相會することと是なり、或は凌辱者の手に陷り、其心は彼に且常に故なくして神を畏るゝにより搖動すると、岩石高處又は之に類する處より墜落して、身體の爲に恐るべき挫折を屢々受ると、終に神聖なる力と信の望みとを以て心を助くるものに乏しきを感ずると是なり、之を咎言すればすべて能はざるものと力に超ゆるものとは彼等自己と其近者とを追ふなり、我等

があらはしたる此のすべては驕傲の誘惑の數に屬す。

此等の誘惑の始めて人に現はるゝは、其眼中に己を賢なりと思ひ始むる時なるべくして、かくの如き驕傲の意思を己に有するに準じて人は此等の悉くの不幸を經過せん、終に其誘惑の性質により汝の心意の幾微の路を歸結すべし、もし其誘惑の或ものは先に述べたる誘惑と混ずるを見るならば、知るべし汝が此等を有する程は驕傲は汝に深く徹底するを。

又誘惑につきて歸結すべき他の方法をも聽くべし、すべて困迫なる事情と凡そその患難とは、もし其際に忍耐せずんば、二倍の苦みとならん、何となれば忍耐は人に於て不幸を反拒すれども、怯懦は苦の母なればなり、忍耐は慰安の母にして、心の廣きにより常に生せらるゝ或る力なり、人は祈禱して退かざると涙を注ぐとにより得らるべき神聖なる賜なくんば、其患難に於てかくの如きの力を見んこと難し。

人を更に大なる患難に服せしむるは神の意なるときは人の怯懦の手に落つるを許し給ふ、怯懦は人を屈服せしむる煩悶の力を生み、之により人は心靈の壓潰せらるゝを感せん、是れ地獄を試みるなり、此により憤心は人を襲ふて、百千の誘惑は之より流れ出でん、擾亂、忿怒、詬濱、運命を怨ふると、思の轉變して定まらざると、一方よ

り他方に移ること等是なり。もし汝は此のすべての源因は何なりやと問はゞ余は答へん、汝の怠慢なりと。汝は自がら之が爲に療方を尋ぬるを盛らざりき。此のすべての爲に療方は一なり、たゞ此療方の助により人は其心に慰藉を速に見ん。こは如何なる療方なるか。心の譴遜是なり。譴遜なくんば何人も此等の惡の障碍を破る能はずして、不幸の彼に勝を制するを直に發見せん。

怒るなかれ、子は汝に眞實を言ふ。汝は心を盡して譴遜を尋ねざりき。もし欲するならば譴遜の範圍に入るべし、さらば譴遜は汝を其弊病より脫せしむるを見ん。譴遜に準じて汝は其不幸に於て忍耐を與へらるべく、忍耐に準じて、汝の患難の重きは輕くせられて、慰藉をうくべく、然して汝の慰藉に準じて、神に對する汝の愛は增々大ならん。義を愛する我等の父は其眞實なる子の爲に誘惑を取上げずして、誘惑に於るの忍耐を彼等に與へ給ふ。されば彼等は其忍耐の手を以て此の悉くの幸福を受けて其靈を全うせん。願くはハリストス神は其恩寵により我等心の感謝を以て彼を愛するにより、惡を忍耐せしめ給はんことを。アミン。

第八十　說教

德行の種類の說明、及び彼等は各々如何なる價値ど如何なる特質を有するか。

身的德行は默想により身體を物體的なるより淨むれども、心の德行は靈魂を譴遜にし、之を粗き有害なる思より淨めて、慾の爲に占有せらるゝを免れしむるのみならず、特に直覺に專ならしむるなり。此直覺は靈魂を殆ど才智を睜ぐに近づかしむべくして、之を非物的直覺とは名づくるなり。是れ即靈的德行にして、思を地に屬するものより昇せて、之を第一の靈的直覺に近づかしめ、其思をも又其言ふべからざる光榮の直覺をも神の前に立て、是れ即神の性の大なることを思ふ想像の興起なり。智を此世と此世の感觸より離すなり。之により我等は彼の許與せられたる望に堅く立ちて、之を遂ぐべきを保證せられん、是れ使徒の謂ゆる勸誘ガラティヤ五の八）即保證にして我等に許約せられたる希望により心は想像を以て歡喜に導かるゝなり。

神に依る身的生涯とは身體上の行爲なり、身體上の行爲と名づけらるゝものは道德上の實踐を以て肉體を淨むるが爲に顯然たる動作によりて行はれ、之を以て人は肉體上の不潔より淨められるゝなり。心的生涯とは審判の事或は神の裁と神の定制の事を念々思慮すると共に撓まず續行する心の作用にして、之と同く連綿として斷えざる心の祈禱と、個々に於ても一般に於ても全世界の中に窺はるゝ神の照管と其處の事を思ひ、神秘なる靈的範圍に慾に屬するものを一も起らざらしめんが爲に隱なる慾より己を保護することなり。是れ皆心の行爲にしてこれを名づけて心的生涯とはいふなり。靈的實踐と名づけらるべき生涯の肢行爲により心は益々精微になりて、天然に反する空しき生活と親むより遠ざかる、然れども其後時として喚起せられて肉體の需要と成長の爲に造られたる五感に屬する物を回想看視するを始むべくして、其物の助により體中の四元素に力を與へらるゝ所以を了解せん。

靈的生涯とは五感の與からざる實踐なり。此事は神父等あらはせり。諸聖人の智は此生涯を己れに受るや、物體親〔Unio mystica〕と肉身の肥大なるとは直ちに中間より衰去られて最早聰明なる智的觀望始まるべく〔物體觀とは元始天然の受造物を指す〕人は此の物體親より容易に高く擧げられて寂然たる生涯の認識に到り達せん、これ明に說明する如く神に感嘆するなり。是れ未來の幸福を樂むときの高上なる性狀にして、不死なる生命の自由と復活の後の生命に與へらるゝなり。何となれば人性は受造物に對する何等の念頭をも全く有せず、彼處に常に神に感嘆して已まざればなり。けだし何か神と同じき物のあらば智は或時は神を以て其物に引寄せらるべく、或時は其物自から之を引寄せんさりながら受造物の如何なる美も其未來の革新に於ても、神の美よりは遠く降るならば、如何ぞ智は其看望に於て神の美より遠ざかるを得ん。然らば何物なるか、心を慫ましむるものは死するの免れざることなるが、或は肉體の重きか、或は親族の記憶、或は天然の要求、或は艱難、或は障碍、或は知れざる心意の高慢、或は人性の不完全、或は元行の園繞、或は相互の面會、或は煩悶、或は人を疲らす身體の勞苦なるか全く然らず、此すべてのものは世に之あるに拘はらず、慾の覆を心の眼より脫して、未來の榮を達觀する時は、思は直ちに高く昇せられて、狂喜大悅せん。神は此生命に於て如此の性狀に界限を置て、幾ばくか此に躊躇せしむるを爲さゝるのみならず、舉生の間人に此事を許與せられしならば、人は此世に於ても之を看望するより遠ざかる能はざるべし、矧んや前文に計算

したるものゝ絕て有る無き處に於てをや。けだし此の道德は界限を有せずして、生涯の爲に之を賜はるならば、我等も眞實實際に王門の內部に入らん。

此によるに如何して智は此の奇異神妙なる直覺を避け且之に遠ざかりて、或る他物の爲に阻止せらるべけんや。禍なる哉、我等は自己の靈魂を知らず、如何なる生涯に召さるゝをも知らずして却て此の薄弱なる生命と、此の生存の狀態と、世の患難と、世其ものと、世の惡弊と、其安樂とを何か價値あるものゝ如く思ふ。

然れども ハリストス、獨一全能なる者よ、力は汝にあり、心の路を汝に向くる人は福なり」聖詠八十三の六。汝主よ、我等の面を世に背けて汝を慕はしめ給へ。然らば我等は世の如何なるを知り、影を實體の如く信ずることの息むに至らん。主よ、死に先だちて、我等の心に勉勵を更に起して之を新にし給へ、我等が出發の時、我等此世に入り且出づるの如何なるを知らん爲なり。然らば我等は最初汝の旨に依り生命に召されたる其事を遂行すべく、次で聖書に約する如く汝の愛を以て第二の造成に備へ給ひし大なる幸福を受けんとの願に滿たさるゝ希望を感受するに至るべくして、我等は機密を信するにより、此記憶を守らん。

第八十一　說教

肉體と靈魂と智との淨潔。

肉體の淨潔は肉體上の汚穢に犯されざる是なり。靈魂の淨潔は心中に起る隱なる慾念より自由を得る是なり。然して智の淨潔は奧義の啓示により成就せらるべし。けだし智はすべて粗大にして五感に屬するものより深めらるゝなり。小兒は身體に於ては無罪にして、靈魂に於ても無慾なれども、誰も彼を名づけて智に於ても淨潔なるものとは言はず。けだし智の淨潔は天を觀望するの行動其ものに於けるの完全にして、彼の天上界の高上なる整飾と無數なる奇蹟の靈妙なる力により五感の關係を待たず喚起せらるべく、而して此樂みは彼等の見えざる勤めにより、智力を以て想像し得らるゝ幾微神妙なる啓示の不斷何れの時にも變化するものを以て彼此の爲に分與せらるゝなり。我等が神は自から我等に寵はれざる智力を以て神を直視するを賜ふべくして、其後直に之を洞看するを世々に賜はらん。彼に光榮は歸す。アミン」。

第八十一　說教

第八十二　說教

靈的智慧に充たさるゝ有益なる主眼。

信仰は機密の門なり。身體の目は五官に屬する物を見る如く、信仰は精神の目を以て神秘なるものを熟視す。神父等言ふ如く我等に心靈の目の二あるは身體の目の二ある如し、然れども視覺の要求は心靈の目各々同じからず。一の目を以ては天地萬物に隱るゝ神の榮の奥秘を視る、即神の力と容智と又我等を統治するの大なる目を以て我等を靈界の機密に引入れて我等の心中に信仰の海を開拓するときは、により理會せらるべき神の照管の我等に關するものを視るべくして、之と同く其至聖なる神の性の光榮を直覺せん。

第八十三　說教

悔改の事。

恩寵に恩寵を加ふる如く人に洗禮の後悔改を與へらる、何となれば悔改は神により生るゝ第二の更生なればなり。而して我等は信仰により聽質を受け、悔改により其賜物を受くるなり。悔改は熱心を以て尋ぬる者の爲に開かれたる憐の門にして、我等は此門により神の憐みに入るべく、此入口の外には憐を看出さゝるなり、神聖なる使徒の言ふ如し、曰く「人皆罪を獲、義とせらるゝは彼の恩寵に賴る」〔ロマ三の二十三、二十四〕悔改は第二の恩寵にして信と畏れとにより心に生ずべく、而して畏れは靈界幸福の樂園に達するに至る迄は我等を統御する父の杖なり、然れども既に達するときは彼は我等を棄て去らん。

樂園は神の愛にしてすべて幸福の承る糧により養はれにる處にして、生命の樹の果を彼處に味ふや、彼は呼んで左の如く言へり、曰く「神が己を愛する者の爲に備へしものは目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心に未だ入らざるものなり」と〔コリンフ前二の九〕此樹の果は魔鬼の陰謀の故にアダムに禁せられたり。生命の樹は神の愛にして、アダムは之より離れたり、ゆゑに其時より彼は最早喜を見ずして、荊棘の地に勞動辛苦せり。神の愛を奪はれたる者はたとひ正道を行くといへども、原人の陷りし後食ふを命せられたる汗の餅を自己の勞により食はん。愛を受るに至る迄は我等が爲す所は荊棘の地に於てすべ

くして、我等の種くは義を種くと雖、我等は荊棘の中に種き且之を刈りて、時々之が爲に傷つけらるゝ迄、己を義とするが爲に何を爲すありとも、面に汗して生活せん。然れども愛を得る時は、天の餅に養はれて、勞動辛苦なしに力を堅められん。天の餅は天より降りて「世に生命を與ふる」〔イオアン六の三十三〕ハリストスなり。是れ即天使的食物なり。

愛を得たる者は毎日毎時ハリストスを食ひ、之によりて不死なる者とならん、けだし言へり、「此の餅を食ふ者は世々に生きん、我が與へんとする餅は云々」〔イオアン六の五十一〕イイスなる愛の餅を食ふ者は福なり。しかして愛を食ふ者はあらゆる者の上に存在するハルストス神を食ふ所以なるをイオアンは證明して「神は愛なり」といへり。終に愛に生活する者は神により生命の果を產すべくして、猶此世に於て、茲に感ずる所のものにより彼の復活の空氣を嗅がん。此空氣を以て義人等は復活の後に樂まん。愛は即國なり、主は之を使徒等と奧密に約し、其國に於て之を食はんことをいへり。げだし言へり「我が國に於てわが席に飲食せん爲なり」〔ルカ二十二の三十〕と、是れ愛を示すにあらずして何ぞや。愛は食と飲とに代りて人を養ふが爲に充分なり。是れ人の心を樂ましむるの酒なり。〔聖詠百三の十五〕此酒を飲む者は福なる哉。不節制者は之を飲みて慚愧し、罪人は飲みて碍路を忘れ、大酒者は飲みて禁酒者となり、富者は飲みて貧者たらんを願ひ、貧者は飲みて希望に富み、病者は飲みて强健になり、無智者は飲みて聰明になれり。

大船と小舸となくんば大海を渡る能はず、此の如く、畏れ無んば何人も愛に達する能はざるなり。我等と心の樂園との間なる臭海は畏の舵師ある悔改の小舸に乘りてのみ渡るを得ん。しかれども此の畏の舵師等は此世の海を越えて神に移るべき悔改の大船を御せずんば、此の臭海に溺れん。悔改は大船なり、畏は其舵師にして、愛は即神聖なる湊なり。是故に畏は我等を悔改の大船に引入れ生命の臭海を渡りて、愛なる神聖の湊にみちびくなり。凡て勞苦して悔改を任ふ者は此湊に到着せん。而して愛に達する時は我等は神に達すべく、我等が旅行は終を告げて、父と子と聖神のましますに至らん。彼處の世界の島に至らん。彼に光榮と權柄は歸す、願くは我等をも其畏を以て彼の光榮と愛とに當るものとなさんことを。アミン。

第八十四　說教

知識の尺度と信仰の尺度は如何程大なるか。

信仰に先だつ知識と信仰を以て生せらるゝ知識とあり。信仰に先だつ知識は天然の知識にして、信仰を以て生せらるゝものは靈的知識なり。善を惡より別つ天然の知識あり、名づけて天良是非の心といふ、これにより學問を待たずして善と惡とを天然に識別するなり。此の是非の心を神は靈智ある天性に賦與し、學問の助により て彼は成長と增加を受くるなり之を有せざらん人はあらず。是れ聰明なる靈魂に賦與せられし天然認識の力にして、靈中に不斷活動し、善と惡とを識別するなり。此力を奪はれたる者は靈智ある天性より下くなれども、之を有する者に於ては靈性は緊要なる狀態にあり、ゆゑに彼等は靈智ある人間の尊敬の爲に神を以て天性に與へられしものを一も害はれざるなり。善を惡より別つ此の認識の力を失ひし者を豫言者は責めて言へり、曰く「人は貴きに在りて知らず」(聖詠四十八の十三)靈智ある天性の貴きは善を惡より識別する分別心にありて、之を失ひし者を豫言者が靈智と理性とを有せざる無智の動物に比するは當然なり。此の分別心を以て我等は神の路を看破するを得べし。是れ天然の知識なり、彼は信仰に先だち神に至るの路程なり、之を以て我等は認識を求め得て善を惡より分別し、信仰を受けん而して人が此の萬物を造りし者を信せざるべからざる所以と其誡命の言を信じて之を實行せざるべからざる所以とは、天性の力も之を證明して、之を信ずるにより神を畏るゝの心は生ずべく、信仰が行爲を伴ひて漸々に活動し來る時は靈的知識を生ずるの如くなれば靈的知識は單に一片の裸體的信念より生ずるには非ずして、却て信念が神を畏るゝ心を生みて、神を畏るゝ心と共に活動し始むるときは、此の畏の作用により靈的知識の生ずることは、聖金口イオアンの言ひし如し、曰く「誰か神を畏るゝ心と思想の正しき狀態に相副ふの意志を受る時は、彼は神秘なるものゝ啓示を直に受けん」と。彼は靈的知識を名づけて神秘なるものゝ啓示とはい

へり。

しかれども神を畏るゝ心が此の靈的知識を生むにはあらず。げだし天性に賦與せられざるものは生ずることも能はざればなり。反つて此知識は神を畏るゝ心の作用に恩賜として與へらるゝなり。神を畏るゝ心の作用を注意推究する時は、其作用は即悔改なるを發見すべくして、此よりして靈的知識は生ずるなり。これ我等先にも述べし如く、此聰質を我等は洗禮に於て受れども、其賜物は悔改によりて受けんといへるもの是なり。悔改によも受けんと我等が言ひし此賜物は是即靈的知識にして、此賜物は畏の靈能により與へらるゝなり。靈的知識は神秘なるものを感ずるなり。若し誰か此の見えずして大に超絶する所のものを感ずる時は、其感は之により靈的知識の名をうくべくして、此の感知により最初の信仰に反對せずして却て其信仰を堅むる他の信仰は生ずるなり。之を名づけて直覺的信念といふ。此時に至る迄は聽覺なりしも、今は直覺なり、而して直覺は聽覺よりは更に確實なり。是れ皆善なるものと惡なるものとを識別する天然の知識より生るゝものにして、此知識は道德の良善なる種子たることは我等既に言へり。然れども此の天然の知識を自己の放蕩なる望みを以て暗ます時は、此のすべての幸福は奪はれんそ

れ此の天然の知識と與に之に隨て人に生ずるものは、良心の不斷の刺戟と、死の間斷なき記憶と、世を去るに至る迄續く或る苦しき配慮とにして、其後生ずるものは悲哀なり、煩悶なり、神を畏るゝ心なり、天然の羞恥なり、既往の罪の爲に哀むなり、緊要なる注意なり、一般の行路を忘れざる記憶なり、己を此に支度することの配慮なり、あらゆる人性の通過せざるべからざる此門に安んじて入らんことを涙を以て神に願ふなり、世を輕んずると、德行の爲に烈しく奮闘することなり。これ皆天然の知識を以て求め獲らるゝなり。故にすべての人は其行を之と對照すべし。げだし人が之を獲たるを認めらるゝ時は、是即人は天然の路に由りて行くを示すなり。然れども之を超越して愛に入る時は、天性より上に立ち、奮闘、畏懼、困難及び疲勞はすべて人の爲に終を告ぐるなり。親よ是れ天然の知識の結局にして、自己の放蕩なる望みを以て此知識を暗まさゞる時は、此を自己に發見すべくして、我等を此のすべてのものより免れしむる愛に達するに至る迄は、此階段に止まらん。すべての人は此の我等が逃る所のものに據り、之と對照して己を試むべく其進行は何れにあるか、天然に反對するものにあるか或は天然に超越するものにあるかを試むべし。此の進行の方針によりすべての人は其一生を如何に統治

せらるゝを明白迅速に看出すを得ん。されど我等が定めたる如く、人は謂ゆる天然と適合するものに於て顯れず、又天然に超越するものに於てもあらはれざる時は、彼は天然と反對なるものに衝落されしものなること明なり。我等が神に光榮は世々にアミン」

第八十五　說教

謙遜にして聽く者に愛を以て告ぐる有益なる教訓。

神の恩寵によらずんば善意は心中に降り來らざるべし。誘惑と實驗との爲にあらずんば惡念は靈魂に近づかざらん。自己の劣弱の程度を識るに達したる人は謙遜の完全に達せん。不斷の感謝の爲に惹起さるゝ心は人に神の賜を誘引せん。常に心中に惹起さるゝ不平なる思は靈魂に誘惑を被らしめん。主は人間のすべての劣弱を忍耐すれども、常に不平を懷く人をば寛容せず。敎訓なくして置かざるなり。如何なる知識の照明にも遮ざかる靈魂はかくの如き不平なる思に沈まん。常に感謝する口は神より祝福を受くべくして、心が感謝に止まるならば恩寵は之に降らん。謙遜は恩寵に先だてども、自負は罰に先だつ。驕傲なる者には謗瀆に陷るを許され、勉

勉なる德行を以て自から高ぶる者には迷謬に陷るを許さる。然して自己の賢明に誇る者には暗黑なる無智の網に陷るを許さるゝなり。

神を忘れざる記憶に全く遠ざかる人は、近者に對する惡しき記憶の爲に擾さるゝ思を心中に懷かん。神を記憶する時にすべての人を尊敬する者は、奧密に神の指麾に依りすべての人の助を己れに得ん。侮辱せられし者を保護する者は神を己の保護者と爲さん。手を近者を助くるに伸ばす者は自己を助くるに神の僕を受けん。兄弟の瑕瑾を訴ふる者は、神を己の原告者と爲す。兄弟を密室に匡正する者は自己の瑕瑾を愈さん。之に反して人を集會の前に訴ふる者は、己の疵の痛苦を大にす。兄弟を窃に療する者は、自己の愛の力を顯然なるものと爲す。之に反して彼を其友の目前に辱しむる者は、自から猜忌の力をあらはす。窃に證責する友は賢明なる醫なり。之に反して衆の目前に療する者は實に罵詈者なり。同情の徵候はすべての負を赦すにあり、之に反して思の惡しき狀態の徵候は陷りし者と抗論する是なり。康健者たらしめんとの目的を以て敎誨を爲す者は愛を以て敎誨す。之に反して報復せんと欲する者には愛あらず。神は愛を以て敎誨すれども、報復せず。然り、之あらざるなり反つて其像を愈すが爲に監守し、怒を藏して時を待たざるべし。愛の此方法は公

正の結果にして、報復の情に傾かざるなり。義なる賢哲は神に匹似す。けだし人を罰するは全く罪の爲に報復するには非ずして、或は其人の改悛せんが爲、或は他の人々の恐れんが爲なり、此の如くならざる罰は敎誨にあらざるなり。報酬の爲に善を爲す者は速に變ずるも、其思は高ぶらずして、德行より離れざらん。神に應分の報を爲すが爲に己の智を磨く者は、靈を以ても體を以ても謙遜の深きに降らん、けだし人は認識に近づく以前には其行狀は或は上り或は下る、しかれども認識に近づくならば、全く高處に擧げられん、されども高めらるゝに至る迄は、其認識の上昇は完全に達せずして、彼の光榮の世の來らざる間は、人は其充分の富をうけざるなり。けだし人は神の前に成全なるほどは神の跡に追隨すべくして、眞實の世に於て神は其顏を彼にあらはさん、されども其如何なるを示すには非ず。けだし義人は神を見るに入る迄は鏡を以て像を見る如し、されど彼處に於ては現實の顯はるゝを見ん。枯れたる薪に燃着たる火は辛うじて消し得ん。もし世を棄てたる者の心に神の溫媛の顯はれ降るあらば、其燃着は消えずして、溫熱は火より烈しからん。酒の力の肢體に入るあらば、心はすべてに嚴肅を忘れん。神を忘れざる記憶も靈中に牧地を占むるときは、すべて有形なるものに於ける記憶を滅す。靈的聰慧を獲たる智は艤裝せし船に海中に値ふ人と同じ、之に乘るときは、此世の海を出帆して、來世の島に到らん。此世に於て來世を感ずるは海中に小島を見付ると同じ、彼に近づく者は最早此世の現象の波間に勞苦を爲さゝるなり。

商賈は仕拂を終るときは、急ぎて己の家に歸らん。修道士も其勤勉の時の猶殘る間は、此身と別るゝを哀めども、時を購ひ得て、聰質を受けたるを心に感ずる時は、來世を慕ふ、商賈は海中にある間は、其肢體戰慄す、恐らくは波浪起りて其營業の望を水底に沈めんと。修道士も世に居る間は、生涯恐を抱く、恐くは暴風起りて少より老に至る迄辛苦したる己の事業を亡さん。商賈は堅き陸地に注目し、修道士は死期に注目す。

航海者は海中を駛行するときは星を望み、湊に達するに至る迄は星に依りて船の方向を定む。修道士も祈禱に注目す、何となれば祈禱は彼自己を矯正して、其進行を彼の湊に向はしめ、其生涯は旬時の祈禱により左右せらるればなり。航海者は船を繫ぐべき島嶼を發見し、彼處に路用を辨じて、其後他の島嶼に向ふ。修道士の進行も此生命に居る間は此の如し。修道士は島嶼より島嶼（即認識より認識）に移り、此の島

嶮(即認識)の轉換によりて大に進歩し、海より出でゝ其進行を彼の眞の都に達せしめん、けだし彼の都の住者は復た貿易を營まずして、各々己の富に安んずるなり。此の空しき世に居り、此の大海の中にありて、其貿易を亂調に至らしめざる者は福なり。其船の破壞せず、喜んで湊に達する者は福なり。

泅者は眞珠を發見するに至る迄は、衣を脫して、海底に沈む。賢なる修道士も眞珠なるイイススハリストスを自己に發見するに至る迄は、すべてを脫して、生命を送る。而して彼を發見するときは、最早彼と共に世に存する何物をも求めざるなり。眞珠は庫中に貯へらる、修道士の樂も默想に於て守らるゝなり。童貞に有害なるものは民の集會に於て種々の人々と共にするにあり、修道士の心に有害なるものは衆人と談話するにあり。鳥は何處にありても己の巢に向ひ、彼處に於て雛を孵化す。思慮ある修道士も己の居處に急ぎ、自から生命の果を造らん。蛇は全身を擊摧がるゝも其頭を守る。賢なる修道士も生命の原始なる己の信仰を何れの時にも保護す。雲は太陽を蔽ひ言の多きは祈禱的直覺を以て輝き始めたる靈魂を暗ます。博學者の言に依るに「エロデイ」と名づくる鳥あり居る所の地より遠ざかり曠野に達して、彼處に住むときは、欣々として喜ぶといふ。かくの如く修道士の靈魂も、人々より遠ざかり幽靜の地に來り居る時は、天の歡喜を己れに感じ、彼處にありて己が出發の時を待たん。傳に言ふ「シレーナ」と名づくる鳥あり、凡そ其好音を聞く者は心を奪はれざるなく、彼を追ふて野に徘徊しつゝ、其鳴く聲の愉快なるが爲に己の生命をも忘れ倒れて死せんとするに至る。是れ靈魂に起る所のものを形容するを得べし。靈魂が天上の愉快を感ずるときは、感覺を以て心に傳へらるゝ神の言の好音により、靈魂は全く此愉快を追ひ、突進して身體の生命を忘るゝに至るゆゑに身體は其欲望を奪はれ、靈魂は此生命より擧げられて、神に到らん。

樹は先づ酋葉を脫せずんば、新葉を生ぜざらん。修道士も從前の行の記憶を其心中より投出さずんば、ハリストスイイススに於る新しき果と葉とを產せざらん。

風は樹上又は田中の果實を肥さん、神の爲の配慮は心中の果實を肥す。眞珠の生ずる貝中には、人々言ふ如く、電氣を以て火花の如きもの生出し、空氣によりて貝は此物質を己れに受く、然れども其時に至る迄は尋常の肉にて存す。修道士の心も、通曉力を以て天の物質を己れに受るに至る迄は、尋常にして、其貝中に慰藉の果を結ばざるなり。

鼻孔を舐る犬は、己の血を飮めども、其血の甘きにより、其害を感せず。虛誇を嫻飮す

るを好む修道士も、自己の生命を飲みて、時々感ずる甘味に因り其害を自覺せず。世の名譽は水に覆はれたる海中の暗礁なり、船底を之に觸れて水を滿さるゝに至る迄は、航海者の爲に知られず。虐謔も人を溺らし亡すに至る迄は亦之に同じ。神父等は此事を言へり。靈魂の曾て避け且脫したる慾念は虛誇を好む靈魂に復歸すと。小なる雲は太陽の周圍を蔽へども雲の過ぎし後太陽は特に煌々と輝かん。小なる憂愁も靈魂を暗ませども、其後大なる喜は成らん。

神聖なる書中にある所の奥妙なる言には、祈禱と神の助を願ふことなくして就くなかれ。乃ち言ふべし、主よ、彼に含有する力を受るを我に得しめ給へと。祈禱は神聖なる書中に遡べられし眞正なる旨趣に於る關鍵と思ふべし。心を以て神に近づかんと欲する時は、先づ身體の勞苦を以て彼に愛をあらはすべし。生涯の始は此勞苦に托せらるゝなり。げだし靈用の缺乏と、食の或る種類に己を慣らすとを以て心は神に多く接近せん、かくの如く此接近は身體の行爲の後に生ずるなり。ゆゑに主も之を以て完全の基礎となし給へり。閑散は心の昏迷の始めと思ふべし。談話の爲に會合するは、昏迷に昏迷を重ぬるなり。前者は後者の爲に緣由たり。有益なる談話も度なきときは昏迷を生ずるならば、況して無益の談話に於てをや。靈魂は神を畏るゝを以て保護せらるゝに拘はらず、續く談話の多きにより卑うせらるゝなり。終に心の昏迷は行爲に順序なきより生ず。

行爲に於るの節度と或る規則は智を照して擾亂に入らしめざるべし。されど順序なきより生ずる智の擾亂は心中に昏迷を生じて昏迷により擾亂は再び生出せられん。平和は善き順序の結果なり、平和により心中に光は生じて光と平和により清き空氣は智に照り始めん。心が世に遠ざかりて靈智に近づく程は、神より喜を受けて、靈智と俗智との差異を其靈中に感せん。何となれば靈智により靈魂を占領するものは沈默にして、俗智により占領するものは思の高超の泉なればなり。されば第一の智慧を得たるにより、汝は其すべての思想を主宰する大なる誠遜と温良と平和とに滿たさるゝなり。此時より汝の肢體にも擾亂と騷暴は熄みて、沈默の至るあらん。然れども第二の智慧を得ること共に其念慮に驕傲を受け、得もいはれざる奇怪なる思想と、智の擾亂と、感情の無恥と、高慢とを受けん。肉體上の事に束縛せらるゝ人は、祈禱に於て神の前に勇氣を有せんと思ふなかれ。貧客なる靈魂は容智を奪はるれども憐憫なる靈魂は精神を以て智慧附けらるゝなり。

油は燈の光る爲に必要なる如く、矜恤も心中に知識を養ふ。心に神聖なる賜を受く

る爲の關鍵は近者を愛するを以て與へらるべくして、之と同く心を身體の鍵鑰より脫する程は其前に知識の門は開かるゝなり。靈魂の世より世に移るは通曉力を受けしなり。近者を愛するは、もし其慮を以て我等を神を愛するより引離さずんば、如何に美にして且賞讃すべきや、我等が靈的兄弟と談話するは、もし其時に神と會話するを守らるゝならば、如何に愉快なるや。終に之が平稱を保たるゝ間は、此事を慮るも可なり。即神秘なる練習と行爲と神と不斷會話することを此行爲により失はざるを得る間は、之を慮る可なり。前者を確守するは後者の妨とならん。智は二の談話を爲す爲には不充分なり。世の人々と面會するは神に屬する事の爲に之を避けたる者の心に亂れを生せん。靈的兄弟と不斷談話するさへ害あるならば、況して世の人々をばたゝ遠くより觀望するのみなるも害あらん。五感が或物と接するは身體の働の爲には妨とならず。しかれども神秘なる練習に於て喜びを穫ること、思の鎭靜により果實を穫る如くせんと欲する者には、現象無くして一の音響のみなるも心の平安を援さん。內部に於て死者の如くならんことは、五感を不動作ならしめずんば、能はざるべし。身體の生活は五感の覺醒を要すれども、靈魂の生活は心の覺醒を要す。

靈魂は天然に身體より愈さる如く、靈魂の働も身體の働に愈れり。元始身體の造成は之に生命を噓入るゝに先だちし如く、身體の働も心靈の働に先だつ。易はらずして續く高尙ならざる生涯は大なる力なり。易はらずして常に落ちる弱き點滴は頑石を穿つ。

靈的なる人の汝に復活する時の近づく時は、一切の爲に死者の如くなることは汝に起るべくして、受造物とは比す可らざる汝の靈魂に喜は燃え、汝の思念は汝の心中の愉快を以て汝の內部に閉されん。之に反して世が汝に復活するときは、思の高超、陋劣不定なる念慮は汝に加はらん。世とは心の高超を生ずる慾を謂ふ。慾が生じて成熟に遂する時は、罪となりて人を殺さん。母なくして子の生れざる如く、思の高超なくして慾は生せず、慾と對話するなくんば罪の成るあらざるなり。

我等が心に忍耐の成長するあらば、是れ我等は慰藉の恩寵を密にうけたる徵候なり。忍耐の力は心を管領する喜ばしき意思より強し。神に於る生活は五感の衰なり。心が活くる時は五感は衰ふ。五感の復興は心の死滅なり。ゆゑに五感の復興するあらば、是れ心が神の爲に死したる徵候なり。良心は人々の間に行はるゝ德行よりは正しきを受けず。

誰か他の人々の爲に行ふ所の德行は靈魂を淨むる能はざるべし、何となれば事は神の前に報酬視せらるればなり。然れども人が自己に行ふ德行は完全なる德行に算へらるべくして、彼をも此をも達せん。即報酬視せらるべく、又淨潔をも生せん。故に前者に遠ざかりて後者に從ふべし。後者を慮らずして前者を存するは、神より明に離るゝなり。しかれども後者はたとひ前者あらざるも自から前者を補はん。安息と閑散とは靈魂の爲に滅亡にして、之を害すること魔鬼より大なり。身體の弱なるを强ひて其力に超ゆる事を爲さしめんとする時は、汝の靈魂は昏迷に昏迷を加へて、之に大なる亂れを入れん。之と相反して、身體の强壯なるを安息と閑散とに委するならば、此の身體の中に居る靈魂に凡その弊病は成らん、されば若し誰か善を强く願望するも善に對して有する意思を速に奪はれん。靈魂が希望の喜びと神に關する樂みに醉はしめらるゝ時は、身體はたとひ薄弱なりとも哀みを感せざるべし。げだし二倍の重きを負ふて力に乏しからざるのみならず、併て自から樂むべくして、たとひ薄弱なりとも心靈の樂みに助けん。靈魂が彼の精神の喜びに入るときはかくの如し。

もし己の舌を守らば兄弟よ、汝に心の感動の思念を神より與へらるべく、之により汝は己の靈魂を悟りて精神上の喜に入らん。されど汝の舌が汝に克つならば、汝に言ふ所のものと對照せよ。汝は如何しても昏迷より救はるゝ能はざるなり。心が汝に淨からずば、口なりとも淨からしめよと願なるイオアンは言へり。

人を善に向はしめんと欲する時は、先づ肉身上彼を安んせしめ、愛の言を以て彼を尊敬すべし。げだし汝によりて見んとする肉身上の幸福と尊敬との如く人を恥に傾かしめ其弊病を乘てゝ善良に向はしむるものはあらざるなり。誰か神の爲に苦行に入る程は其心は祈禱に於て勇氣を得ん。されど人が多くの事に引かるゝ程は、神の助を失はん。肉身上の缺乏を憂ふるなかき去ればなり。死を恐るゝなかれ、何となれば死は之を汝より全く除にすべて偏へたればなり。

彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン」。

第八十六　說教

心が靈界に進歩する爲、神の照管に依り我等に喚起せらるゝ天使的行動。

神の仁慈に依り人に入りて靈魂を生命にみちびく第一の意思は此の人性の出發に關して心中に落る意思なり。此思想に從ひ自然に世を輕んずべくして、人を生命にみちびく種々樣々なる善き行動は之により始まらん。人に伴ふ神聖なる力の人に生命を顯さんと欲するときは、此を人に置くこと、恰も或る基礎の如くなるべし。ゆゑに人は我が述べたる此意思を浮世の關係又は空論を以て之を己れに消滅せずして靜默を以て之を成長せしめ直覺を以て之を守りて、之が爲に占領せらるゝならば、此の意思は人をみちびきて何人も言にて形容する能はざる深き直覺に至らしめんサタナが此思想を嫉視し、全力を擧げて攻擊するは、之を人に滅さん爲なり。ゆゑにもし能するならば、全世界の國をも人に與へて、たゞ人を此の如きの思想より引離し之を其の心に消滅せしめんとす。予が言ふ如く、もし能するならば、彼は好んで此事を爲すならん。げだし此思想が人に存するときは、人の智は最早此の誘惑の地に立たずして、サタナの人に對する奸計は之に近づく能はざること彼れ狡猾者の知る所なればなり。しかれども知るべし是は其想起を以て我等に死の記憶を喚起する最初の思想を言ふには非ずして、事の充滿につきていふ即死の離れざる記憶を人に入れて人が之を思念するにより、不斷慙嘆の狀態に立てらるゝものにつきて言ふなり。第一の思想は或る肉體上に屬するものなれども、此後者は靈神上の直覺と奇異なる恩寵なり。此直覺は清明なる意思を衣る。ゆゑに之を有する者は此世の事の穿鑿には更に立入らずして己が肉體の爲に繫がれざるなり。

至愛者よ、此の眞實なる直覺を少時の間に神は人々に賜ふならば、こは此世に於て相傳授受すべきに非ること全く當然なり。此直覺は天然が抗し得ざる鏈鎖となるべくして、此の冥想を其心に受る者は各自個々の練習に比すれば更に最有力なる神の恩寵を以て受くるなり。而して此恩寵は中等の階段にありて心の正しきによりて悔改を願ふ者に與へらるゝなり、即此世より遠ざかりて最善なる生命に移るに眞實適當するを神に知らるゝ者に神の善なる旨によりて與へらるゝものなり。然して此恩寵は彼等が遁世寂寞の室に於て彼等に成長し且止まらん。我等は祈禱

に於て之を願ひ、之が爲に長き儆醒を成して、涙を以て主に祈禱せん、何物にも比する能はざる此恩寵を我等に與へ給はん爲なり、さらば此世の辛苦の中にありて復た弱わることあらざらん、これぞ人に於て義の充滿を行ふ生命の始めなる。

第八十七　說教

人に於ける第二の行爲。

此後人が善良なる生活を善く經過して、悔改の階段に昇る時は、他の行爲を生ずべくして、靈的認識の愉快を嘗むる恩寵を上より受くるときは、直覺と其行爲を味ふに近づかん。此行爲の始は左の如し、即人に於る神の照管を人は先づ信認すべく、造成者に對する愛を以て照さるゝと共に靈物の整然たると靈物に於る神の大なる慮とに驚嘆する是なり。此よりして神聖なる愉快は人に起り神に對する愛の焰は心中に燃えて、靈と形との慾念を燒盡さん。あらゆる受造物の性とすべて人が遭遇する所の對象とを聰明に熟考し、之を研究して、精神を以て判斷するならば、人は直に此力を己れに感知せん。ゆゑに人は其時始めてかくの如き有力神聖なる勉勵と善なる良心とにより、神聖なる愛を喚起せられて、俄に其愛に酩酊すること、酒に酩酊する如くなるべく、其肢體は弱わり、其思は駭愕の中に在りて、其心は神に捉へ去られん、かくの如くなれば予が述べし如く人は酒に酩酊したる者の如くなるべし。而して內部の感情の強まるに隨ひ、其直覺も強まるべくして、人は善なる行爲と己を守ると、讀經及び祈禱に時を送ることに盡力する程は其力は人にます〳〵固くなりて確められるゝなり。ゆゑに兄弟よ、時として人は此體を負ふことをも自から記憶せずして、此世にあるや否をも知らざるに至らんことは全く當然なり。

是れぞ人に於ける靈的直覺の始めなる、是れぞ智力の爲にすべての默示の始めなる。此により智は成長して神秘なるものに固められるべく、之を以て人の天性に超越する他の天啓に昇せられん、之を略言すればすべて聖人が此世に於て受る所の神聖なる直覺と、靈的默示と、すべて人性が此生命に於て僅に知るを得る賜と默示とは、彼の天啓の手を以て人に傳へらるゝなり。これぞ我等が造成者を以て入れ給ひし我等の感應の根基なる。此の善良なる種子の人の靈中に落ちるや、守りて之を長せしめ、一時なるものを想ふ妄想と、思の高超とにより、之を自から濫費せざる者は福なり。我等が神に光榮は世々に歸す「アミン」。

第八十八　說教

光と暗との更迭は何れの時にも靈中に起る事、及び
靈魂は右にも左にも傾く事。

至愛者よ、我等は祈禱の時、己の靈魂を省み、聖詠を誦するに當りて我等に專心なる祈禱的直覺ありや否やに注意せん。此直覺は眞實なる默想の結果なれば、昏迷の中に在る時も、我等に特別の理由あるにあらずんば援されざるべし。これ神の照管に歸すべきものにして、獨り神にのみ知らるゝ源因により行はるゝなり。けだし我等が靈魂は他時には非常に疲れ苦むことも、宛ら波浪の中に在る如く、聖書を讀み或は奉事を行ひ、如何なる事に如何樣に着手するをも人は知らずして、昏々迷々の中に在ることあらん。かくの如き者は事を廢棄して、彼に近づくことをも許さゞることを度々之ありて、こは一時の變化なることをも、人が平安に居ることをも、全く信せざることあるべし。此の時は失望と畏懼とに滿たされ神に依賴すると神を信ずるの穩藉とは心より全く拋擲せられて靈魂は疑圍と畏懼の念に全く滿たさるゝなり。此時是の波浪の中に在て試惑を大に忍耐したる者は、此事の終りに如何なる變化の生ずるを實驗によりて知らん。さりながら神は靈魂をかくの如き狀態に盡日棄て置かざるべし。何となれば「ハリステアニン」たる望を失ふべければなり。反て速に逃るべき法を備へん（コリンフ前十の十三）。ゆゑにもし此昏迷の擾々たる狀態が更に續くときは、其生命の變化を待つべし。

然れども人よ、予は汝に注意して勸諭を與へん、もし汝は己を制して祈禱に其の面を俯伏する力を有せざらんときは、汝の爲に此昏迷の時の過ぐるに至る迄、外套を首に被りて臥すべし。慮中より出ることなかれ。智力上の生活を送らんを特に願ふて其進行により信仰の慰安を尋ぬる者等は大なる試惑に遇はん。故に此時彼等を大に苦め且疲らすに心の動搖を以てし、次で謗瀆の念は屢々起るべく、時としては復活に於るの疑と他の我等言ふべきにもあらざることの人に生ずるあらん。これ皆我等實驗を以て屢々確知せしもの、ゆゑに衆人を慰めんが爲に此の奮鬪を記しぬ。

肉身上の事に從事する者は、此等の試惑より全く免れん。彼等にもすべての人に知らるゝ他の煩悶の生ずることあれど、其狀態は此等の試惑と異なるあり。此等の試

惑に苦む者の健康と其療方とは默想より流れ出でん。是ぞ彼の爲に慰安なる。然れども他の交際に於ては決して慰安の光を受けざるべく、人々の集會を以ては愈されざるべくして、一時は安んせしめらるゝも、其後此煩悶は更に大なる勢力を以て人に起らん。ゆゑに彼の爲に緊要なるは、此事に實驗を有する敎化者にして、彼はすべて必要の場合には敎へ且固めん、然れども常に敎ふるには非ず。戸外に出でずして此を忍耐する者は福なり。げだし神父等の言ふ如く此事の後彼は大なる住所と勢力とに達すればなり。さりながら此奮鬪は一時に終るに非ず、又速に終るにもあらずして、恩寵もすべて假に來りて心中に居るにはあらず、漸を以てするなり。而して彼此互に交代し、時として試誘あれども、時としては慰藉あるべくして、人はかくの如き狀態を以て存在して、其出發の時に至らん。しかれども全く之に遠ざかりて全く己を慰めんことは此世に於ては望むことも能はざるべし。げだし我等の生命の此世にかくの如く立てられて路を進行する者が之を忍耐するは神の自から喜ぶ所なればなり。神に光榮は世々に、「アミン」。

第八十九　說敎

神聖なる熱心の假面に覆はるゝ無智なる熱心の有害なる事、温良及び其の他の德性より生ずる助けの事。

嫉妬深き人は決して心の平安を得ずして、平安に遠ざかる者は喜にも遠ざかる。心の平安は完全なる康健と名づけらるれど、嫉妬は平安と反對するならば、惡なる嫉妬心を有つ者は最早重き病に苦むを示すなり。人よ、汝は一見したる所は他の病に對して自己の熱心を顯はす如くなるも實に己の靈魂の康健を奪へり。故に己が鑒魂の健康を慮るの愈れるに如かず。もし弱き者を愈さんと欲せば、知るべし病者は謗責よりも深切に必要を有することを。しかれども汝は未だ他に助を爲さゝるとも同時に自分を重く苦しき病に投ず。嫉妬は人々認めて賢明の一種とは爲さずして心靈の病の一と爲す。是即意思の有樣の狹隘なると大なる無知なり。神聖なる容智の始めは謙遜と温柔とにして、こは大なる靈魂に屬し、人々の弱きを己れに擔はん。

けだし言ふあり、汝等強き者は弱き者の弱き者を容れて、（ロマ十五の一）溫柔の心を以て規すべし、（ガラティヤ六の一）顯然たる肉身上の二十二顯然たる肉身上の行爲に於る薄弱と無力との爲に哀みに滿たさるゝ心は此の肉體上の行爲をすべて自から補はん。心意の哀まざる肉體上の行爲は精神の入らざる身體と同じ。心は憂ふれども官能に自由を與ふる者は恰も身體は苦めども其口はすべて有害なる食物の爲に開く病者に類す。心は憂ふれども官能に自由を與ふる者は、恰も獨生の子ありて、之を自分の手にて漸々に堕る人に類す。心意の哀みは貴重なる神の賜物なり。之を適當に忍耐する者は恰も其肢體に聖なるものを滿たさるゝ人に似たり。舌に自由を與へて人々の是非を言ふ者は此恩寵を受るに當らざるなり。悔改と併せて人々と繁く交通するは、堤れたる樽に同じ。仁俠なる施與と共に其人の頬を批つは蜜に混せし劒と同じ。貞潔と併せて婦人と交際するは一家に獅子と羊と居るに同じ。神の前に憐のなき行は父の面前に其子を屠る人と同じ。心は薄弱にして他に路を教ふる人に似たり。

一心に慈悲と公義とあるは、一家に神を拜する人と偶像に拜する人と居るに同じ。

慈悲は公義と反對す。公義は精確なる尺度を一樣平均にす、何となれば各人に其受くべきものを與へて、報酬する時は一方に傾き或は偏頗あるを許さゞるなり。之と相反して慈悲は恩惠の爲に喚起せらるゝ哀みなり、されば衆人に同情を以て向ひ、惡しき待遇を受くべき者に惡を報いずして、善き報酬を受くべき者をば滿たして餘あらしむるなり。ゆゑに彼には公正の部分ありて、此には不正なる惡の分子あり。一家に枯草と火とあるを容さゞる如く、一心に公義と慈悲とあるを容さず。砂粒は金の大塊と平稱を有たざる如く神の公義の要求は神の慈悲に比して平稱を保たざるなり。

すべての肉體の罪に陷りしを神の憐憫とに比すれば大海に投せられたる一掬の砂粒と同じ。渾々として湧出る泉は一掬の塵にて塞がれざる如く、造成者の慈悲も受造者の惡弊にて妨げられざるなり。怨を抱きて祈禱するは海中に種きて刈るを待つと同じきを示す。火の光明を妨げて上昇せざらしむることは能はざる如く、慈悲者の祈禱の天に上るを妨ぐるものはあらざるなり。水は傾斜の地に流るゝ如く、忿怒の勢力も我等が心意に近づくときは此の如し。心に讒謏を得たる者は世の爲に死せし者なり、而して世の爲に死者の如くなれる者は慾の爲に死者

の如くならん。近者の爲に心に於て死者の如くなれる者の爲に惡魔は死せん。これに反して嫉妬を求め得たる者は之と共に惡魔を斃さん。

神を畏るゝに由る謙遜あり、又神を愛するより起る謙遜あり。一は神を畏るゝによりて謙遜になり、他は喜によりて謙遜になるなり。神を畏るゝにより謙遜なる者に伴ふは何れの時にもすべての肢體の謙卑なると感覺の正しきと碎けたる心とにして、喜により謙遜なる者に伴ふは大なる正直と成長して禦ぐ能はざる心なり。

愛は恥を知らず、故に肢體に醜貌を加ふるを解せず。恥ぢずして己が尺度を忘るゝは愛の自然なり。吁大なる喜の湊よ、汝を得たる者は福なる哉。謙遜なる者の集會は神に愛せらるゝことセラフィムの會の如し。貞潔なる身體は神の前に貴重なることを貴ぶべし。何となれば彼は多くの害を止むればなり。腹を護るべし。然れとも親愛なり。

恭敬を以て其友に就くべし、かくの如く擧動するときは自己にも其友にも益を產す。何となれば靈魂は愛に托して謹愼の樽を自から振落すこと屢々之あればなり。會合を豫防せよ、何となれば彼は何れの時も有益なるに非ざればなり。集會に沈默を以て其者は汝の爲に餘人にはあらざらん、何となれば柔弱に耽る習慣を汝に敎ふればなり。放蕩なる生活を送る者を欣々として迎ふるなかれ、たゞ彼を憎まざらんやうに自から用心せよ、もし起たんを欲するならば、彼に手を與へよ。而して彼を得んことを死に至る迄心掛くべし。されど汝は未た無力ならば彼を治療するを避けよ、だし言ふあり、彼に汝の杖の端を與へよ云々。高慢にして嫉妬に苦む者には戒愼して言ふべし、もし何か言ふあらば彼は直に汝の言に己が心に欲する如きの解釋を

を讓ると同うするなかれ、何となれば家裡の戰は外部の戰より輕ければなり。兄弟よ、身體を善良なる正しき狀態にみちびかずしても內部の念慮を止むるを得べしと信ずるなかれ。敵よりも習慣を恐れよ。習慣を自己に養ふ者は火に食を給する人と同じ、何となれば彼と此とに於る程度は養ふの多少にあればなり。もし習慣は何の衣服をか要求して其要求を遂げざるときは、他日其習慣の弱るを見ん。之に反して一たび其所望を遂ぐるならば第二次に於ては其習慣の特に大なる勢力を以て汝を攻擊するを見ん。

すべてに關し此事を記憶して忘るゝなかれ、何となれば預防の助は實際の助より重ければなり。誰か戲笑を好み人々に展示せんが爲に自から差出るを好むならば、其者は汝の爲に餘人にはあらざらん、何となれば柔弱に耽る習慣を汝に敎ふればなり。放蕩なる生活を送る者を欣々として迎ふるなかれ、たゞ彼を憎まざらんやうに自から用心せよ、もし起たんを欲するならば、彼に手を與へよ。而して彼を得んことを死に至る迄心掛くべし。されど汝は未た無力ならば彼を治療するを避けよ、だし言ふあり、彼に汝の杖の端を與へよ云々。高慢にして嫉妬に苦む者には戒愼して言ふべし、もし何か言ふあらば彼は直に汝の言に己が心に欲する如きの解釋を

與へ、汝にある所の善なるものに於て他を蹈かしむべきものを捜し、汝の言は彼の意中に變じて彼の病の爲に食とならん。誰か汝の前に於て其友を議し始むるとき は面を俯せよ。かくの如く爲すときは神の前にも彼の前にも謹愼なる者と認めら れん。

困窮する者に物を與ふるときは、汝の顏色の喜ばしきは汝の與ふるに先だつべく 好言を以て彼の憂を慰むべし。此の如く爲す時は、汝の深切は彼の心に汝のかくの 如き賜與より貴かるべく、其肉體の要求より止にあらん。己の口を開き何人にか逆 つて言ふあらんとする日には、たとひ其意思は汝をして明に當然なる建德の事を 述べしむるとも、神の爲に己を死せる者と思ふべく、其すべての行爲に於て無益な る者と思ふべし。けだし人は何の必要あり自己の家を毀ちて其友の家を修繕せん や。

或る病に苦む者の爲、及び身體或は心中に苦痛する善者或は惡者の爲に哀む日に は、己を致命者と思ふべく、己を視ること ハリストスの爲に苦難を受くる者の如く すべく、表信者となるを賜はりし者の如くすべし。けだし ハリストスの死せしは罪 人の爲にして、義人の爲に非ざるを記せよ。視よ、惡なる人々の爲に哀み、義人よりも

罪人に特に善を作すは、如何に大なる行なるか。使徒は此事を想起して、嘆美すべき 行と爲す（ロマ五の六、八）。もし己の靈魂を自から義とするを得ば、他の稀義を尋ぬる を慮るなかれ、汝に於て身體の清潔と良心の潔白とは汝のすべての行に先だつべ し。けだし之なくんばすべての行は神の前に無益なり。すべての行はもし沈思と推 究となくして爲さば、たとひ適當なりとも、無益と知るべし、何となれば神の義を歸 するは思慮あるが爲にして、無思慮なる行動の爲にあらざればなり。

小なる義人は太陽の前の燈なり。惡を懷く者の祈禱は石上に種くなり。無慈悲なる 苦行者は無結果の樹なり。嫉妬によりて責むるは毒箭なり。狡猾者の讃美は蹉れた る網なり。恐なる勸諭者は盲目の番兵なり。考少き者と共に居るは心の惱みなり。善 智者と共に話するは甘き泉なり。賢明なる勸諭者は希望の城なり。粗くして考少き 友は害の藏所なり。恐者に從ふ智者を見んよりは、哀む婦人と共に居る者を見るは 愈れり。惡しき品行の人と同居せんよりは、野獸と共に居るは愈れり。貧客にして傲 く無き人と共に居らんよりは、猛鳥と共に居らん。好爭者たらんよりは、殺人者の友 となれ。嗜甘者と共に交らんよりは、豚と共に交れ。何となれば豚の槽は貪食者の口 より愈ればなり。驕傲なる者と共に居らんよりは、癩者と共に居れ。汝を逐ふも汝は

逐ふなかれ、汝を十字架に釘するも汝は釘するなかれ、汝を誚するも汝は誚するなかれ、惡に熱心なるなかれ。

訴訟するは「パリスティアニン」の生活の行にあらず、パリストスの教には此事の暗示だもわらず樂む者と共に樂み哀む者と共に哀むべし。けだし是れ清潔の徵なり。病者と共に悲み、罪人と共に涙を流し、悔ゆる者と共に喜べよ。衆人と共に親むべし、然れども自己の思は獨り居るべし。すべての人の苦難に關係を有つべし、然れども自己の身は衆人に遠ざかるべし。誰をも責むるなかれ、其品行の極めて惡しき者たりとも誹るなかれ。陷る者には己の衣を擴げて彼を掩ふべし。もし彼の罪を己れに取り、彼に代りて罰と恥とを自己に負ふ能はずんば、少なくも寬忍せよ。彼を辱しむるなかれ。兄弟よ、我等庵の戸を出でざるを要するは人間の惡事を知らざらんが爲なるを知るべし。其時は自己の心の知らざるにより衆人を見て聖なる者及び善なる者と爲さん。されどもし或は責め、或は諭し、或は批判し、或は詮議し、或は罰し、或は罵るならば、我等が生活は何を以て城中の生活と異ならん。もし此を棄てずんば、野に居るより惡しき者ありや。もし心にて沈默せずんば、少なくも舌にて沈默せよ。もし其思想の齊整を保つ能はずんば、感覺なりとも善く整へよ。もし汝は思にて獨ならずば、

身にてなりとも獨なれ。もし身にて勞する能はずんば、思を以てなりとも憂へよ。もし立つて儆醒する能はずんば、座し或は床上に在りて儆醒せよ。もし二日の間禁食する能はずんば、少なくも晩に至る迄禁食せよ。しかれども若し晩に至る迄も之を能せずんば、飽食を戒めよ。もし汝は心にて無玷ならずば、身にてなりとも無玷なれ。もし必に哀まずば、少なくも面に憂色を帶びよ。もし汝は和平を行ふ者たらずんば、叛亂を好む者となるなかれ。汝は勉勵者となる能はず、少なくも意思の狀態は怠慢者の如くなるなかれ。もし汝は勝者たらずば、責を受く可き者に思ひ高ぶるなかれ。もし其友を誚する者の口を塞ぐ能はずば、少なくも彼と交際するを戒めよ。

知るべし、汝より火を出して他人を燒かば、神は汝の火に燒かれたるもろ〳〵の靈を汝の手より尋ぬるを。たとひ汝は火を投せずとも投ずる者と同意して之を喜ぶならば、審判に於て彼の同類とならん。もし温良を愛するならば和平を務めよ。而してもし和平を賜はらば、何れの時にも喜ぶべし。才智を尋ねよ、金を尋ぬるなかれ、讒遜を衣よ、細布を衣るなかれ、和平を求めよ、されど國を求むるなかれ。聰明ならざる者は讒遜を有せずして、讒遜を有せざる者は聰明ならず。讒遜ならざ

る者は平安ならずして、平安ならざる者は讒遜の德あらず。而してもし誰か喜ばずんば、彼は平安ならず。人の世を進行するすべての路に於て神に依賴するに近づく近は、平安を見ざるべし。心に希望を生じて之を和げ、之に喜を濯ぐ迄は、心は勞苦と躓きの爲に平安ならざらん。祟拜せらるべくして聖德に滿たさるゝ口は、此を左の如く言へり、曰く「凡そ勞苦して重きを負ふ者は我に來れ、我れ汝等を安んせん」（マトフェイ十一の二十八）其意謂ふ我に希望を託して、勞と恐怖とより安ずるを得んが爲に近づき來れと。

神に依賴するは心を高尙にすれども、地獄の恐れは之を挫折す。智の光は信仰を生み、信仰は希望の慰めを生む。然して希望は心を堅むるなり。信仰は靈智の顯現なり、ゆゑに智が暗くなるときは、信仰は隱れ、畏怖は我等を主宰して、我等の希望を絕たん。學問に依る信仰は人を驕傲と懷疑とより脫せしめず、されど靈智にあらはれて光り始むる信仰は之を脫す。之を名づけて眞理の認識又は顯現といふ。靈智の顯現により心が神を神の如く理會するに至る迄は、畏は心に近づかざらん。我等自から卑うするに至る迄昏迷に陷りて、此聰明を失ふを許さるゝ時は、我等を讒遜と悔改とに近づかしむる迄畏は我等にあらん。

神の子は十字架を忍び給へり。故に我等罪ある者は敢て悔改に依賴すべからず。ダビデ王に於る悔改の一狀態さへ彼より怒を遠ざけしならば、我等が悔改の眞實なるは我等の爲に無益とならざるべし。眞實に居らざる彼に於る讒遜の一狀態さへ彼より怒を遮ざけしならば、況んや罪に陷りしを實に哀む我等よりこれを遮ざけざらんや。心の哀みはすべて身體上の行爲を補ふが爲に充分なり。

聖グリゴリイ言へり、神と體合し、其審判の事を常に慮る者は恩寵の殿なり。神の審判のことを配慮すとは何を示すか。常に神を安んせしめんを尋ね、我等が天性の助けを以ては完全に達する能はざるを不斷自から哀み、自から掛念するの謂にあらずして何ぞやと。此事の不斷の哀を有すとは是れ其心に神を忘れざる記憶を不斷懷抱するの謂なることは、顯たるワシリイの言ひし如し。放心せざるの祈禱は神に關する明亮なる意見を心中に生せん。而して神を忘れざるの記憶を我等自己に固むるは、是即我等に神を住ましむるなり。かくの如くして我等は神の殿とならん。視よ是れ、即神を安んせしめんとの配慮にして、之を預備するが爲に心を碎くなり。彼に光榮は世々に。（アミン）。

第九十　說教

心ならざる惡なる念頭は、之に先だつ思念を等閑にして注意せざるより生ず。

或者は身體を固め、神に腦する行爲の爲に力を養ひて、其行爲に再び復るに至る迄は之に少許の安息を與へんを欲す。ゆゑに其安息の僅の日子の間にも己れに注意するを全く弱めずして、其行爲に再び歸るの意向さへ有せざる者の如く其靈魂を衰弱に陷れざるなり。或者は平安の時に敵箭の爲に敗らる、これ即意志の果敢なるにより靈魂に泥を集むる者にして、彼等は聖なる國に於て、即祈禱に於て己が不潔なる衣に被はるゝを見ん。是れ即神のことを思念すると祈禱の時に於て心中に起る所のものなり。怠慢の時我等が求めたるものは、我等が祈禱の時に我等を辱めん。心の謹肅は行爲よりも大に人に助く。然れども或事に於るの寛縱は安息よりも多く人を害す。家裡の戰は安息より起りて、人を狼狽せしむ。然れども人は之を斷絶するを得べし。げだし人が安息を棄てゝ行爲の塲所に歸るならば直に此戰は人より一掃せられて退去せん。さりながら寛縱によりて生ずるものは衰弱と安息とによりて生ずるものゝ如くならず。人は安息の時に於て自由の範圍に在る間は、再び歸りて規則の定むる所に循ひ、己を治むることを得べし、何となれば猶自由の範圍にあればなり。しかれども自己に寛縱を與ふるならば、自由の範圍を脫せん。もし人は己れに注意するを全く棄てずんば、安息を與へざるものに心ならず強て從はしめらるゝことはあらざるべし。而して自由の境界を全く脫せずんは緊要に人を束縛して抵抗する能はざる程の事情は起らざるべし。

人よ、官能の跳れにも自由を與ふるなかれ、恐らくは自由に再び歸る能はざるに至らん。安息はたゞ小者に害あれども、寛縱は成人にも老人にも害あり。安息に繰りて惡しき念慮を得る者は、自己に注意するが爲に、更に歸りて高尚なる生涯に確立するを得べし。之に反して行爲に依賴し自己に注意するを怠る者は、高き生涯より放蕩なる生活に捉へ去らるゝなり。

或は敵國に於て敗らるれど平安の時に死する者あり。或は生命を己れに買ふを以て貴にして出で、靈魂に銳利なる刀を受くる者あり。或事に失脚すれども其に慣るゝ時は衰まざらん、げだし失脚は完全なる者にも度々之あれども、其に慣るゝは全く死なり。失脚の際に感ずる哀みは、我等が爲に恩寵により清潔なる行の代りとなる

べし。悔改に依賴して更に失脚する者は、詐りて神と行ふなり、死は知らず識らず彼を襲ふて、彼は道德の事を行ふの望ある時を得ざらん。官能に自由を與へん。

心の練修は外部の官能の爲に鏈鎖となるべし。もし誰か在昔の神父等に倣ひ、思慮を用ひて此に從事するならば、彼に生ずる三の現象により此事は明白ならん、即彼は肉體の利益に繫がれざると、美食を嗜まざると、彼より激怒の全く遠ざかることなり。左の三の現象即肉身上(大小に拘はらず)の利益と、怒り易きと、美食の爲に膀たるゝと此三の現象の地位を有する處に於ては(汝宜しく知るべし)一見したる所人は古の聖人に似たりといへども、外部に屬するものに於る寬恕は人の內部に屬するものに於る不堪忍より生ず、其心の特別なる等閑より生ずるにはあらず。然らずんば肉身に屬するものを輕んずるも溫良を得ざるは何故なるか思慮を用ひて輕んずるが爲に、隨て生ずるものは、何物にも束縛せられざると、安息又は世の執着を輕んずること是なり。ゆゑにもし誰か用意して神の爲に損害を喜んで受るならば、彼は內部に於て潔し。もし身體上の不具の爲に何人をも輕んせずんば實に彼は自由なり。人の尊敬を表するを喜視せず、或は人より名譽を汚さるゝを怒らざる者は此生命に於て世の爲に死せしなり。思慮を守るはすべて何等の手段により、又は如何なる人爲の方法によりてか導かるゝ如何なる行爲よりも愈れり。

罪人を憎む心を養ふなかれ、何となればわれ等は皆責を受く可ればなり。もし神の爲に起ちて彼に反對するならば、彼の爲に哀むべし。何の爲に汝は彼を憎むか。彼の罪を憎みて、彼の爲に祈るべし、罪人を怒らずして彼等の爲に祈りしハリストスに似ん爲なり。パリストスがイエルサリムの爲に泣きしを知らざるか(ルカ十九の四十一)魔鬼は我等を大に笑ふ、何の爲に罪人を憎むか、彼は汝と同じく不正なるが爲にあらずや。愛を有せずんば、汝の義は何處にかある何故汝は彼の爲に泣かざるか、却て汝は彼を窘逐す。或者は無知により己を罪人の行の裁判官の如く想て怒を發す。神の慈悲を傳ふるの傳宣者となるべし、何となれば神は汝不當なる者をも治むればなり、汝は彼に多く負ふあれごも彼の督促は汝に見えずして汝の成せる小なる行爲のために彼は大なるものを汝に報ゆればなり。神を名づけて汝に義なる者とのみ言ふなかれ、何となれば汝等の行爲を以て彼の公義は認むるを得ざればなり。

ダヲィドは彼を稱して義なる者といひ正しき者と言ふといへども神の子は我等に彼の特に慈愛なると恩惠に充滿するとを示せり。げだし言へり惡者と不法者とに

慈愛なりと（ルカ六の三十五）工人に報酬の事の章に於て、友よ我爾に義ならざることを爲さず、我れ此の後なる者にも爾と等しく與へんと欲す、我が善きによりて爾の目惡しきか（マトフェイ六の十三、十四、十五）といふを見るならば、何故神を義なる者とのみ稱するか。之と同く放蕩を以て富を費盡したる敗子の事の章に於て彼が表したる一悔改の爲に、趨りて其頸を抱き、彼に其悉くの富の櫃を與へしを見るならば、人よ何故神を義なる者とのみ稱するか。我等をして神に疑を容れざらしめん爲に他の何人も神につきて此事を言はざりしに、反つて神の子は自から神につきて此事を證明したりき。然らば神の義は何處にありや、我等は罪人なれど、パリストスは我等の爲に死し給ひしこと是なり。神は斯程に憐憫ならば、神の變らざることをも信ずべし。

神を無慈悲なる者と稱せんとする此の無法を決して念頭に置くなかれ。神の性質の變らざるは死者の如し。神は其無き所のものを得ず、其有る所のものを棄はれず、或は受造物の如く增加を受けざるなり。神が始より有せしものは常に之を有して、無限に至るべきことは、爾なるキリストが創世紀の解に於て述べし如し。彼言ふ神を愛するにより神を畏れよ。彼に加へられたる威名の爲にあらざるべし。汝は彼を愛さゝるを得ざるにより彼を愛せよ。未來に於て汝に何物をか與へんとする爲にはあらずして、現在我等が受けし物の爲なるべく、彼が我等の爲に造り給へる此の一世界の爲なるべし。げだし誰か彼に報ゆるを得るか。何の處に於て我等の行により彼に報ゆるか。誰か最初に彼を勸めて我等を存在せしめたるか。我等が彼を想起せざらんとき、誰か我等を彼に願ふか。我等の未だ存在せざりしとき、誰か此の我等の體を生命に喚起したるか。然のみならず意識は何處より塵中に落來るか。吁神の仁慈は奇なる哉。吁我等が神と造物主の恩寵は盡くべき哉。一切の爲に充分にして足らざる無きは、如何なる力なるか。我等罪人に於る我等の性を高めて新に之を造る無量なる仁慈は如何なるか。彼を頌讃する力は何人に足るか。彼の誡命を破りて彼を誹毀したる者を起し、無智なる塵を新にして、之を才智あるもの及び有言なるものと爲し、紛紜として無感覺なる塵と散漫なる感覺とをして聰明にして思惟する力に適する性と爲す。罪人は彼の復活の恩寵を想像するだも能はざるなり。我等を哀ましめんとする地獄は何處にありや。我等を種々に嚇着して彼を愛するの喜に勝つ苦みは何處にありや。我等を地獄より起して此の朽ちたるものに朽ちざるものを被らしめ、地獄に陷りし者を光榮に再造する彼の復活の恩寵に比して地獄は

如何なるか。

思慮ある者よ來りて慫慂せよ。誰か聰明にして奇異なる智力を有し、我等が造成者の憐憫を奇とするに適當なるか。罪人に報あり、義人の報に替へて彼は罪人に復活を以て報い、彼の法を蹂躙したる身體に替へて之に完全なる不朽の榮を衣す。我等が罪を犯したる後に我等を復活せしむる此憐憫は我等の未だ有らざるとき、我等を存在にみちびく憐憫よりは一層高し。主よ光榮は汝の無量なる恩寵に歸す。視よ、主や汝の恩寵の波は我を沈默せしむるも、汝に感謝するが爲に我が意は己むなし、我等が生命を愛する慈善なる王よ、如何なる口を以て汝を頌讃せんか。汝は我等が成長のためにも、又我等を汝の光榮を知る認識に昇せて汝に造られし衆人を樂ましむる爲にも、此の二世界を造り給ひしにより、光榮は汝に歸す、光榮は汝に歸して今より世々に至らん「アミン」。

第九十一　說教

神を愛するより生ずる忍耐の事、及び忍耐により助を得らるゝ事。

人の此世を輕んじて、敬神の事に熱心する程は、神の照管は人に近づきて、人は照管の助を蒙に盛すべく、之を了解するが爲に清潔なる念慮を人に與へらるゝなり。而してもし誰か此世の幸福を隨意に自から奪ふならば、之を奪ふ程は、神の憐憫は彼に伴ひて、神の仁慈は彼を扶けん。光榮は我等を右左より救ひて、すべて我等にわが生命を得るの機會を與ふる者に歸す。げだし生命を得んとするの望に勞れたる者等の靈魂を彼は心ならざる患難を以て善行に導かんとす。彼の貧者ラザリが世の幸福を奪はれ、其體は疵に壞られて、最悲慘なる二の艱苦を忍耐したりしは、其願に依るに非ず、然れども終に尊敬せられて、アウラアムの懷に置かれたりき。神は患難に於て神を呼ぶ者の哀む心に近し。もし時としては肉身上の剝奪又は其他の患難にかゝるありとも、之を忍耐するは、我等の爲に變じて助となること、たとへば醫が重き病の爲に肢體を截斷して健康を回復する如し。主が哀む者の心に大なる仁慈を

現はし給ふは其患難に苦むの酷烈と相準ずるなり。
是故にハリストスを愛する願望が汝に於て勝を占めて、ハリストスを喜ぶにより種々の患難に無感覺なる者となるに至らざる間は、知るべし汝に於て活るは世にしてハリストスにはあらざるを。又肉身上の病と、缺乏と、疲憊及び身に害あることの恐れが汝の思を擾す時は、知るべし汝に於て活るは肉身にして、ハリストスにはあらざるを。之を略言すれば何物にか執着する思の強くして汝に主たるときは、其物は汝に於て活るなり。ゆゑにもし汝は當要する所のものに缺くるなく、肉體は健全にして、何等反對なるものをも恐れず、之によりハリストスに直に趣くを得べしと言ふならば、知るべし汝は心に病を得て神の光榮を味ふを奪はれたるを。然れども予が汝を忖度するは、最早汝は此の如くなれるが爲にあらず、汝は古の神父等の生涯の或る部分を有するに拘はらず、完全に至る迄には多くの足らざるあるを汝に知らしめん爲なり又身體は試惑と患難との爲に破らるゝも、心意は薄弱より高まりて心意の哀みがハリストスを愛するの愛にて征服せられたる人はあらざるべしと汝の言はざらん爲なり。
余は聖なる致命者を引證して記憶せしめざるべし恐らくは彼等の苦みの深酷なるに對して自から弱らんことを。又彼等がハリストスを愛するの力を以て堅められるゝ忍耐は大なる患難と肉身の病とに幾ばく勝ちしことをも言はざるべし。是を證かん、何となれば之を想起するは事の重大なると此覩の不可思議なるが爲に人性を哀みに投じて、之を擾すべきによる。
謂はゆる無神論者なる哲學者等を一見せん。其中一人あり、若干年の間沈默を守らんことを意中に定めて、自己の法となしぬ。之を聞きて慫けるローマの王は彼を試みんと欲せり。ゆゑに命じて彼を導き來らしめたり。然して王は種々の問題を提出したりしも彼が決然として沈默するを認むるや、大に怒り、王位と王冠とを尊敬せざるが爲に死に付すべきを命せり。然れども哲學者は畏れざるのみならず、却つて自己の法を守りて靜に死の用意をなしぬ。王は刑の執行者に命令を左の如く與へたり「もし劍を畏れて自己の法を破らば彼を殺すべし、然れども自己の自由を堅く守らば彼を我に生還せよ」と。故に命を受けたる者等は指定せられたる地に近づきて、哲學者に恥を蒙らしめ、彼をして強て自己の法を破りて死を受けざらしめんとするや、其時彼は斷定して謂へり「我れ死の恐れに勝たれて己の賢を辱かしめ、非常の事に遭遇して臆病の名を取らんよりは、一時死して己の自由を守り、之を遂ぐるが

爲に若干時間奮闘するの慈れるに如かず」と。而して劍を以て斬られん爲に彼は援れずして身を伸したりき。此事を王に上申しけるに、王は驚き尊敬して彼を放免せり。

又或者は天然の慾望を全く蹂躙し、他者は惡言を易すく堪忍し、或者は酷烈なる病を哀まずして我慢し、而して或者は患難と大なる不幸に自己の忍耐をあらはせり。それ彼等は虛名と空望との爲にさへ之を忍耐せしならば、神と體合するに召されたる我等修道士は更に愈々忍耐すべきにあらずや。願くは我等が聖潔なる女后、生神女、永貞マリヤの祈禱と凡て苦行の汗を以てハリストスを悅ばしめたる者等の祈禱により我等にも之を賜はらんことを。悉くの尊敬と光榮と叩拜は彼と同く無始なる父と同く永遠にして一性なる生命の始なる神と共に彼に歸するは當然なり、今及び世々に「アミン」。

シリヤの聖イサアク全書　終

明治四十二年七月廿九日印刷
明治四十二年八月一日發行

發行所
正教會編輯局
東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

飜譯兼發行者　堀江復
東京市本郷區森川町壹番地

印刷者　田中市之助
東京市神田區通神石町三番地

印刷所　東陽堂
東京市神田區通新石町三番地

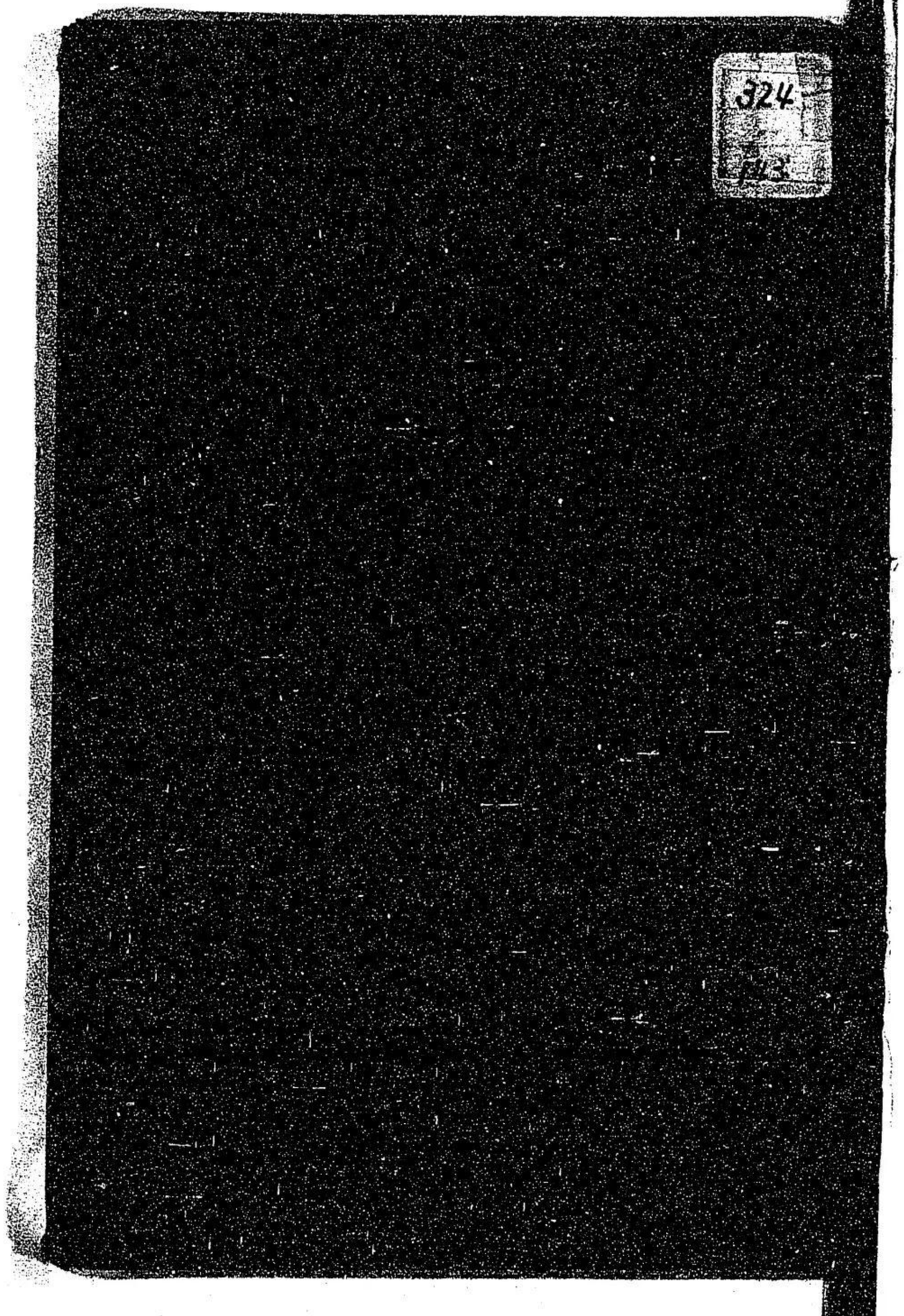
供物簿

供物簿

324
143

324
143

[redacted]



020771-000-5

324-143

シリアの聖イサアク全書

堀江 復/訳

M42

ABI-0596

